

第3章 調査の成果

第1節 1区の調査成果

(1) 概要

1区からは弥生時代後期後葉の溝1条、土坑3基、古墳時代後期の段状遺構8棟、鍛冶工房1棟、奈良時代の段状遺構2棟、古墳時代後期から奈良時代の掘立柱建物跡2棟、土器溜り1ヶ所、土坑1基を検出した。これらの遺構は斜面部を5段にわたり雛壇状に造成して築かれたもので、調査区北半を中心に拡がりを見せている。なかでも、古墳時代後期～終末期の段状遺構SS6の床面から29個の玉類が数珠繋ぎ状態で出土したことや、調査区南端の斜面最下段、谷筋の小川を望む位置に岩盤を掘削・整地して掘立柱建物を構築していることなどが注目される。さらに、古墳時代後期の鍛冶工房SS7では羽口の残された状態で鍛冶炉1基が確認されている。以上のように、古墳時代後期から奈良時代に至る集落の立地や生産活動のあり方を検討する上で大きな成果を得た。

(2) 基本層序(第8・9図)

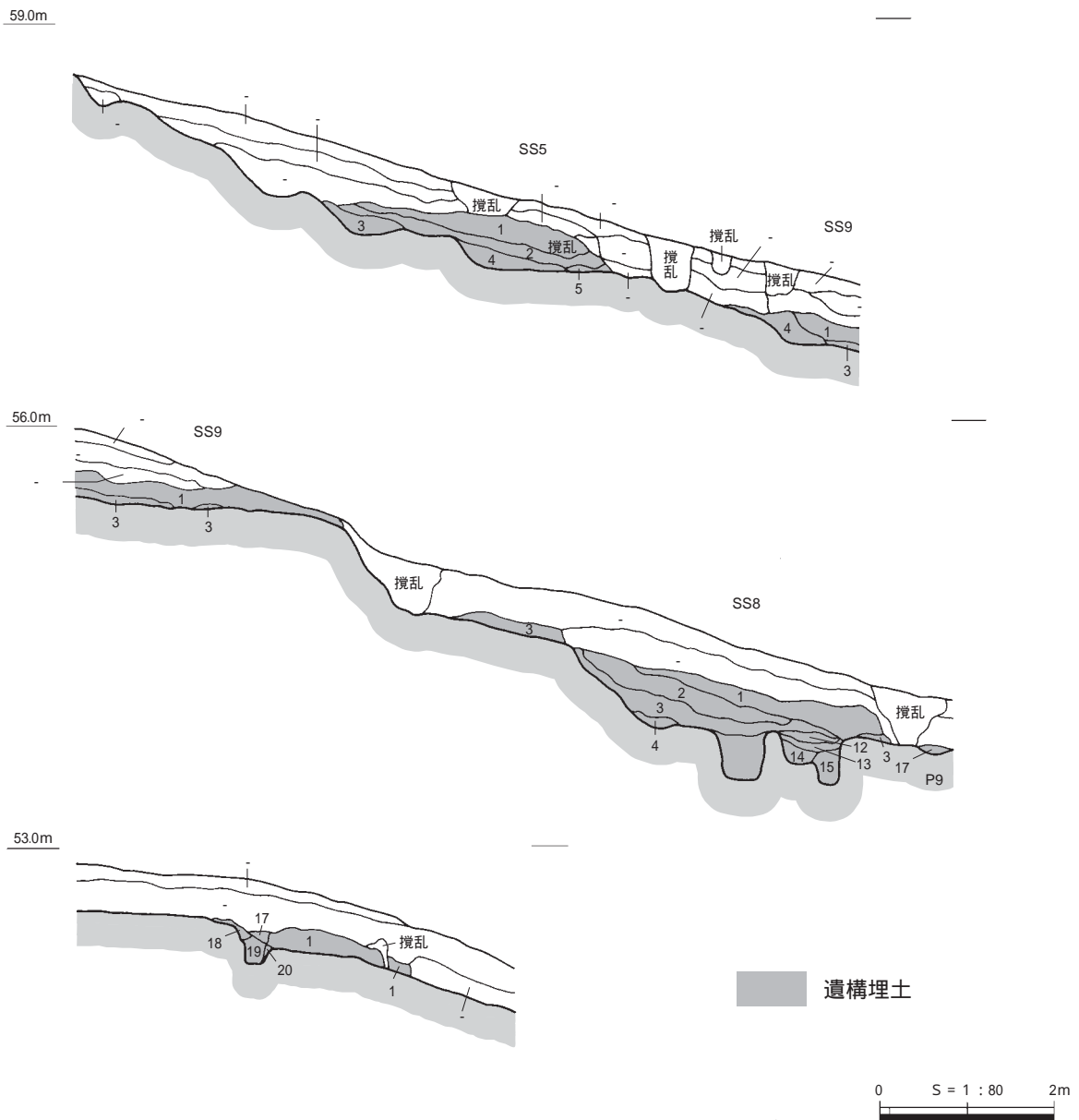
1区は平成17年度調査地の東側に隣接し、調査前は森林であった。この一帯は大山火山噴出物によって形成された丘陵地であり、調査地の土層は大山を噴出源とする火山灰堆積である。調査地ではクボクが比較的発達し、弥生時代～古代の包含層と上～中部火山灰層が確認された。

調査地の基本層序は、表土を 層、遺物包含層を 層とする。弥生時代の包含層である 層は古代以降の掘削のため、斜面下方でのみ安定的に堆積する。なお、斜面地という性格から、斜面下方は二次堆積土が重層し、尾根部層位との整合が難しい。以下、概略を記す。

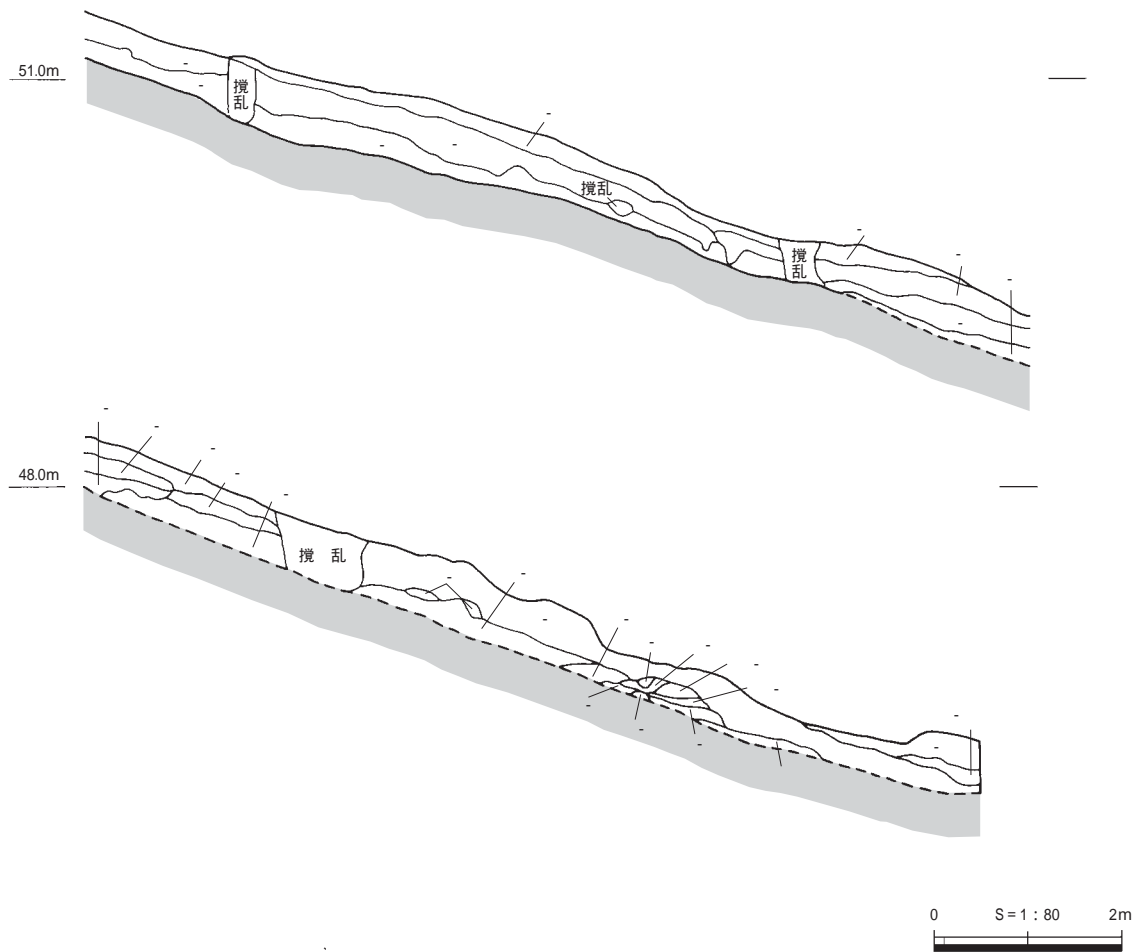


第7図 1区遺構配置図

- 層：黒褐色土（表土）10～15cmの厚さで全体を覆う。細かな根が多く張り、しまりが弱い。
- 層：赤褐色土。客土。
- 層：暗褐色土。主に斜面上方から中位に部分的に堆積する。径2cm以下の炭化物、地山ブロックを含んでいる。しまり・粘性ともに弱い。包含される遺物は、須恵器や土師器などが主体である。
- 層：暗褐色土。斜面部全体にわたり安定的に堆積する。径2cm以下の炭化物、焼土粒、地山ブロックを多く含んでいる。古墳時代以降の遺物が多く、客体的に弥生時代後期後葉の遺物を包含する。
- 層：褐色土。斜面下方に広がりを見せる。径1cm以下の炭化物を含む。弥生時代後期後葉の遺物を包含する。
- 層：黒褐色土。斜面下方において部分的に堆積する。径3cm以下の地山ブロックを含んでいる。
- 層：暗褐色土。斜面部下方に部分的に堆積する。径3cm以下の地山ブロックを含む。

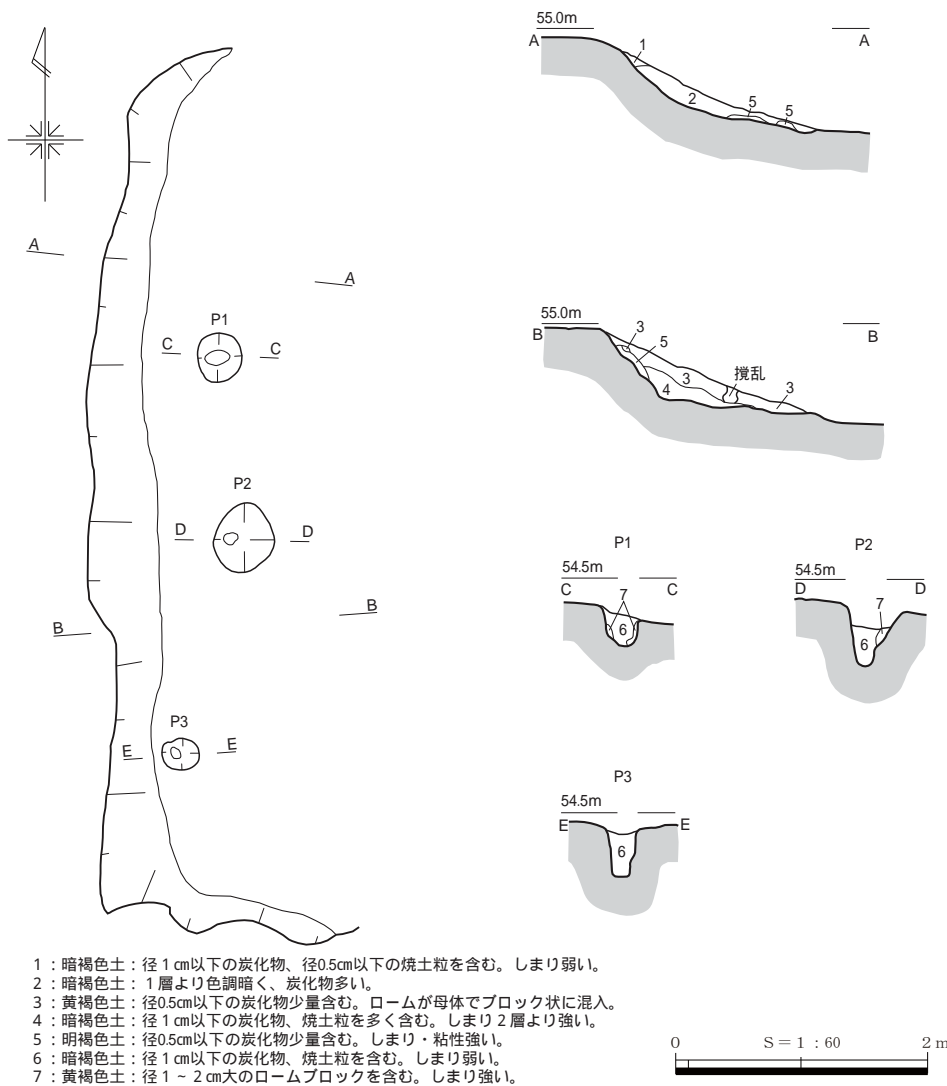


第8図 1区北壁土層断面図(1)



第9図 1区北壁土層断面図(2)

- 層：暗褐色土。斜面部下方に堆積するローム層。しまり・粘性弱い。
 - 層：黄褐色土。径5cm大の - 層が混じる。流れ込みによる二次堆積土。
 - 層：黒褐色土。斜面部のみに堆積するローム層。径5cm大の礫を含み、しまり・粘性強い。
 - 層：淡黄褐色土。斜面部下方に部分的に堆積する。径5cm大の黄色ロームブロックを含む。
流れ込みによる二次堆積土。
 - 層：暗褐色土。斜面部下方に部分的に堆積する二次堆積土。
 - 層：黄褐色土。斜面部下半に部分的に堆積する二次堆積土。しまり・粘性強い。
 - 層：黄褐色土。径5cm以下の黄色ロームブロックを含む。しまり・粘性強い。
 - 層：灰白色粘質土。径5cm以下の黄色ロームブロックを含む。粘性強い。
 - 層：暗褐色土。径5cm以下の黄色ロームブロックを含む。粘性強い。
 - 層：灰白色粘質土。径2cm大の黄色ロームブロックを含む。粘性強い。
 - 層：暗褐色土。径5cm大の黄色ロームブロックを含む。しまり・粘性強い。
 - 層：黄褐色土。径5cm以下の礫を多く含む。しまり・粘性強い。
 - 層：橙褐色土：斜面上方から中位に堆積する火山灰粘質土。粘性・しまり強い。
- 谷部では 層の二次堆積土が覆うため確認できなかった。斜面部での遺構検出面。



第10図 SS1

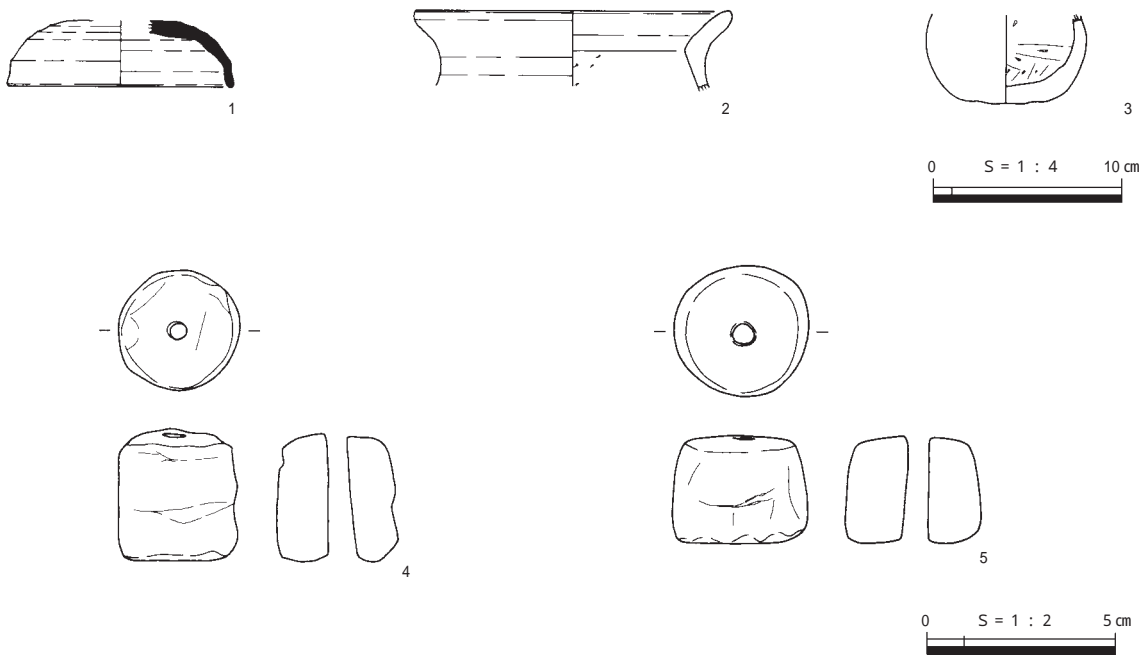
(3) 段状遺構

SS1 (第10・11図、表3・15・21、PL2・42・61)

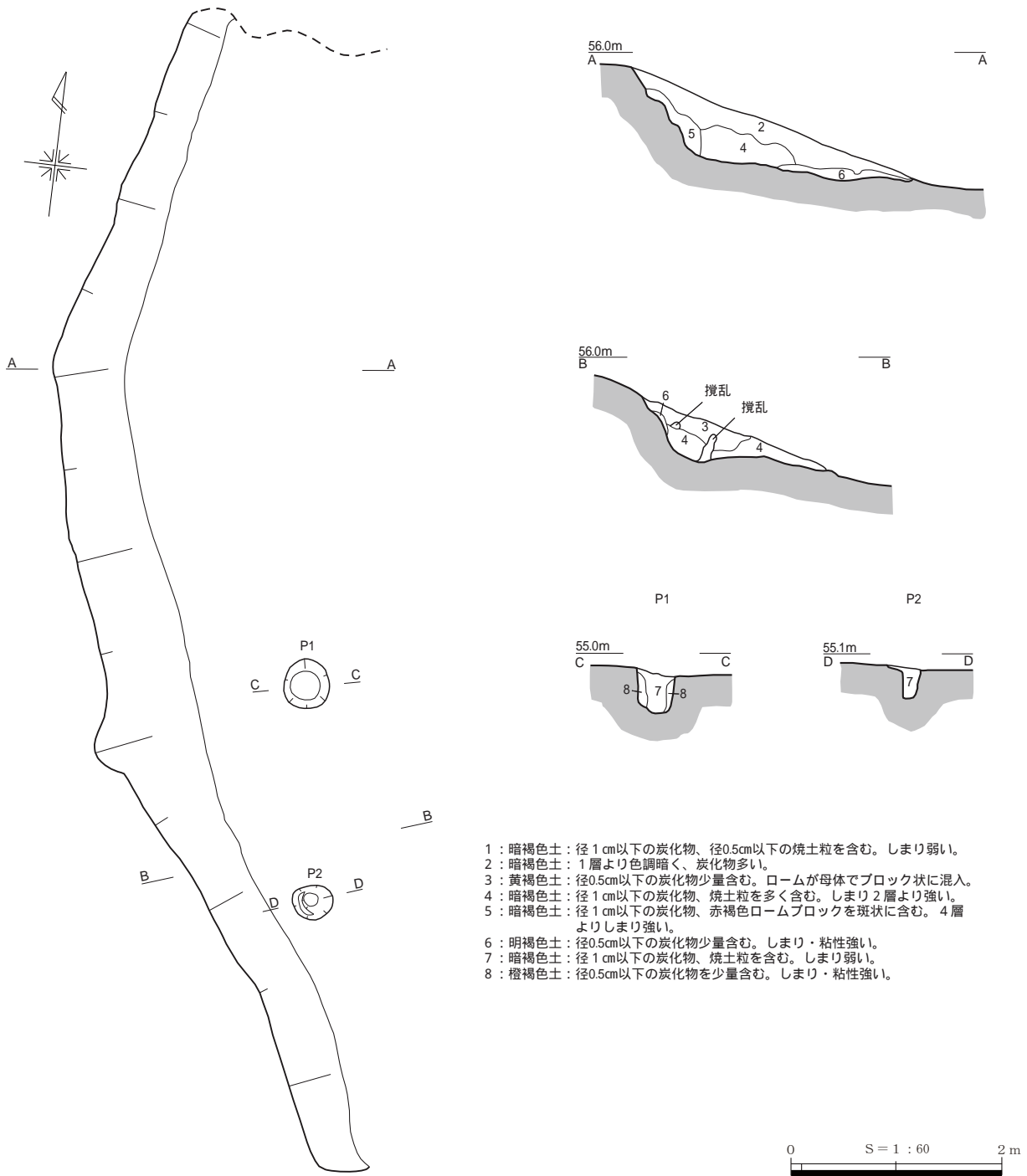
調査区西側、C2・D2グリッドの標高54.2 ~ 55.0mに立地する。北側1mにはSK16が位置し、南側でSS2を切っている。

平面形は隅丸長方形であり、斜面下方に当たる床面は流出してしまっている。長軸7m、短軸2.15m、残存面積は15.7m²である。検出面から床面までの深さは70cm、西壁は45度の角度で外傾して立ち上がる。

柱穴は全体的にやや南寄りに位置し、P1 (45 × 35 - 30cm)、P3 (30 × 25 - 38cm) の2ヶ所が想定される。P1の埋土で



第11図 SS1出土遺物

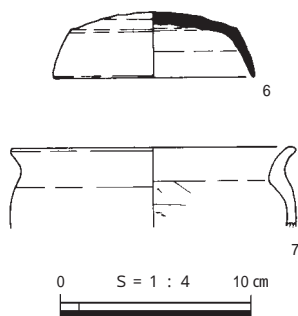


第12図 SS2

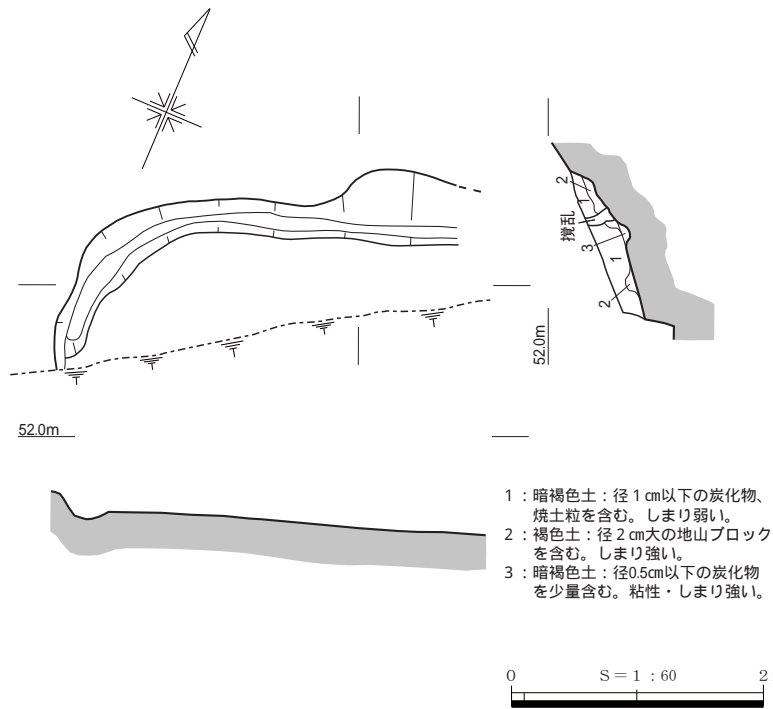
は柱痕が確認され、直径は15 ~ 18cmを測る。そのほか、床面ほぼ中心にP2 (66 × 54 - 18cm) が検出された。

埋土は5層に分かれ、斜面上方の西側から東側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。

遺物は、古墳時代後期前葉の須恵器坏蓋1、土師器甕2、壺3、有孔土玉4・5を掲げている。坏蓋1は肩部の稜が無く、天井部に向かって丸味を帯びる器形で、口縁部がやや細身を帯びて端部に至る。調整は回転ナデである。甕は頸部で「く」の字状に外反し、口



第13図 SS2出土遺物



第14図 SS3

縁部がやや厚い。体部内面はヘラケズリ調整が施されている。3は小型の丸底壺で口縁部は欠損している。外面はナデ、内面はヘラケズリ調整である。4・5の有孔土玉は円筒形を呈し、上方がやや細身を帯びる。下部から上部に向かう片面穿孔であり、外面は粗いナデ調整が施されている。

遺構の時期は、出土遺物から八橋 ~ 期、古墳時代終末期に位置づけられる。

SS2 (第12・13図、表3・15、PL.3・42)

調査区西側の標高54.7 ~ 55.9m、D2・E2グリッドに跨って検出した。北側をSS1に切られている。平面形

は南北11.1m、東西3.2mの弓形を呈し、斜面下方の床面は流出してしまっているが、本調査区で最も規模が大きい。検出面から床面までの深さは1.1m、壁面は40度の角度で外傾して立ち上がる。

明瞭な柱穴といえるものはP1 (48×40 - 40cm) の1基のみであった。そのほか、P2 (40×32 - 30cm) などが補助柱穴の可能性がある。P1では柱痕が観察でき、その直径は18cmを測る。埋土は炭化物を多く含む暗褐色土を中心に6層に分かれ、いずれも壁際から流れ込んだ状況を示し、自然堆積と考えられる。

遺物は埋土上層から概ね出土し、ここでは2点を図示している。6は須恵器坏蓋であり、天井部と口縁部の境に明瞭な稜を持ち、口縁端部が細身を帯びている。7は素口縁の土師器甕であり、外反度がやや緩く頸部の稜も丸味を持つ。

遺構の時期は、出土遺物から八橋 ~ 期、古墳時代後期前半に位置づけられる。

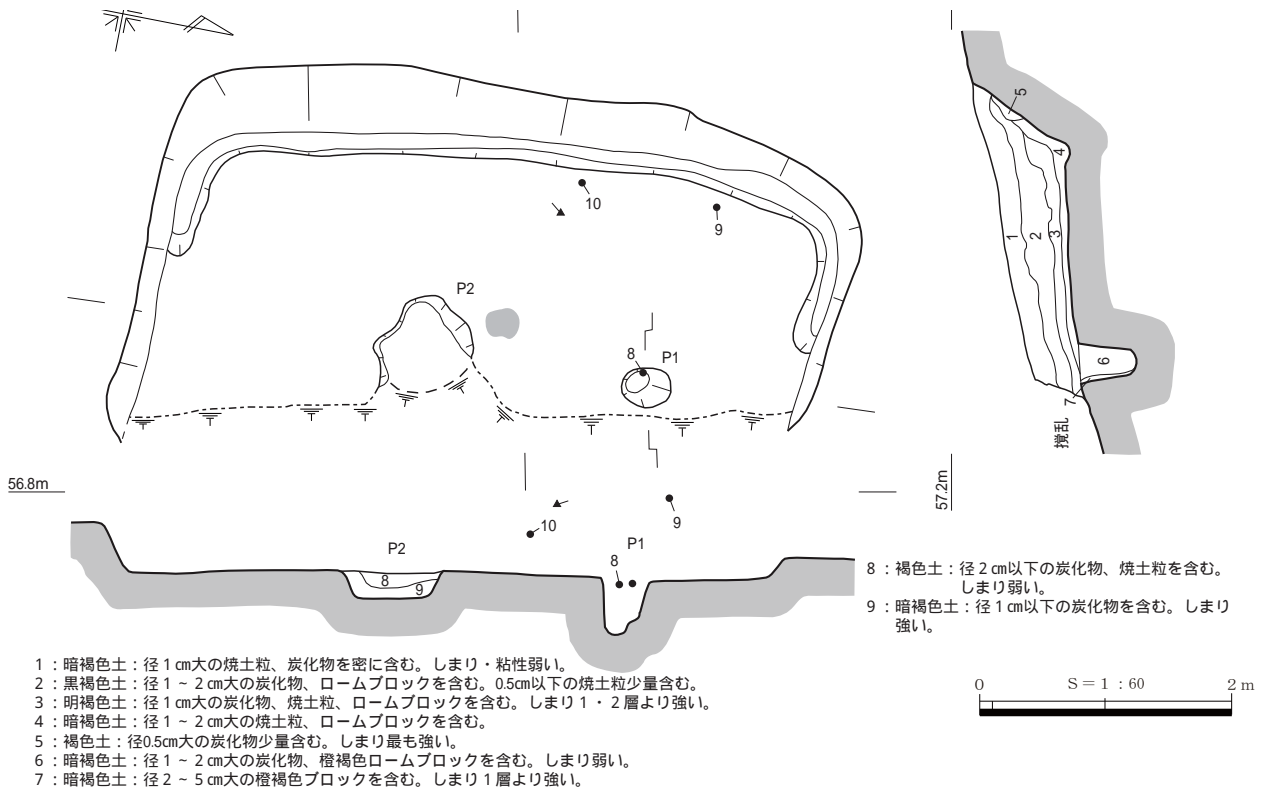
SS3 (第14図、PL.4)

調査区中央、やや傾斜が緩やかになるE1グリッドの標高51.6mに立地する。北側に土器溜り1が、北東方向5mにSS7が位置している。

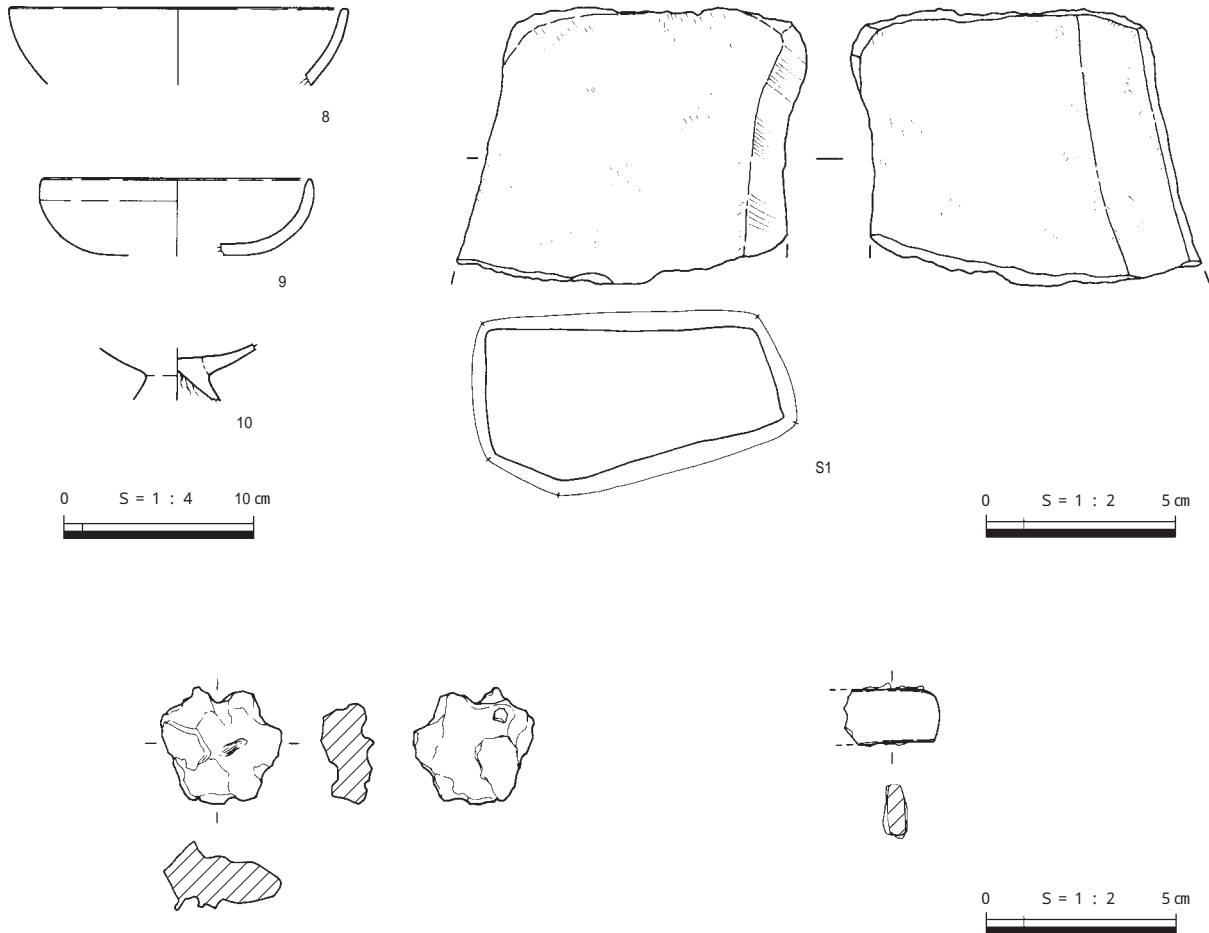
平面形は隅丸方形であるが、斜面下方は平成17年度調査の試掘トレンチで、北側は攪乱により削平されて原形を留めていない。南北3.3m、東西1.2m、現状での面積は3.3㎡である。西壁際には断面逆台形状の壁溝がめぐり、床面からの深さ5cmを測る。検出面から床面までの深さは尾根側で60cm、中心部で20cm、壁面は50度の角度で外傾して立ち上がる。柱穴などのピットは検出されていない。

埋土は、炭化物や焼土粒を含む暗褐色土と地山ブロックが混じる褐色土の2層に分かれる。いずれも斜面上方から流れ込んだ状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

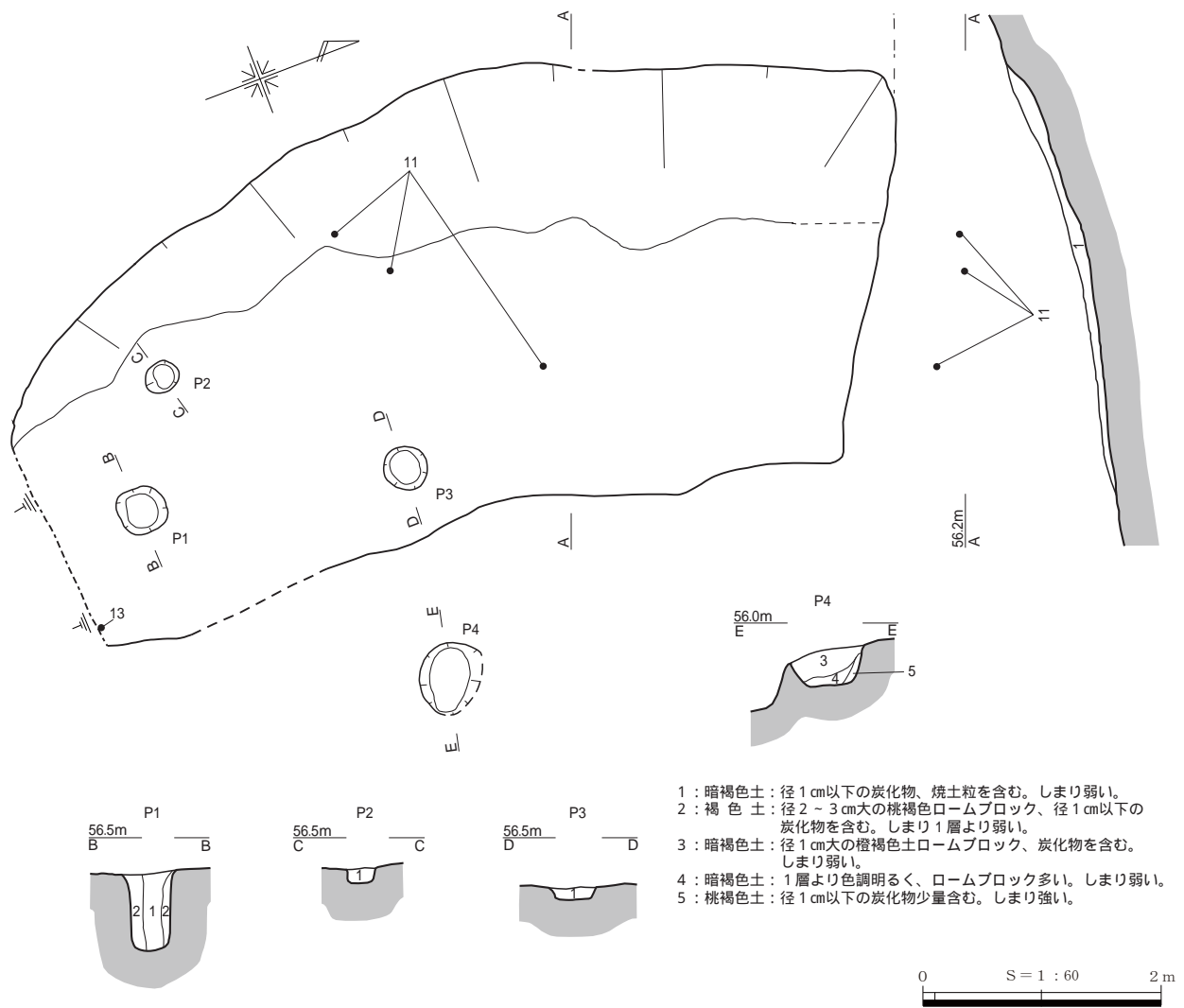
遺構の時期は、出土遺物が無く不明であるが、埋土の状況から古墳時代から奈良時代に収まるものと想定される。



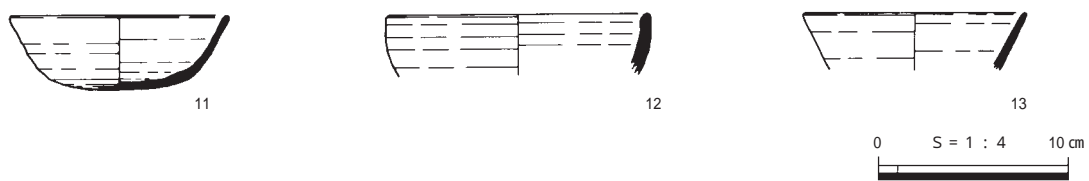
第15図 SS4



第16図 SS4出土遺物



第17図 SS5



第18図 SS5出土遺物

SS4 (第15・16図、表3・4・12・15・24、PL.5・42・65 ~ 67)

調査区西側、C3・D3グリッドの標高56.0 ~ 57.1mに立地する。東側の斜面下方 2 mにSS1が位置している。

平面形は方形であるが、斜面下方は攪乱により削平されて原形を留めていない。南北5.6m、東西2.7m、現状での面積は17.9m²である。西壁際には断面逆台形状の壁溝がめぐり、床面からの深さ5cmを測る。検出面から床面までの深さは尾根側で80cm、谷側で40cmを測り、壁面は50度の角度で外傾して立ち上がる。

柱穴は床面やや東よりにP1 (40 × 30 - 45cm) が検出されている。P1の埋土では柱痕が確認され、直径は最大18cmを測る。そのほか、床面ほぼ中心にP2 (80 × 75 - 20cm) が検出された。平面形は東

側が削平され不明であるが、不整形円形を呈し断面形は桶形である。P2の北側10cmに径25cmほどの焼土面が確認された。

埋土は5層に分かれ、径2cm以下の炭化物や焼土粒を多く含む暗褐色～黒色土と地山ブロックが混じる褐色土が確認された。いずれも斜面上方から流れ込んだ状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

遺物は、土師器椀8・9と高坏10、砥石S1、鍛冶滓、鉄製品を掲げている。8・9は体部が緩やかに丸味を帯びて立ち上がっており、内外面ナデ調整である。10は高坏の坏部から脚部破片である。S1は細粒花崗岩製の砥石であり、器体下半を欠失している。5面の砥面が見られ、各面とも平滑で緩く湾曲する。は平面六角形で断面が扁平な鍛冶滓である。含鉄部は左側側部寄りに位置する。

は幅1.2cmほどのヘラ状鉄製品である。左側部は欠損し器種は不明である。

遺構の時期は、出土遺物から八橋期、古墳時代後期と考えられる。

SS5（第17・18図、表3・15、PL.6・42）

調査区北西、B3・C3グリッドの標高54.9～56.0mに立地する。東側斜面下方1mにはSS9が位置している。遺構北半は調査区外に伸びており、また南側の一部は平成17年度調査時の試掘トレンチに切られているため全形は不明である。

平面形はSS1に類似し弓形であり、斜面下方に当たる東床面は流出してしまっている。その規模は現存値で長軸7.4m、短軸3.7m、面積は19.7m²を測る。検出面から床面までの深さは60cm、西壁は20度の角度で緩やかに立ち上がる。

床面からは4基のピットが確認され、そのうちP1(40×40-65cm)が柱穴と考えられる。そのほか、P2(28×25-13cm)、P3(38×36-10cm)、斜面下方にP4(60×53-30cm)が検出された。P1の埋土では柱痕が確認され、直径は15cmを測る。

埋土は調査区北壁で4層に分かれ、斜面上方の西側から東側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。

遺物は少なく小片が目立った。須恵器坏身3点を掲げている。11は坏身であり、口縁部から体部にかけて緩やかに下がっている。底面は回転ヘラケズリである。12は体部がやや丸味を帯びて立ち上がる坏身であり、底部は欠損、胎土の焼成は不良である。13は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる坏身であり、底部は欠損している。

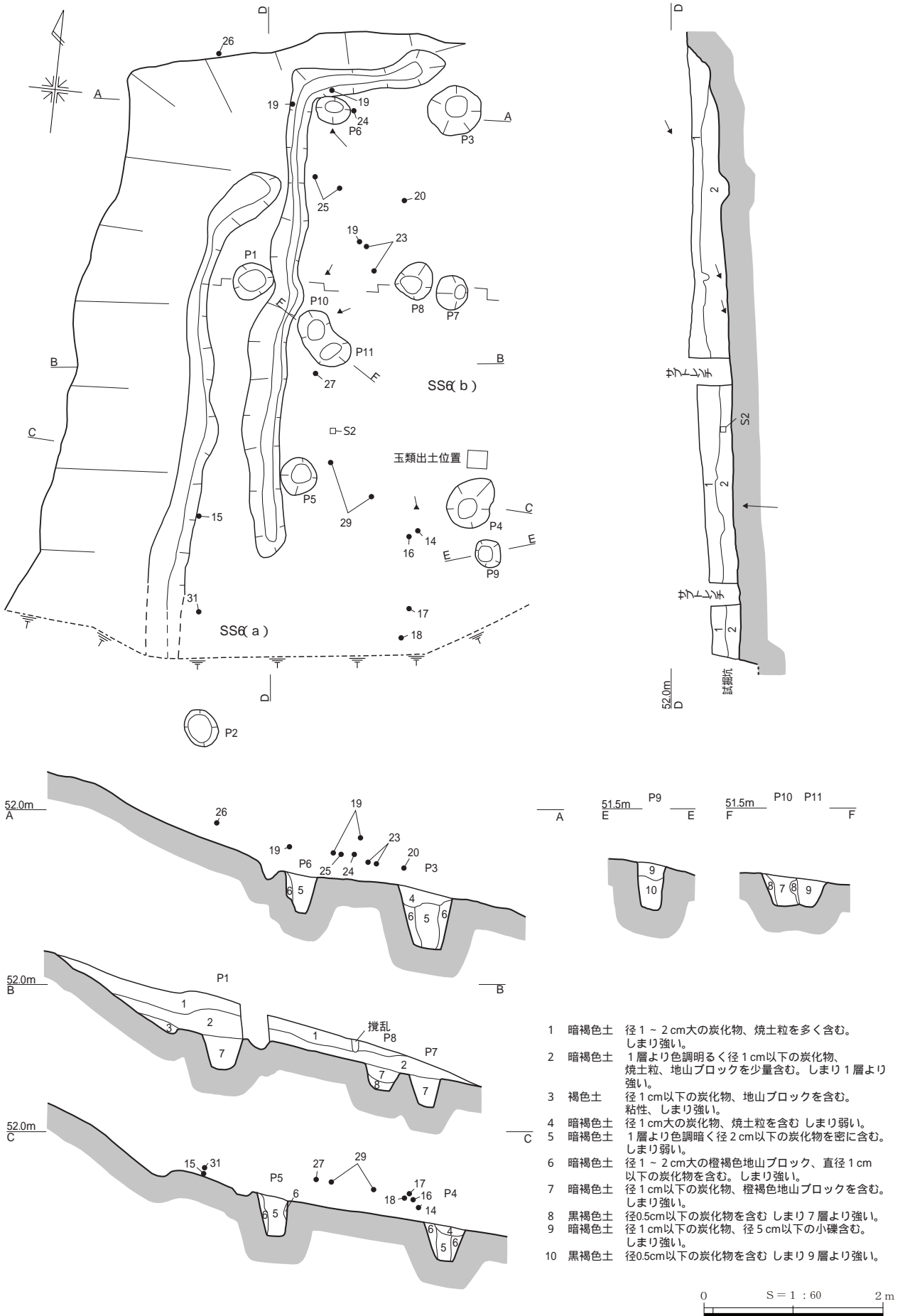
遺構の時期は、出土遺物から八橋～期、古墳時代終末から奈良時代に位置づけられる。

SS6（第19～26図、表3・4・12・15・21・23・24、巻頭図版2・3、PL.6～8・42～45・61・63・66・67）

調査区中央北寄り、C1・D1グリッドの標高50.8～52.4mに立地する。東側の斜面下方3mにSS7が、北西側尾根部3mにSS8が位置している。本遺構は建て替えが2回行われているため、古い方から(a)(b)と呼称する。

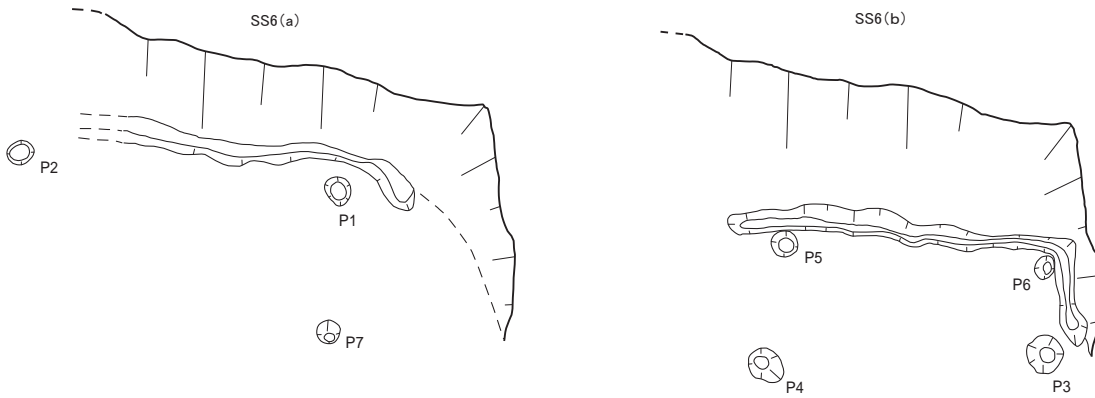
SS6(a)平面形は方形であるが、南側は平成17年度調査の試掘トレンチで削平されているため全形は不明である。トレンチ内のピットを主柱穴とすれば南北6.4m、東西4.4m、面積は約28.2m²である。西壁際には断面U字状の壁溝がコの字状にめぐり、床面からの深さは6cmを測る。検出面から床面までの深さは尾根側で45cm、谷側で21cmを測り、壁面は22度の角度で外傾して立ち上がる。

第3章 調査の成果

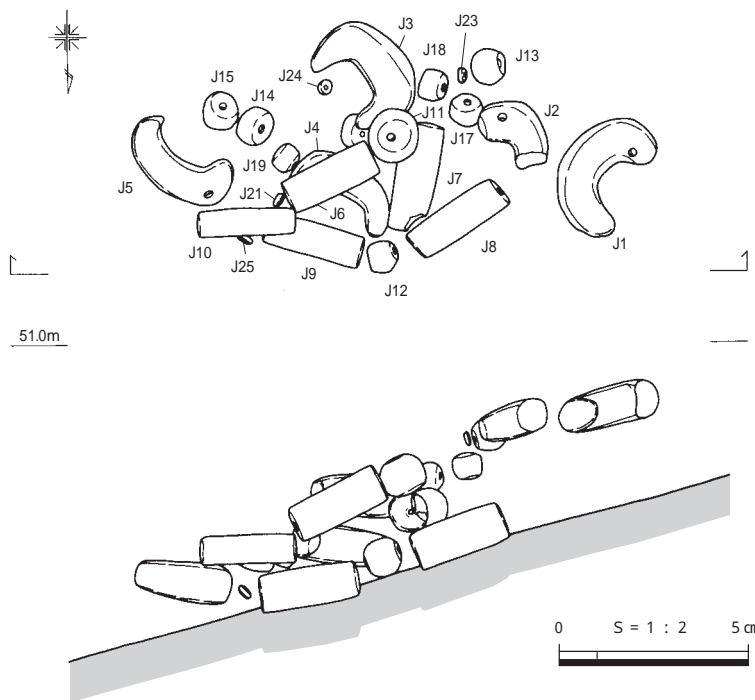


- 1 暗褐色土 径1～2cm大の炭化物、焼土粒を多く含む。しまり強い。
- 2 暗褐色土 1層より色調明るく径1cm以下の炭化物、焼土粒、地山ブロックを少量含む。しまり1層より強い。
- 3 褐色土 径1cm以下の炭化物、地山ブロックを含む。粘性、しまり強い。
- 4 暗褐色土 径1cm大の炭化物、焼土粒を含む しまり弱い。
- 5 暗褐色土 1層より色調暗く径2cm以下の炭化物を密に含む。しまり強い。
- 6 暗褐色土 径1～2cm大の橙褐色地山ブロック、直径1cm以下の炭化物を含む。しまり強い。
- 7 暗褐色土 径1cm以下の炭化物、橙褐色地山ブロックを含む。しまり強い。
- 8 黒褐色土 径0.5cm以下の炭化物を含む しまり7層より強い。
- 9 暗褐色土 径1cm以下の炭化物、径5cm以下の小礫含む。しまり強い。
- 10 黒褐色土 径0.5cm以下の炭化物を含む しまり9層より強い。

第19図 SS6



第20図 SS6(a)・(b)変遷模式図



第21図 玉類出土状況図

柱穴はP1 (45×42 - 37cm)、P2 (40×37 - 30cm)、P7 (39×34 - 33cm)の3ヶ所が検出されている。もう1基の支柱穴が谷側に存在していたものと推定されるが試掘トレンチで削平されてしまっている。支柱穴間距離は、P1 - 2間 が5.1m、P1 - P7間 が2.3mである。柱穴埋土は地山ブロックを含み、しまりが強いことから建て替えの際、埋め戻されたと考えられる。

埋土は炭化物や焼土粒を含む暗褐色土が大きく上下2層で堆積しているが、いずれも斜面上方から流れ込んだ状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

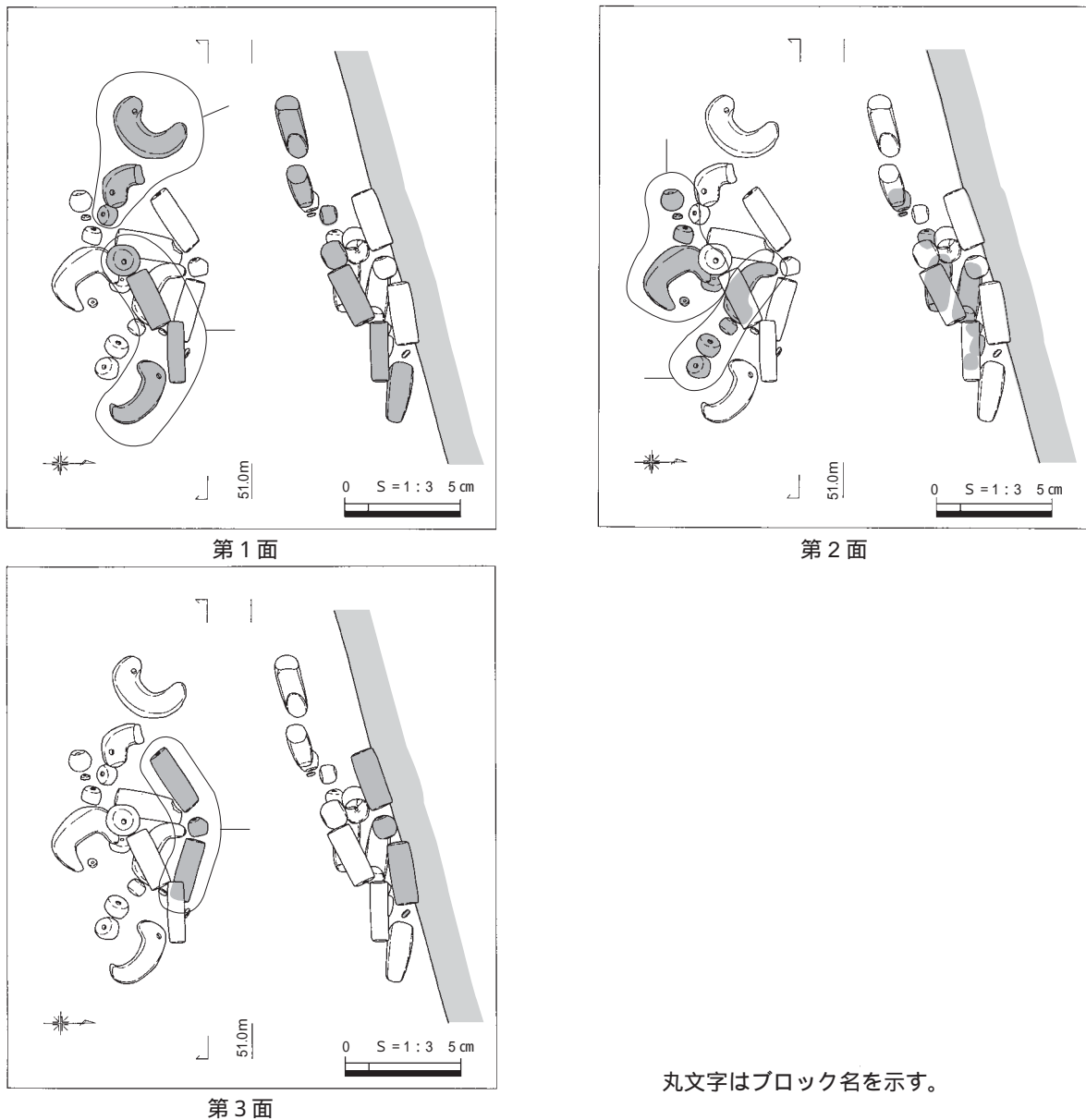
SS6(b)平面形は方形であり、

北東方向に建て替えを行っている。谷側の床面は流出してしまっているが、現存値で南北5.7m、東西約3.5m、面積は約20㎡である。西壁際には断面U字状の壁溝がコの字状にめぐり、床面からの深さは8cmを測る。検出面から床面までの深さは尾根側で45cm、谷側で21cmを測り、壁面は22度の角度で外傾して立ち上がる。

柱穴はP3 (58×55 - 62cm)、P4 (55×50 - 40cm)、P5 (42×40 - 45cm)、P6 (38×30 - 42cm)の4ヶ所が検出されている。支柱穴間距離は、P3 - P4間4.5m、P4 - P5間1.9m、P5 - P6間4.2m、P6 - P3間1.4mである。P3・4の埋土では柱痕が確認され、直径は15～23cmを測る。そのほか床面中央にはP8 (41×41 - 25cm)、P9 (33×28 - 42cm)、P10 (38×35 - 33cm)、P11 (40×30 - 30cm)が認められ、P11はP10を切っている。

埋土は炭化物や焼土粒を含む暗褐色土が大きく上下2層で堆積しているが、いずれも斜面上方から流れ込んだ状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

第23図に須恵器14～26、土師器27～29、有孔土玉31を掲げた。14～16は天井部から口縁部に丸味を持って下がる坏蓋で、14は回転ヘラケズリを天井部に残している。17～18は内傾したカエリを

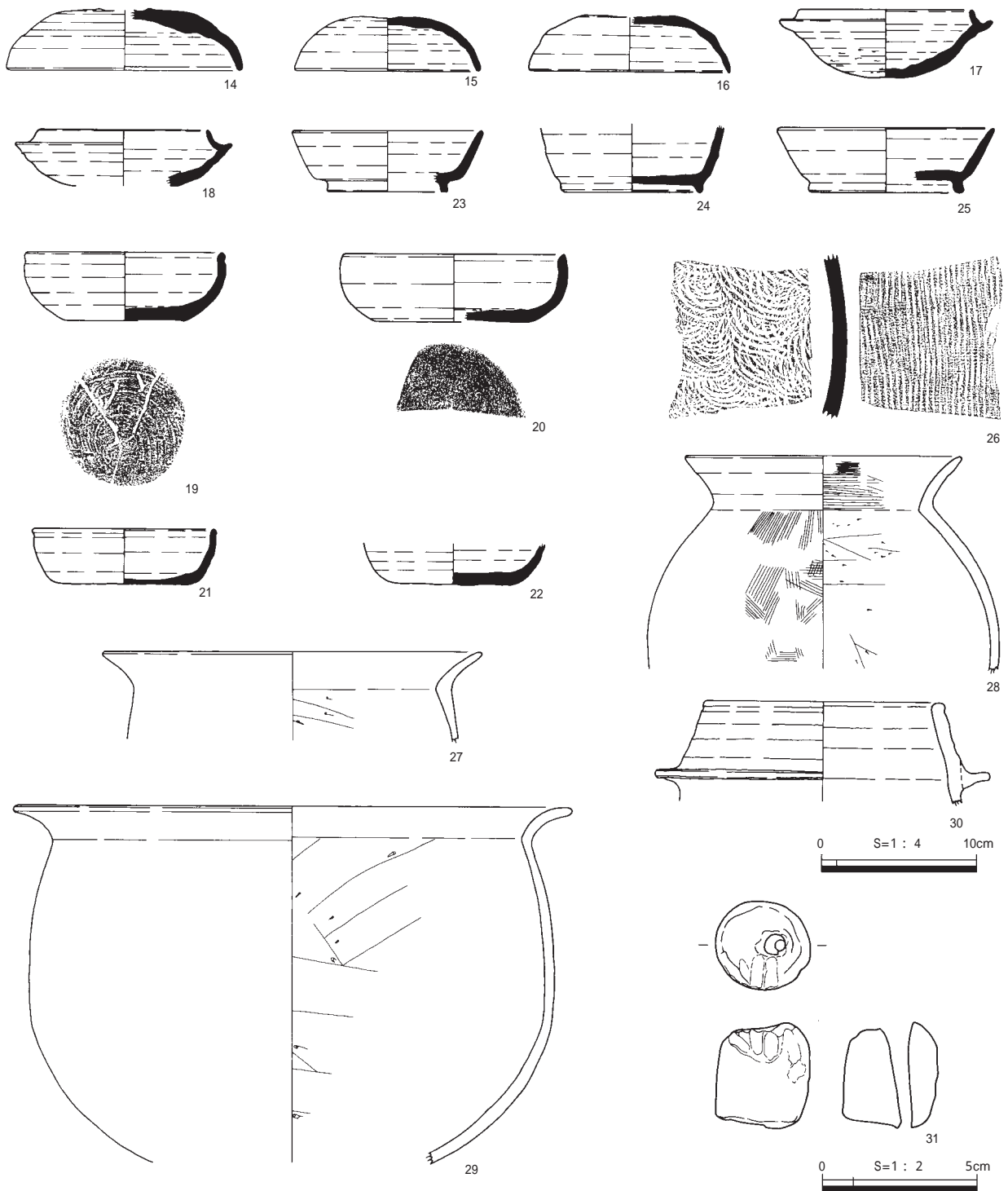


第22図 玉類出土状況模式図

有する坏身であり、17は体部下半に回転ヘラケズリが観察される。以上は八橋 ~ 期、古墳時代終末期に位置づけられる。19 ~ 22は体部が丸味を帯びて立ち上がる坏身であり、底面に回転系切痕を残している。23 ~ 25は高台付坏身である。体部から口縁に向かって直線的に立ち上がり、底面はナデ調整が施される。以上の特徴より八橋 期以降、奈良時代に帰属する。27 ~ 29は素口縁の土師器甕であり、口縁部が大きく外反し、頸部内面は「く」字状に屈曲している。口縁径より体部径が増す28はやや古相を帯びる。31は筒状の有孔土玉であり、肩部に棒状工具による窪みが認められる。

S2は小型の長楕円形礫を素材として、上下両端を擦り切った石錘である。器体は平滑で擦痕が認められることから、素材の整形を行ったことが分かる。

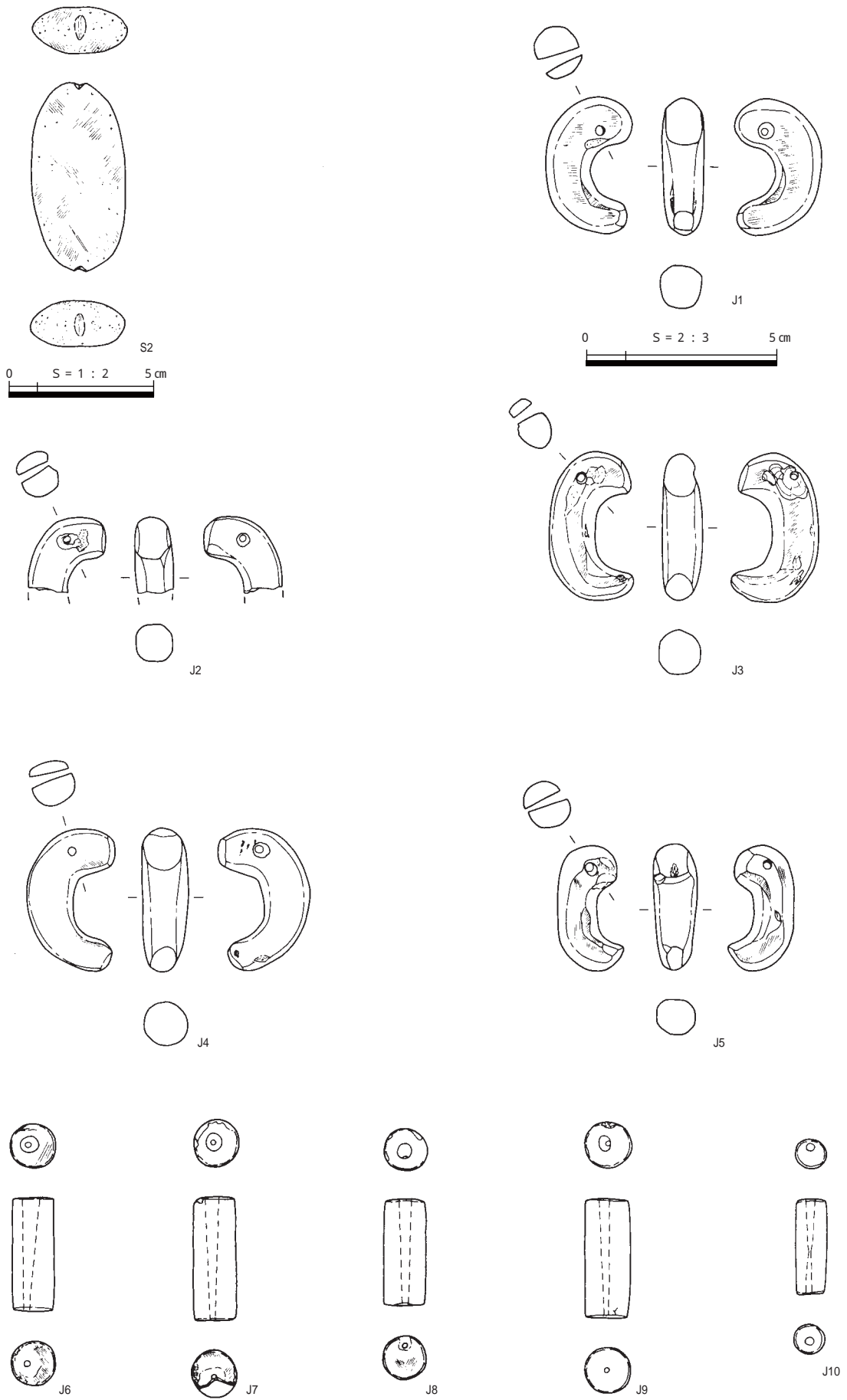
第26図には鍛冶関連遺物をまとめている。 は小型の椀形鍛冶滓でメタル度はH()である。 は極小の椀形鍛冶滓で下面に炉床土が付着する。粉炭を含む酸化土砂に覆われた極小の椀形鍛冶滓は、右寄りの上面に含鉄部が位置している。 は表面全体に木炭痕が点在する小塊状の鍛冶滓。 は長さ4.6cm、幅0.7cm、下手側の端部に方柱状の突出部を持つ棒状不明品である。



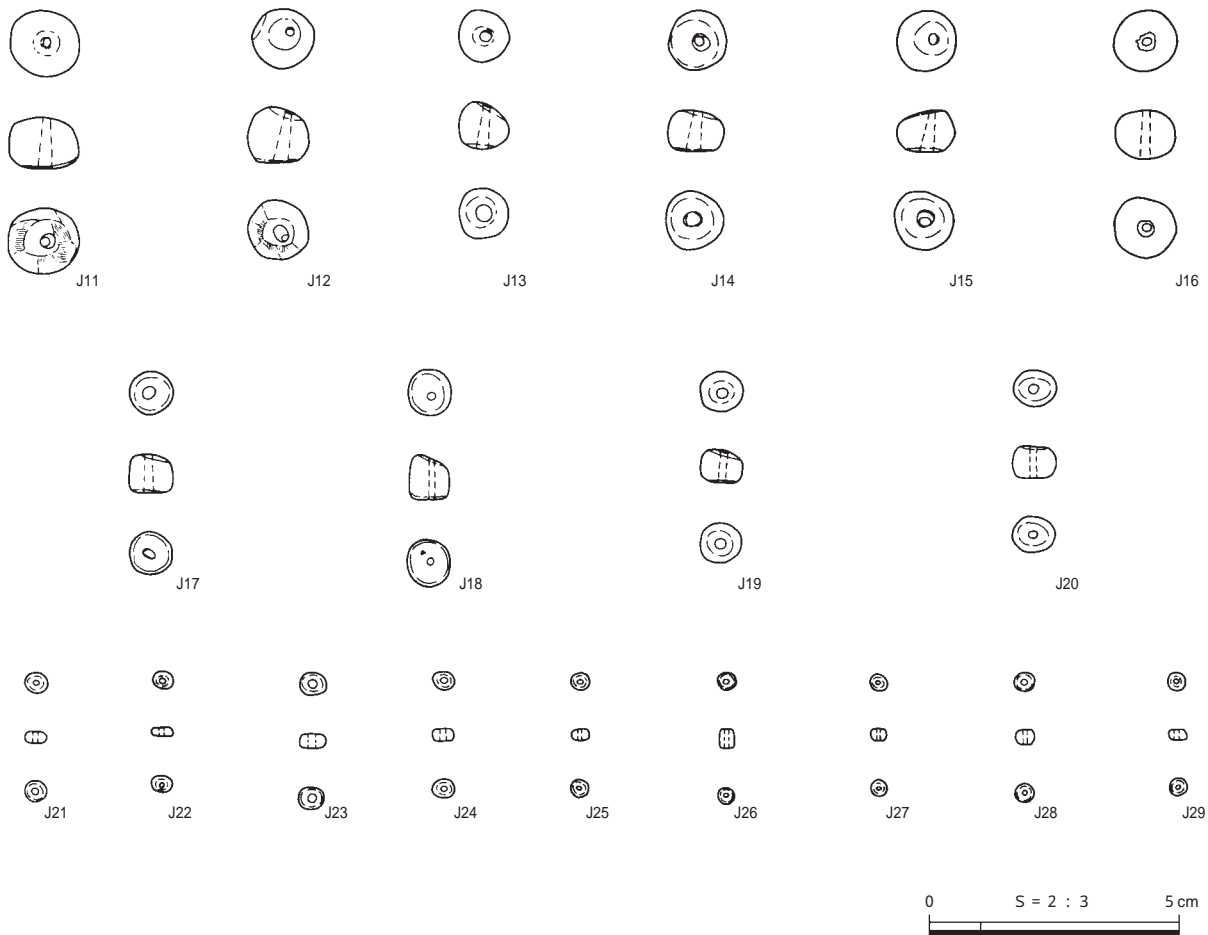
第23図 P153・SS6出土遺物(1)

SS6出土玉類

第21・22・24・25図に玉類とその出土状況を図示している。これらは、SS6南東に位置するP153に隣接して、着装状態が推定復元できるような状態で検出された。調査の経過は、SS6埋土掘り下げ過程で、まずJ1が発見され、そこで精査を行ったところ、東西14cm、南北7cmの範囲で次々と現れ始めた。遺物に伴う掘り込みや遺構は認められなかった。これらの玉類は最下面で標高50.93m、床面直上に沿うように出土しているが、出土位置や穿孔方向から検討すると5ブロック、3面のレベル差を有していた。なお、J27～29は周辺土壌を回収したものをフルイにかけて発見されたもので、出土位



第24図 SS6出土遺物(2)



第25図 SS6出土遺物(3)

置は不明である。以下、ブロックの構成と出土状況の概略を記す。

ブロック はJ1・2・7・17が該当する。レベルは50.972 ~ 50.976mで最も高い第1面となる。穿孔方向からみた繋がりは、西側からJ1 J2 J17 J7の順と考えられる。

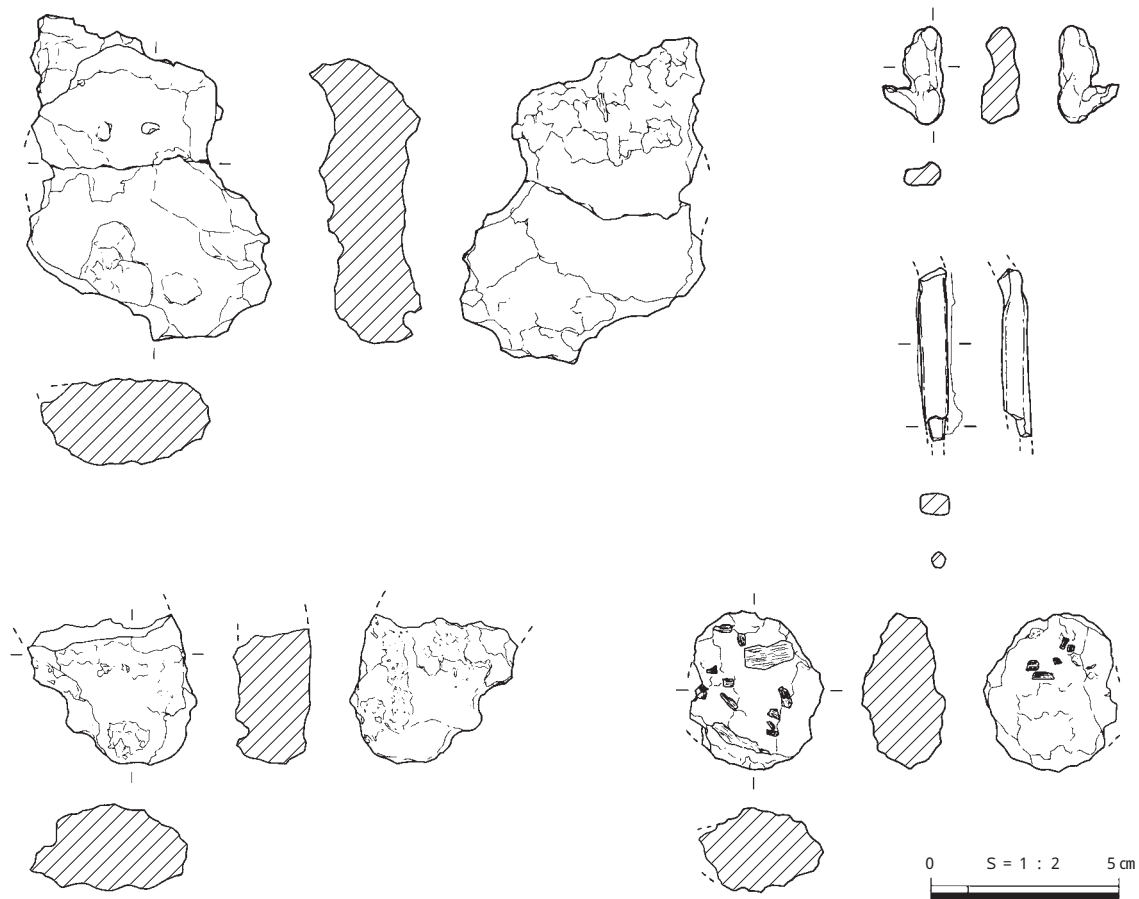
ブロック はJ5・6・10・11・21・22が該当する。レベルは50.932 ~ 50.959mを測り、第2面となる。穿孔方向からみた繋がりは西側からJ11 J6 J21 J10 J22 J5の順と考えられる。

ブロック はJ3・13・18・23・24が該当する。レベルは50.966 ~ 50.974mを測り、第1 ~ 2面である。穿孔方向からみた繋がりは、西側からJ13 J23 J18 J3 J24の順と考えられる。

ブロック はJ4・14・15・16・19・20・26が該当する。レベルは50.940 ~ 50.942mを測り、第2面である。穿孔方向からみた繋がりは、西側からJ26 J4 J16 J20 J19 J14 J15の順と考えられる。

ブロック はJ8・9・12・25が該当する。レベルは50.933 ~ 50.949mを測り、第3面となる。穿孔方向からみた繋がりは、西側からJ8 J12 J9 J25の順と考えられる。

次にブロック間の関係を検討してみたい。第1 ~ 2面のブロック の東端に位置するJ5は、同じく第2面のブロック J15に隣接していることから、ブロック の繋がりが想定される。最下面である第3面のブロック J25は第2面ブロック のJ26とほぼ同レベルに位置することから、ブロック の繋がりを持つものと考えられる。第1 ~ 2面のブロック J11はほぼ垂直方向に孔を向けていることから、その下部に位置するブロック のJ3と繋がる可能性が高い。したがってブロック の関係が考えられる。最後にブロック がどのブロックに繋がるかが問題となるが、第3面のプロ

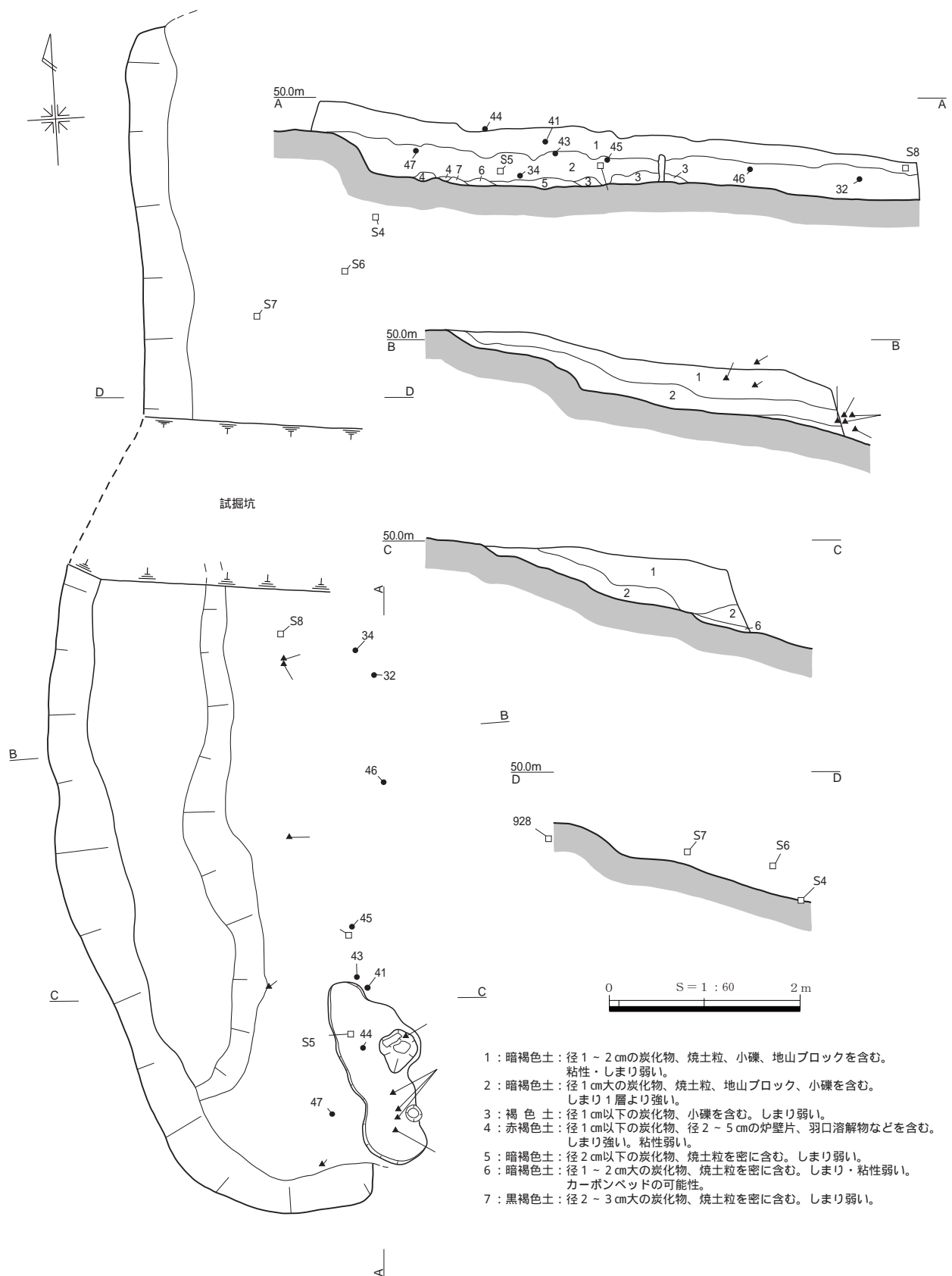


第26図 SS6出土遺物(4)

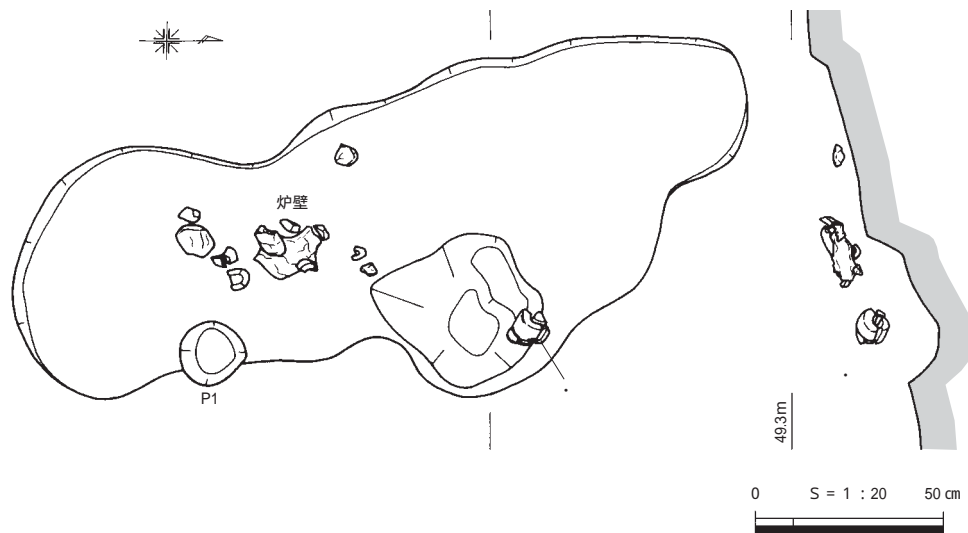
ック J8は主軸を直交させつつも、レベルが近いことを根拠としてブロック J7と連結するものと仮定する。さらにブロック J13はブロック J1に穿孔方向を向けていることから、やや開きがあるがブロック とブロック が繋がるものと考えたい。そこで復元される順序は、ブロック を基点として時計回りにブロック となる(巻頭図版3、PL.44)。

玉類は勾玉5点、管玉5点、丸玉6点、小玉13点、計29点が出土している。石材別にみると全体に占める割合はガラスが最も高く45%、次いで碧玉24%、瑪瑙14%、水晶14%、緑色凝灰岩3%となり、その内訳は瑪瑙製の勾玉4点、碧玉製の勾玉1点、管玉4点、丸玉2点、緑色凝灰岩製の管玉1点、水晶製の丸玉4点、濃紺色のガラス小玉4点、淡青色透明なガラス小玉9点である。

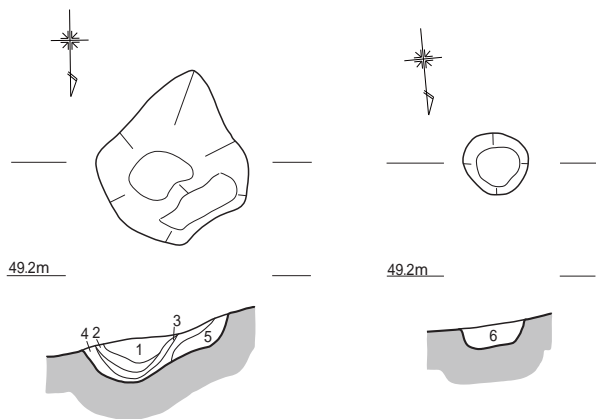
勾玉は概ね「コ」の字状を呈し、J4の勾玉は表面平滑であるが、そのほかのJ1～3・5は面取りの痕跡が残り仕上げが粗い。J2はやや赤味を帯びた瑪瑙製勾玉で、下半部が欠損している。J6～9は碧玉製の管玉であり、径1.1～1.2cmと太型であり、いずれも片面穿孔である。このなかでJ7は穿孔時による欠損部が認められる。J10は軟質の緑色凝灰岩製の管玉であり、両面穿孔となっている。J11・12は碧玉製の丸玉で、いずれも片面穿孔である。J11は比較的平滑に仕上げているが、J12は形態が歪で面取り痕跡が残っている。J13～16は水晶製の丸玉であり、J16のような平滑な仕上げを持つものとJ14・15の厚みに不均一なものが認められる。J17～20は濃紺色のガラス小玉であり、白玉状を呈するJ20と筒状のJ18など形態に差が確認できる。J21～29は淡青色のガラス小玉で、径3.5mm、厚さ2mm前後のものが主体となっている。いずれも端面が平滑で、研磨により調整されたと考えられる。



第27図 SS7



第28図 SS7鍛冶炉周辺遺物出土状況



- 1：黒褐色土：炭化材を含み、しまり弱い。径0.5cm以下の暗褐色土ブロックを含む。
- 2：黄褐色土：径0.5cm以下の砂礫を含み、固くしまる。
- 3：暗褐色土：2層に接する部分は黒変し、全体に固く締まる。
- 4：焼土：固くしまる。
- 5：暗褐色土：粘性有り。
- 6：暗褐色土：径1cm以下の炭化物、焼土粒を含む。しまり弱い。

第29図 SS7鍛冶炉

平面形はSS1に類似し弓形であり、斜面下方に当たる東床面は流出してしまっている。その規模は現存値で長軸12.7m、短軸4m、面積は34.7㎡を測る。検出面から床面までの深さは尾根部側で20cm、谷側は65cm、西側床面は長さ5.3m、幅1.26mのテラス状の段を有している。西壁は20度の角度で緩やかに立ち上がる。床面南端近くに長軸2.02m、短軸0.8mほどの浅い掘り込み面と、直径約45cmの鍛冶炉1基、P1(17×16-5cm)が検出された。

埋土は7層に分かれ、径2cm以下の炭化物や焼土粒、地山ブロックを含む暗褐色土が全体を覆っている。いずれも斜面上方の西側から東側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。

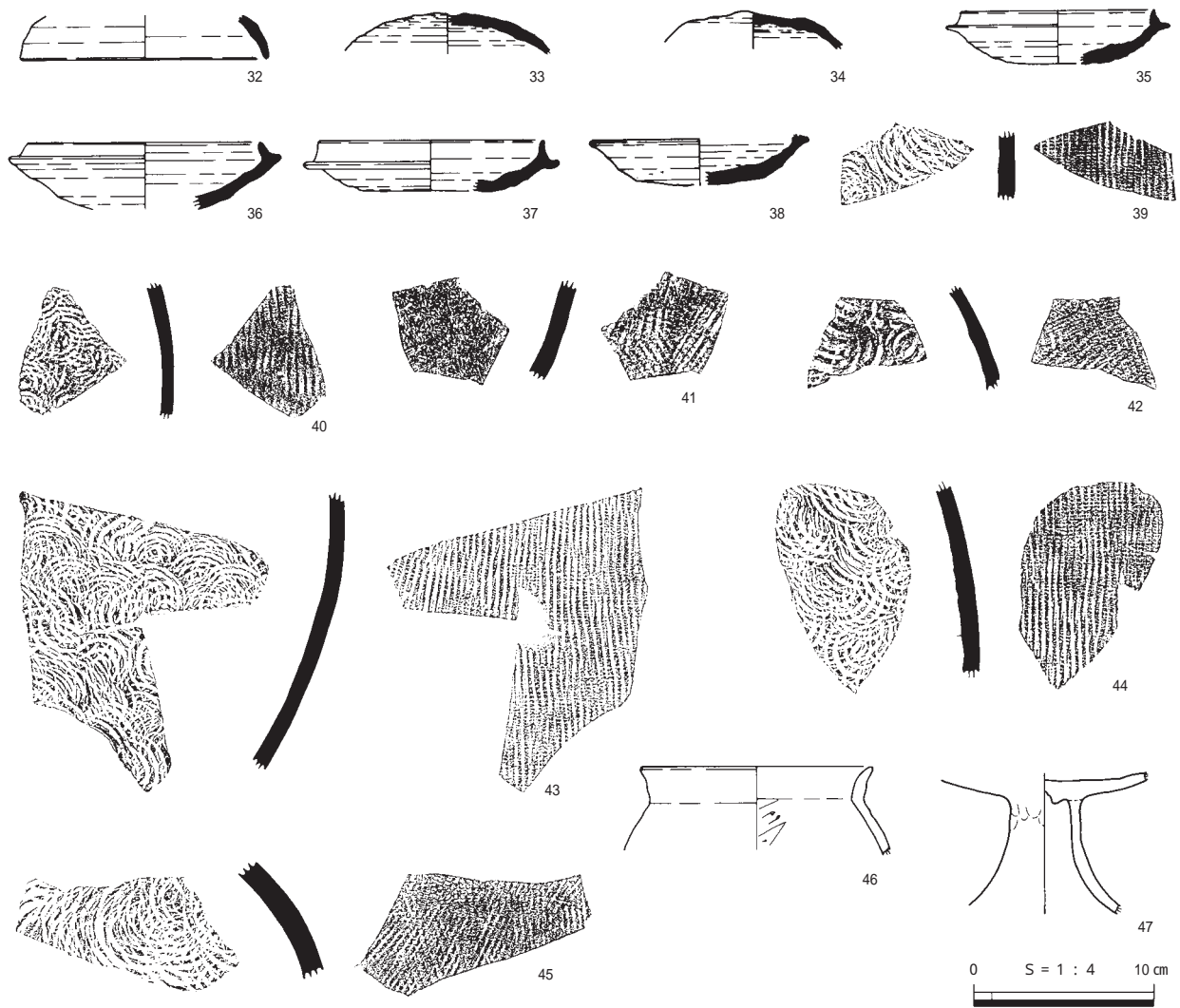
遺物は古墳時代後期から終末期の須恵器32～45、土師器46・47が出土している。32～34は天井部から口縁部に向かって緩やかに下がる坏蓋である。肩部に明瞭な稜を持たず、天井部は回転ヘラケズリ調整が認められる。35～38は内傾したカエリを有する坏身であり、概ね器高は低い。以上は、古墳時代終末、7世紀後半に位置付けられよう。39～45は甕の体部もしくは肩部破片、いずれも外面に平行タタキ、内面は同心円状当て具痕を残す。46は素口縁甕であり、口縁部が緩く外反し、体部は

遺構の時期は、出土遺物から八橋～期、古墳時代終末期から奈良時代に帰属するものと考えられる。

SS7(第27～34図、表1・3～13・15・24、巻頭図版4・5、PL9～11・45・46・62～64・66・68・69)

調査区東寄りの斜面下方、C1・D1グリッドの標高49.8～50.0mに立地する。西側斜面上方5mにはSS3が位置している。遺構の北寄り中央は平成17年度調査時の試掘トレンチに切られている。

平面形はSS1に類似し弓形であり、斜面下方に当たる東床面は流出してしまっている。その規模は現存値で長軸12.7m、短軸4m、面積は34.7㎡を測る。検出面から床面までの深さは尾根部側で20cm、谷側は65cm、西側床面は長さ5.3m、幅1.26



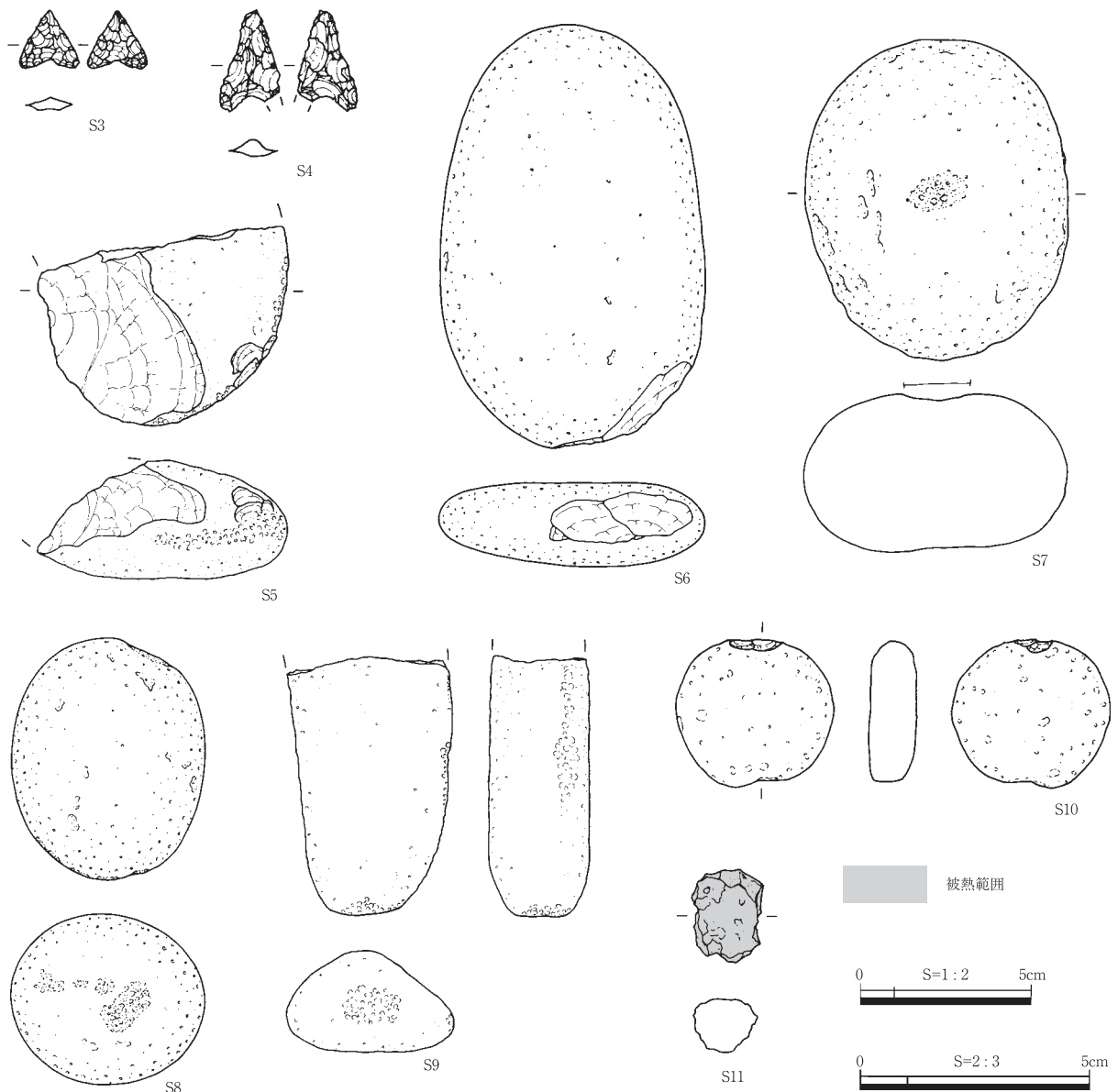
第30図 SS7出土遺物(1)

球胴形となっている。47は高坏の坏部から脚部破片に該当する。

S3・4は凹基式の石鏝である。S3は黒曜石製で、基部に浅い抉りを入れて脚部を作り出している。S4はサヌカイト製で、一方の脚部が欠損している。S6～9は敲石をまとめている。S5は大きく欠損しているが円礫を素材として用いている。下端から右側面にかけて敲打痕が帯状に連続する。表面の左半分を占める剥離面の打点位置は左側面下半に求められることから、左側面も使用されていたと考えられる。S6は小型の長楕円礫の下端に剥離痕が認められる。敲打痕は観察できないが、使用による剥離と判断し敲石とした。S7は厚めの楕円礫の表面中央に弱い敲打痕が見られる。S8は小型の楕円礫の下端に敲打痕が残っている。S9は棒状礫の下端と右側面に敲打痕がみられるが、器体中央で欠損しているため全体の形状は不明である。S10は小型の扁平な円礫の上端に弱い打ち欠きを加えた礫石錘である。下端は打ち欠きではなく、素材の礫に元からあった窪みに弱い摺り切りを施した可能性がある。S11は鍛冶炉内から出土した被熱礫である。

SS7鍛冶炉・鍛冶関連ピット・鍛冶関連遺物

SS7南東隅、床面の最も谷寄りに位置している。SS7東の斜面部掘り下げを実施しているなかで、羽口と炭が集中する範囲が検出されたため精査を行った。その結果、長軸約2m、幅約1mの炭層が



第31図 SS7出土遺物(2)

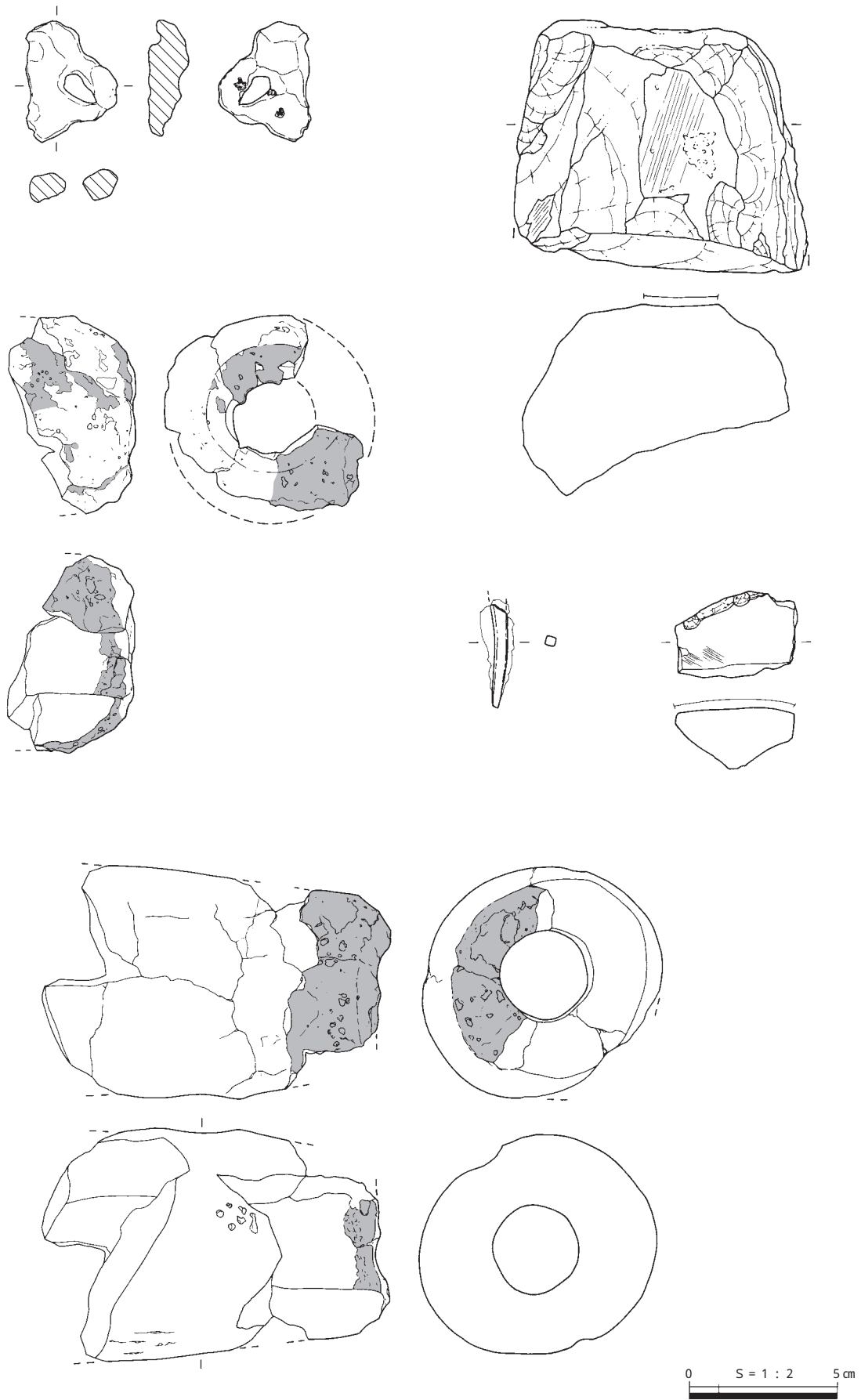
現れ、その下部に鍛冶炉が検出されたため、この炭層の広がる範囲を中心に25cm単位のマッシュを組み、周辺土壌のサンプリングを実施した。SS7は、そのほかの遺構に比べ鍛冶関連遺物や鉄製品が目立ったが、斜面部の下方で谷筋を望むこの場所に存在していることには正直驚きであった。調査後であるが、たたら研究会委員の穴澤義功氏に現地指導を賜り、鍛冶関連遺構の調査法と整理についてご教示いただいている。鍛冶炉の周囲には、長軸2.02m、短軸0.8m、深さ5cmの不整楕円形の掘り込み面を持ち、この底面は硬化していた。

鍛冶炉 鍛冶炉は、この掘り込み面の東側ほぼ中央に位置している。平面形は長軸46cm、短軸40cmの南側に張り出す不整円形を呈している。検出面からの深さは11cmを測り、掘り方は緩やかに外傾する掘り鉢状で、北西壁の一部はテラスを有した段状となっている。

鍛冶炉北側のテラス部にかかる位置に、羽口の先端部が出土している。通風口部を鍛冶炉の南東方向に向けていることから、ほぼ原位置を留めているものと思われる。同時に鍛冶炉から18cm南には羽口の基部を伴う炉壁が廃棄されていた。炉壁は最大長21cm、最大幅15cm、最大厚5cmで、上面側に羽口基部が貼り付き、周囲にも炉壁片や羽口片が点在している。羽口の位置から推定して、鍛冶炉北側



第32図 SS7出土遺物(3)



第33図 SS7鍛冶炉周辺出土遺物

に鞆が設置され、鍛冶炉縁辺にあった炉壁は鍛冶炉廃絶と同時に取り壊され、廃棄されたものと考えられる。

埋土は粘性・しまりが強い暗褐色土と焼土が底面に堆積し、上層に粘土質の黄褐色土とカーボンペットの黒褐色土が中心部に認められた。検出面でも、中心部に密集した炭が充填している1層があり、それを取り囲むように粘土質の2層と焼土層の4層が取り囲んでいる。なお、1層中より出土した炭化物2点についてAMS法による年代測定と樹種同定を依頼したところ、7世紀後半代の数値が得られている。このことは、SS7から出土した須恵器の年代観とも一致しており古墳時代終末の鍛冶工房であることが明確になった。また、燃料材としての炭はいずれもクリであることがわかり、鍛冶用炭として知られるクリ材が選択的に使用された可能性が指摘されている(第4章第4節)。

P1 鍛冶炉南東側37cmの場所に位置している。平面形は、直径17cmほどの不整形円形を呈し、検出面からの深さは5cmを測る。埋土は径1cm以下の炭化物と焼土粒を含んでいた。

鍛冶関連遺物 第32・33図に掲げている。 は炉床土付きの極小の椀形鍛冶滓であり分析資料 1に該当する(NOT2-1)。表面の酸化土砂中には鍛造剥片が付着し、メタル度は錆化()である。 ・

は同じく極小の椀形鍛冶滓で、 は含鉄部が上面寄りの中核部に位置している。 は極小の椀形鍛冶滓であり、皿状の底面には炉床土が固着している。滓質は外周部を中心に気孔が多く、比較的密度が高い。分析資料 2である(NOT2-2)。 ~ は鉄製品をまとめている。 は頭部が1~2cmほど外側に広がった小型の鑿、 は袋状鉄斧であり、刃部が斜めに磨耗している状態で使用痕かと思われる。 ・ は分析資料 3・4(NOT2-3・4)として抽出している。 は横断面が方形を呈し、足部先端が欠損している鋸状不明品である。 は上面に通風孔部の壁面を残す羽口の先端部破片である。通風孔部径は約3cmで、右側部上半が滓化した自然面となっている。 は薄板状に剥離した鉄床石の表面破片であり、下手寄りには被熱し黒褐色の鍛造剥片が固着している。 は砂岩製の砥石であり上面に幅3.3cmの緩く湾曲した砥面を持っている。

~ は鍛冶炉内もしくは鍛冶炉周辺から出土した遺物である。 は流動状の鍛冶滓であり、鍛冶炉粉炭層中で生成した可能性がある。 は方形の横断面を有する釘の足部片である。 ・ は鍛冶炉直上から出土した羽口であり、 の通風口部の径は先端部で3cm、先端部から肩部にかけて滓化発泡している。 は羽口体部から先端部破片であり、先端から斜め方向に直線状に開く形態で、基部側に向かい身厚を増す。先端部から肩部にかけて滓化発泡しており、通風孔部の壁面にも一部、滓を巻き込んでいる。 は砂岩製の被熱した砥石であり、上面は斜め方向の砥痕が確認される。

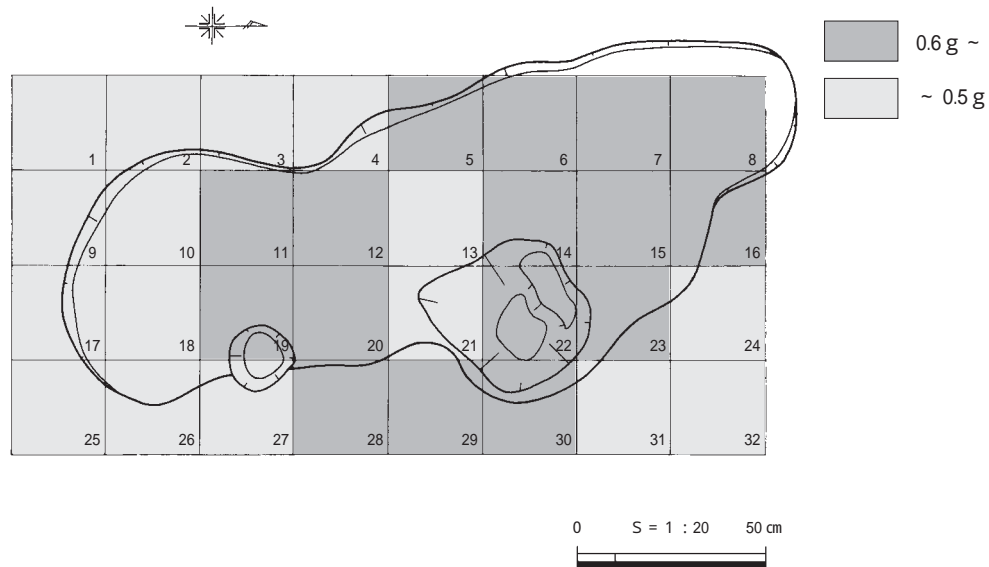
遺構の時期は、出土遺物から八橋 ~ 期、古墳時代後期後半~終末に位置づけられる。

粒状滓・鍛造剥片の分布 SS7鍛冶炉周辺では鍛冶作業と操業空間の復元を行うために、鍛冶炉を中心に25cmメッシュを組んで、土壌を回収・水洗し、磁石による選別、肉眼分類を通して粒状滓、鍛造剥片、鍛冶滓、炉壁、羽口、炭化材などを抽出した。なお、本来ならばSS7鍛冶工房全域にわたる全量サンプルが望ましいが、調査期間などの制約から鍛冶炉周辺に限定せざるを得なかった。

第34図、表1はメッシュ配置図と解析結果である。粒状滓は2.5g、468点、鍛造剥片は46.8gと微量である。分布状況は、メッシュ 7が104点、メッシュ 15が43点、メッシュ 6・14で密度が高いことから、この周辺において鍛打作業が行われたと推定される。鍛冶炉南側では北東側に次いで微細遺物が多く認められるが、際立って著しい状況は確認できていない。さらに、P1では粒状滓・鍛造剥片が0.4gと微量であり、規模も小さいことから鉄床石設置穴や鍛冶工人の足入れ穴であった可能性

は低い。したがって、羽口の位置から鍛冶炉北側が鞆の設置場所、鍛冶炉北東から西側が鍛打作業空間として復元されよう。鍛冶炉周辺の南北約2m、東西約0.8mの硬化範囲は、SS7鍛冶工房の作業中心部であったと判断される。

回収された鍛冶関連遺物や微細遺物が少量である背景として、鍛冶作業期間が小規模で短期間であったこと、斜面上に立地していることから流出してしまった可能性が高いことが列挙できる。したがって、上記のデータが本遺跡の鍛冶作業の実態を全て表しているとはいえないが、鍛冶関連遺物の構成や出土状況を見る限り、村方鍛冶程度の規模であった見解と大きな齟齬はないものとする。



第34図 鍛冶炉周辺微細遺物分布図

SS8 (第35 ~ 39図、表3・4・13・15・16・21・24、PL.12・47・48・61・62・66 ~ 69)

調査区北端中央、B 2・C 2グリッドの標高52.8mに立地する。斜面上方の2.5mにはSS9が、斜面下方3.5mにはSS6が位置している。北側は調査区外に伸びるため、全形は不明である。本遺構は建て替えが4回行われているため古い方から(a)・(b)・(c)・(d)と呼称する。

SS8 (a) 床面の平面形は弧状を呈しているが大部分は調査区外に伸びるため不明である。尾根部の壁はその後の建て替えによって破壊されてしまっているため存在しないが、壁溝が残存していた。壁溝は幅25 ~ 70cm、断面形はU字状で検出面から底面の深さは12cmを測る。P2・5 ~ 7に切られ、埋土は地山ブロックを含む粘質土で埋められていた。主柱穴はP11の1基を検出している。

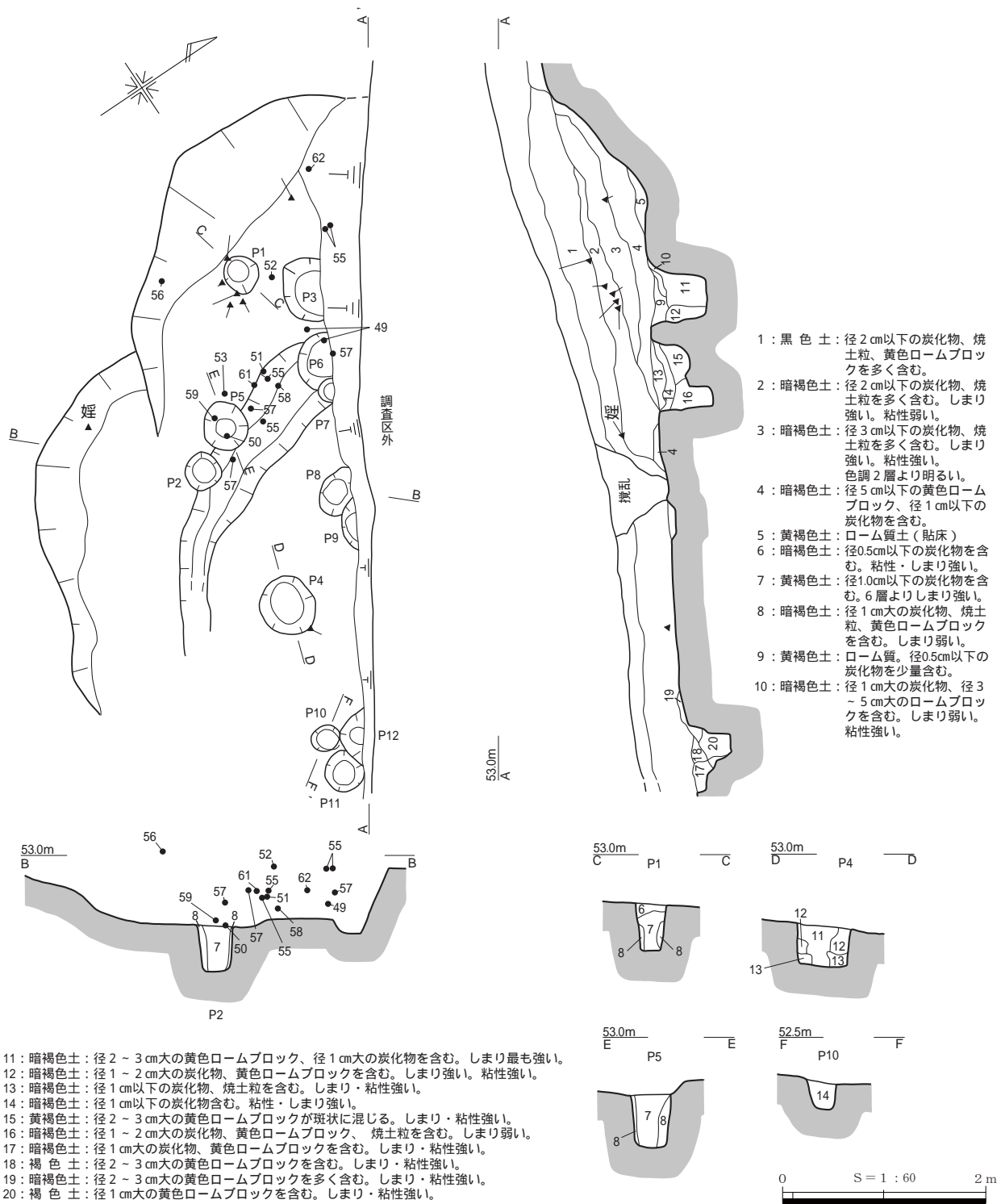
SS8 (b) 平面形は検出部分で隅丸方形を呈し、東西3.8m、南北3.4m、残存面積は6.4m²を測る。検出面から床面までの深さは48cm、南壁は30度の角度で外反して立ち上がる。主柱穴はP5 (46 × 43 - 52cm) の1基を検出した。もう1基の主柱穴が谷側に存在していたものと推定される。埋土は自然流入で、建物全体のものと同質である。

SS8 (c) 床面の平面形は弧状を呈し、東西3.5m、南北2.1m、検出面から床面までの深さは48cm、西壁は50度の角度で立ち上がる。主柱穴は、P1 (40 × 34 - 45cm)、P2 (36 × 34 - 45cm) の2基を検出した。埋土は自然流入で、建物全体のものと同質である。

表1 鍛冶炉周辺微細遺物集計表

カッコ内の数字は個体数

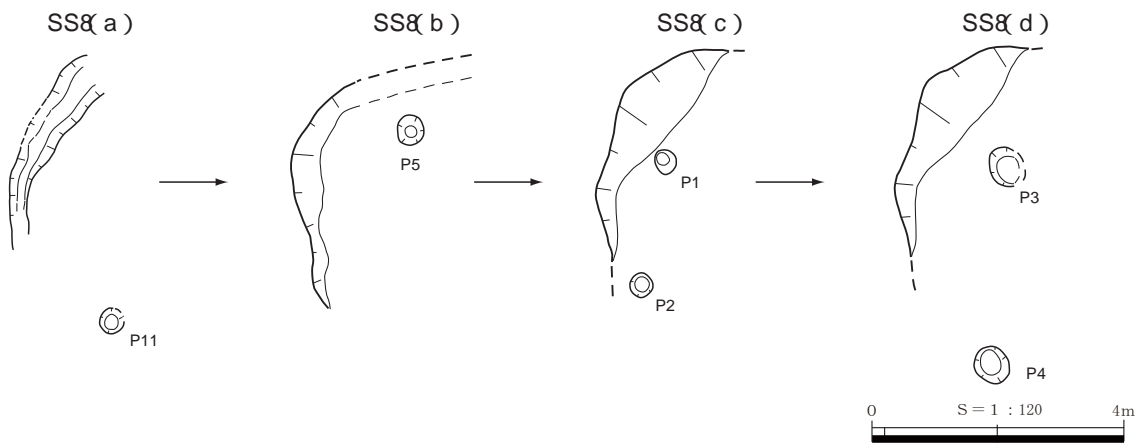
メッシュ		粒状滓 (g)		鍛造剥片 (g)				粒状滓・ 鍛造剥片 合計 (g)	鉄滓 (g)	炉壁 (g)	炭化材 (g)	土器 (g)	羽口 (g)	その他の 微細遺物 合計 (g)	微細遺 物合計 (g)
新番号	旧番号	~ 0.8mm	合計	~ 0.8mm	0.8 ~ 2.0mm	2.0mm ~	合計								
2	f-5- -い	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
3	f-5- -は	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.6
4	f-5- -い	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.6
5	e-5- -は	0.1	0.1 (3)	0.0	0.8	0.0	0.8	0.9	0.0	0.0	0.6	2.8 (2)	0.0	3.4	4.3
6	e-5- -い	0.1	0.1 (46)	0.0	1.4	0.0	1.4	1.5	0.1	4.0	28.0	4.2 (1)	0.0	36.2	37.8
7	e-5- -は	0.2	0.2 (104)	0.0	0.8	0.0	0.8	1.0	0.1	0.0	14.0	0.0	0.0	14.0	15.1
8	e-5- -い	0.1	0.1 (4)	0.0	0.8	0.0	0.8	0.9	4.2	0.0	1.6	5.0 (1)	0.0	6.6	11.7
9	f-5- -に	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
10	f-5- -ろ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
11	f-5- -に	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.6	0.6	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.7
12	f-5- -ろ	0.1	0.1 (3)	0.0	0.9	0.0	0.9	1.0	0.1	0.0	0.3	0.0	0.0	0.3	1.4
13	e-5- -に	0.1	0.1 (2)	0.0	0.4	0.0	0.4	0.5	0.0	0.0	3.9	0.0	0.0	3.9	4.4
14	e-5- -ろ	0.1	0.1 (67)	0.0	0.7	0.0	0.7	0.8	0.5	6.5	40.6	8.6 (1)	0.0	55.7	57.0
15	e-5- -に	0.1	0.1 (43)	0.0	0.8	0.0	0.8	0.9	0.1	0.0	10.4	9.2 (2)	0.0	19.6	20.6
16	e-5- -ろ	0.1	0.1 (3)	0.7	0.0	0.0	0.7	0.8	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0
17	f-5- -は	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
18	f-5- -い	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
19	f-5- -は	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.7	0.7	0.7	1.9	0.9	0.0	0.0	2.8	4.2
20	f-5- -い	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.8	0.8	0.6	0.0	0.2	0.0	0.0	0.2	1.6
21	e-5- -は	0.1	0.1 (3)	0.0	0.3	0.0	0.3	0.4	0.1	0.0	0.3	1.9 (1)	0.0	2.2	2.7
22	e-5- -い	0.1	0.1 (1)	0.0	0.7	0.0	0.7	0.8	0.1	11.8	17.0	1.0 (1)	0.7 (3)	30.5	31.4
23	e-5- -は	0.1	0.1 (1)	0.0	0.6	0.2	0.8	0.9	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.4	1.3
24	e-5- -い	0.1	0.1 (1)	0.0	0.3	0.0	0.3	0.4	0.0	0.0	0.0	2.4 (1)	0.0	2.4	2.8
25	f-5- -に	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
26	f-5- -ろ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3
27	f-5- -に	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.2	0.0	0.0	0.2	0.7
28	f-5- -ろ	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	1.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0
29	e-5- -に	0.1	0.1 (1)	0.0	0.9	0.0	0.9	1.0	0.1	1.0	0.0	0.0	0.0	1.0	2.1
30	e-5- -ろ	0.1	0.1 (10)	0.0	1.2	0.3	1.5	1.6	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	2.6
31	e-5- -に	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4
32	e-5- -ろ	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.4	0.4	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.5
	SS7-P1一括	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.4	0.4	0.0	0.0	0.2	0.9 (1)	0.0	1.1	1.5
	鍛冶炉土壌サンプル	0.4	0.4 (164)	0.0	8.9	5.7	14.6	15.0	6.5	224.3	32.4	16.9 (19)	7.0 (2)	280.6	302.1
	鍛冶炉周辺一括	0.2	0.2 (6)	0.0	2.7	0.0	2.7	2.9	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0
1,2,9,10	f-5- 一括	0.1	0.1 (1)	0.0	0.8	0.0	0.8	0.9	0.0	1.4	0.3	5.5 (8)	0.0	7.2	8.1
3,4,11,12	f-5- 一括	0.1	0.1 (2)	0.0	0.1	0.0	0.1	0.2	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
5,6,13,14	e-5- 一括	0.1	0.1 (3)	0.0	2.6	0.0	2.6	2.7	3.4	0.0	0.9	5.3 (7)	0.0	6.2	12.3
17,18,25,26	f-5- 一括	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7
19,20,28,27	f-5- 一括	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.6	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6
	a-5- 一括	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.2	0.0	1.0	4.6 (8)	1.1 (1)	6.7	11.9
	b-5- 一括	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6	0.0	0.4	18.4 (12)	0.0	18.8	21.4
	b-5- 一括	0.0	0.0	0.0	6.1	0.1	6.2	6.2	0.0	5.9	2.1	37.6 (23)	0.2 (3)	45.8	52.0
	d-4- 一括	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0	1.4	1.4	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.8	2.2
	合計	2.5	2.5 (468)	0.7	39.5	6.6	46.8	49.3	26.8	256.8	157.9	124.3 (88)	9.0 (9)	548.0	624.1



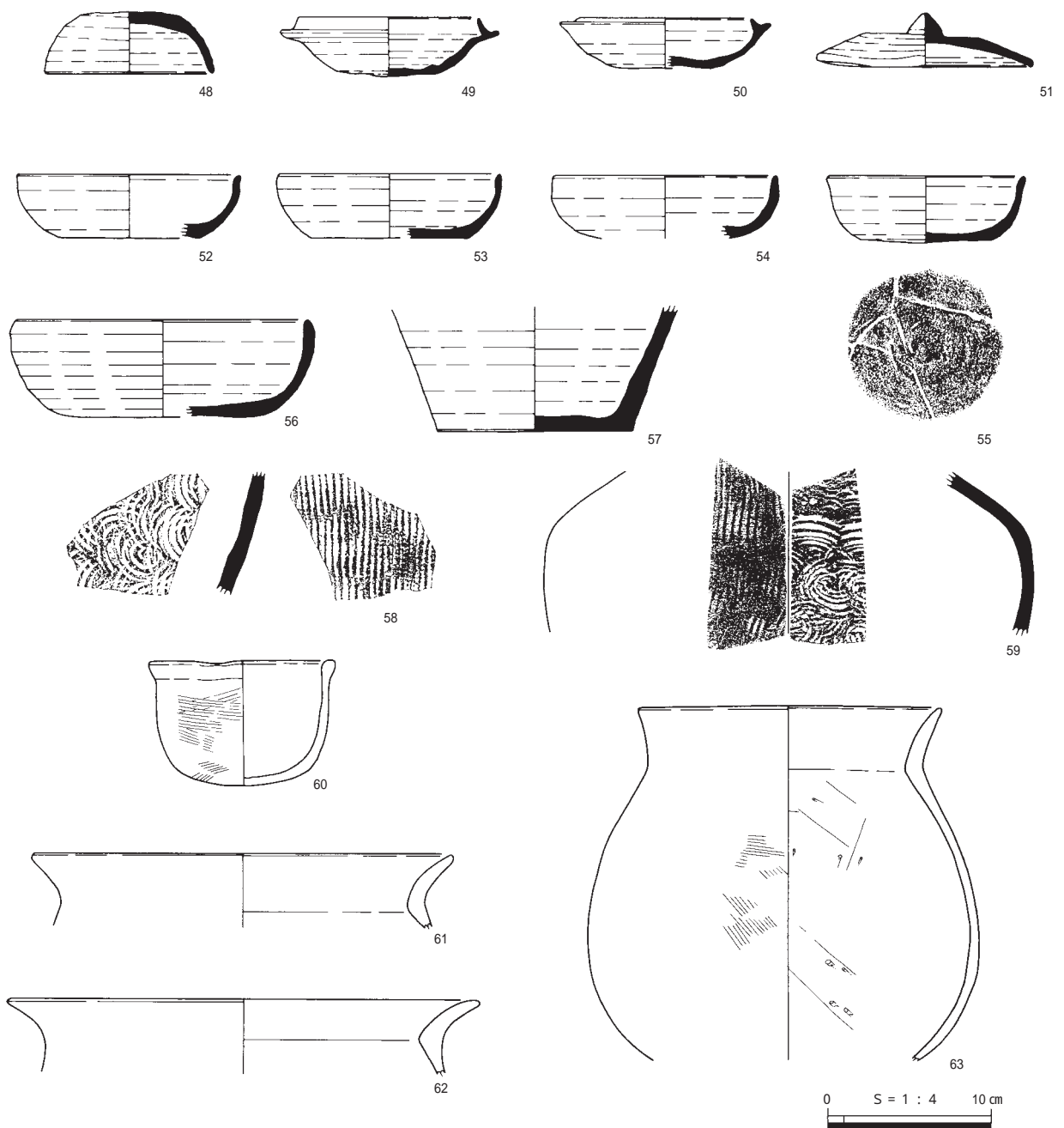
第35図 SS8

SS8 (d) 平面形はSS8 (c) と同じで弧状を呈し、東西3.5m、短軸2.1m、検出面から床面までの深さは48cm、西壁は50度の角度で立ち上がる。支柱穴は、P3 (60×35 - 50cm) P4 (60×55 - 40cm) の2基を検出した。柱穴の規模がc期よりも拡大し、建物自体も拡幅しているものと考えられる。埋土は尾根側からの自然流入で、建物全体のものと同質である。

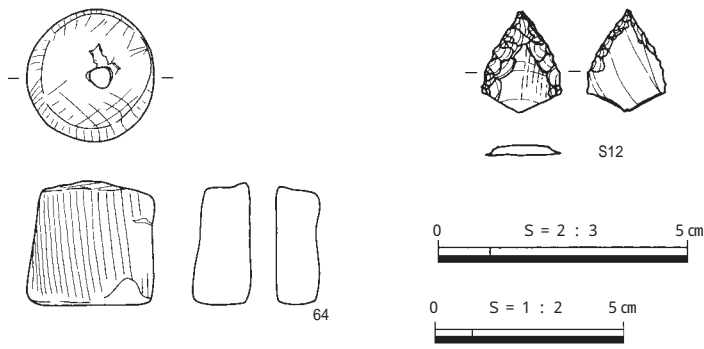
遺物は埋土中・下層にまとまって出土している。48~59は須恵器、60~63は土師器をまとめている。48は天井部から丸味を帯びて口縁に至る坏蓋である。49・50は内傾したカエリを持つ坏身であり、底部は回転未調整である。51は三角錘状のツマミが付いた坏蓋であり、肩部に稜を有し口縁部に向か



第36図 SS8変遷模式図

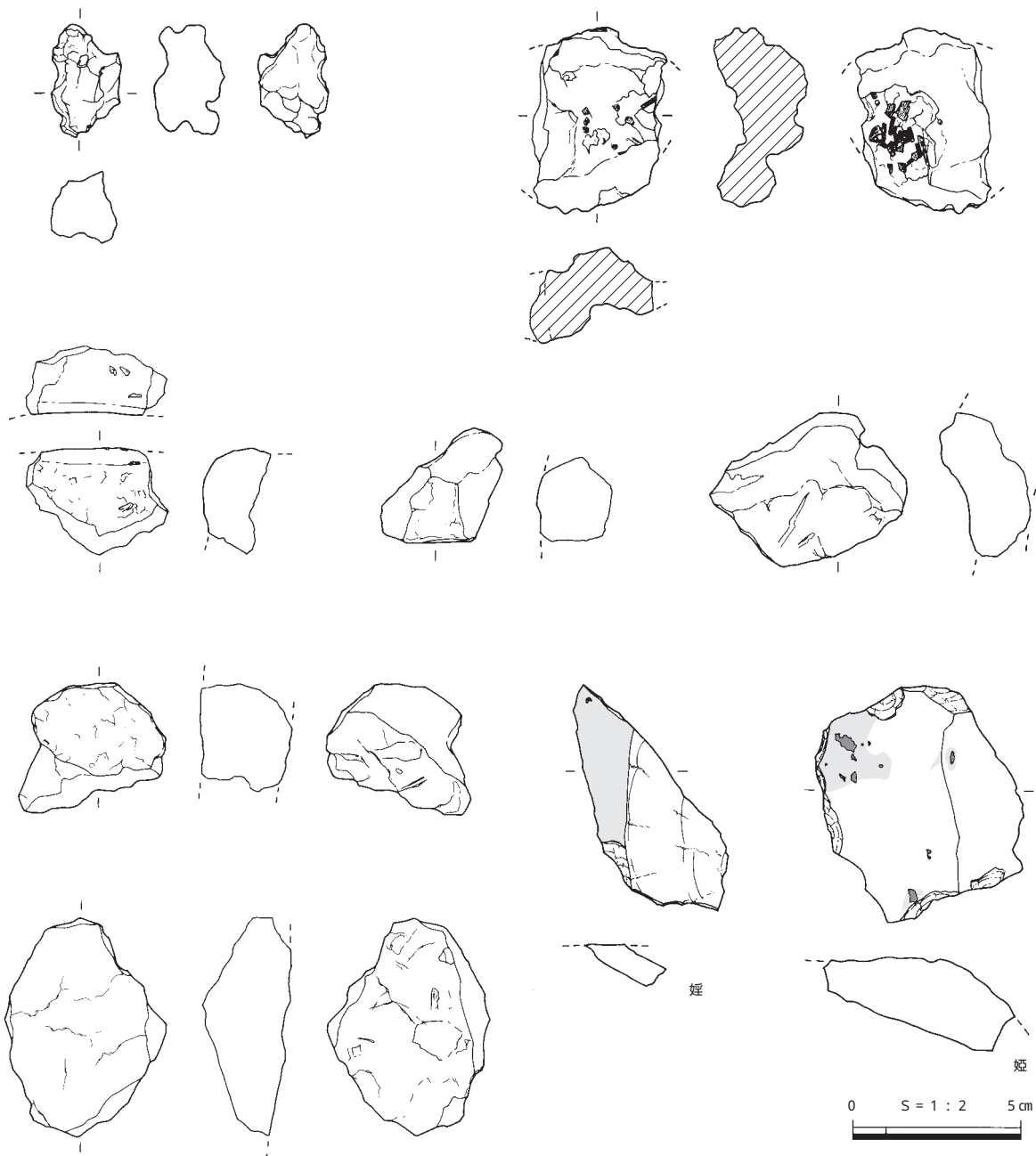


第37図 SS8出土遺物(1)

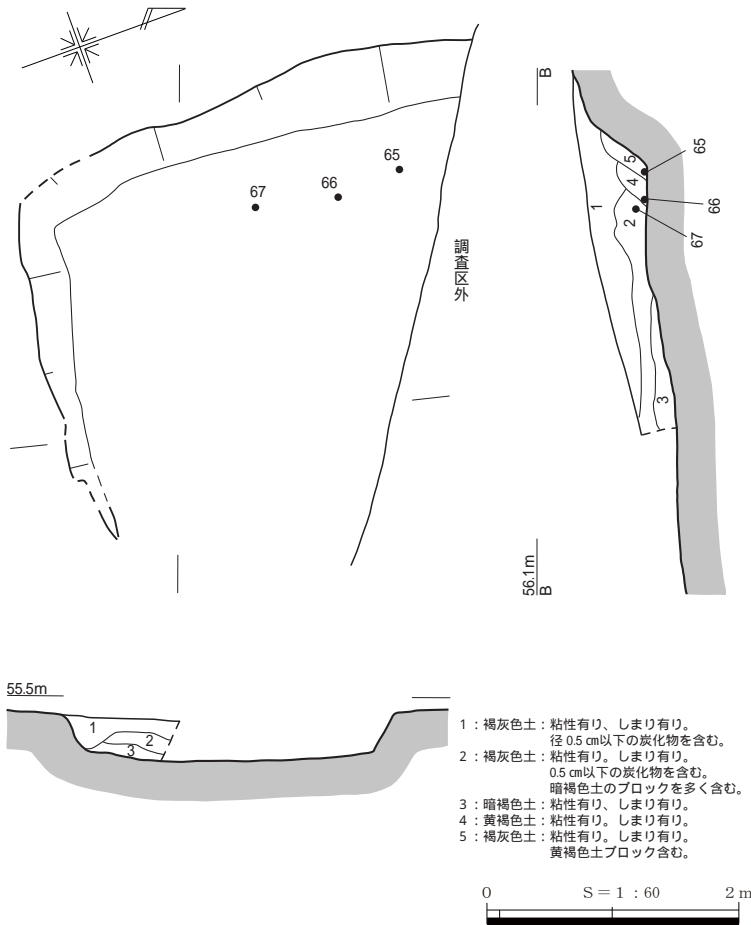


第38図 SS8出土遺物(2)

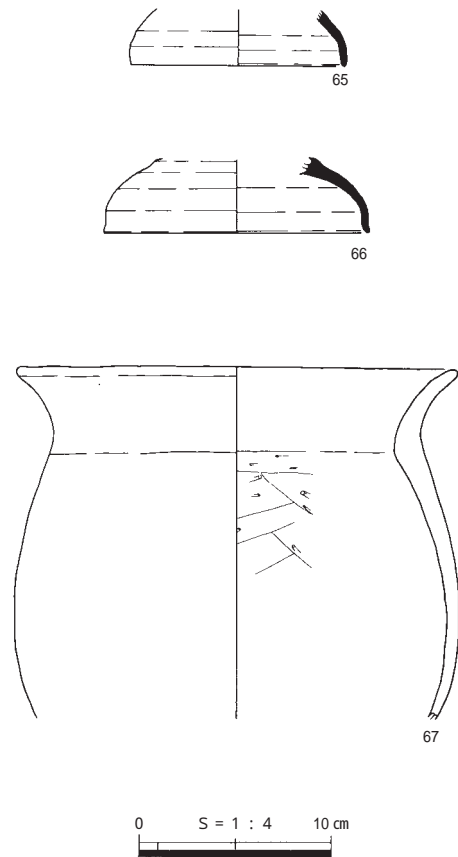
って緩やかに下がる。52～56は体部が緩やかに丸味を帯びて立ち上がる坏身であり、55は回転糸切痕が残る。57は壺の底部破片であり、回転糸切り痕が認められる。58・59は甕の肩から体部にかけての破片であり、外面は平行タタキ、内面は同心円状当て具痕が観察される。以上は八橋期以降(7世紀後半～8世紀代)に位置づけられる。60はP6から出土した無頸壺であり外面にハケメ、内面にヘラケズリ調整が見られる。61～63は素口縁甕であり、い



第39図 SS8出土遺物(3)



第40図 SS9



第41図 SS9出土遺物

れも口縁端部が先細りし、頸部内面に稜を持っている。64は表面にハケメ調整が施される筒状の有孔土玉である。

S12は黒曜石製の石鏃で、縁辺に加工を施しつつも表裏面に素材面を残し、脚部が欠損していることから失敗品の可能性がある。

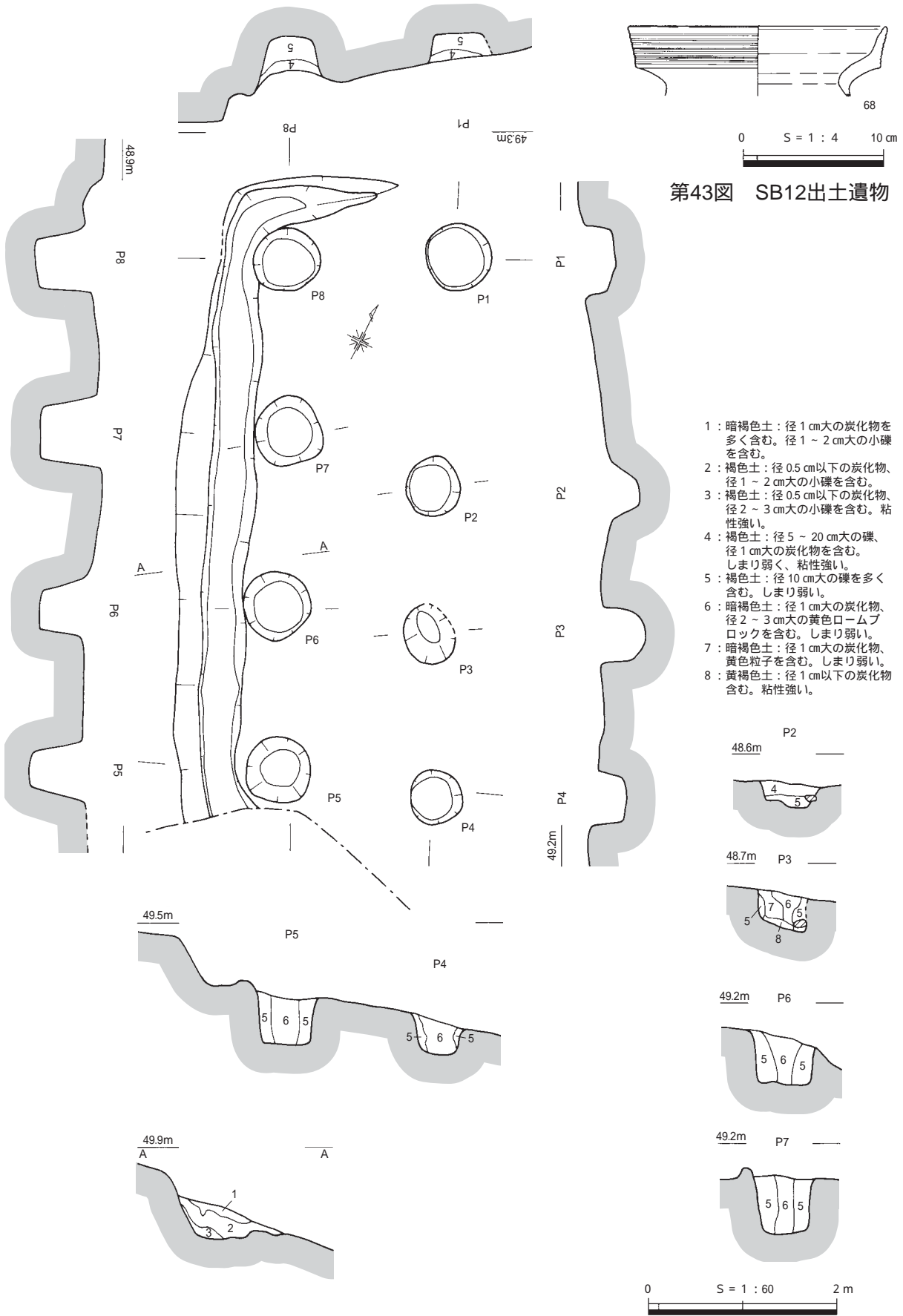
第39図は鍛冶関連遺物を図示している。 は粘土質溶解物で、羽口の頸部で生成された可能性がある。 は左右が主破面となり、錆化している極小の椀形鍛冶滓である。 ~ は炉壁の可能性を持つ被熱粘土塊で、内外面が吸炭している ~ や滓がわずかに固着している などが見られる。姪・姪は表面が薄く剥離した鉄床石破片である。姪は表面が被熱して赤化し、姪は被熱範囲に鍛造剥片が固着している。以上のように、本遺構からは鍛冶関連遺物が比較的多く見られ、とくに埋土中から炉壁の可能性のある被熱粘土塊がまとまって出土していることから、SS7とは別に鍛冶炉を伴う遺構である可能性を有している。鍛冶炉があるとするれば、北側調査区外となろう。

遺構の時期は、出土遺物から八橋 ~ 期、古墳時代終末期から奈良時代に位置づけられる。

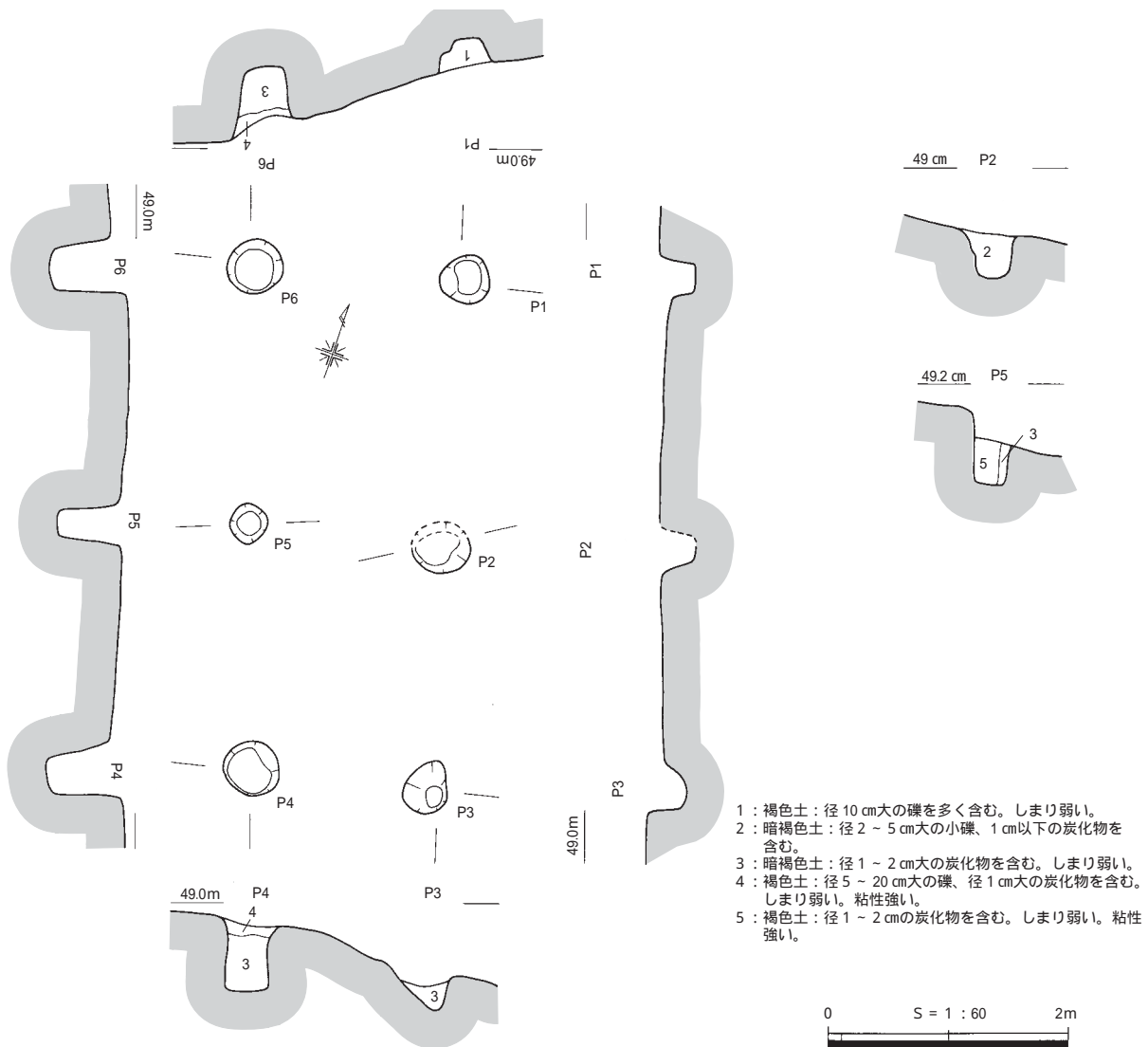
SS9 (第40・41図、表16、PL.13・47・49)

調査区北西、B3グリッドの標高54.9 ~ 55.8mに立地する。斜面上方の西1mにはSS5が、斜面下方2mにはSS8が位置している。遺構北側は調査区外に伸び、東側は攪乱により削平を受けている。

平面形は残存部分で方形を呈し、長軸3.8m、短軸3.4m、残存面積は10.1m²を測る。検出面から床



第42図 SB12



第44図 SB13

面までの深さは48cm、西壁は50度の角度で外反して立ち上がる。

床面からはピットや壁溝、焼土面などは確認されなかった。おそらく、床面の中心部は北側の調査区外に延びるためと思われる。

埋土は5層に分かれ、上層の微細な炭化物を含む褐灰色から暗褐色土が全面を覆っている。これらは斜面上方の西側から東側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。

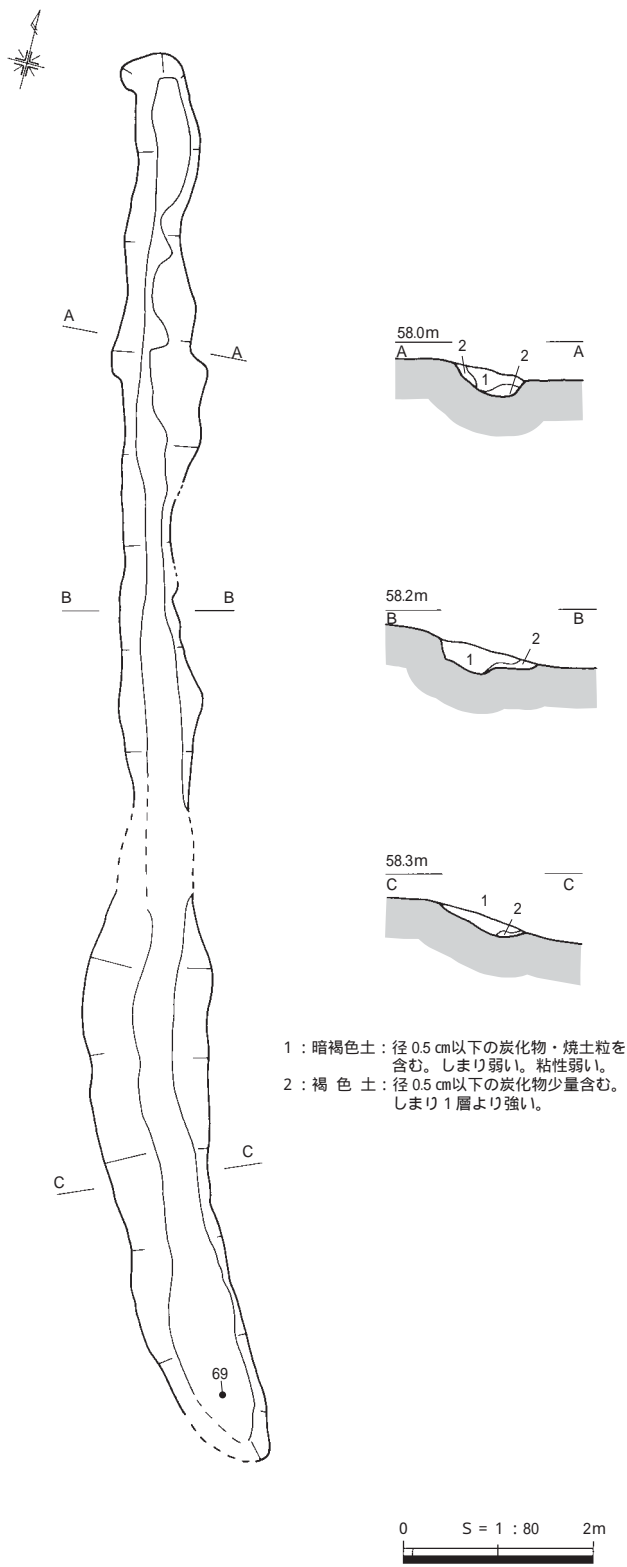
遺物は埋土下層と床面において須恵器と土師器が出土している。65・66は須恵器坏蓋であり、天井部から口縁部にかけて明瞭な稜を持たず緩やかに下がっている。67は素口縁甕であり、口縁端部が先細りし、内面が丸味を帯びている。口縁部径が体部径よりも大きく、体部が直立する118（第61図）への移行形態である。

遺構の時期は、出土遺物から八橋 ~ 期、古墳時代終末期に位置づけられる。

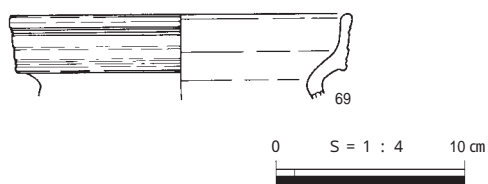
(4) 掘立柱建物跡

SB12（第42・43図、表3・16、PL.13・14・49）

調査区南東の最下段、F0グリッドの標高48.5 ~ 49.5mの岩盤上に立地し、斜面下方の8 m東には



第45図 SD1



第46図 SD1出土遺物

小川が北に向かって流れている。SB12 - P2が、SB13 - P2を切っている。

平面形は桁行3間(5.7m) 梁行1間(1.8m)の掘立柱建物跡であり、主軸はN - 23° - W、梁桁に囲まれた面積は約9.7m²を測る。柱間距離はP1 - 2:2.5m、P2 - 3:1.5m、P3 - 4:1.7m、P4 - 5:1.7m、P5 - 6:1.72m、P6 - 7:1.86m、P7 - 8:1.8m、P8 - 1:1.82mとやや東側の梁行が長い。柱穴の平面形は直径74cm前後の不整形円形であり、検出面からの深さは西側の梁行で約66cm、東側で約46cmを測る。

埋土は、径1cm大の炭化物を含む暗褐色土と径10cm以下の礫が混じる褐色土に概ね分かれ、前者は柱痕が相当する。柱痕が残るピットは基本的に西側であり、柱痕から推定される柱の直径は16 ~ 18cmである。

尾根側は岩盤を掘削して整地し、壁溝と柱穴を穿っているが、この壁は63度の角度で立ち上がる。溝は幅36 ~ 50cm、深さ6cm、断面が逆台形状でコの字状にめぐっている。SB12は桁数が少なく、本来もう一間存在していた可能性があるが、谷部側は土砂の流出により柱穴は検出されなかった。

SB12は、柱穴の切り合い関係からSB13廃絶後に築かれている。主軸を10度ずらし、柱穴の径が倍以上となり、梁間を一間分増やし拡張していることから、建造物の規模もかなり大きなものであった可能性がある。出土遺物は、SB12を覆っている暗褐色土中から弥生時代後期後葉の甕68が出土しているが、混入と考えられる。

遺構の時期は、埋土の特徴から古墳時代後期以降と想定される。

SB13 (第44図、表3、PL.13)

調査区南東の最下段、F0グリッドの標高48.4 ~ 49.0mの岩盤上に立地する。P2がSB12 - P2に切られている。

平面形は桁行2間(4.35m)、梁行1間(1.8m)の掘立柱建物跡であり、主軸はN-18°-W、梁桁に囲まれた面積は約7.8㎡を測る。柱間距離はP1-2:2.2m、P2-3:2.15m、P3-4:1.6m、P4-5:2.1m、P5-6:2.12m、P6-7:1.78mとやや東側の梁行が長い。柱穴の平面形は直径32~48cmの不整円形、検出面からの深さは西側で52cm、東側で約30cmを測り、やや谷側が深い。

埋土は、径1cm大の炭化物や地山ブロックを含む暗褐色土が主体となり、人為的に埋め戻された状況であった。

尾根側の柱穴は部分的に岩盤を掘削して掘り込んでいるが、SB13を構築するための岩盤の整地は確認されなかった。本来は規模の小さな整地がなされていた可能性も残るが、SB12を築くにあたって拡張したためその痕跡がみられない。いずれにしても、SB13からSB12への建て替えは短期間に行われたものと考えられる。

遺構の時期は、埋土の特色から古墳時代後期以降と想定される。

(5) 溝

SD1(第45・46図、表16、PL.15・49)

調査区西端、D3・E3グリッドの標高57.6~58.0m、南北方向に向かって斜面沿いに縦走している。北東側2.5mにSS4が位置する。

検出した長さは13m、幅は0.6~1.3m、検出面からの深さは0.26mを測る。底面幅は総じて北半が狭く、南半が広い。断面形はU字状で、埋土は1層の暗褐色土と2層の褐色土が全体を覆っている。出土遺物は少なく、弥生土器1点を図示している。69は拡張した口縁部に、多条平行沈線文が認められる弥生後期後葉の甕である。

遺構の時期は、出土遺物から - 3様式、弥生時代後期後葉に帰属する。

(6) 土坑

SK16(第47図、PL.16)

調査区北西側、C2グリッドの標高54.0~54.3mの斜面上に立地する。南側はSS1が隣接している。

平面形は不整長方形を呈し、長軸2.2m、短軸1.4m、検出面からの深さは0.43mを測る。底面は北側に不整円形の掘り込み面を持ち、掘り方は段状で尾根方向が50度の角度で外反して立ち上がり、谷側は浅い。

埋土は4層に分層でき、暗灰褐色から黒褐色土中には5mm以下の炭化物や地山ブロックを含んでいる。いずれも斜面上方の西側から東側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。

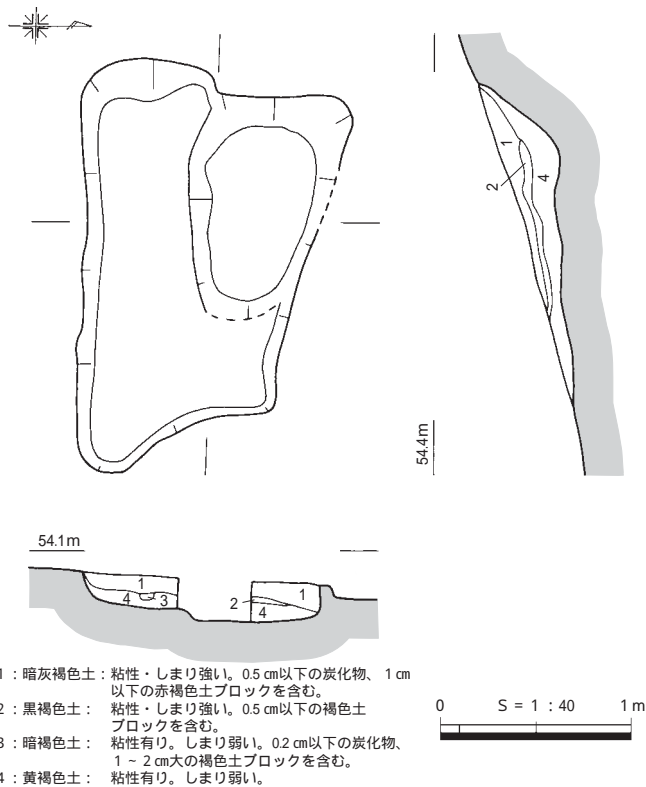
遺構の時期は、埋土の特徴から古墳時代以降と想定される。

SK17(第48・49図、表16、PL.17・49)

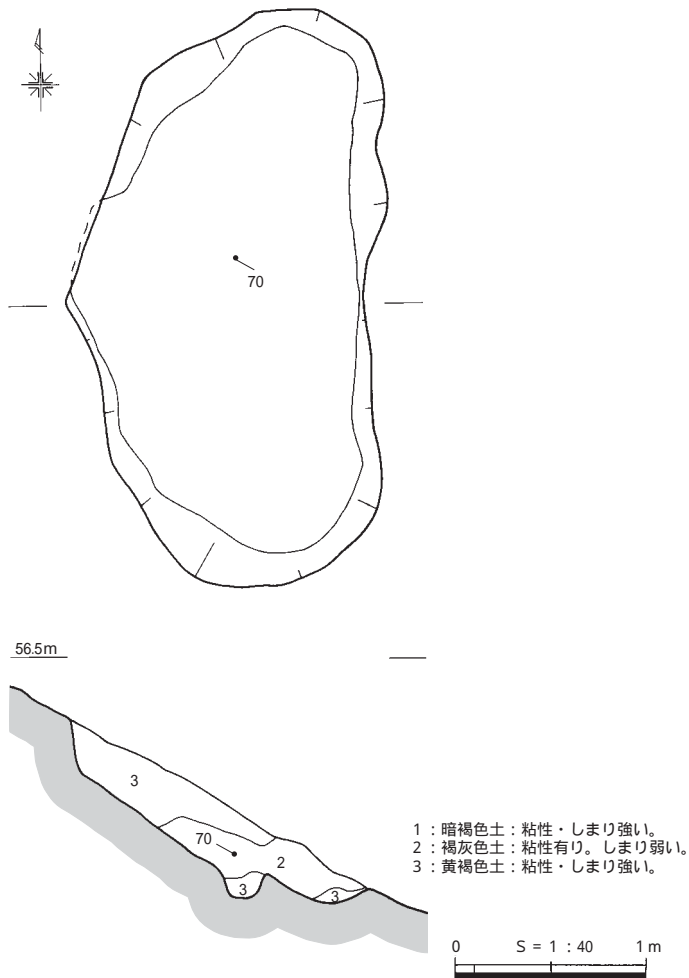
調査区南、F1グリッドの標高55.3~56.4mの急峻な斜面上に立地する。

平面形は長軸3.05m、短軸1.7mの不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは35cmを測る。掘り方は斜面に沿って傾斜を持ち、尾根方向の西壁は45度の角度で外傾して立ち上がる。

埋土は3層に分かれ、最上層の1層暗褐色土以外は、地山ブロックを多く含む。



第47図 SK16



第48図 SK17

いずれも斜面上方の西側から東側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。

遺物は2層から出土した弥生時代後期後葉の甕70を掲げた。

遺構の時期は、出土遺物から - 3 様式、弥生時代後期後葉と考えられる。

SK18 (第50・52図、表16・24、PL.18・49・63)

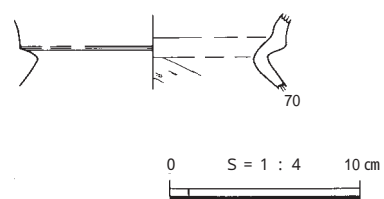
調査区中央西寄り、E2グリッドの標高54.2～55.0mの斜面上に立地する。西側0.5mにSS2が位置し、南側の一部をSK19に切られている。

平面形は長軸2.0m、短軸1.35mの不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは48cmで、底面形は瓢状に歪である。掘り方は、尾根方向が50度の緩やかな壁となり、底面はやや丸味を帯びている。

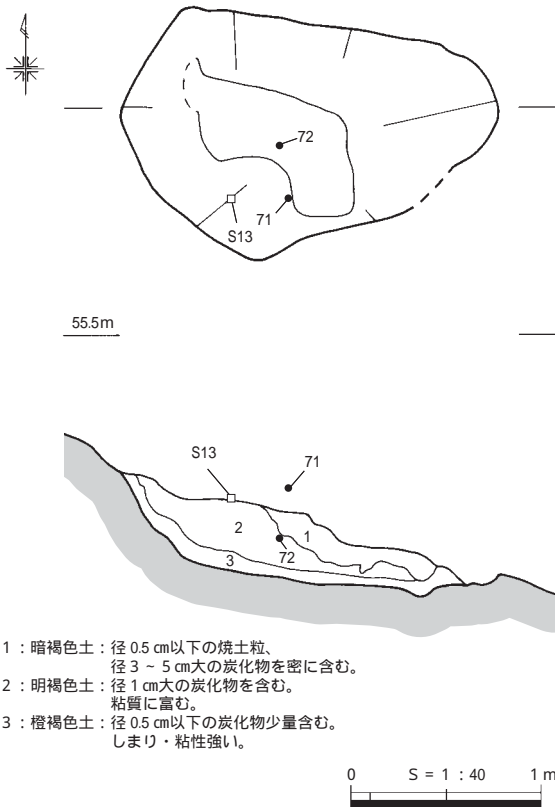
埋土は3層に分かれ、最上層の暗褐色土以外は地山の色調と類似した褐色系であり、いずれも粘質に富み微細な炭化物を含んでいた。これらは斜面上方の西側から東側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。

遺物は、埋土中から弥生時代後期後葉の甕と礫石錘が出土している。71は口縁部に9条、72は5条の平行沈線文がめぐる甕口縁部破片である。S13はやや厚めの楕円礫を用いた安山岩製の打ち欠き石錘であり、同様な石錘が本遺構の周辺からも数点検出されている。

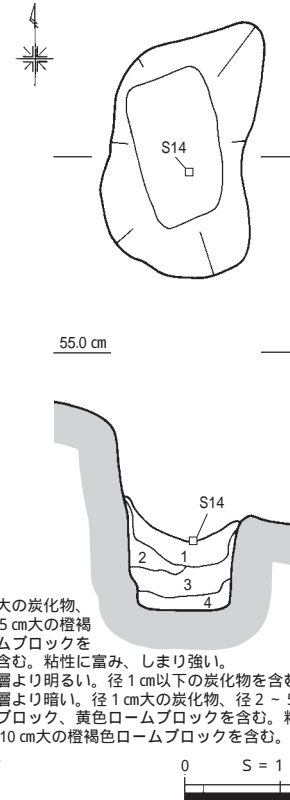
遺構の時期は、出土遺物から - 3 様式、弥生時代後期後葉と考えられる。



第49図 SK17出土遺物



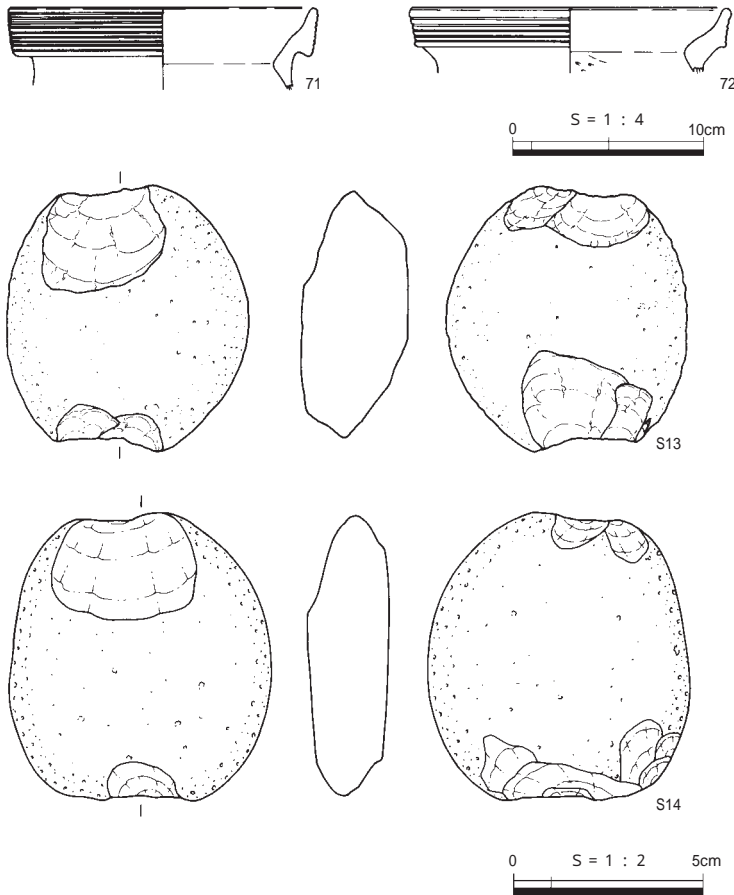
- 1：暗褐色土：径0.5cm以下の焼土粒、径3～5cm大の炭化物を密に含む。
- 2：明褐色土：径1cm大の炭化物を含む。粘質に富む。
- 3：橙褐色土：径0.5cm以下の炭化物少量含む。しまり・粘性強い。



- 1：暗褐色土：径1cm大の炭化物、径2～5cm大の橙褐色ロームブロックを斑状に含む。粘性に富み、しまり強い。
- 2：暗褐色土：色調1層より明るい。径1cm以下の炭化物を含む。粘質に富む。
- 3：暗褐色土：色調1層より暗い。径1cm大の炭化物、径2～5cm大の橙褐色ロームブロック、黄色ロームブロックを含む。粘質に富む。
- 4：暗褐色土：径5～10cm大の橙褐色ロームブロックを含む。粘性・しまり最も強い。

第50図 SK18

第51図 SK19

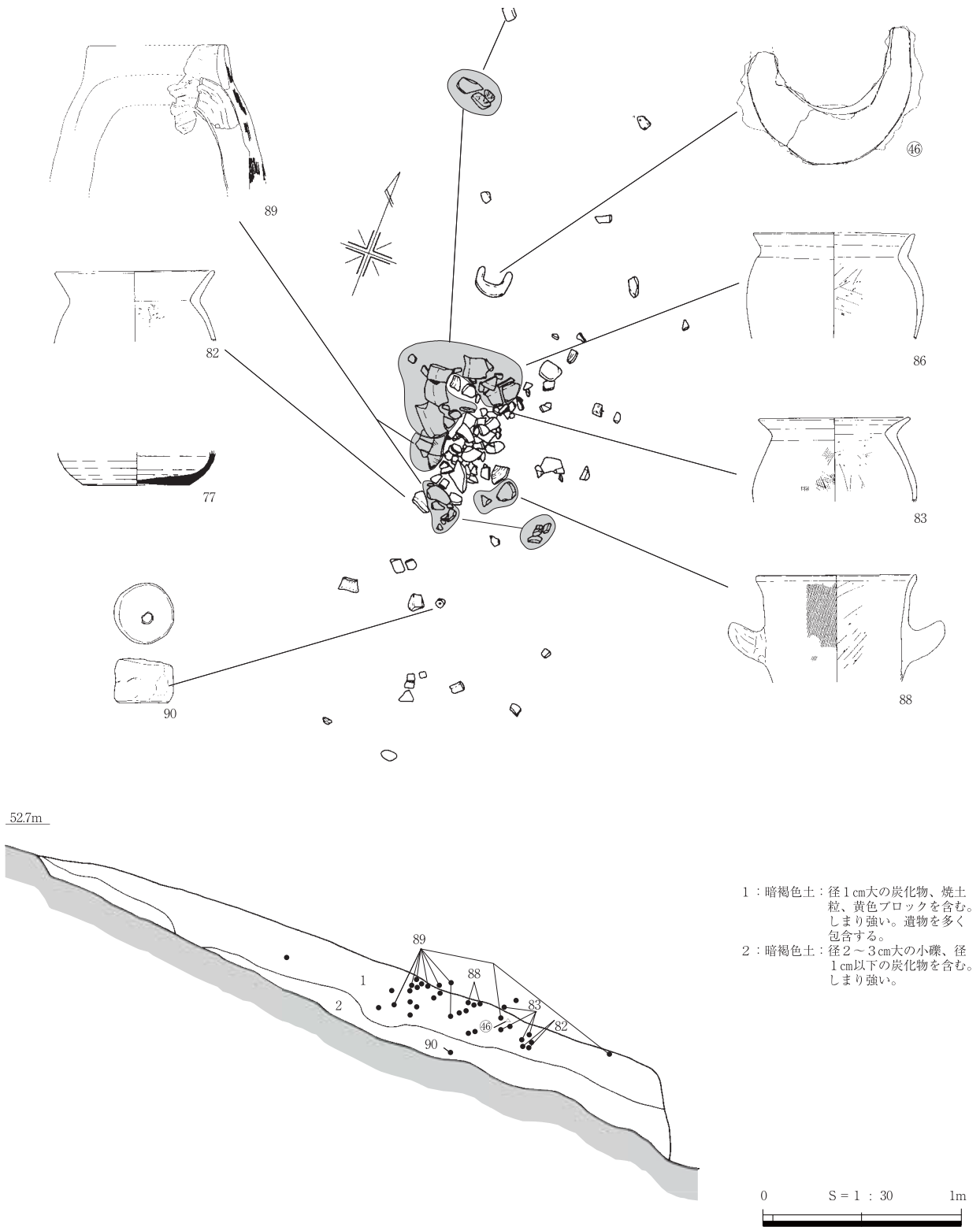


第52図 SK18・19出土遺物

SK19 (第51・52図、表24、PL.18・63) 調査区中央西寄り、E2グリッドの標高54.1～54.8mの緩斜面上に立地する。北側でSK18を切っている。

平面形は、長軸1.35m、短軸0.8m、北東隅がやや張り出した不整隅丸方形を呈している。検出面から底面までの深さは60cmで、東西壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面の形状は、長方形であり底面は平坦となっている。

埋土は4層に分かれ、いずれも粘性・しまりが強く、微細な炭化物と地山ブロックを含む層が互層を成していた。また、底面では地下水が湧き出ている状況であった。遺物は、1層中から礫石錘S14が1点出土している。扁平な楕円礫の上下両端を打ち欠いている。軟質な石材のため



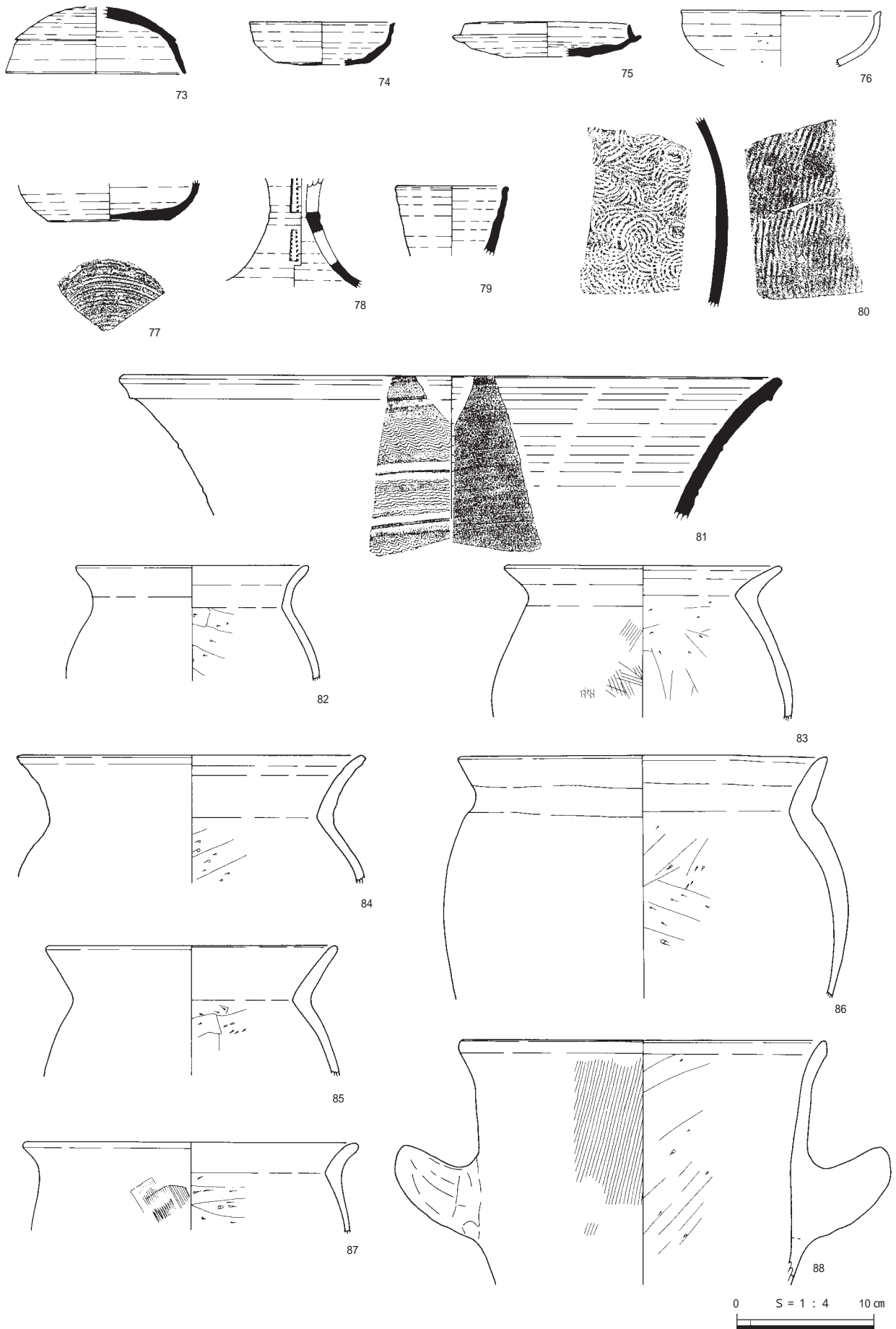
第53図 土器溜り1

か全体が摩滅している。

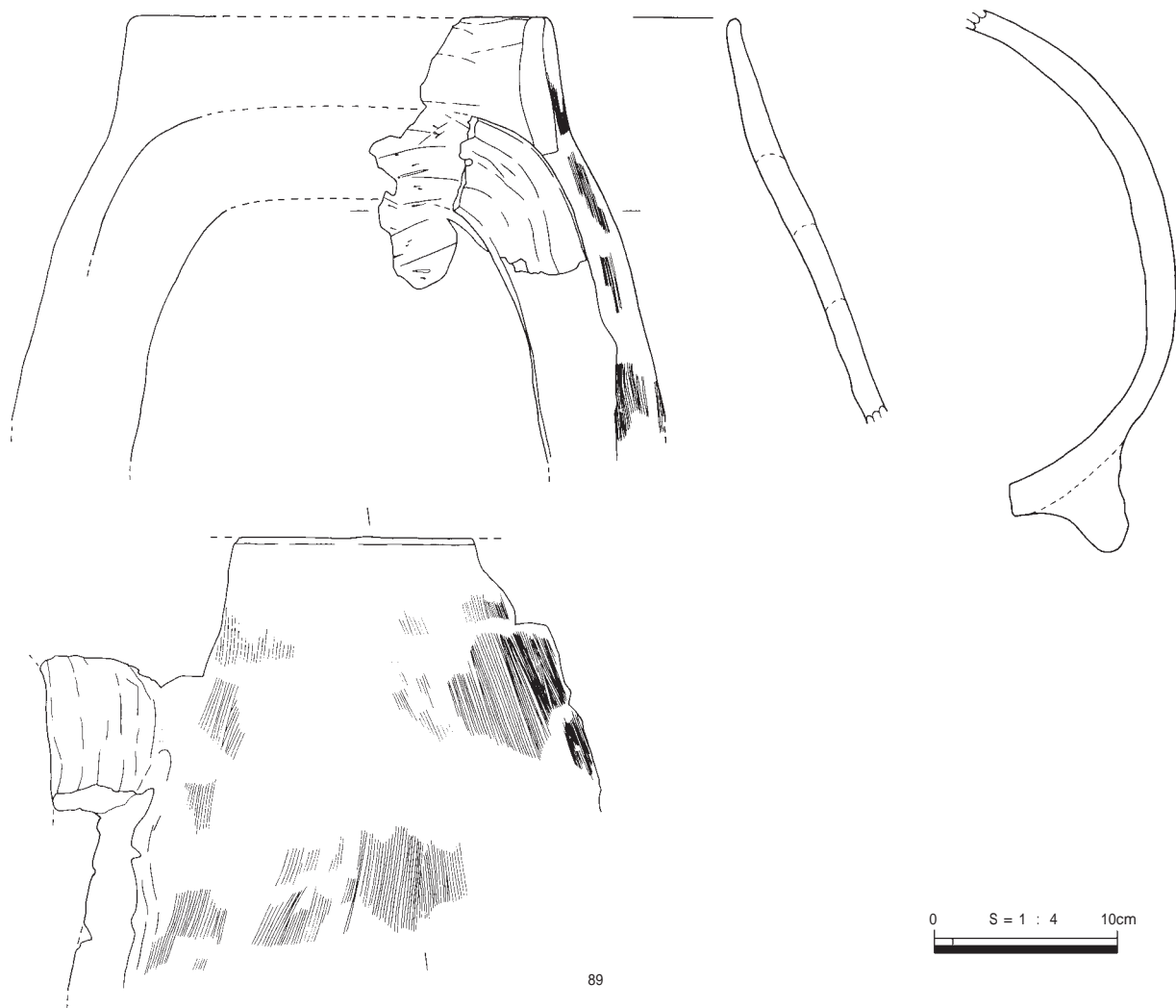
遺構の時期は、埋土がSK18と類似していることから弥生時代後期以降と想定される。

(7) 土器溜り1 (第53 ~ 56図、表4・14・16・21・22、PL.19・49 ~ 51・54・61・66・67)

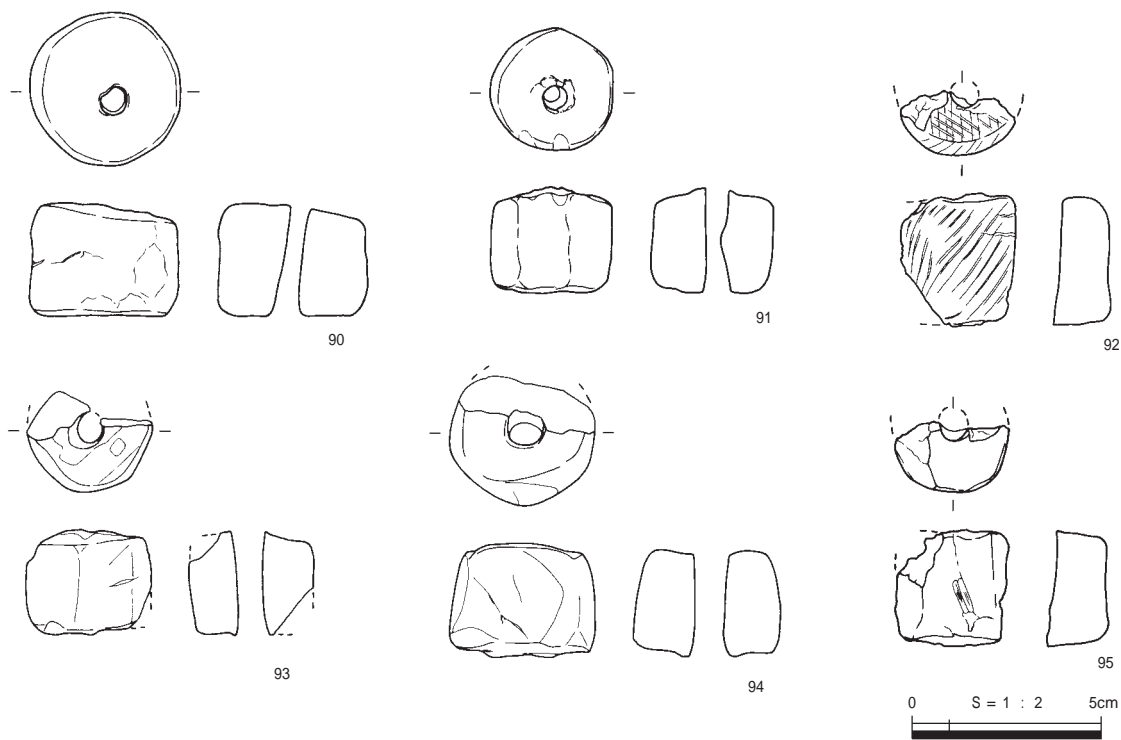
調査区中心部、D1グリッドの標高51.5 ~ 52.6mの谷筋に位置する。遺物の分布は南北4m、東西



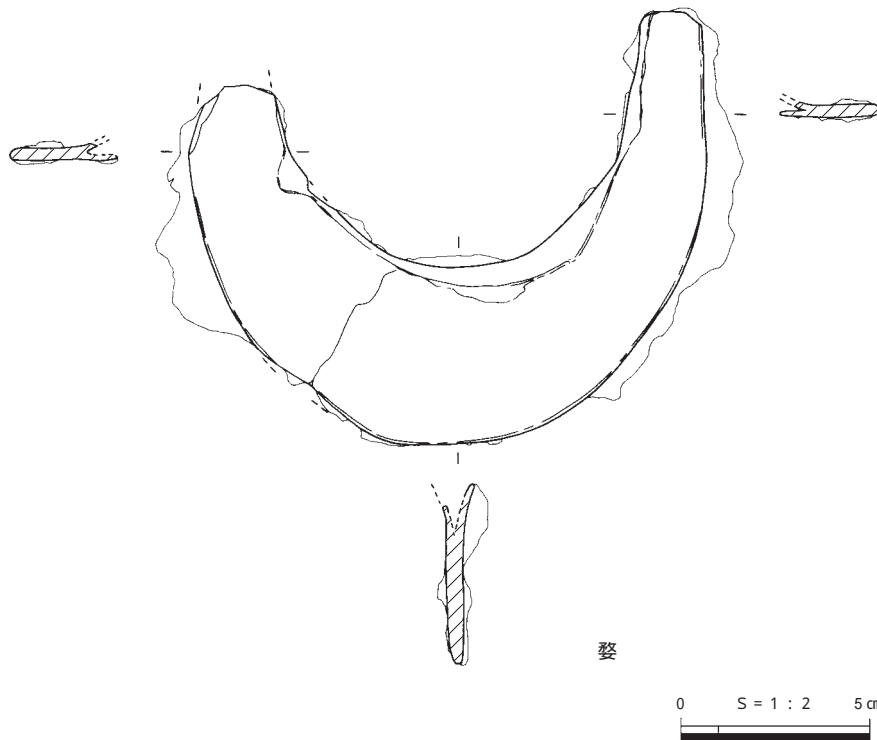
第54図 土器溜り1出土遺物(1)



89



第55図 土器溜り1出土遺物(2)



第56図 土器溜り1出土遺物(3)

2 mの範囲にまとめ、比高差1.1mである。土器溜り周辺は径1 cm以下の炭化物や焼土粒を多く含む層が堆積することから、遺構埋土の可能性を想定しサブトレンチを設定して掘り下げを試みたが、床面や壁などは検出されなかった。遺物は土師器甕が目立ち、近接して廃棄された状況が窺える。一方で、須恵器など時期幅がみられることから、一部斜面上方からの流れ込みに加え、本地点が一時期の遺物廃棄箇所であった可能性が想定される。その理由として、本地点が傾

斜の一旦緩やかになる地形変換点であることも起因しているものと考えられる。

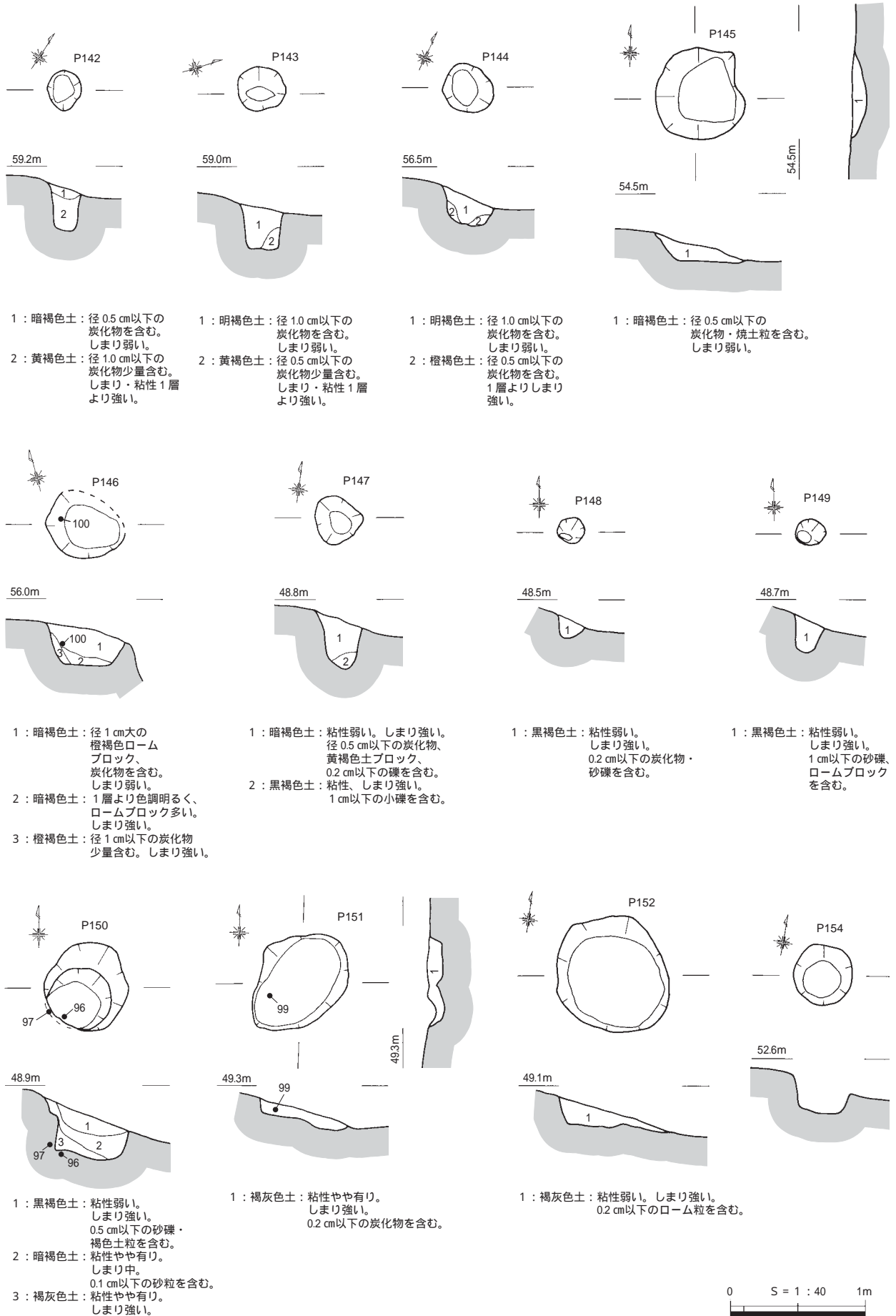
第54～56図では、土器溜り1の遺物を掲げている。73～75・77～81は須恵器、82～88は土師器をまとめている。73は肩部に明瞭な稜を有する坏蓋であり、天井部には回転ヘラケズリ痕が観察される。76は体部が丸味を持ち、口縁端部が面取りされる土師器の坏身である。75は内側に傾くカエリを持つ坏身であり、底部は回転ヘラケズリ。77は体部が緩やかな丸味を持って立ち上がる坏身であり、底部は回転系切り痕が残る。78は長脚二段透孔高坏の脚部破片である。79は横瓶の口縁部、80・81は大甕の体部と口縁部破片である。後者は口縁端部が肥厚し、頸部に櫛描波状文がめぐっている。以上は、八橋～期に跨る資料である。

82～87は素口縁甕であり、口縁部が外反し頸部内面に明瞭な稜を持つ。体部が球状となる82～86と、胴部が直立する87に分かれ、いずれも体部外面はナデもしくはハケ調整で、内面はヘラケズリである。88は一对の把手を持つ甕であり、口縁端部が若干肥厚する。把手部はヘラケズリ、体部はハケ調整が観察される。89は竈で正面から右側部が残る。正面の焚口には長さ約6 cmの庇が張り出し、掛口はやや窄まりながらも直立している。付け庇の剥離痕から体部はヘラケズリ後ハケ調整であることがわかる。

90～95は有孔土玉であり、いずれも円筒形である。表面は面取り後、ナデ調整されるものが多いなか、92は唯一ハケ調整が施されている。

姿はU字状鋤先の刃部破片。刃部の最大幅は約5 cm、基部は右側がやや長く遺存しており、左側は途中で欠落している。

第3章 調査の成果



第57図 ピット(1)

(8) ピット

P142 (第57図、表2、PL.20)

調査区南西、F1グリッドの標高59.1mの急峻な斜面上に立地する。南側0.7mにP143が位置する。平面形は長軸30cm、短軸24cmの不整円形である。断面形は、円筒形で検出面からの深さは32cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P143 (第57図、表2、PL.20)

調査区南西、F1グリッドの標高58.7mの急峻な斜面上に立地する。北側0.7mにP142が位置している。平面形は長軸35cm、短軸33cmの不整円形を呈している。検出面からの深さは31cm、断面形は筒状を呈している。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

P144 (第57図、表2、PL.20)

調査区中央西寄り、D2グリッドの標高56.4mに立地する。東側0.8mにSS2が位置する。平面形は長軸38cm、短軸36cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは28cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P145 (第57図、表2、PL.20)

調査区北西、C2グリッドの標高54.2mに立地する。SS1とSK16の間隙に位置している。平面形は長軸73cm、短軸70cmの不整楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは22cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P146 (第57・59図、表2・16、PL.20・49)

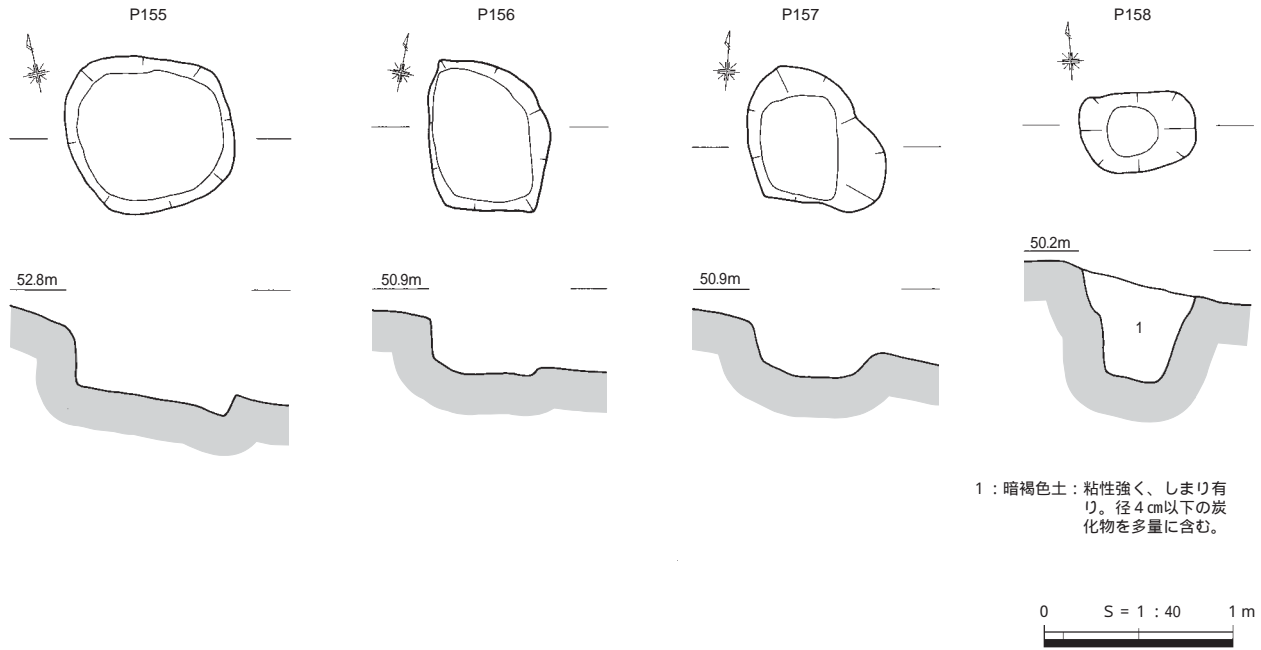
調査区北西、B3グリッドの標高55.8mに立地する。SS9の南西隅を切っている。平面形は長軸62cm、短軸54cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは29cmを測る。埋土は3層に分かれ、埋土中からカエリを持つ須恵器坏蓋100が出土している。遺構の時期は、古墳時代後期と考えられる。

P147 (第57図、表2、PL.20)

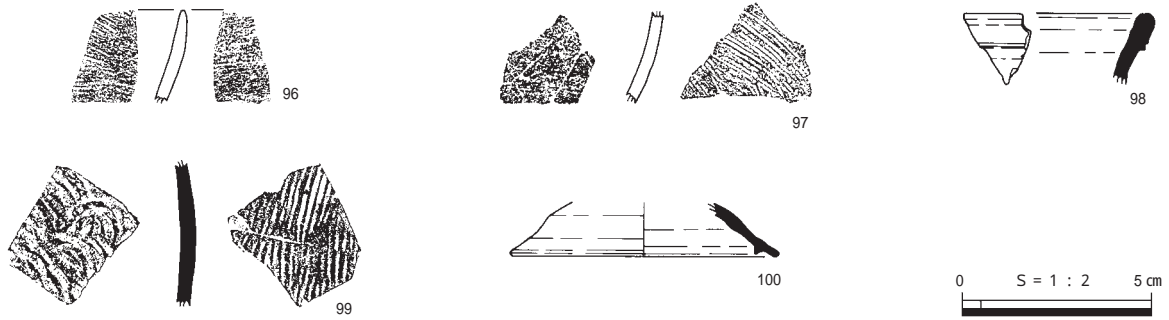
調査区北東、D0グリッドの標高48.7mに立地する。西側の斜面上方0.8mにSS7鍛冶炉が位置する。平面形は直径38cmの不整楕円形を呈している。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは38cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、SS7に関連する柱穴の可能性もある。

P148 (第57図、表2、PL.20)

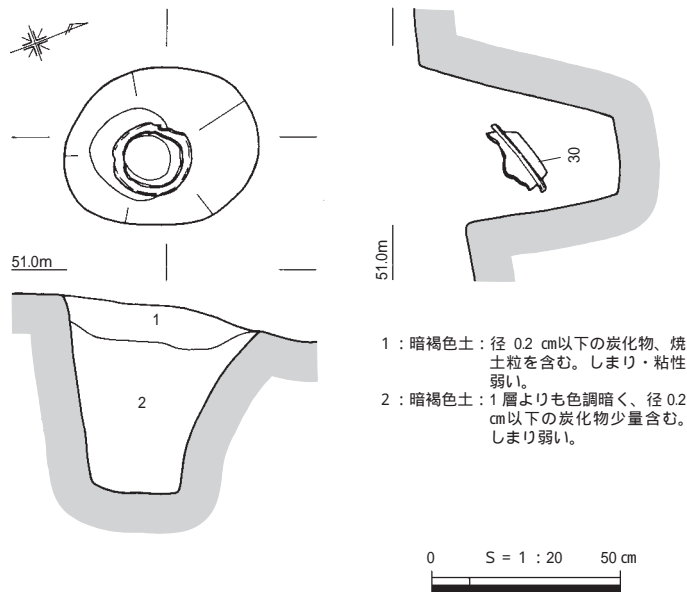
調査区北東、D0グリッドの標高48.4mに立地する。西側の斜面上方0.7mにSS7が位置する。平面形は長軸22cm、短軸20cmの不整円形を呈している。断面形は掘り鉢状で、検出面から底面までの深さは18cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明。



第58図 ピット(2)



第59図 P146・150・151出土遺物



第60図 P153

P149 (第57図、表2、PL.20)
 調査区北東、D0グリッドの標高48.6mに立地する。西側の斜面上方1mにSS7が位置している。平面形は長軸22cm、短軸19cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは28cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明であるが、SS7に関連する柱穴の可能性もある。

P150 (第57・59図、表2・16、PL.21・49)

調査区北東、D0グリッドの標高48.9mに立地する。西側の斜面上方

1 mにはSS7が位置している。平面形は長軸65cm、短軸62cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは34cmを測る。下層から須恵器甕の口縁部破片98が出土している。また、縄文土器深鉢96・97は同一個体であり、内外面ケズリ調整が施されている。遺構の時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

P151 (第57図、表2・16、PL.49)

調査区北東、D1グリッドの標高49.2mに立地する。東側0.6mにはSS7が位置している。平面形は長軸86cm、短軸65cmの不整楕円形である。断面形は皿状で、検出面から底面までの深さは9cmを測る。遺構の時期は、不明である。

P152 (第57図、表2、PL.21)

調査区北東、D1グリッドの標高49.0mに立地する。東側1.7mにはSS7が位置している。平面形は長軸85cm、短軸82cmの不整円形である。断面形は段状で、検出面から底面までの深さは18cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P153 (第23・60図、表2・15、PL.21・45)

調査区中央部北寄り、D1グリッドの標高50.9mに立地する。平面形は長軸54cm、短軸42cmの不整円形である。断面形は筒状で検出面からの深さは50cmを測る。埋土は2層に分かれ、下層中から体部を意図的に打ち欠いた甑形土器30が出土している。

P154 (第57図、表2、PL.21)

調査区、C2グリッドの標高52.5mに立地する。平面形は長軸45cm、短軸44cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは24cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P155 (第58図、表2、PL.21)

調査区、C2グリッドの標高52.6mに立地する。北側約1 mにはSS8が位置している。平面形は長軸88cm、短軸83cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは31cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P156 (第58図、表2)

調査区、C2グリッドの標高50.7mに立地する。平面形は長軸78cm、短軸64cmの不整楕円形である。断面形は段状で、検出面から底面までの深さは24cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P157 (第58図、表2、PL.21)

調査区、C1グリッドの標高50.7mに立地する。平面形は長軸71cm、短軸70cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは28cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P158 (第58図、表2、PL.21)

調査区北東、C1グリッドの標高50.1mに立地する。東側2.2mにSS7が位置する。平面形は長軸61cm、短軸42cmの不整楕円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは55cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

(9) 遺構外出土遺物(第61～63図、表4・14・16・17・22・24、PL.52・54・55・62～67・69)

本節では遺構外出土遺物を掲載する。回収された遺物はコンテナ数50箱強であり、その多くが良好に堆積した包含層から得られている。遺物を瞥見すると、弥生時代後期後葉から古代律令期まで及ぶが、主体は古墳時代後期から奈良時代である。

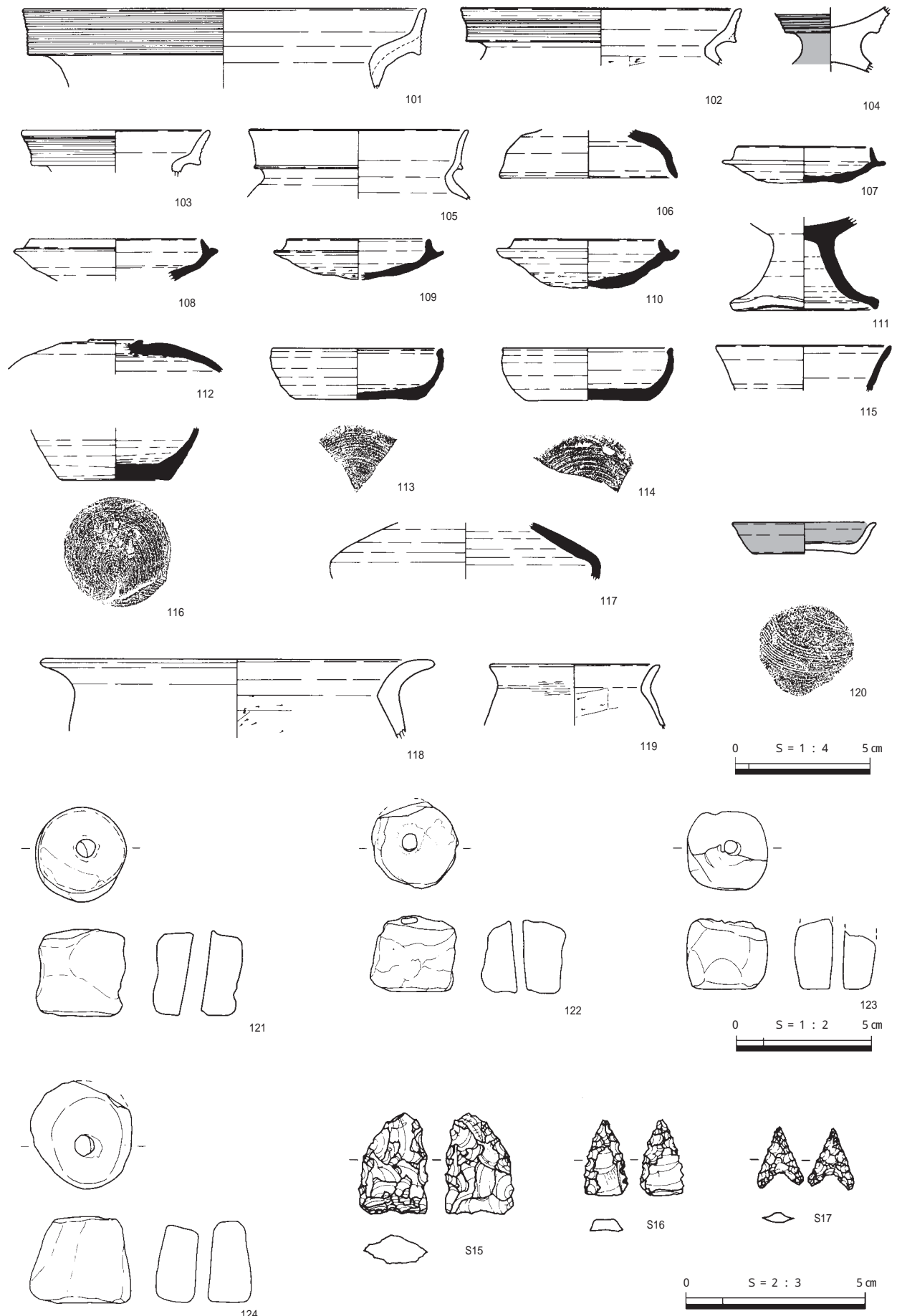
101～103は弥生時代後期後葉の甕をまとめている。拡張した口縁部には多条平行沈線文がめぐっている。104は多条平行沈線が施された器台であり、外面に赤色顔料が塗彩されている。105は器壁が薄く、直線的に口縁部が立ち上がる弥生時代終末期の甕である。

106～117は須恵器を図示している。106は肩部に稜が残る坏蓋であり、天上部はヘラケズリ調整である。108～110は内傾したカエリを有する坏身であり、いずれも底部に回転ヘラケズリ調整が認められる。111は短脚の高坏脚部であり、裾部が緩やかに広がっている。112は天井部に環状ツマミを持つ坏蓋であり、本遺跡では希薄である。113・114は体部が丸味を帯びて立ち上がる坏身であり、いずれも焼成は不良、底部に回転系切り痕が認められる。115は口縁部が直線的に外反する坏身であり底部は欠損し、底部整形は不明である。118・119は素口縁の土師器甕である。118は頸部内面の稜が外面の括れよりも下部に位置し、体部径よりも口径が大きくなることからより後出的である。120は内外面赤色塗彩された土師器坏であり、底部に静止系切り痕が残っている。

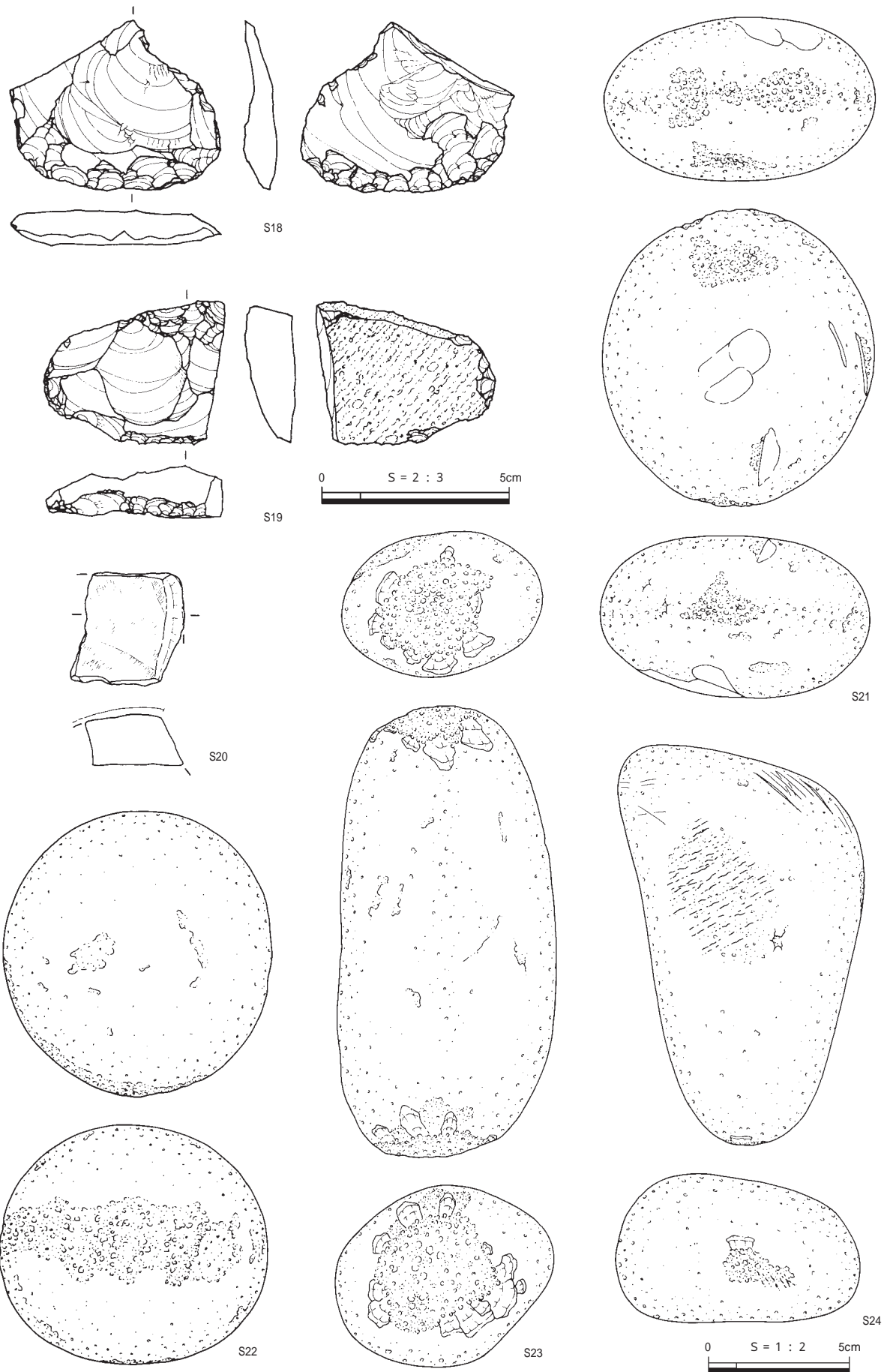
121～124は筒形の有孔土玉であり、面取り後にナデ調整が施される121・123・124と粗いナデ調整のみの122に二者が認められる。

S15～17は石鏃および未成品をまとめている。S15は黒曜石製の石鏃未製品であり、表裏面の加工が粗く器体が分厚い。S16はサヌカイト製の石鏃未成品もしくは失敗品である。周縁からの加工を施しつつも表裏面に素材面を残している。S17は周縁からの加工が器体中央まで及び、脚部をしっかりと作り出している。S18・19は黒曜石製のスクレイパーである。S18は不定な剥片素材に、表裏面から剥離を加え刃部を作り出す。S19は裏面に自然面を残し、表面のみ調整を加えて刃部を作り出している。S20は細粒花崗岩製の砥石であり、砥面は1面。S21～24は安山岩製の敲石である。S21は厚めの円礫の上下両端と表面の一部に弱い敲打痕が認められる。S22は球状の礫の下端に敲打痕が認められる。敲打による潰れは弱く、帯状に残されている。器体が平滑なのは整形によるものか。S23は太めの棒状礫を素材としたもので、上下両端の敲打痕は広い範囲に及び、敲打痕の周囲には小剥離が伴っている。S24は不整な亜円礫の尖り気味となった下端に敲打痕が見られる。また、表面上半に粗い擦痕が集中するほか、表裏に鋭い刃物傷のような跡がある。S25・26は礫石錘である。S25は長さ7.5cmほどの扁平な楕円礫を素材とし上下両端を打ち欠いている。S26も同じく扁平な楕円礫を用い、上下両端を打ち欠いているが下端の打ち欠きは弱い。

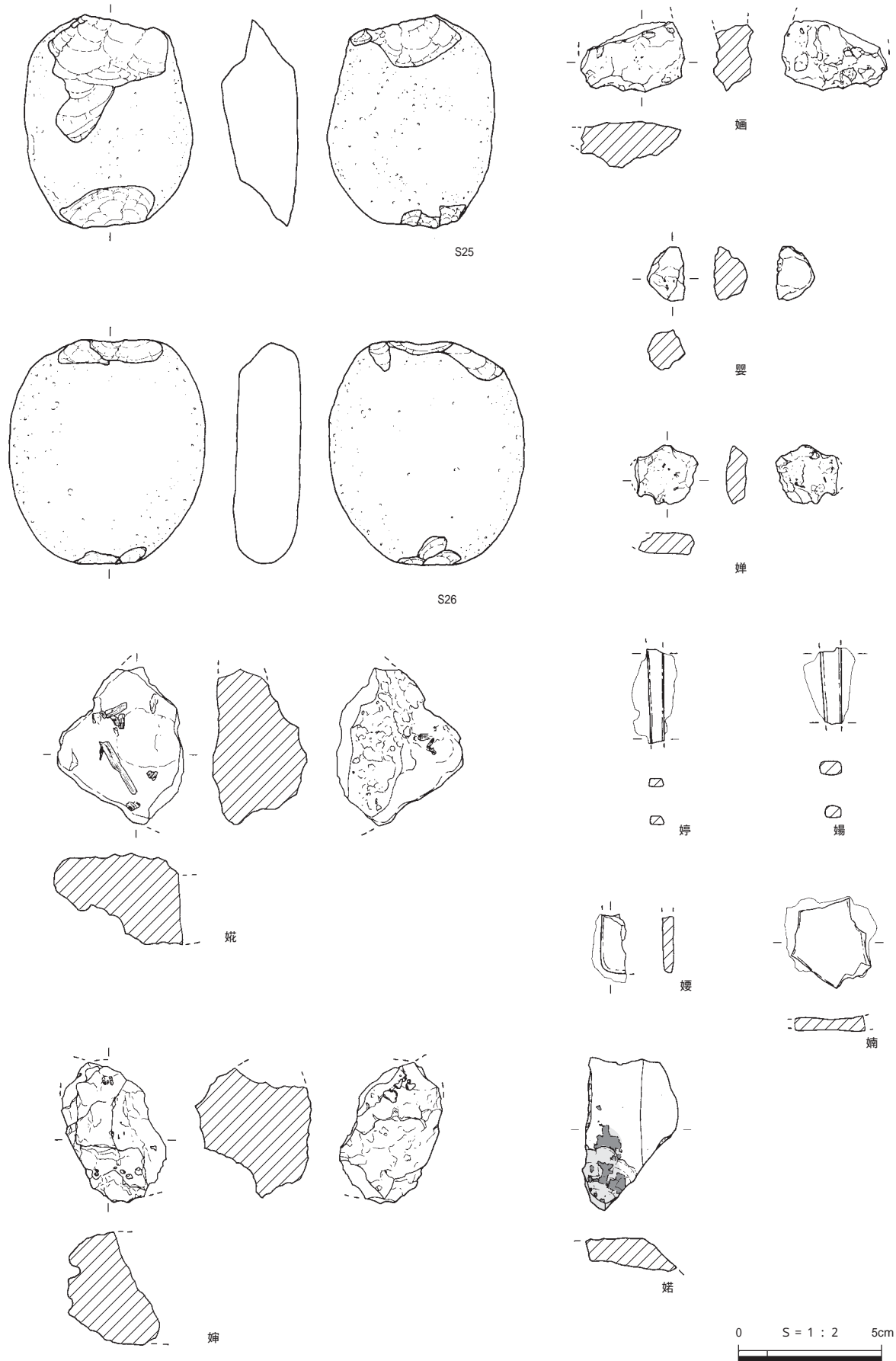
姦～姦は鍛冶関連遺物に該当する。姦は小型の椀形鍛冶滓側部破片である。姦は極小の椀形鍛冶滓の側部破片であり、表裏面には羽口由来の粘土塊が点々と固着している。嬰は鍛冶滓であり、表面に微細な鍛造剥片が付着する。婁・婁は粘土質溶解物であり、前者はガラス質滓が主体であるが、後者は粘土質の滓が重層して出来上がっている。娵～娵は鉄製品をまとめている。娵・娵は釘の芯部で、先端・基部とも欠損している。娵は薄板状の鉄製品であるが、右側部から上手側部に芯部の鉄が抜けた中空の破面が露出している。娵は5mmほどの厚みを持つ板状の鉄製品であり、鑄造鉄斧の破片の可能性もある。娵は薄板状に剥離した鍛造剥片が固着した鉄床石破片である。



第61図 遺構外出土遺物(1)



第62図 遺構外出土遺物(2)



第63図 遺構外出土遺物(3)

第2節 2区の調査成果

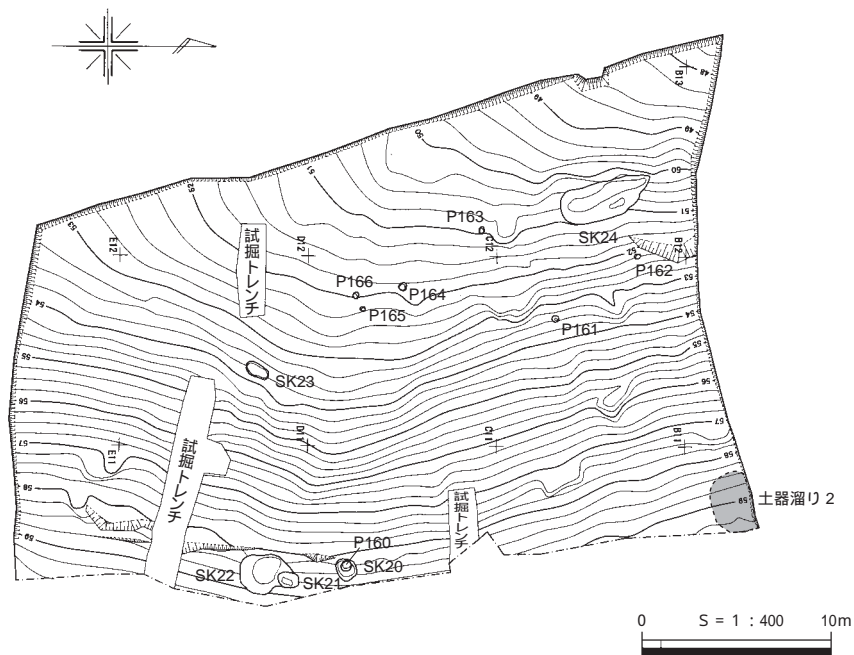
(1) 概要

2区からは弥生時代後期～古墳時代前期における土坑3基、土器溜り1ヶ所、時期不明の落とし穴1基、土坑1基、ピット8基を検出した。これらの遺構は斜面部上方と谷筋を望む下方に位置しているが、1区斜面部と比較し遺構密度は希薄である。その要因の1つとして、尾根部西半では古墳時代以降の生活面や遺構がほとんど認められないことが大きいと考えられる。谷底面において弥生時代から古墳時代以降の包含層が形成されている状況であった。

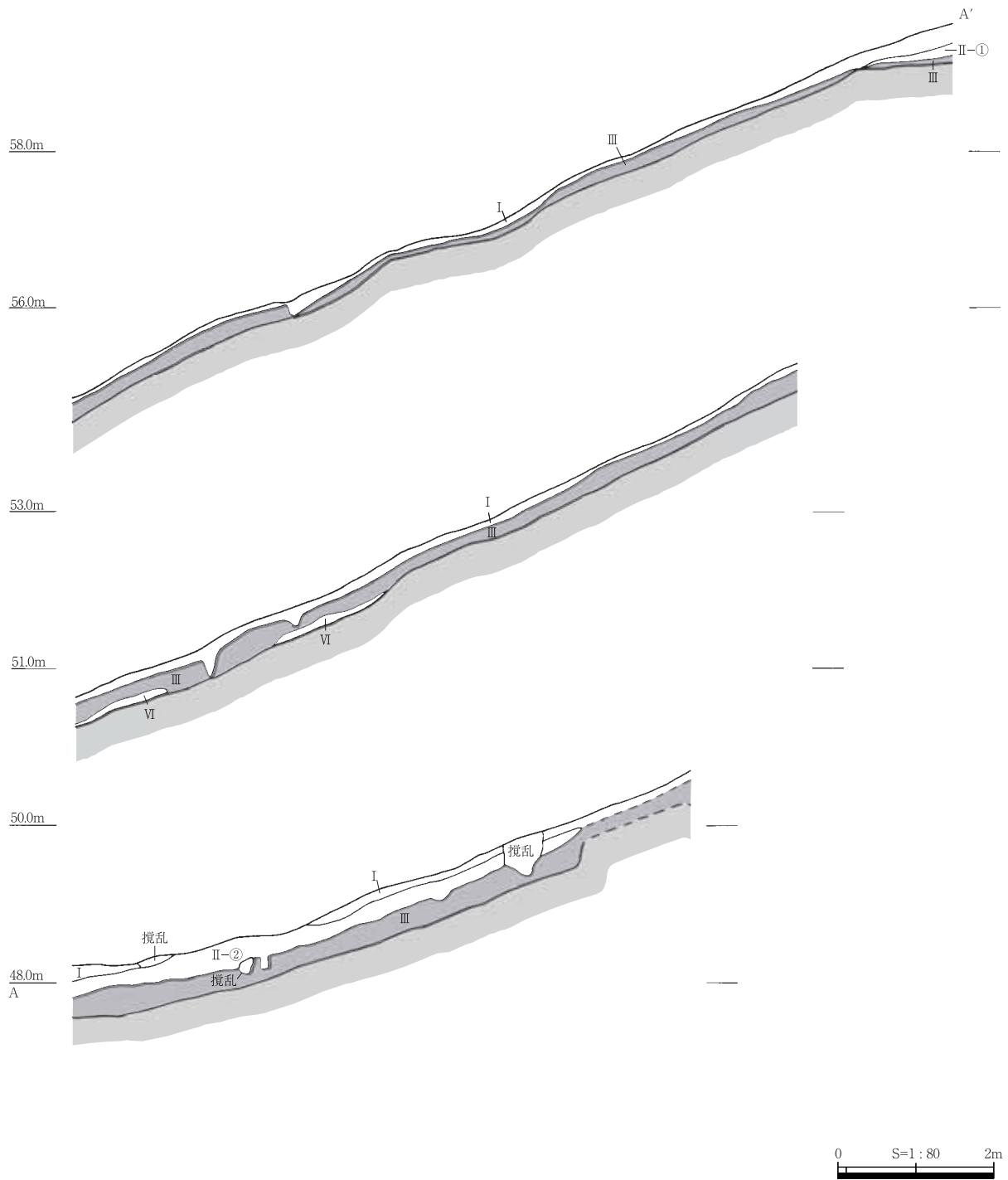
(2) 基本層序(第65・66図)

2区は平成17年度調査地の西側に隣接し、調査前は森林であった。この一帯は大山火山噴出物によって形成された丘陵地であり、調査地の土層は大山を噴出源とする火山灰堆積である。調査地ではクロボクが比較的発達し、弥生時代～古代の包含層と上～中部火山灰層が確認された。古墳時代以降の包含層は未発達で、層厚は薄い。調査地の基本層序は、表土を 層、遺物包含層を 層とする。

- 層：表土。10～15cmの厚さで全体を覆う。
- 層：暗褐色土。谷部のみ堆積し、層厚は15～20cmを測る。径1cm以下の炭化物を含み、しまり・粘性ともに弱い。包含される遺物は、古墳時代以降が主体である。
- 層：黒褐色土。斜面部下部から谷部にかけて厚さ7～10cmで堆積する。径1cm以下の炭化物を多く含んでいる。古墳時代以降の遺物が多く、客体的に弥生時代後期後葉から終末期の遺物を包含する。
- 層：褐色土。斜面部から谷部全面にわたって広がりを見せる。斜面部で5～15cm、谷部で25～50cmの厚さを持つ。径1cm以下の炭化物を多く含み遺物も多い。弥生時代後期後葉から終末期の



第64図 2区遺構配置図



第65図 2区北壁土層断面図

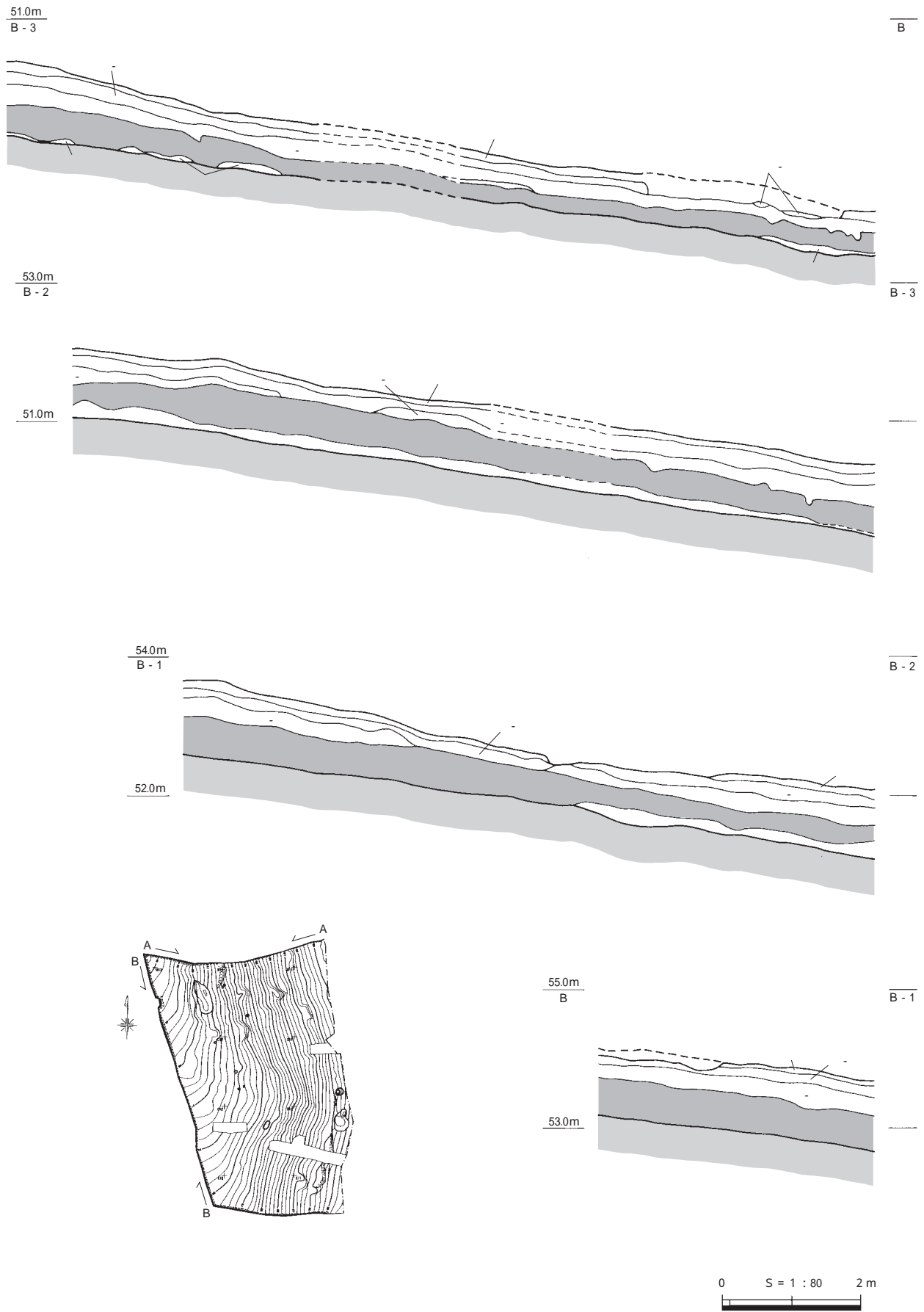
遺物を包含する。

層：黒褐色土。谷部にのみ堆積する無遺物層。粘性・しまり強い。1区の - 層に対応する。

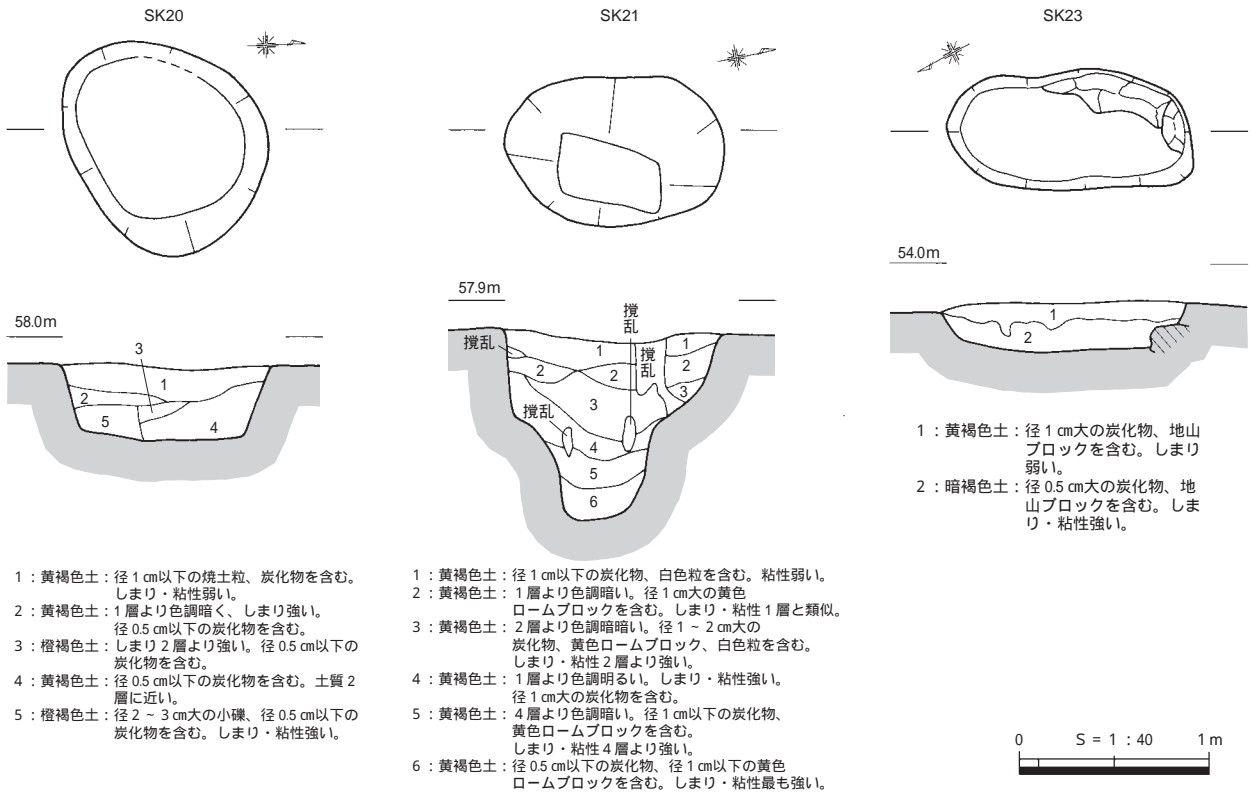
層：橙褐色土。斜面部に認められる火山灰粘質土。谷部では二次堆積土が上方を覆うため、確認できなかった。斜面部の遺構検出面である。

層：黄褐色土。ホーキ層。A T層。3区の 層に対応。

第3章 調査の成果

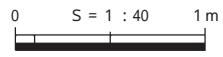


第66図 2区西壁土層断面図



- 1: 黄褐色土: 径1cm以下の焼土粒、炭化物を含む。しまり・粘性弱い。
- 2: 黄褐色土: 1層より色調暗く、しまり強い。径0.5cm以下の炭化物を含む。
- 3: 橙褐色土: しまり2層より強い。径0.5cm以下の炭化物を含む。
- 4: 黄褐色土: 径0.5cm以下の炭化物を含む。土質2層に近い。
- 5: 橙褐色土: 径2~3cm大の小礫、径0.5cm以下の炭化物を含む。しまり・粘性強い。

- 1: 黄褐色土: 径1cm以下の炭化物、白色粒を含む。粘性弱い。
- 2: 黄褐色土: 1層より色調暗い、径1cm大の黄色ロームブロックを含む。しまり・粘性1層と類似。
- 3: 黄褐色土: 2層より色調暗い。径1~2cm大の炭化物、黄色ロームブロック、白色粒を含む。しまり・粘性2層より強い。
- 4: 黄褐色土: 1層より色調明るい。しまり・粘性強い。径1cm大の炭化物を含む。
- 5: 黄褐色土: 4層より色調暗い。径1cm以下の炭化物、黄色ロームブロックを含む。しまり・粘性4層より強い。
- 6: 黄褐色土: 径0.5cm以下の炭化物、径1cm以下の黄色ロームブロックを含む。しまり・粘性最も強い。



第67図 SK20・21・23

(3) 土坑

SK20 (第67図、PL.23)

調査区東端、C10グリッドの標高57.8mの斜面上に立地する。底面にP159が位置し、本遺構が切っている。

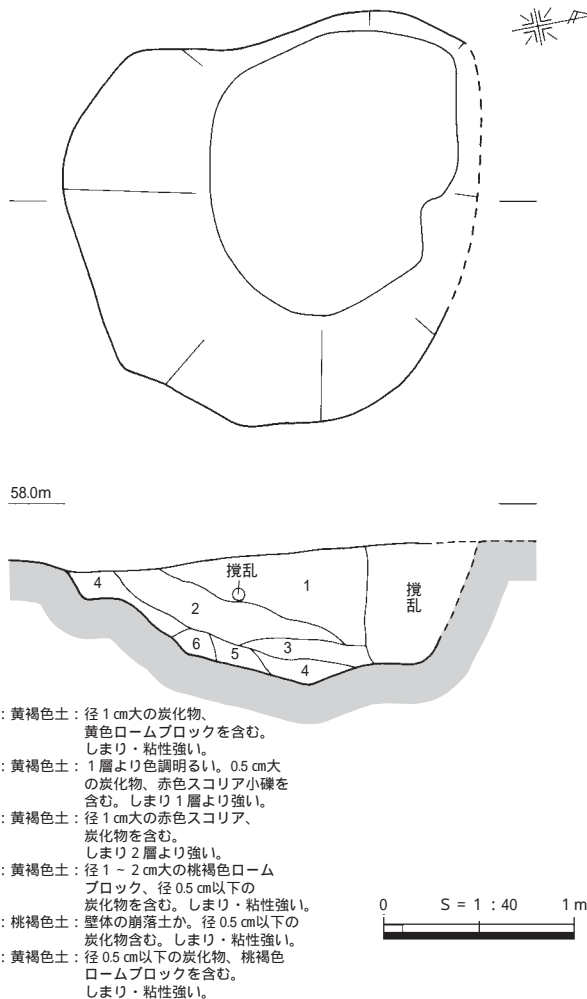
平面形は不整長方形を呈し、長軸1.1m、短軸1.08m、検出面からの深さは0.4mを測る。掘り方はタライ状で、南北の壁は65度の角度で外反して立ち上がる。

埋土は5層に分層でき、地山ブロックを含む黄褐色土が主体に堆積している。いずれも斜面上方の東側から西側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。図示していないが、埋土上層から弥生時代後期から終末期の甕小片が出土している。

遺構の時期は、遺物と埋土の特徴から弥生時代後期から終末期に位置づけられる。

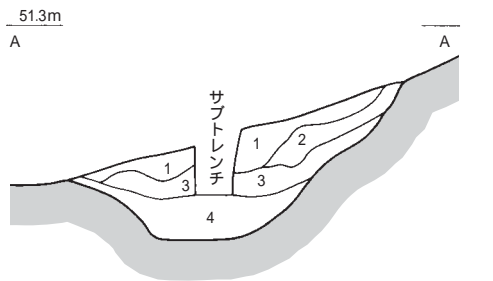
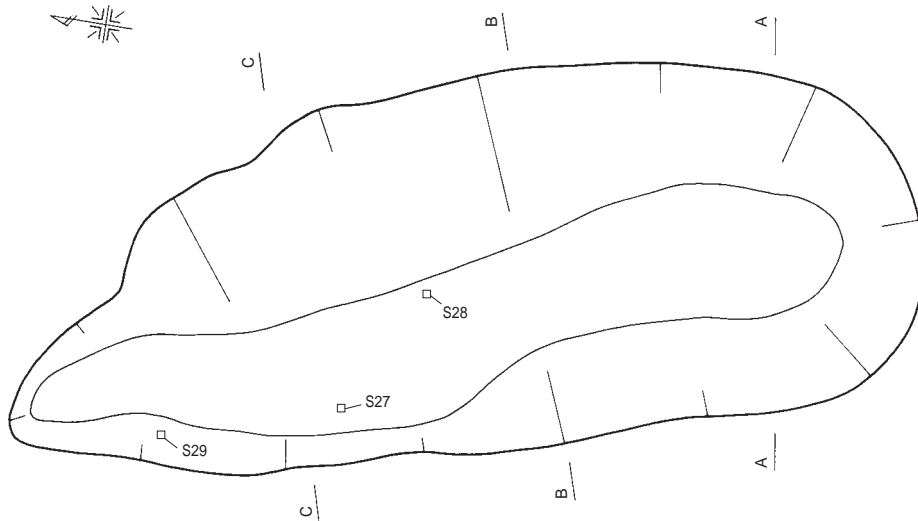
SK21 (第67図、PL.23)

調査区東端の中央部、D10グリッドの標高

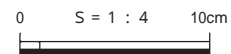
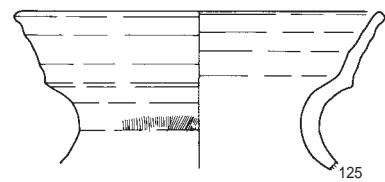
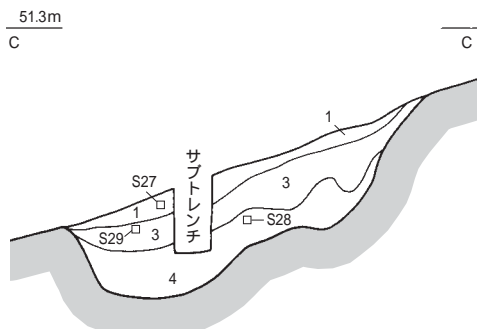
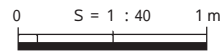
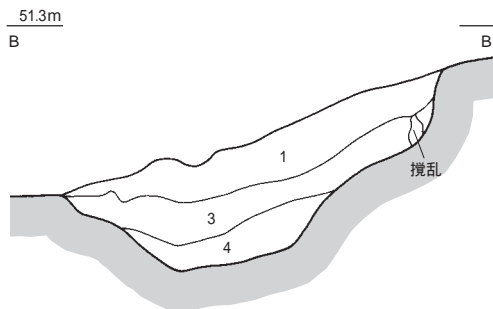


- 1: 黄褐色土: 径1cm大の炭化物、黄色ロームブロックを含む。しまり・粘性強い。
- 2: 黄褐色土: 1層より色調明るい。0.5cm大の炭化物、赤色スコリア小礫を含む。しまり1層より強い。
- 3: 黄褐色土: 径1cm大の赤色スコリア、炭化物を含む。しまり2層より強い。
- 4: 黄褐色土: 径1~2cm大の桃褐色ロームブロック、径0.5cm以下の炭化物を含む。しまり・粘性強い。
- 5: 桃褐色土: 壁体の崩落土か。径0.5cm以下の炭化物を含む。しまり・粘性強い。
- 6: 黄褐色土: 径0.5cm以下の炭化物、桃褐色ロームブロックを含む。しまり・粘性強い。

第68図 SK22



- 1 : 暗褐色土 : 径 1 cm 大の炭化物、焼土粒を含む。しまり、粘性強い。
- 2 : 暗褐色土 : 径 0.5 cm 以下の炭化物を少量含む。しまり・粘性弱い。1層より色調明るい。
- 3 : 黄褐色土 : 径 1 cm 以下の炭化物を含む。しまり・粘性弱い。
- 4 : 暗褐色土 : 径 1 cm 大の炭化物、径 3 ~ 5 cm 大の小礫を含む。しまり・粘性強い。

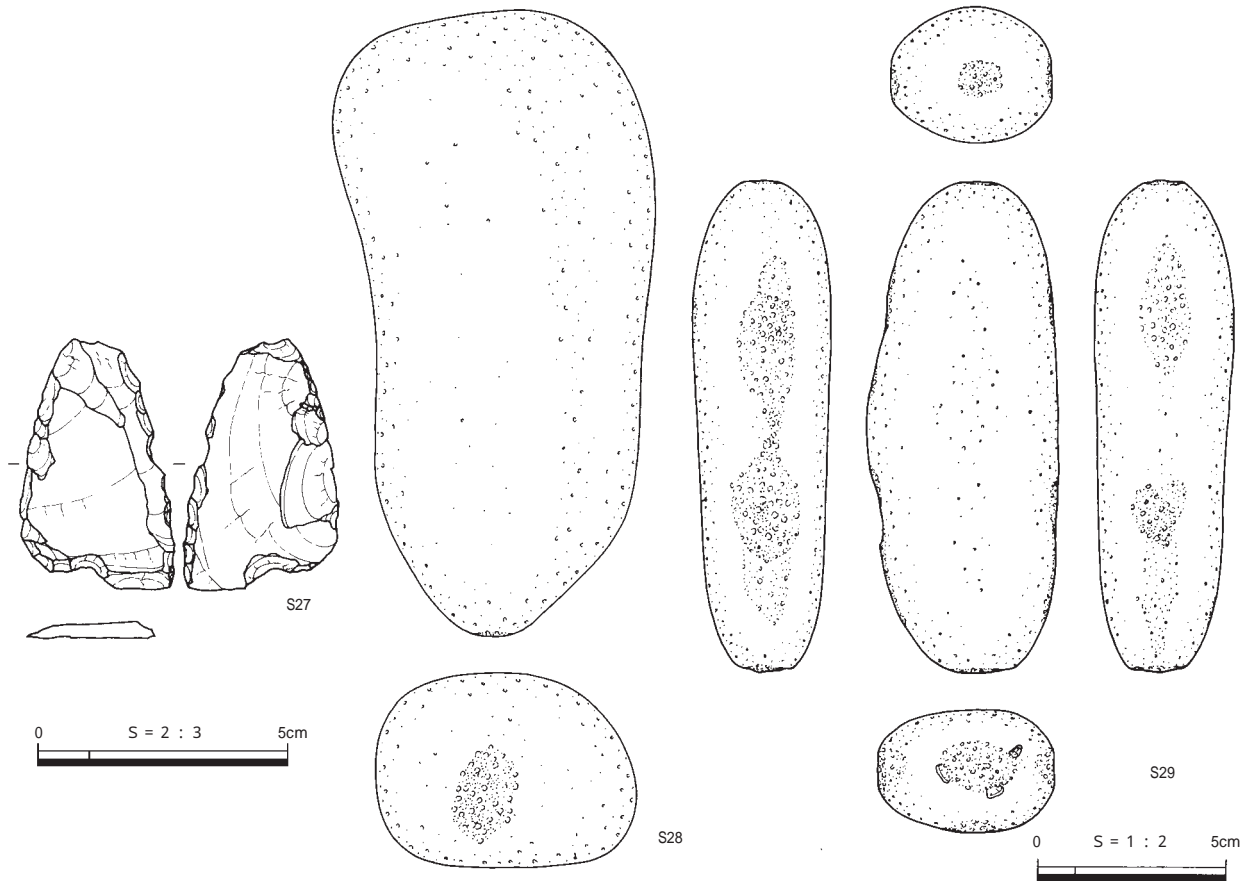


第69図 SK24

第70図 SK24出土遺物(1)

57.8mの斜面上方に立地する。北側 2 m にはSK20が位置し、南壁の一部をSK22に切られている。

掘り込み面の平面形は長軸1.17m、短軸0.8mの不整楕円形、底面は長軸0.57m、短軸0.42mの方形を呈し、下方が狭くなっている。検出面から底面までの深さは94cmを測り、壁面は上方が30度の角度



第71図 SK24出土遺物（2）

で大きく広がり、下方は70～80度の角度で傾斜がきつい。底面ピットは確認されなかったが、以上の特徴から落とし穴と考えられる。

埋土は6層に分かれ、微細な炭化物を含む層と地山ブロックを主体とする層が互層を成している。概ね黄褐色土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物がなく不明であるが、埋土の特徴から弥生時代以前と想定される。

SK22（第68図、PL.23）

調査区東端の中央部、D10グリッドの標高57.7mの斜面上方に立地する。北側の一部がSK21と重複し、本遺構が切っている。

平面形はSK21との間に部分的な攪乱があり、全形は不明であるが残存値で長軸2.2m、短軸2.15mの不整形を呈している。検出面から底面までの深さは0.7mを測り、掘り方は南壁が30度の角度で緩やかに立ち上がっている。

埋土は6層に分かれ、いずれもしまりが強く、地山ブロックを多く含んでいる。斜面上方の東側から西側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物がなく不明である。

SK23（第67図、PL.24）

調査区中央南寄り、D11グリッドの標高53.8mの緩斜面下方に立地する。

平面形は、長軸12.8m、短軸6.3mの楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは0.2mで、南東壁は長さ77cmの岩盤が露出している。底面の形状も楕円形であり、ほぼ平坦となっている。

埋土は2層に分かれ、微細な炭化物と地山ブロックを含んでいた。図示していないが、埋土中から弥生時代後期～終末期の甕小片が出土している。

遺構の時期は、埋土の特徴から弥生時代後期以降に埋没したものと推定される。

SK24 (第69～71図、表18・24、PL.24・53・62・64)

調査区北西、B12グリッドの標高50.45～51.2mの斜面下方に立地する。

平面形は、長軸4.45m、短軸1.9mの不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは最大0.6mを測り、掘り方は尾根部方向の東壁が35度、谷側の西壁は50度の角度で緩やかに立ち上がっている。底面は細長い溝状となり、底面は湾曲している。

埋土は暗褐色土の1・2・4層と黄褐色土の3層に分かれ、いずれも微細な炭化物を含んでいた。斜面上方の東側から西側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。埋土中から、弥生時代終末期の土器小片や石器が出土しているが、ここでは甕1点と石器3点を掲げている。

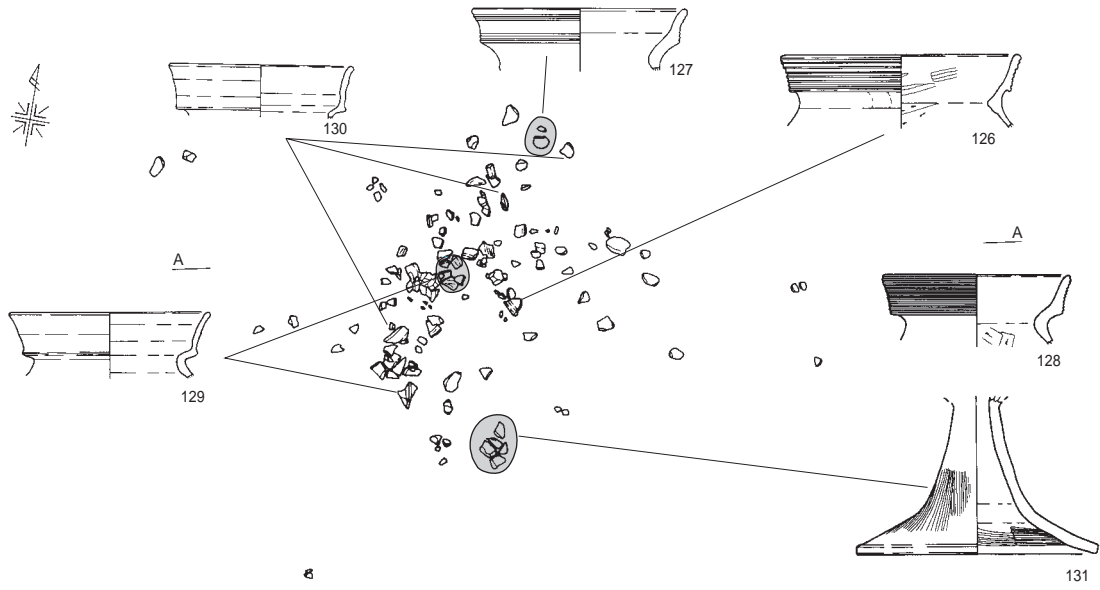
125は広い口縁帯を持つ壺であり、頸部以下ハケメ調整が観察される。S27は大型の凹基式石鏃であり、表裏面に素材面を残し脚部も欠損していることから、未成品もしくは失敗品と考えられる。S28は不整形な棒状礫の先端部に敲打痕が見られる敲石である。S29は棒状礫の上下両端と両側面に敲打痕が認められる。とくに左側面の敲打が強く、縁辺が抉れている。

遺構の時期は、 - 1 様式、弥生時代終末期に位置づけられる。

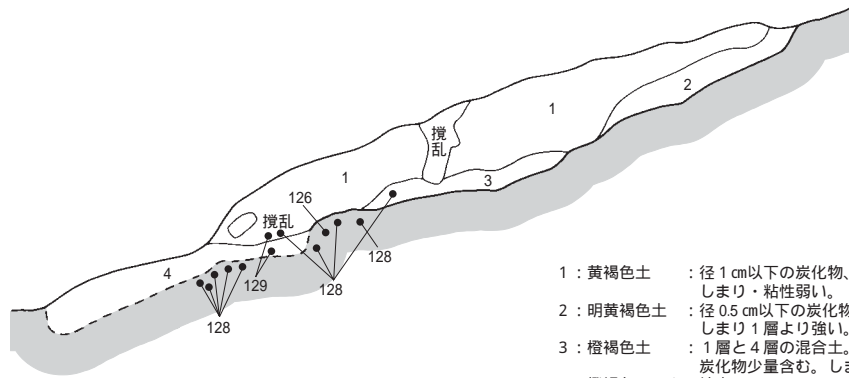
(4) 土器溜り2 (第72・73図、表18、PL.25・53)

調査区北東端、A10グリッドの標高58.1～59.2mの斜面上に位置する。遺物の分布は南北2.5m、東西4.5mの範囲にまとまり、比高差1.1mである。遺物は基本層序 層に類似した黄褐色土中に概ね含まれる。1層は径1cm以下の炭化物や焼土粒が、2・3層は微細な炭化物が少量認められた。これらの土層の特徴から遺構埋土の可能性を想定し、サブトレンチを設定して掘り下げを試みたが、床面や壁などは検出されなかった。遺物は弥生時代後期後葉から終末期に位置づけられ、やや時間幅を持った廃棄場であった可能性が想定される。

第73図に土器溜り2の遺物を掲げている。126～128は口縁部に多条平行沈線がめぐる甕の口縁部から頸部破片であり、V-3様式に比定される。129・130は口縁部にナデ調整が施され、器壁が薄くなっていることから - 1・2 様式である。131はラッパ状に裾が広がる器形の高坏脚部である。外面はタテ方向のハケメ調整、内面はナデとハケメ調整が観察され、 - 2 様式に位置づけられよう。



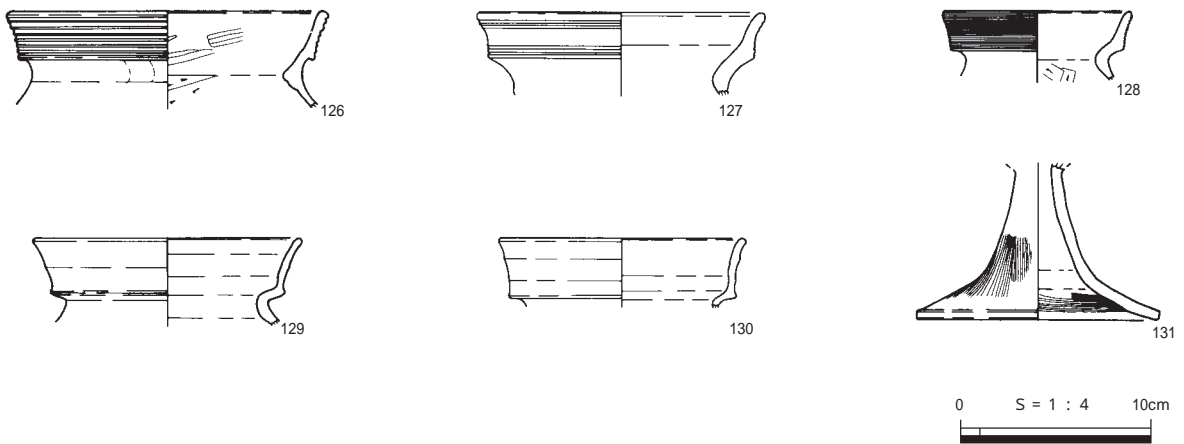
59.5m
A



- 1 : 黄褐色土 : 径 1 cm 以下の炭化物、焼土粒含む。しまり・粘性弱い。
- 2 : 明黄褐色土 : 径 0.5 cm 以下の炭化物を少量含む。しまり 1 層より強い。
- 3 : 橙褐色土 : 1 層と 4 層の混合土。径 0.5 cm 以下の炭化物少量含む。しまり最も強い。
- 4 : 橙褐色ローム : 地山

0 S = 1 : 30 2m

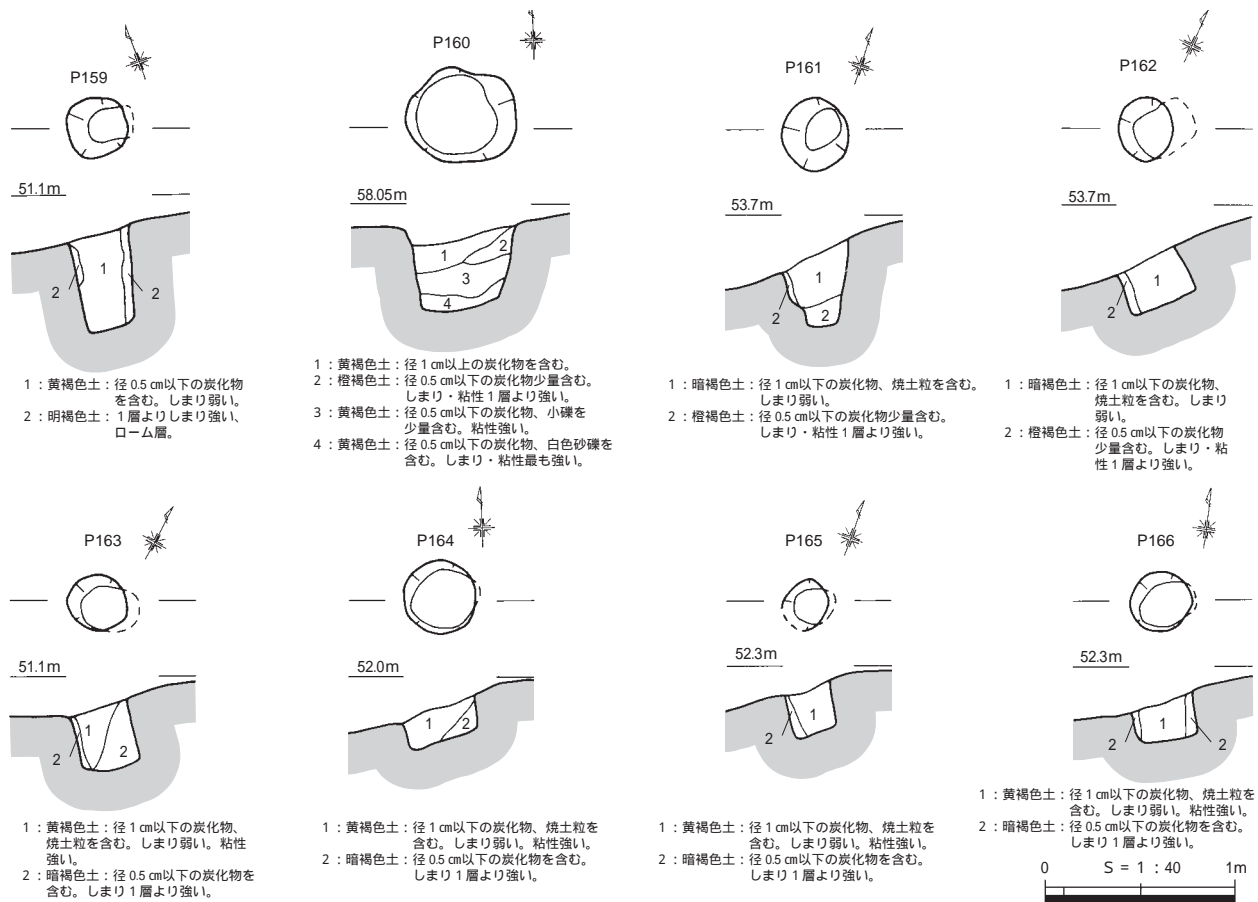
第72図 土器溜り 2



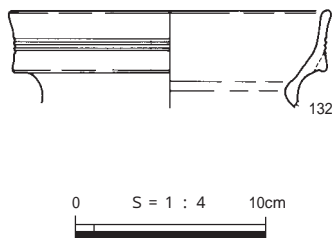
0 S = 1 : 4 10cm

第73図 土器溜り 2 出土遺物

第3章 調査の成果



第74図 ピット



第75図 P162出土遺物

(5) ピット

P159 (第74図、表2、PL.26)

調査区東端、D10グリッドの標高59.3mの斜面上に立地する。西側0.7mにSK23が位置する。平面形は長軸65cm、短軸63cmの不整形円形である。断面形は、円筒形で検出面からの深さは51cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P160 (第74図、表2、PL.23)

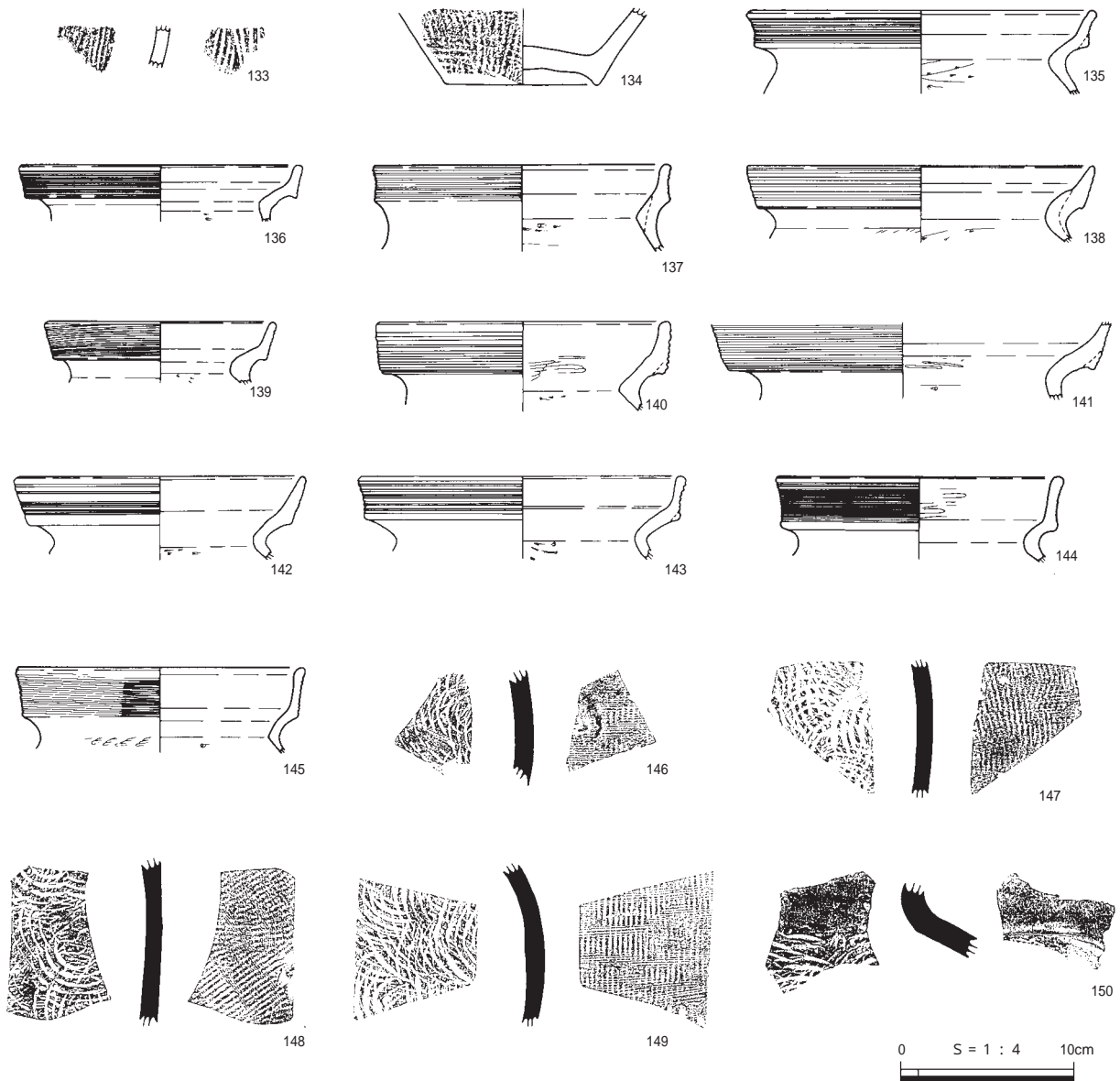
調査区東端、C10グリッドの標高57.9mのSK20底面のほぼ中心に位置する。本遺構の上部はSK20に削平されている。平面形は長軸57cm、短軸50cmの不整形円形で、検出面から底面までの深さは42cmを測る。時期は不明である。

P161 (第74図、表2、PL.26)

調査区中央西寄り、C11グリッドの標高53.6mの斜面上に立地する。平面形は長軸39cm、短軸34cmの不整形円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは46cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P162 (第74・75図、表2・18、PL.26・53)

調査区北西、B12グリッドの標高52.2mの斜面上に立地する。平面形は長軸34cm、短軸28cmの不整形



第76図 遺構外出土遺物(1)

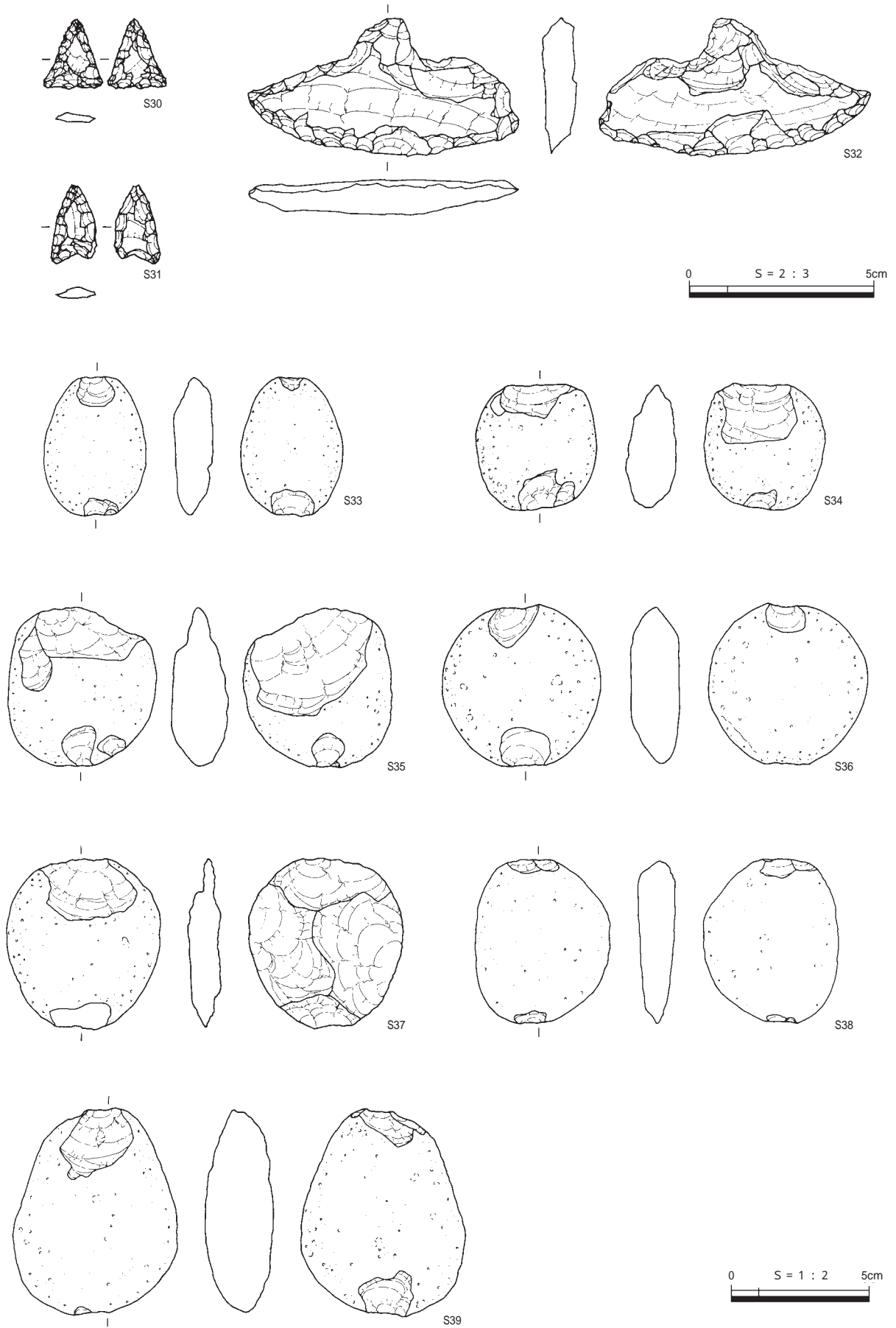
円形を呈し、検出面から底面までの深さは29cmを測る。弥生土器132が出土しており、遺構の時期は弥生後期後葉と考えられる。

P163 (第74図、表2、PL.26)

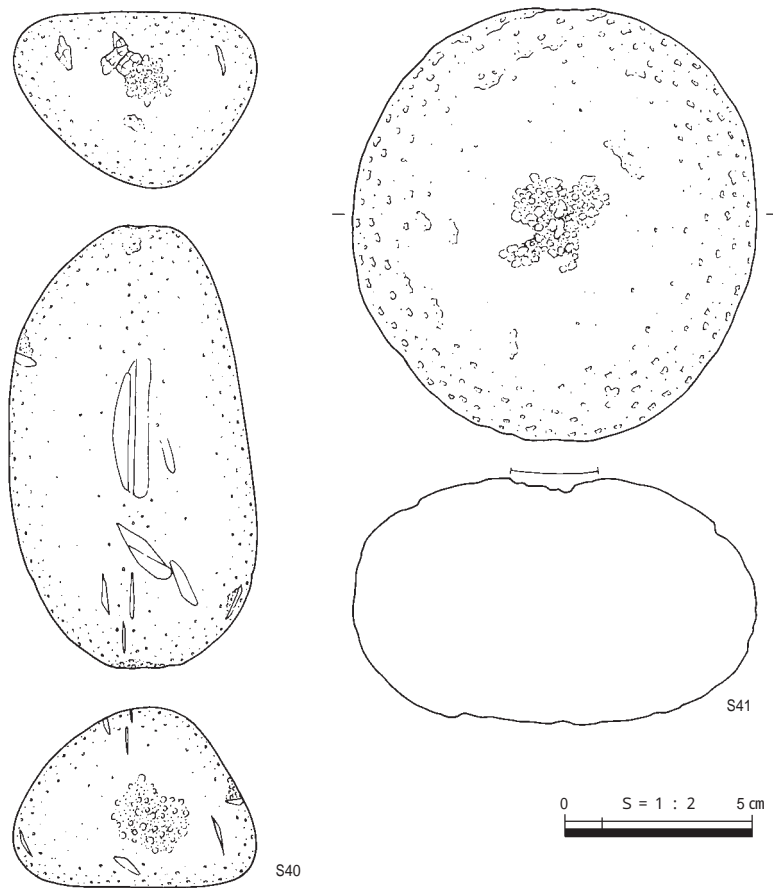
調査区北西、C12グリッドの標高50.9mに立地する。平面形は長軸32cm、短軸29cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは34cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

P164 (第74図、表2、PL.26)

調査区中央の西寄り、C11グリッドの標高51.8mの斜面上に立地する。平面形は長軸38cm、短軸37cmの不整円形を呈している。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは17cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第77図 遺構外出土遺物(2)



第78図 遺構外出土遺物(3)

(6) 遺構外出土遺物(第76～78図、表18・24、PL.55・62～64)

本節では遺構外出土遺物を掲載する。2区出土遺物は谷部包含層から得られた資料が主体である。時期は縄文前期から古墳時代後期まで及んでいるが、主体は弥生時代後期後葉である。

133は縄文土器深鉢である。表面は半裁竹管状工具によるタテ方向の平行沈線が施文されている。134は上げ底の縄文土器深鉢底部である。表面には燃糸文が施文されている。135～145は弥生時代後期後葉の甕口縁部をまとめている。146～150は須恵器甕体部から頸部破片である。外面に平行タタキ、内面には同心円状当て具痕が認められる。

第77・78図に石器をまとめている。S30・31は表裏面に素材面を残したサヌカイト製の石鏃で、S30は平基式、S31は凹基式である。S32は刃部が外湾刃のサヌカイト製の石匙である。縁辺部に調整加工を施し、つまみ部と刃部を作り出している。

S33～39は礫石錘を図示している。S33は小型の楕円礫の上下両端を打ち欠いている。S34は小型でやや厚めの円礫の上下両端に打ち欠きを加える。S35は扁平な楕円礫の上下両端に打ち欠きを加えているが、上端の打ち欠きが大きく、器体中央にまで及んでいる。S36・38は扁平な円礫の上下両端に弱い打ち欠きを加えている。S37は半裁した楕円礫の上下両端を打ち欠いたものである。S38はやや厚めの不整楕円礫の上下両端に打ち欠きを加えられている。S40は横断面が三角形となる棒状の垂角礫を素材とした敲石で、上下両端に敲打痕が認められる。S41は扁平な円礫中央に敲打痕を有する敲石である。

P165(第74図、表2、PL.26)

調査区中央の西寄り、C11グリッドの標高52.2mの斜面上に立地する。平面形は長軸26cm、短軸24cmの不整円形を呈している。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは25cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明。

P166(第74図、表2、PL.26)

調査区中央の西寄り、C11グリッドの標高52.0の斜面上に立地する。平面形は長軸33cm、短軸32cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは22cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

0 5 10
S = 1 : 2 5 cm

第3節 3区の調査成果

(1) 概要

3区・拡張区は標高60～61mの丘陵尾根部のほぼ平坦面に位置し、遺構の密度が高い。弥生時代後期後葉における竪穴住居跡8棟、同終末期の竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡2棟、時期不明の土坑2基、ピット50基を検出した。これらの遺構の多くが平成17年度調査によって明らかになっていたが、町道下に及んでおり限定された調査に留まっていた。今回の調査によって、概ね遺構の全体像が判明したが、拡張区は調査範囲が狭く、新たに遺構が確認されたものの部分的な調査となっている。

(2) 基本層序

3区は尾根部平坦面で平成17年度調査の基本層序に準じている(註1)。調査前は町道であったため、概ね包含層が削平され、表土下に部分的な客土を伴っていた。遺構検出面はホーキ層・AT層を一括した第層となる。この層のプライマリーな状況は、1・2区斜面部では認められず、上・下部を交えた二次堆積となっている。

層: 道下を埋める客土。しまり非常に強い。

- 層: 暗褐色土。主に斜面上方から中位に部分的に堆積する。径2cm以下の炭化物、地山ブロックを含んでいる。しまり・粘性弱い。包含される遺物は、須恵器や土師器などが主体である。

層: 暗褐色土。斜面部全体にわたり安定的に堆積する。径2cm以下の炭化物、焼土粒、地山ブロックを多く含んでいる。古墳時代以降の遺物が多く、客体的に弥生時代中期後葉の遺物を包含する。

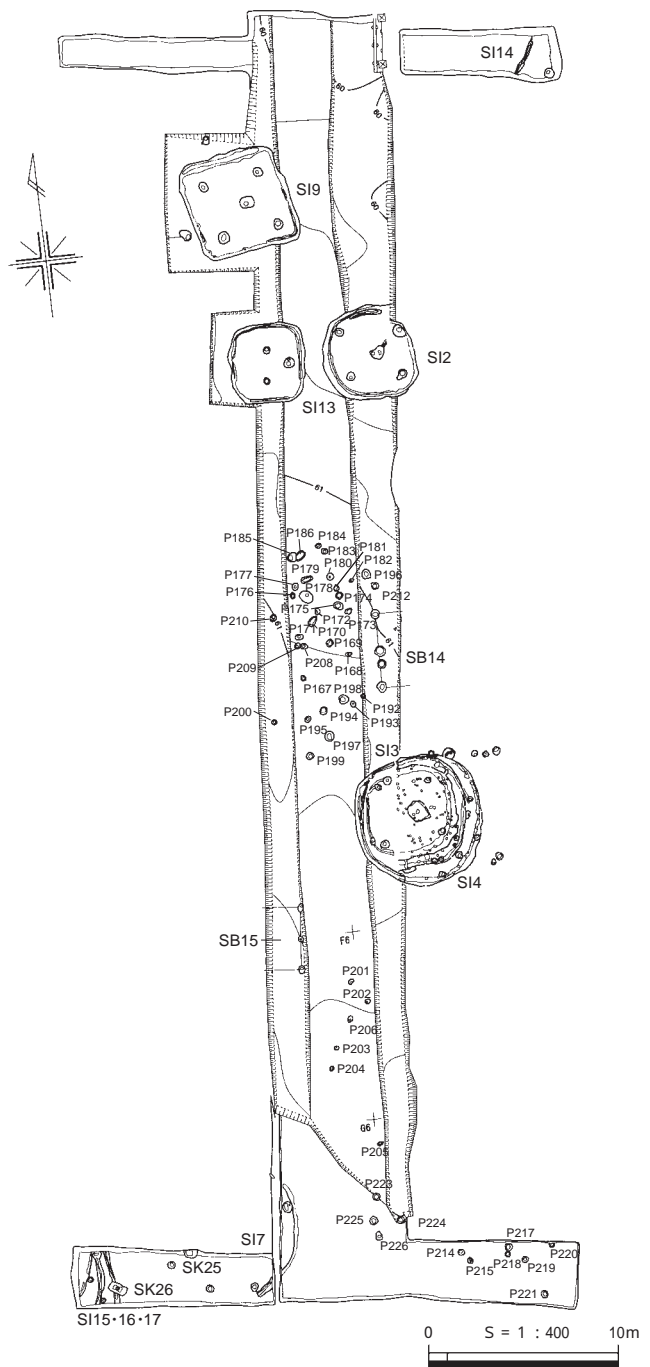
層: 褐色土。斜面下方に広がりを見せる。径1cm以下の炭化物を含む。弥生時代中期後葉の遺物を包含する。

層: 黄褐色土。ホーキ層。AT層。3区での遺構検出面。

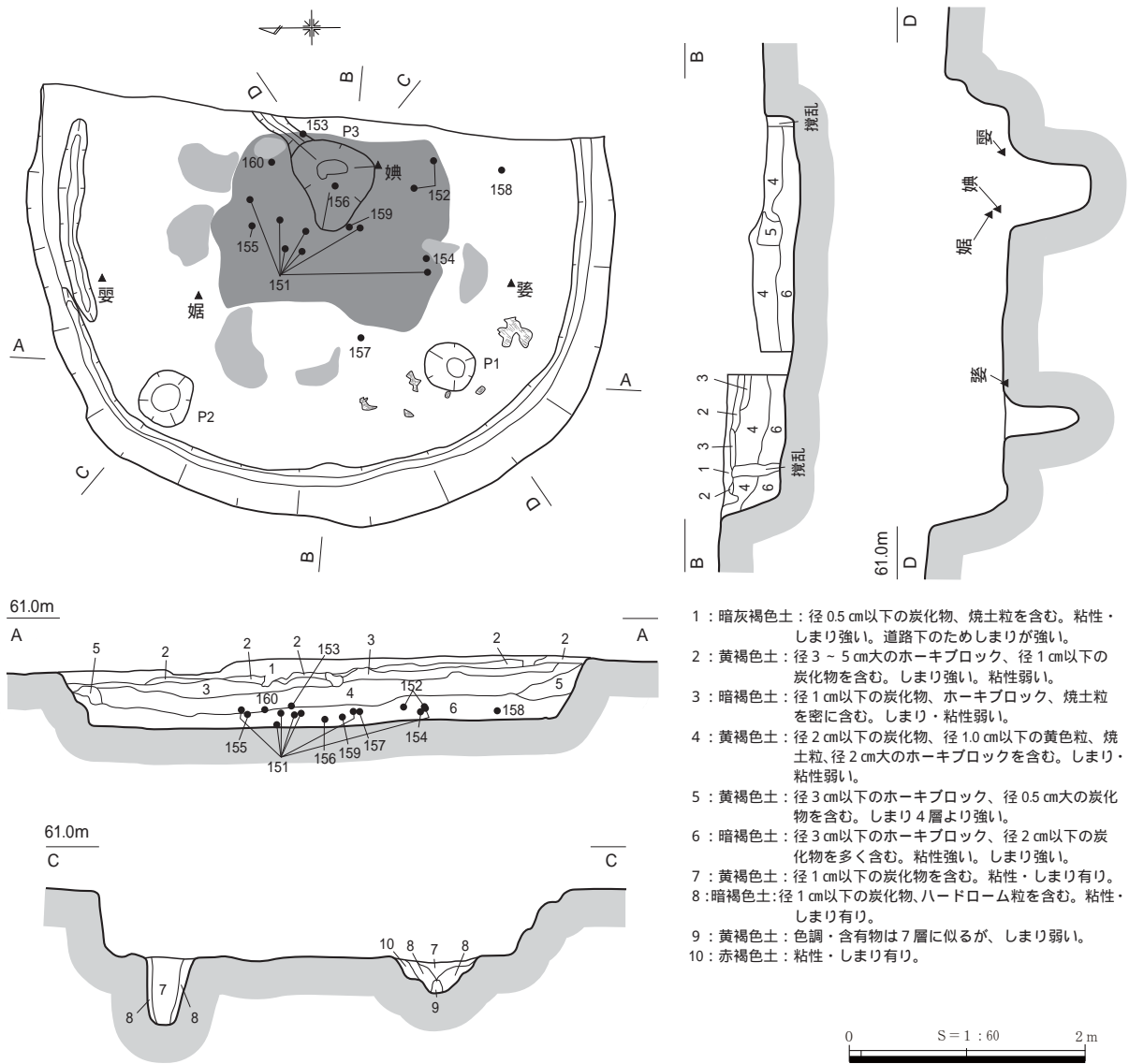
層: 黄白色粘質土。

層: 橙褐色土: 斜面上方から中位に堆積する火山灰粘質土。粘性・しまり強い。

註1) 『笹津乳母ヶ谷第2遺跡1』10頁参照のこと。



第79図 3区遺構配置図



第80図 SI2

(3) 竪穴住居跡

SI2 (第80～82図、表3・4・13・14・19・20、PL.28・56・60・66・67)

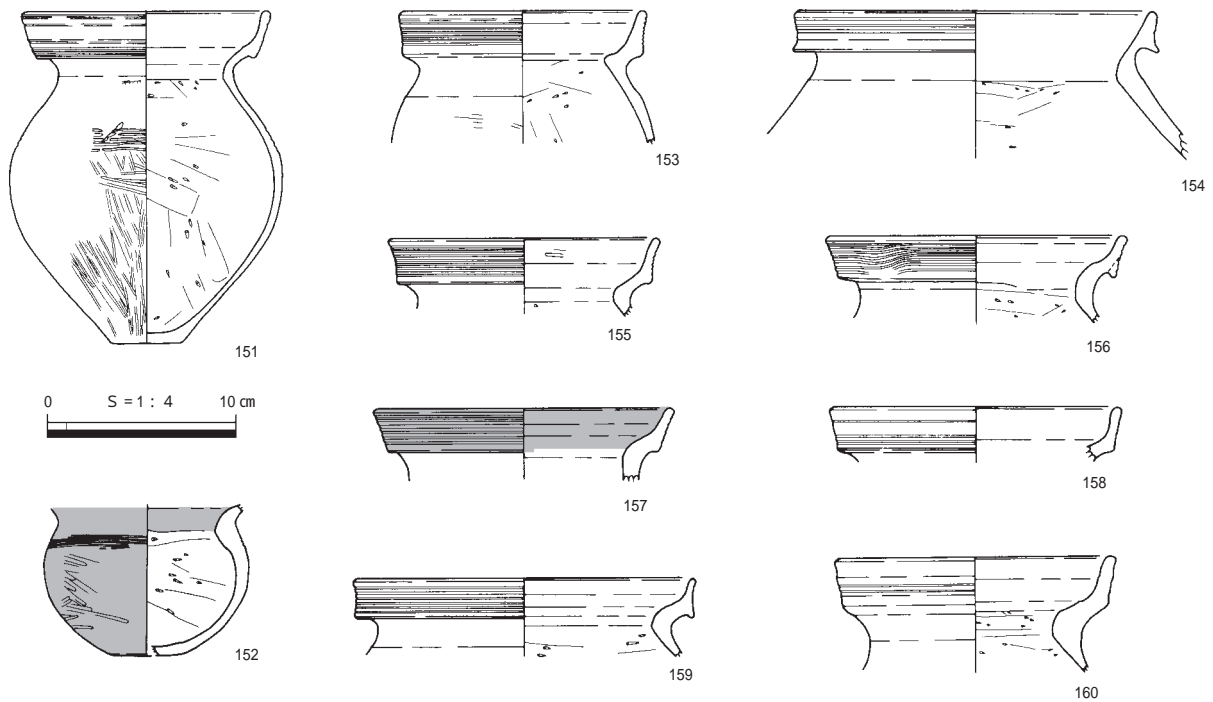
調査区北側、B5・C5グリッドの標高60.65m、尾根部平坦面に立地する。西側約1mにはSI13が位置し、平成17年度に東半部の調査が行われている。

住居規模は長軸4.95m、短軸4.8m、面積は15.0m²を測り、床面の平面形は隅丸方形である。検出面から床面までの深さは53cm、壁面は60度の角度で外傾して立ち上がる。

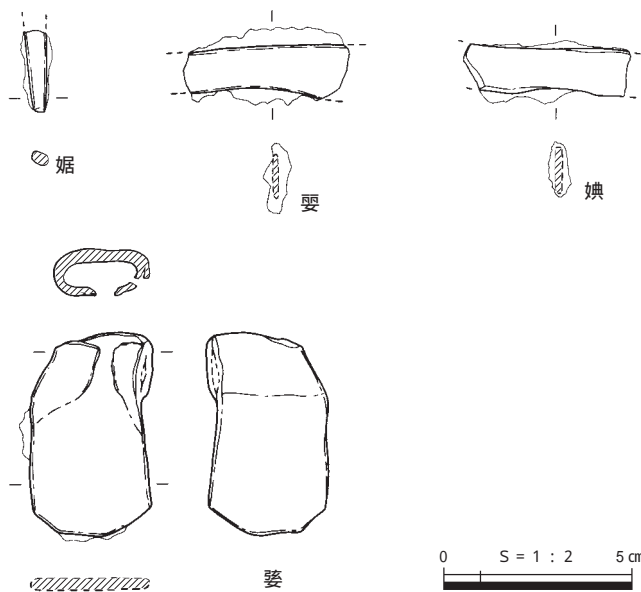
主柱穴はP1(42×40-60cm)、P2(48×43-57cm)を検出し、昨年度調査分を合わせると4本柱となる。P2で柱痕が観察でき、その直径は21cmである。中央ピットのP3(75×69-67cm)は、西に張り出した不整形円形を呈し、北東方向に幅15cmの溝1条が派生している。埋土は4層に分かれ、いずれも粘性が強く1・2層には炭化物が含まれていた。

壁溝の断面はU字状で、幅12cm、深さ5cm程度である。床面は層を掘り込んで整地しており、焼土面は中央ピットを囲むように7ヶ所検出した。床面中央には2.0×1.6mの範囲に厚さ約5cmの炭化物層が拡がり、南西隅に炭化材が点在していた。

埋土は炭化物と地山ブロックが混じる暗褐色土と黄褐色土が互層となって堆積しており、6層に分



第81図 SI2出土遺物(1)



第82図 SI2出土遺物(2)

かれる。壁際から流れ込んだ状況を示し、自然堆積と考えられる。

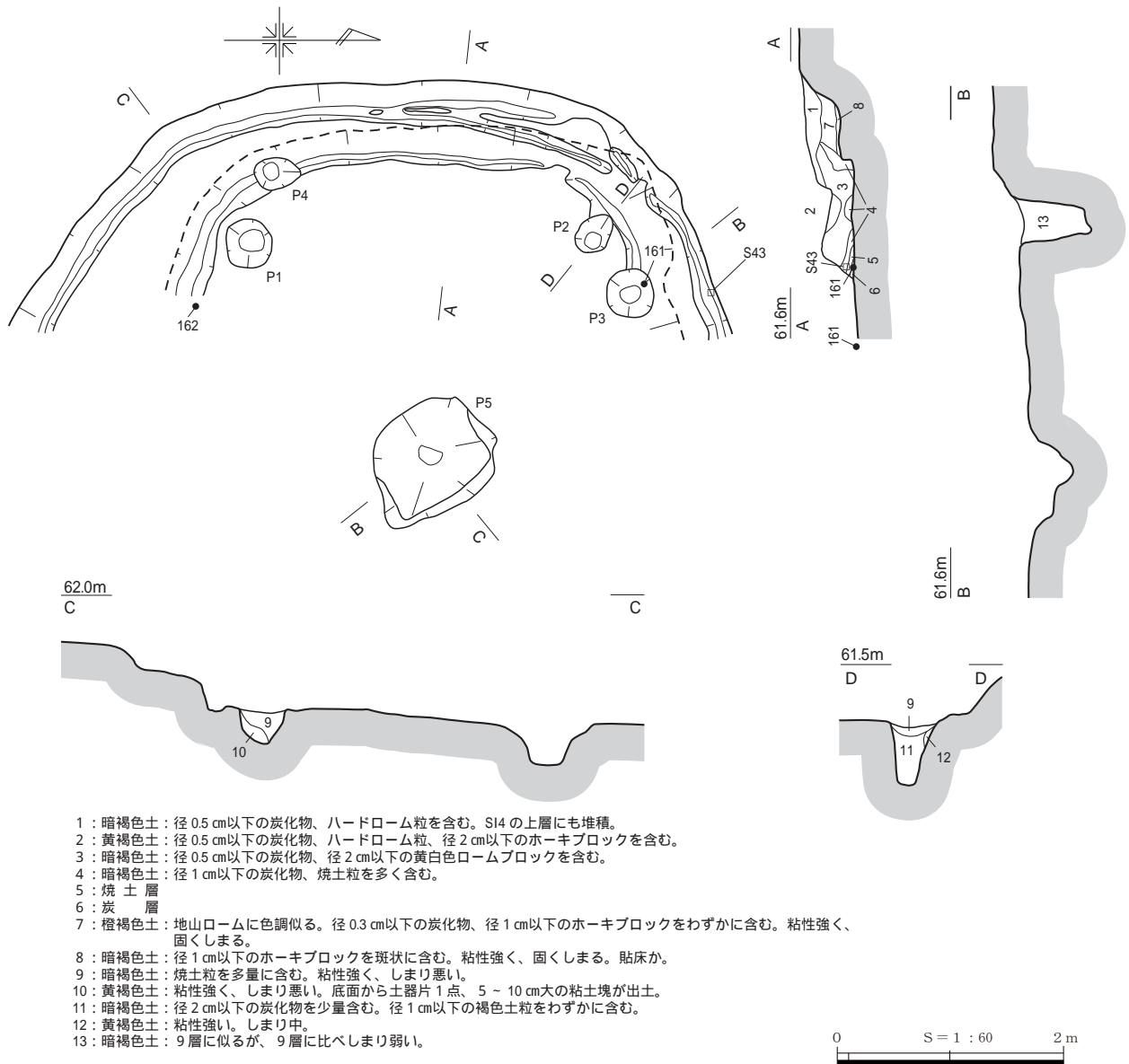
第81・82図に弥生土器と鉄製品を掲載している。口縁部に多条平行沈線がめぐる甕151～159と壺160が認められる。152は頸部直下に櫛描沈線がめぐり、体部はミガキ調整が施されている。媛は横断面形が扁平を呈し、上端が欠損している棒状鉄製品である。要は厚さ1mmほどの薄板状鉄製品であり、刀子の可能性を持っている。嬬は左右側部が反り返っているヘラ状鉄製品であり、両端部が欠失している。婆は袋状鉄斧であり、右側の袋部と器体が破断している。

遺構の時期は、出土遺物から - 3 様

式、弥生時代後期後葉に位置づけられる。

SI3・4(第83～86図、表3・20・24、巻頭図版6、PL.29～32・56・60～61・63・64)

調査区中央部、E5グリッドの標高61.3m、尾根部平坦面に立地する。平成17年度調査によって東側3分の2が明らかとなっている。2棟の竪穴住居跡が重複していたが、土層断面の観察からSI4、SI3の順に新しくなり、SI3は焼失住居である。詳細は平成17年度調査報告を参照されたい。



第83図 SI3・4

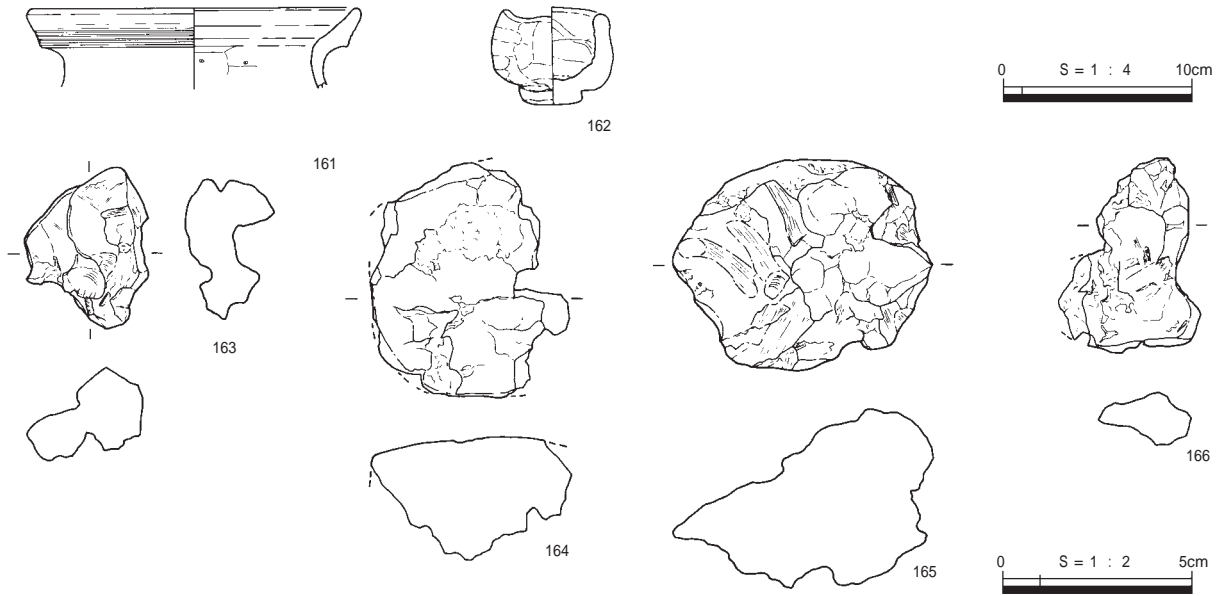
SI3 住居規模は長軸4.8m、短軸4.7m、面積は19.4m²を測り、平面形は隅丸方形である。検出面から床面までの深さは28cm、壁面は70度の角度で外傾して立ち上がる。後述するSI4の埋土を掘り込んで立地している。

焼土層は暗褐色埋土（4層）を除去した後、住居中央部に認められた。東西0.7m、南北4m、厚さ5cmの規模で、南北に帯状に広がっている。この焼土層と床面の間には、炭化材の小片が堆積している状況が確認できた。一方、住居縁辺部では焼土層はほとんど認められず、暗褐色土下に炭化材が良好に遺存していた（第84図）。この炭化材は板状あるいは丸太状を呈し、住居縁辺部から住居中心方向に向きを揃えることから、垂木材もしくは扱首材と考えられる。垂木材と推定される材は、幅20～30cmである。

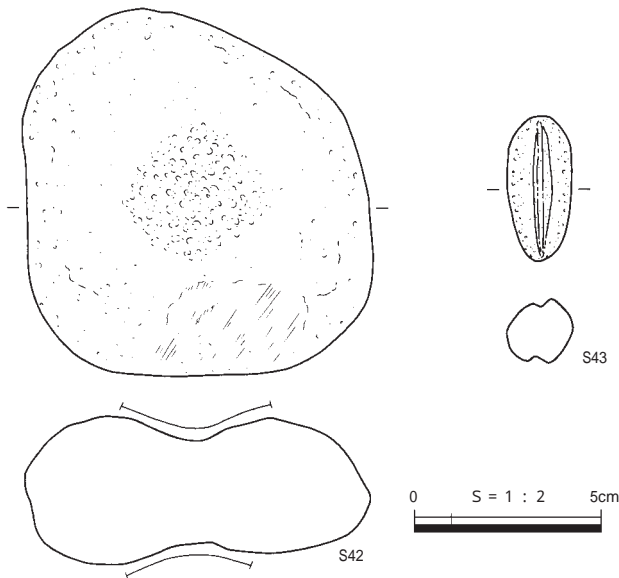
今回検出した主柱穴はP1（45×40 - 28cm）、P2（35×28 - 50cm）で、平成17年度調査分を合わせると4本柱となる。主柱穴間距離は2.8mを測る。床面中央東寄りP5（105×90 - 40cm）が確認されている。P1、2とも、埋土中に焼土粒を多量に含んでいた。また、P1の底面近くでは、炭化物がまとま



第84図 SI3炭化材出土状況図



第85図 SI3・4出土遺物(1)



第86図 SI3・4出土遺物(2)

って検出されており、炭化した柱材の可能性も考えられる。

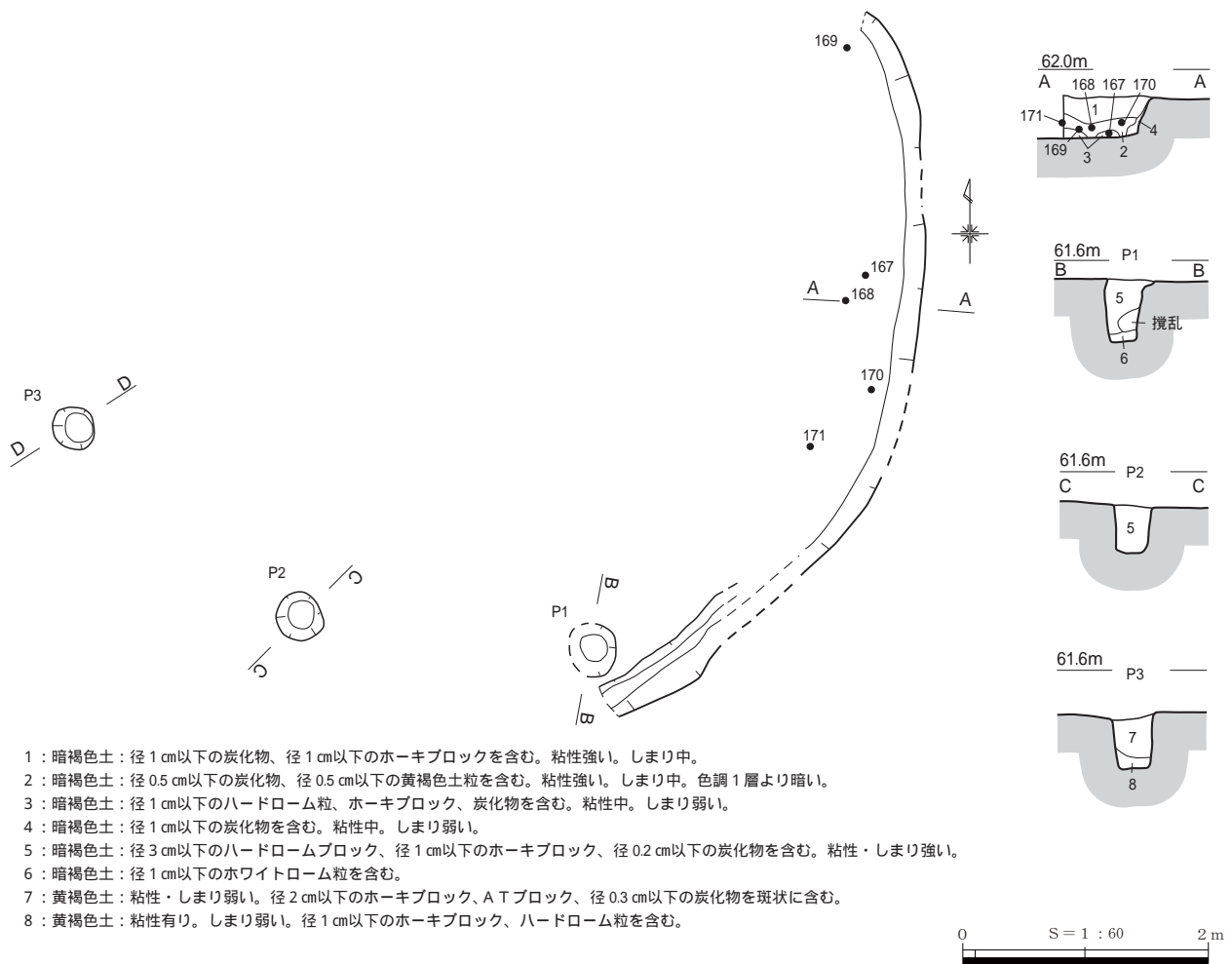
SI4 E5グリッド中央部に位置し、SI3より若干規模を大きくするやや歪な円形の住居跡である。層を確認面として検出した。埋土は床面直上に薄く暗褐色土が堆積するが、大半は炭化物や層ブロックをわずかに含む淡赤褐色土で、堅く締まる。この淡赤褐色土は層に近似している。壁溝は幅15cm、深さ3～5cmでほぼ全周し、北西部分では一部2条認められる。床面レベルはSI3より10cm高い。

検出した支柱穴はP3(40×27-35cm)、P4(45×40-70cm)で、平成17年度調査分と合わせると、4本柱で少なくとも2回の建て替えが行われたと

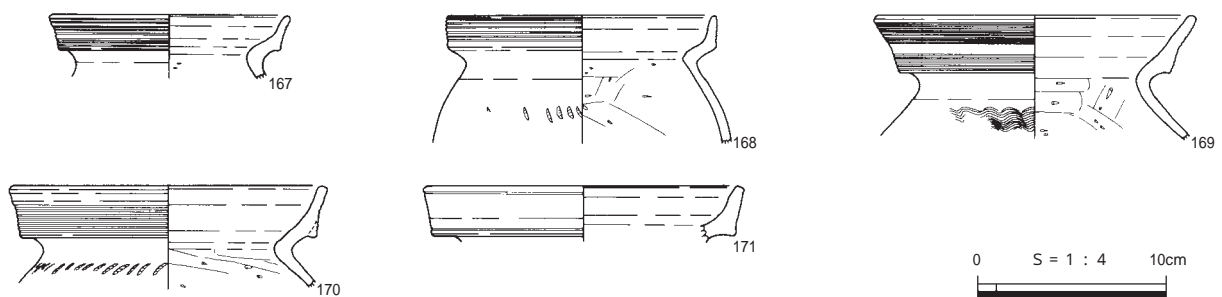
考えられる。柱穴の配置は長方形を呈し、支柱穴間距離は長軸4.5m、短軸3mである。

出土遺物は弥生土器2点、焼成粘土塊4点、石器2点を図示している。161は口縁部に多条平行沈線がめぐる甕であり、弥生時代後期後葉に位置づけられる。162は高台を持つミニチュア土器である。手づくね成形で仕上げられており、ヘラ状工具による面取り後、ナデ調整が施される。163～166は焼成粘土塊である。SI3床面直上からまとまって出土した。母体となる164は調査時の段階で最大長35cm、最大幅31cm、最大厚15cmの大型品であったが、焼成が不良で破損している。粘土塊には径5mm以下の白色砂礫が混じり、指オサエやナデ痕が多く観察される。S42は不整形なえ垂円礫を素材とした敲石である。表裏面のそれぞれ中央に敲打による深い潰れがあり、器体の一端にも敲打痕が認められる。S43は小型の楕円礫の上下面に溝状の切れ目を入れている石錘である。

遺構の時期は、出土遺物からV-3様式、弥生時代後期後葉に位置づけられる。



第87図 SI7



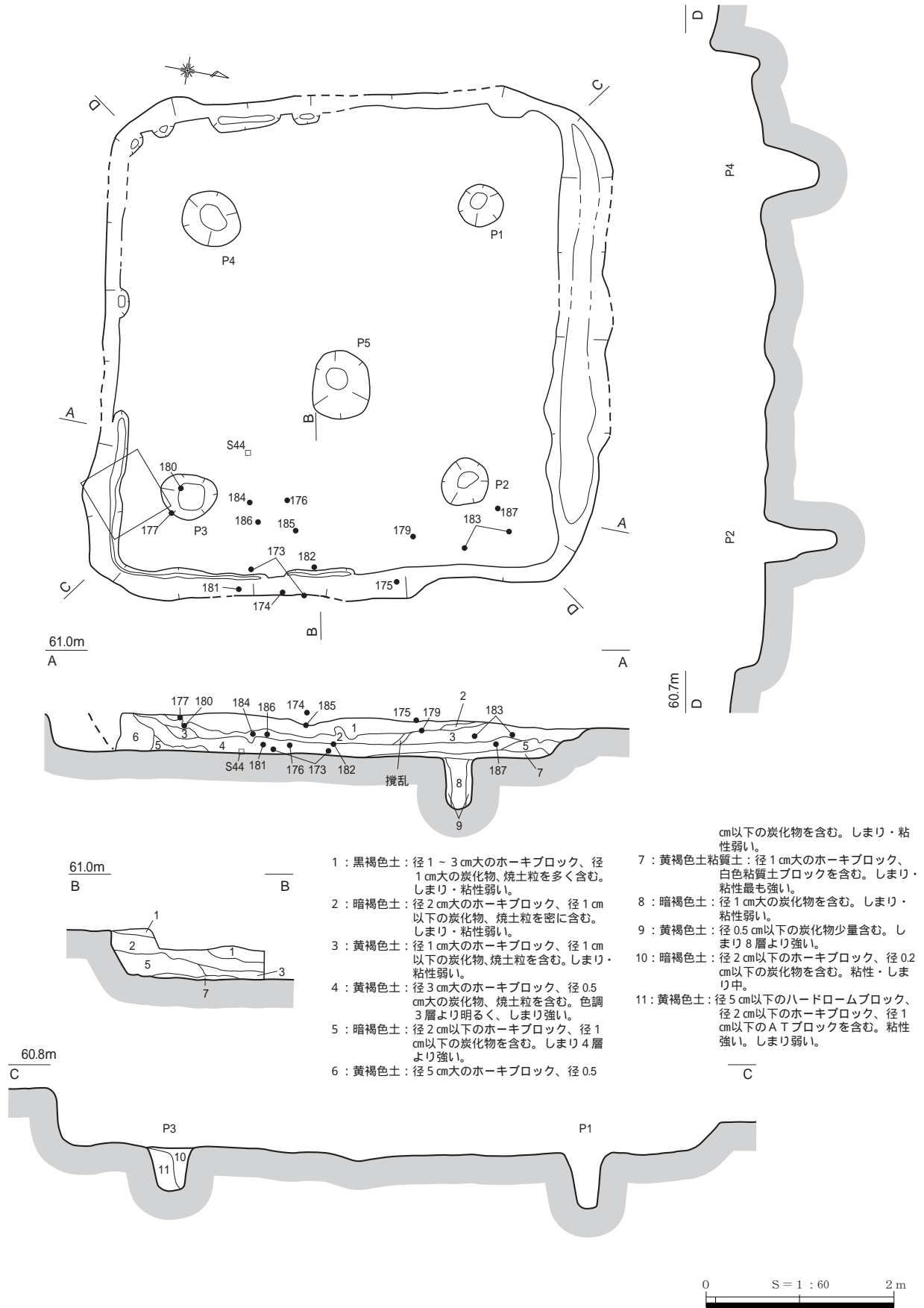
第88図 SI7出土遺物

SI7 (第87・88図、表3・20、PL.33・56)

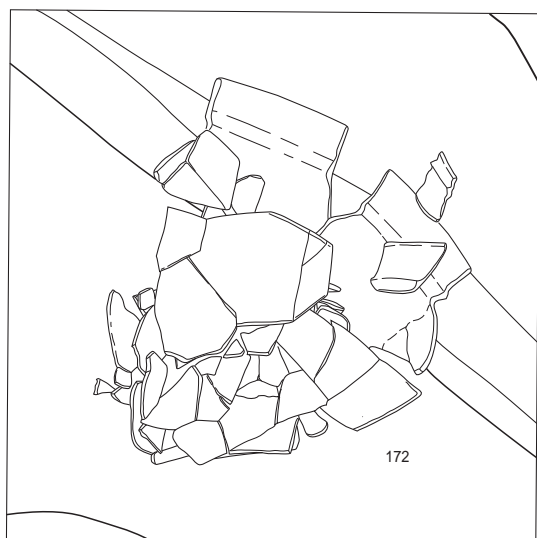
調査区南端、G6・7グリッドの標高61.3m、尾根部平坦地に立地する。南西方向2.5mにSI15・16・17が位置する。南西側は耕作により削平され遺存状態は良くないが、平成17年度調査成果を合わせると床面の平面形はほぼ円形となる。

住居規模は直径約7.9m、面積は41.4㎡、検出面から床面までの深さは残存部分で32cmを測る。壁面は東壁が部分的に残存し70度の角度で立ち上がる。壁溝は南西側で長さ1.3mとわずかに認められた。断面形は逆台形状を呈し、深さは約6cmである。

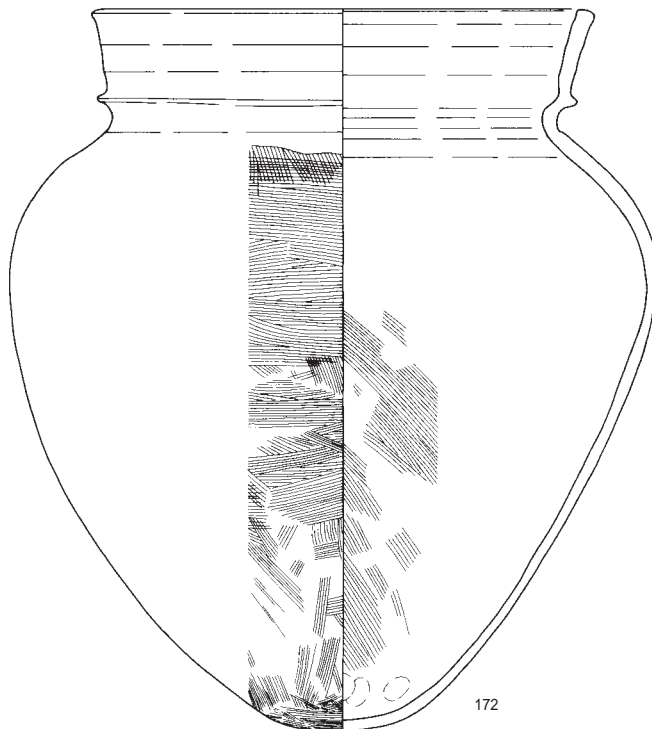
主柱穴は壁際をめくり、P1 (43×38 - 51cm)、P2 (40×38 - 39cm)、P3 (37×34 - 42cm) を検出し



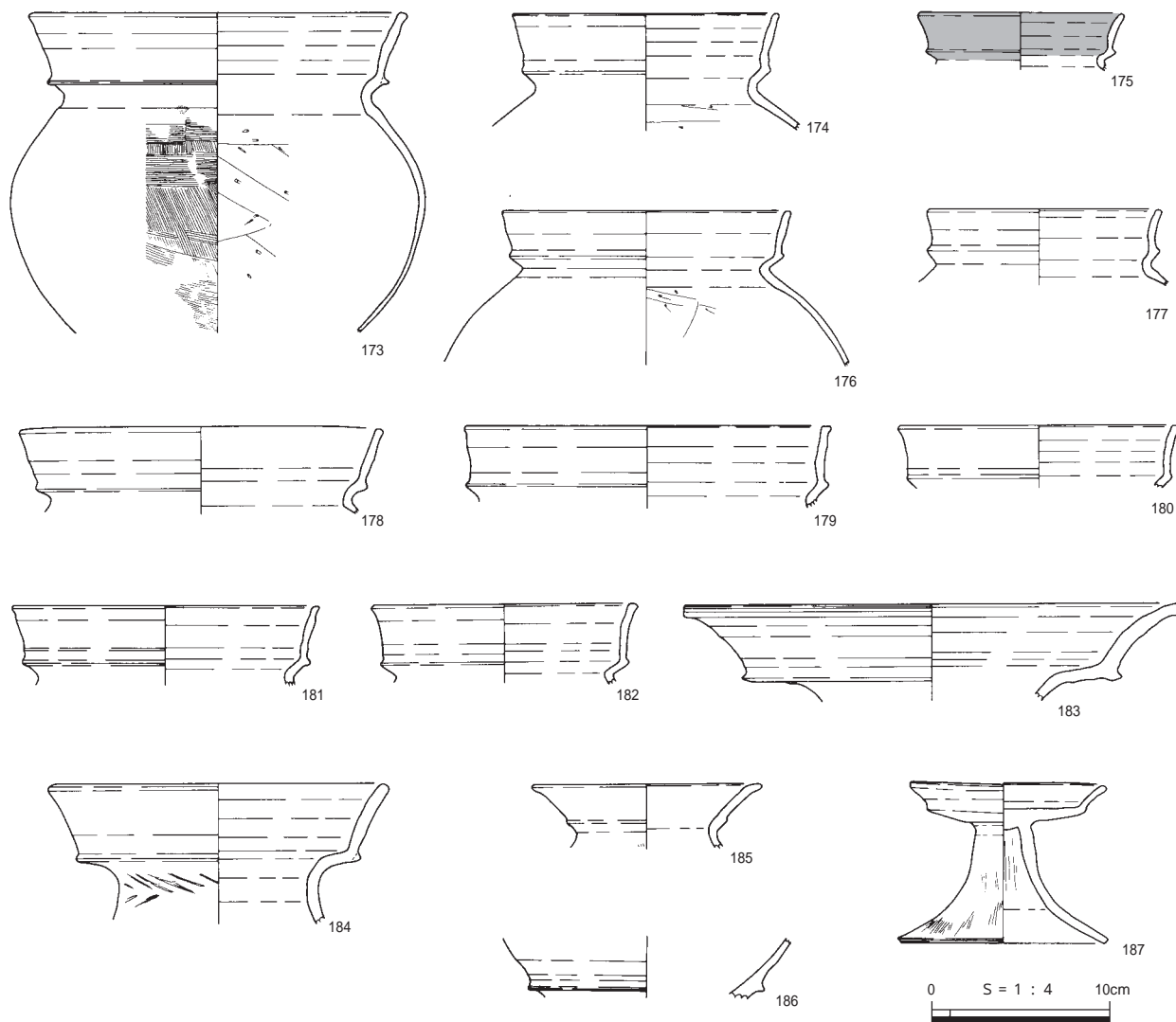
第89図 SI9



0 S = 1 : 10 30cm



第90図 S19 甕172出土状況



第91図 S19出土遺物(1)

た。昨年度調査分を合わせると6本もしくは8本柱となる。主柱穴間距離は2.4mを測る。

遺物は口縁部がやや拡張し、多条平行沈線がめぐる甕167～171が出土している。169は肩部に櫛描波状文が描かれ、170は刺突文が施される。いずれも弥生時代後期後葉に位置づけられよう。

遺構の時期は、出土遺物から - 3様式、弥生時代後期後葉と考えられる。

SI9 (第89～92図、表3・20・24、巻頭図版6、PL.34・57・58・60・64) 調査区北側、A6・B6グリッドの標高60.4m、尾根部平坦面に立地する。南側4mにSI13が位置している。平成17年度調査によって西側3分の2が明らかとなっている。

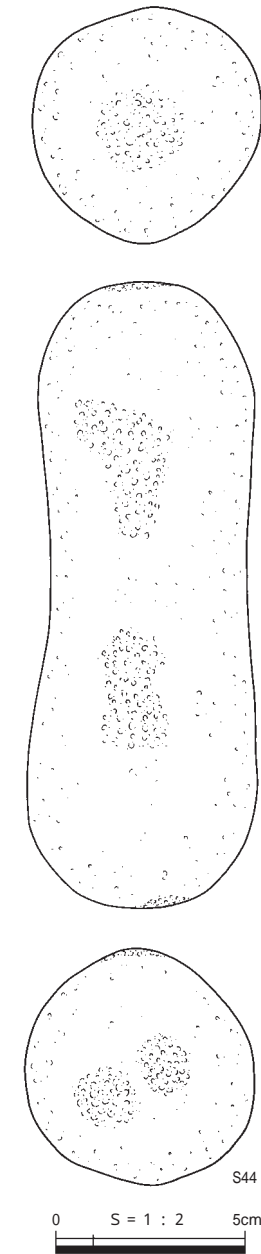
住居規模は長軸5.4m、短軸5.3m、面積は24.0m²を測り、平面形は方形である。検出面から床面までの深さは42cm、壁面は50度の角度で外傾して立ち上がる。

今回検出した主柱穴はP2 (50×49 - 53cm)、P3 (58×47 - 45cm)で、平成17年度調査分を合わせると4本柱となる。P2の埋土では柱痕が観察でき、直径14cmである。主柱穴間距離は2.9mを測る。床面中央東寄りでP5 (72×58 - 62cm) が確認されている。

壁溝は南東隅で認められた。断面形はU字状で、幅12cm、深さ約5cmである。床面は 層を掘り込んで整地しており、床面のほぼ全面に貼床が施されている。

埋土は6層に分かれ、壁際から流れ込んだ状況を示し、自然堆積と考えられる。SI13と類似し、上層に黒褐色土・暗褐色土、下層に黄褐色土が堆積していた。遺物は埋土下層中から多く出土し、南東隅から甕172が潰れた状態で検出されている。

出土遺物は弥生土器15点、石器1点を図示している。172～182は拡張した口縁端部がつまみ上げられ、ナデ調整が施される甕をまとめている。172はほぼ完形であり、器形が丸底を呈し、体部内外面がハケ調整である。一方、173・174・176の体部内面はヘラケズリ調整である。183・184は壺であり、183の口縁部は大きく開く。185・186は鼓形器台であり、頸部が短い。187は浅皿形の器部を有する高坏で、脚部外面はハケ調整、内面はヘラケズリ後ナデ調整が施されている。



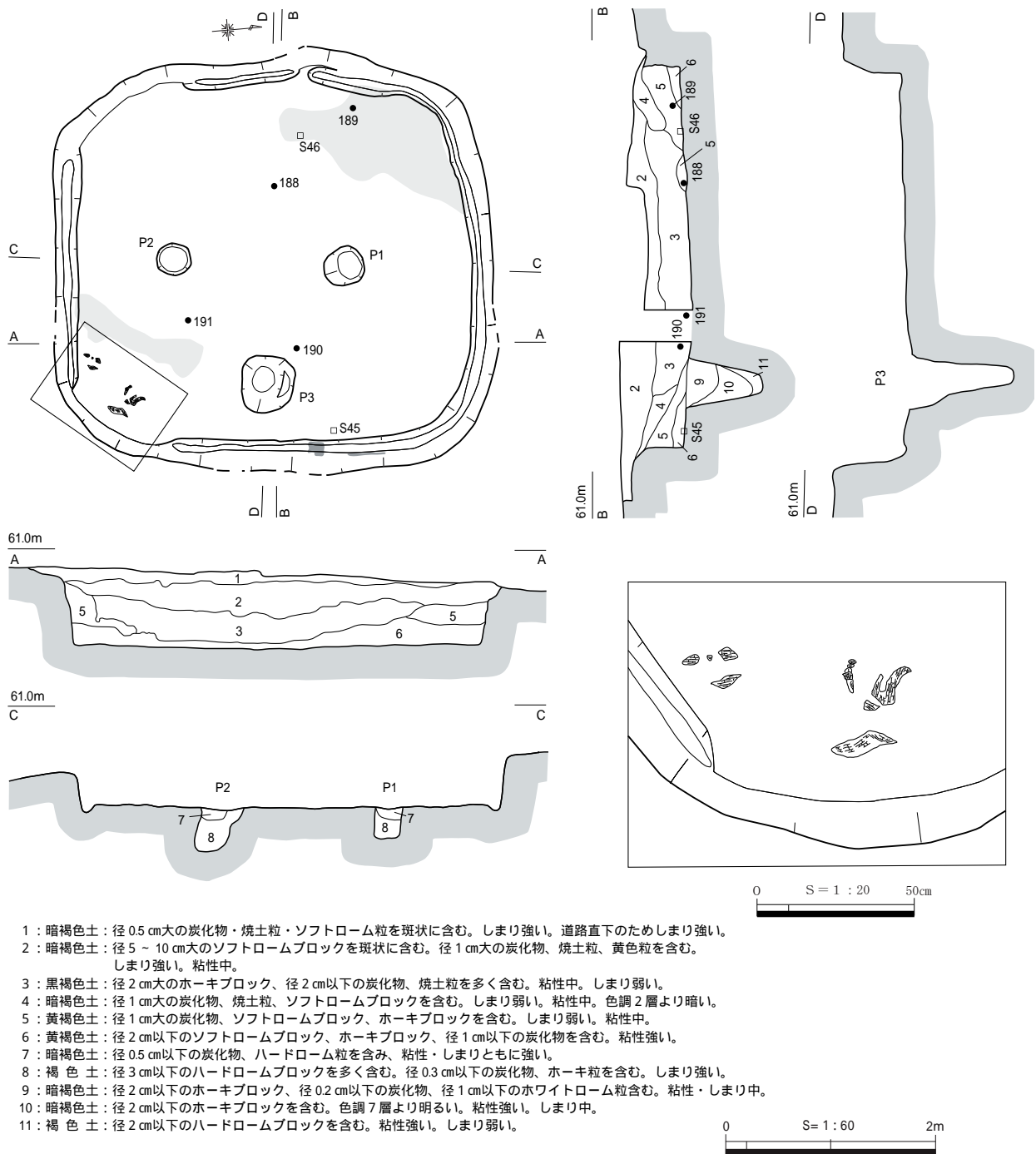
第92図 SI9出土遺物(2)

S44は棒状の亜円礫を用いた敲石であり、上下両端と表面に敲打痕が認められる。表面は平坦でなく、敲打痕は稜線上の2ヶ所に残されている。

遺構の時期は、出土遺物から天神川 期、古墳時代前期前葉に位置づけられる。

SI13 (第93・94図、表3・20・24、PL.35・58・59・65)

調査区北側、C6グリッドの標高60.85m、尾根部平坦面に立地する。東側約1mにはSI2が、北側4mにSI9が位置している。



- 1：暗褐色土：径0.5cm大の炭化物・焼土粒・ソフトローム粒を斑状に含む。しまり強い。道路直下のためしまり強い。
- 2：暗褐色土：径5～10cm大のソフトロームブロックを斑状に含む。径1cm大の炭化物、焼土粒、黄色粒を含む。しまり強い。粘性中。
- 3：黒褐色土：径2cm大のホーキブロック、径2cm以下の炭化物、焼土粒を多く含む。粘性中。しまり弱い。
- 4：暗褐色土：径1cm大の炭化物、焼土粒、ソフトロームブロックを含む。しまり弱い。粘性中。色調2層より暗い。
- 5：黄褐色土：径1cm大の炭化物、ソフトロームブロック、ホーキブロックを含む。しまり弱い。粘性中。
- 6：黄褐色土：径2cm以下のソフトロームブロック、ホーキブロック、径1cm以下の炭化物を含む。粘性強い。
- 7：暗褐色土：径0.5cm以下の炭化物、ハードローム粒を含み、粘性・しまりともに強い。
- 8：褐色土：径3cm以下のハードロームブロックを多く含む。径0.3cm以下の炭化物、ホーキ粒を含む。しまり強い。
- 9：暗褐色土：径2cm以下のホーキブロック、径0.2cm以下の炭化物、径1cm以下のホワイトローム粒を含む。粘性・しまり中。
- 10：暗褐色土：径2cm以下のホーキブロックを含む。色調7層より明るい。粘性強い。しまり中。
- 11：褐色土：径2cm以下のハードロームブロックを含む。粘性強い。しまり弱い。

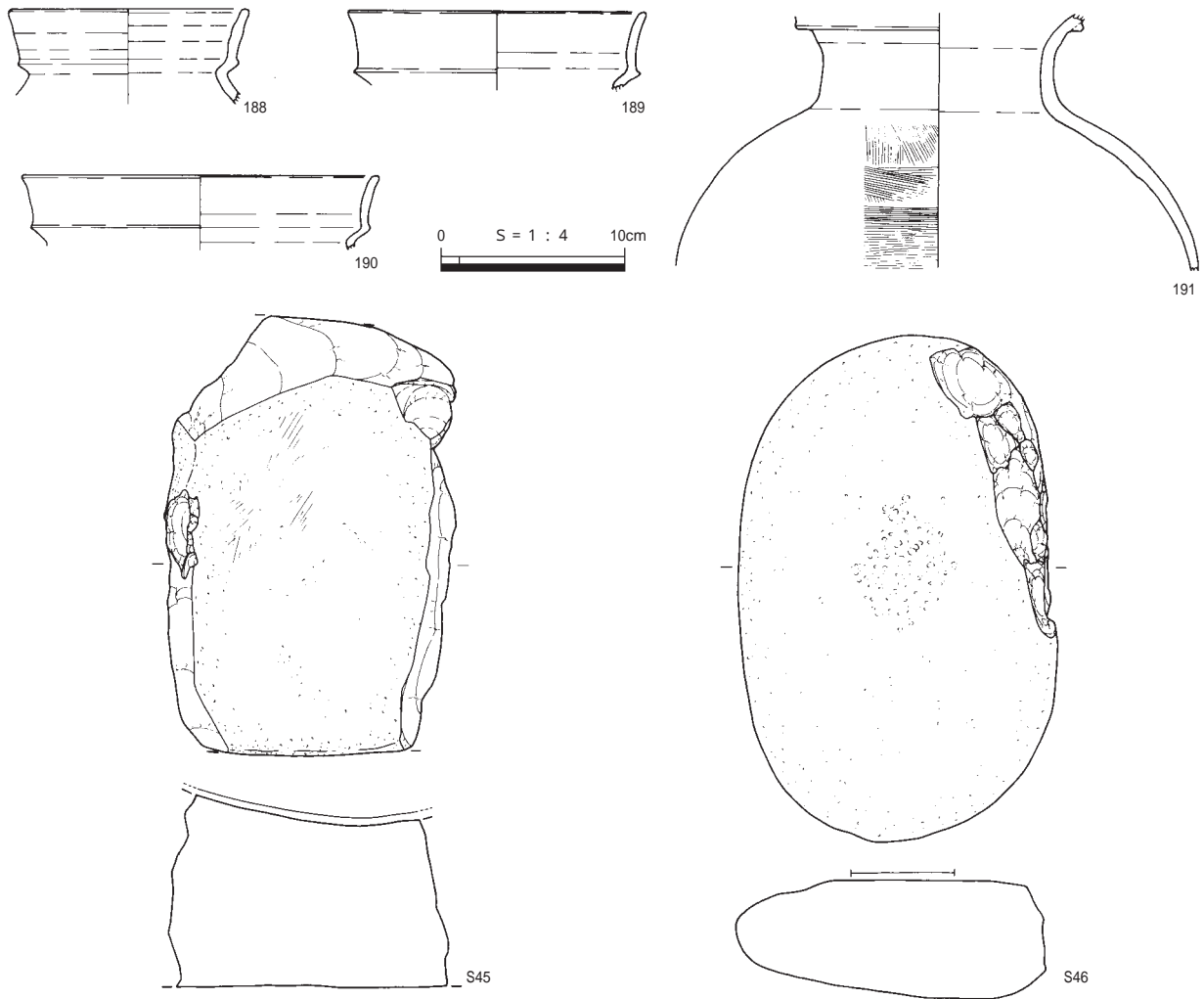
第93図 SI13

住居規模は長軸4.1m、短軸4.05m、面積は12.8㎡を測り、平面形は隅丸方形である。検出面から床面までの深さは74cm、壁面は80度の角度で外傾して立ち上がる。

主柱穴はP1（38×35 - 28cm）、P2（32×30 - 41cm）であり2本柱となる。主柱穴間距離は1.7mを測る。東壁際の中央部で、主柱穴の約2.5倍の深さを持つP3（54×50 - 97cm）を検出した。埋土は径2cm以下の炭化物・地山ブロックを含んでいる。

壁溝の断面はU字状で、幅15～20cm、深さ約7cmである。床面は層を掘り込んで整地しており、北西隅1.8×0.7mと南東隅1.2×0.25mに貼床が施されていた。また、床面南東隅には炭化材が点在している。

埋土は6層に分かれ、壁際から流れ込んだ状況を示し、自然堆積と考えられる。上層に暗褐色土、下層に黄褐色土が堆積していることから、比較的長期間にわたって埋没した可能性が考えられる。



第94図 SI13出土遺物

出土遺物は弥生土器4点、石器2点を図示している。188～189は口縁端部をつまみ上げ、ナデ調整が施された甕である。壺191は口縁から頸部がナデ調整、体部にはハケ調整が観察される。S45は大型で厚めの垂角礫の一面に粗い擦痕が認められる台石。この面は自然面の状態を残しており、研磨などにより平滑となっているわけではない。下面は被熱により一部変色している。縁辺の割れも被熱によるものであろう。S46は大型の扁平礫を用いた台石であり、表面中央付近が潰れている。上端の剥離面は弾け飛んだような割れで、周囲にクラックが走ることから、被熱によるものと思われる。

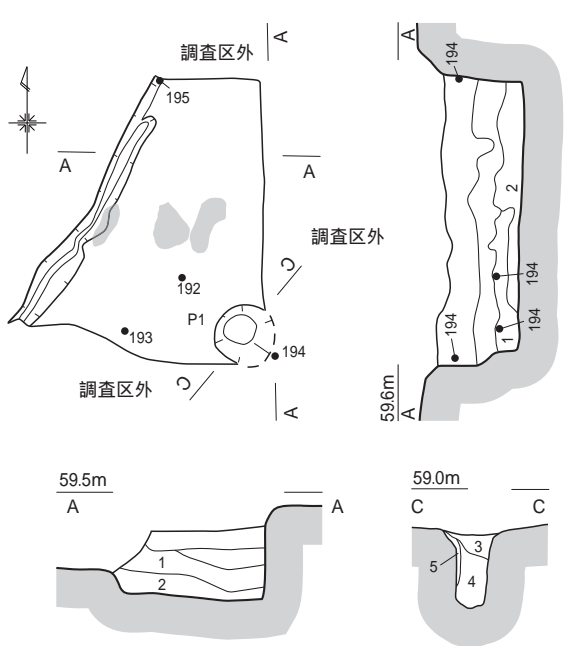
遺構の時期は、出土遺物から天神川期、古墳時代前期初頭に位置づけられる。

SI14 (第95・96図、表3・20、PL.36・58・59)

北東側の拡張区、A4グリッドの標高59.4m、尾根部と斜面部の傾斜変換点に立地する。南側約6mに平成17年度調査で検出されたSI8が位置している。大部分は調査区外に及んでいるため全形は不明である。

住居規模は検出範囲で長軸2.2m、短軸1.8mを測り、平面形は不明である。検出面から床面までの深さは64cm、壁面は60度の角度で外傾して立ち上がる。

主柱穴はP1(49×48-58cm)の1基のみ検出された。埋土の観察から柱は引き抜かれた状況を呈していた。壁溝の断面はU字状で、幅17cm、深さ約2～5cmである。床面は層を掘り込んで整地しており、壁際3ヶ所に炭化物層が点在している。



- 1 : 暗褐色土 : 径 1 cm 以下のハードローム粒、径 2 cm 以下の炭化物を含む。
- 2 : 暗褐色土 : 径 1 cm 以下のハードローム粒を多く含む。粘性・しまり有り。
- 3 : 暗褐色土 : 径 2 cm 以下のホーキブロック、径 0.2 cm 以下の炭化材、径 1 cm 以下の黄白色土粒を含む。粘性・しまり中。
- 4 : 暗褐色土 : 径 2 cm 以下のホーキブロックを含む。色調 3 層より明るい。粘性強い。しまり中。
- 5 : 褐色土 : 径 2 cm 以下のハードロームブロックを含む。粘性強い。しまり弱い。

第95図 SI14

施した弥生時代後期後葉の甕であり、本遺構に伴うものである。193は低脚坏の脚部となる。194は底面に回転系切り痕が残る須恵器坏であり、口縁部が欠損している。195は口縁部が大きく外反して頸部に明瞭な稜が見られる土師器甕である。193 ~ 195は上層からの混入品であろう。

遺構の時期は、出土遺物から - 3 様式、弥生時代後期後葉に位置づけられる。

SI15・16・17 (第97・98図、表3・20・24、PL.37・58・63)

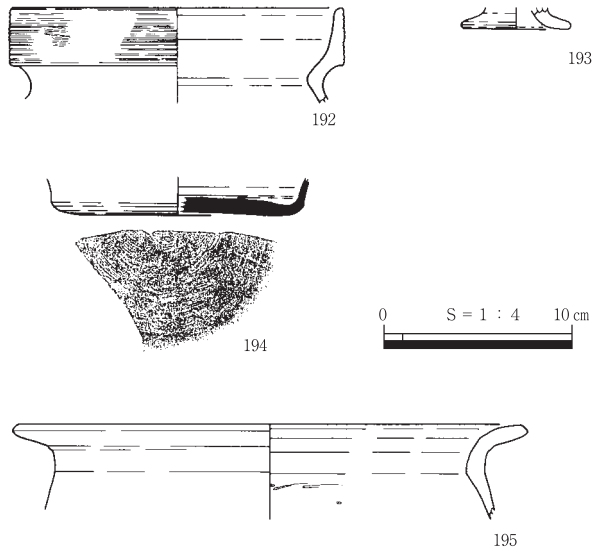
南西側の拡張区、G7グリッドの標高61.2m、尾根部平坦面に立地する。北東方向約2.5mにSI7が位置している。3棟の竪穴住居跡が重複していたが、土層断面と壁溝の観察からSI15、SI16、SI17の順に新しくなり、SI17は焼失住居である。いずれも、調査区外に及んでいるため全形は不明である。

SI15 住居規模は、検出範囲で長軸2.8m、短軸2.1mを測り、平面形は円形と推測される。検出面から床面までの深さは15cm、壁面は50度の角度で外傾して立ち上がる。

主柱穴はP1 (28×24 - 30cm)、P2 (48×32 - 42cm) であり、柱穴間距離は2.5mを測る。埋土は単層で地山ブロックを含み、埋め戻された状況を呈していた。床面は 層を掘り込んで整地しており、壁溝の断面はU字状で、幅19cm、深さ約5cmである。

埋土は6層に分かれ、ホーキブロックを多く含んだ黄褐色土が多い。壁際から流れ込んだ状況を示し、自然堆積と考えられる。壁面から約50cm内部でSI16に切られている。

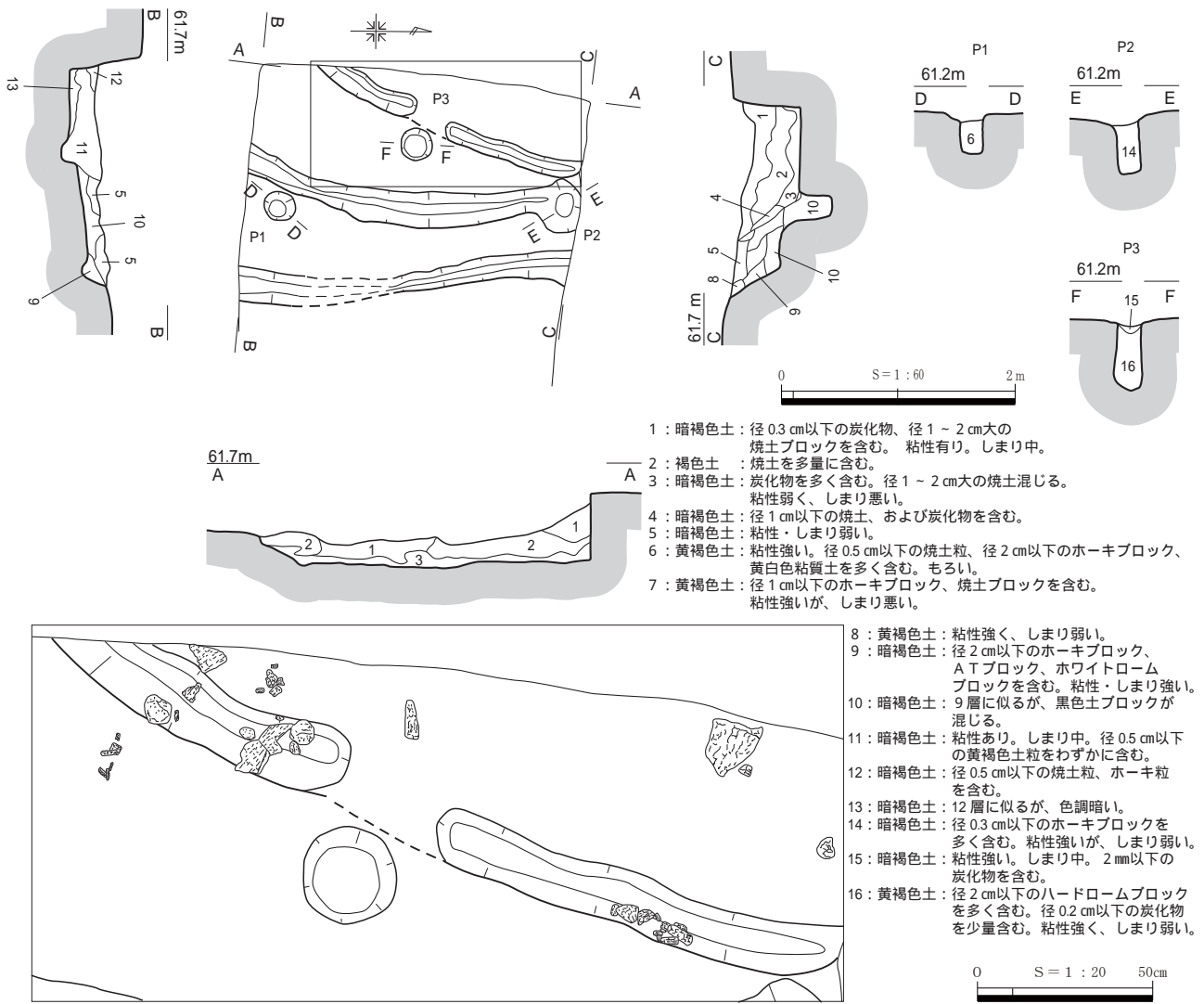
SI16 SI15の西側に位置し、切っている。住居規模は、検出範囲で長軸2.4m、短軸0.6mを測り、床面の平面形は円形と推測される。SI15床面との高低差は約12cmで、 層を掘り込んで整地している。壁溝は東壁を湾曲してめぐり、断面形は逆台形状で幅13cm、深さ6cmである。



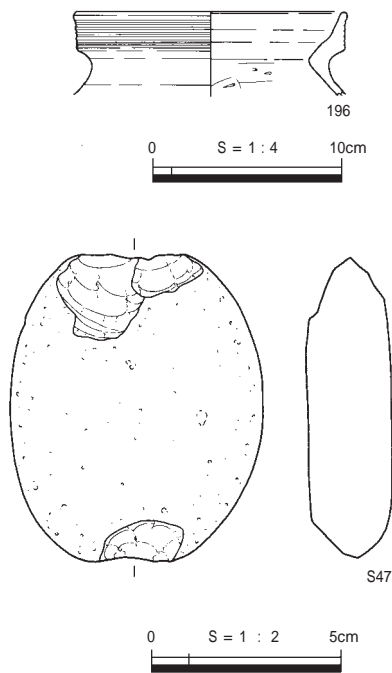
第96図 SI14出土遺物

遺構には - 層が覆っており、その下部が埋土となる。壁際から流れ込んだ状況を示し、自然堆積と考えられる。

出土遺物は弥生土器1点、土師器2点、須恵器1点を図示している。192は口縁部に多条平行沈線を



第97図 SI15・16・17



第98図 SI16出土遺物

主柱穴はP3 (27×26 - 55cm) の1基を確認できた。

SI17 北東方向に軸を向けてSI16を切る。住居規模は、検出範囲で長軸2.8m、短軸1.3mを測り、床面の平面形は円形と推測される。検出面から床面までの深さは25cm、壁面は45度の角度で外傾して立ち上がる。

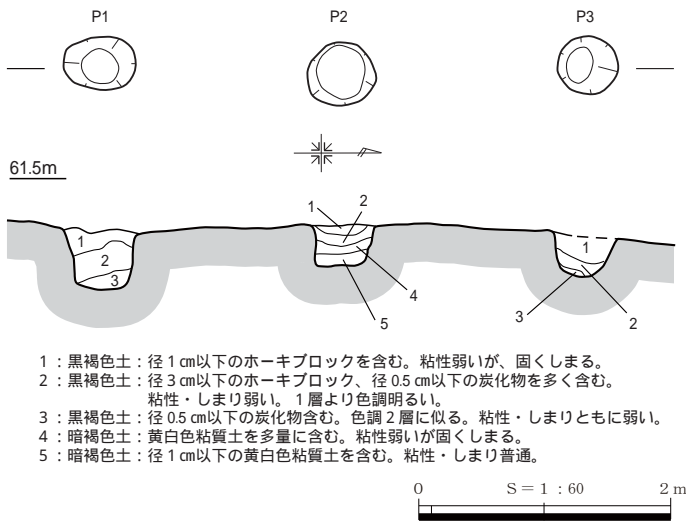
床面は 層を掘り込んで整地しており、断面U字状の幅15 ~ 25cm、深さ約 5 cmの壁溝がめぐっている。

埋土は4層に分かれ、最上層に焼土が、そのほかの埋土中にも径 3 cm以下の炭化物が多量に混じる。壁溝付近に炭化材が点在していたが遺存状態は不良である。

遺物は少なく、弥生時代後期後葉の甕196と石錘S47を図示している。S47はSI16床面から出土した石錘で、扁平な楕円礫の上下両端を打ち欠いている。

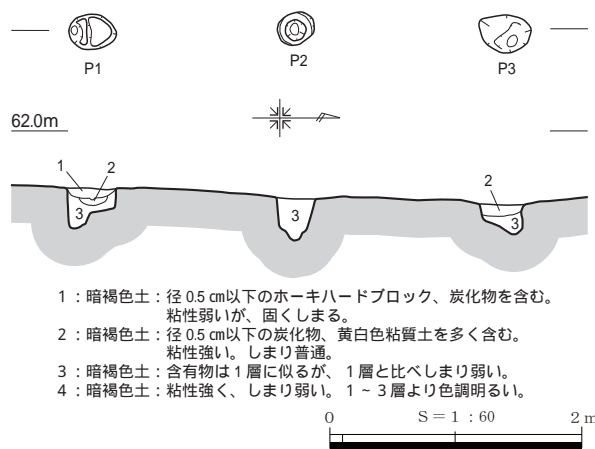
遺構の時期は、出土遺物から - 3 様式、弥生時代後期後葉に位置づけられる。

第3章 調査の成果



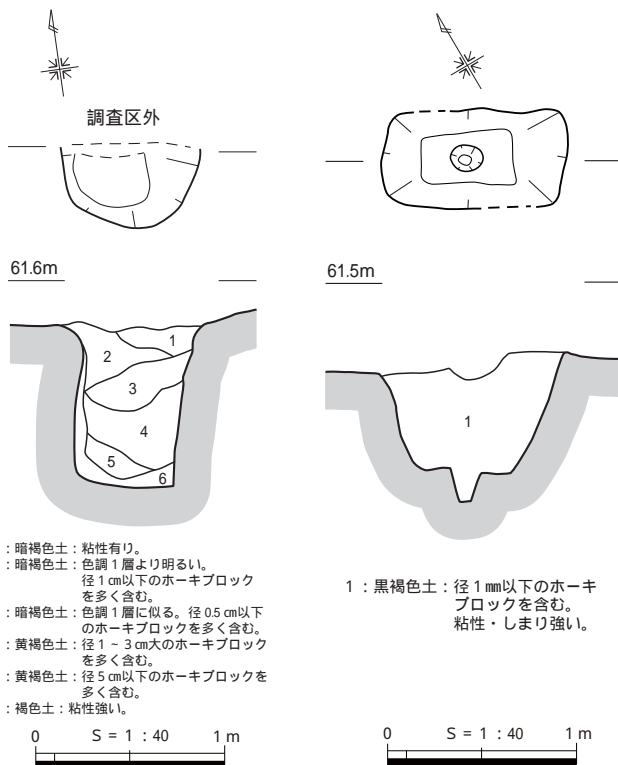
- 1: 黒褐色土: 径 1 cm 以下のホーキブロックを含む。粘性弱いが、固くしまる。
- 2: 黒褐色土: 径 3 cm 以下のホーキブロック、径 0.5 cm 以下の炭化物を多く含む。
粘性・しまり弱い。1層より色調明るい。
- 3: 黒褐色土: 径 0.5 cm 以下の炭化物を含む。色調 2層に似る。粘性・しまりともに弱い。
- 4: 暗褐色土: 黄白色粘質土を多量に含む。粘性弱いが固くしまる。
- 5: 暗褐色土: 径 1 cm 以下の黄白色粘質土を含む。粘性・しまり普通。

第99図 SB14



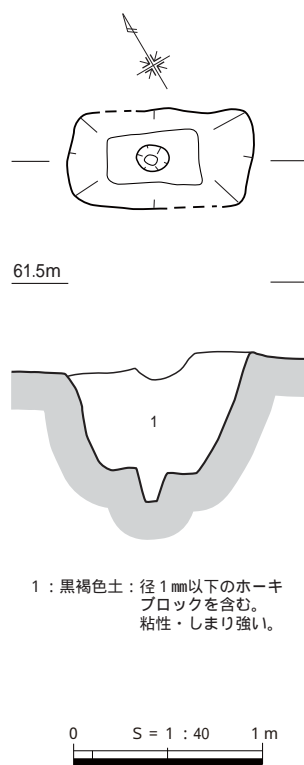
- 1: 暗褐色土: 径 0.5 cm 以下のホーキハードブロック、炭化物を含む。
粘性弱いが、固くしまる。
- 2: 暗褐色土: 径 0.5 cm 以下の炭化物、黄白色粘質土を多く含む。
粘性強い。しまり普通。
- 3: 暗褐色土: 含有物は 1層に似るが、1層と比べしまり弱い。
- 4: 暗褐色土: 粘性強く、しまり弱い。1~3層より色調明るい。

第100図 SB15



- 1: 暗褐色土: 粘性有り。
- 2: 暗褐色土: 色調 1層より明るい。
径 1 cm 以下のホーキブロックを多く含む。
- 3: 暗褐色土: 色調 1層に似る。径 0.5 cm 以下のホーキブロックを多く含む。
- 4: 黄褐色土: 径 1~3 cm 大のホーキブロックを多く含む。
- 5: 黄褐色土: 径 5 cm 以下のホーキブロックを多く含む。
- 6: 褐色土: 粘性強い。

第101図 SK25



- 1: 黒褐色土: 径 1 mm 以下のホーキブロックを含む。
粘性・しまり強い。

第102図 SK26

(4) 掘立柱建物跡

SB14 (第99図、表3、PL.38)

調査区中央、D5グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。南側 3 m にSI3・4が位置している。平成17年度 1 区調査地のP3・4・5と同じ軸を持ち、ピット規模も類似していることから、掘立柱建物跡と判断した。

平面形は桁行 2 間 (3.8m) 梁行 1 間 (3.1 m) の掘立柱建物跡であり、軸はN - 4 ° - W、梁桁に囲まれた面積は約11.8m²である。柱穴はV層を掘り込み、規模はP1 (56 × 43 - 48cm) P2 (51 × 50 - 30cm) P3 (45 × 45 - 33cm)、柱間距離はP1 - 2 : 1.9m、P2 - 3 : 1.9mを測る。

埋土は、炭化物・ホーキブロックを含む黒褐色土・暗褐色土を主体とし、土層における柱痕跡は認められなかった。

遺構の時期は、埋土の特色から古墳時代前期前半以降に廃絶されたものと考えられる。

SB15 (第100図、表3、PL.38)

調査区南寄り、E6・F6グリッドの標高61.6 mの尾根部平坦面に立地する。北東方向 4 m にSI3・4が位置している。平成17年度調査 2 区の調査区際で確認されたピットと同じ軸を持っていることから掘立柱建物跡とした。

平面形は桁行 2 間 (3.3m) 梁行 1 間 (推定値2.5m) の掘立柱建物跡であり、軸はN - 4 ° - E、梁桁に囲まれた面積は約8.25m²である。柱穴はV層を掘り込み、規模はP1 (38 × 25 - 33cm) P2 (30 × 25 - 33cm) P3 (48 × 29 - 24cm) 柱間距離はP1 - 2 : 1.6m、P2 - 3 : 1.7mを測る。

埋土は、炭化物・ホーキブロックを含む暗褐色土が堆積し、土層における柱痕跡は認められなかった。

遺構の時期は、埋土の特色から古墳時代前期前半以降に廃絶されたものと考えられる。

(5) 土坑

SK25 (第101図、PL.39)

南西側の拡張区、G7グリッドの標高61.4mの尾根部平坦面に立地する。SI7に切られ、北半は調査区外に伸びている。

検出範囲の平面形は、長軸1.72m、短軸0.43mの不整円形を呈している。検出面からの深さは85cm、壁面は85度の角度で立ち上がっている。埋土は6層に分層でき、最上層の1層はしまり・粘性とも強く、SI7の貼床となっている。底面ピットは確認できなかったが、壁の立ち上がりなどから落とし穴と考えられる。

遺構の時期は、埋土中からの遺物が確認されなかったため不明である。

SK26 (第102図、PL.39)

南西側の拡張区、G7グリッドの標高61.0mの尾根平坦面に立地する。SI15と重複し、切られている。

平面形は長軸0.95m、短軸0.51mの長方形を呈している。検出面から底面までの深さは52cmであるが、SI15に切られていることから、本来の掘り込み面は、もう少し高かったものと考えられる。壁面は65度の角度で立ち上がり、底面には径17cm、深さ18cmのピットが穿たれていた。埋土は径1cm以下のホーキブロックを含んでおり、しまり・粘性とも強い。

本遺構は落とし穴と想定されるが、時期は不明である。

(6) ピット

P167 (第103図、表2)

調査区中央、D6グリッドの標高61.4mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸28cm、短軸24cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは5cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P168 (第103図、表2)

調査区中央、D5グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸36cm、短軸20cmの不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは31cm、掘り方は段状である。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

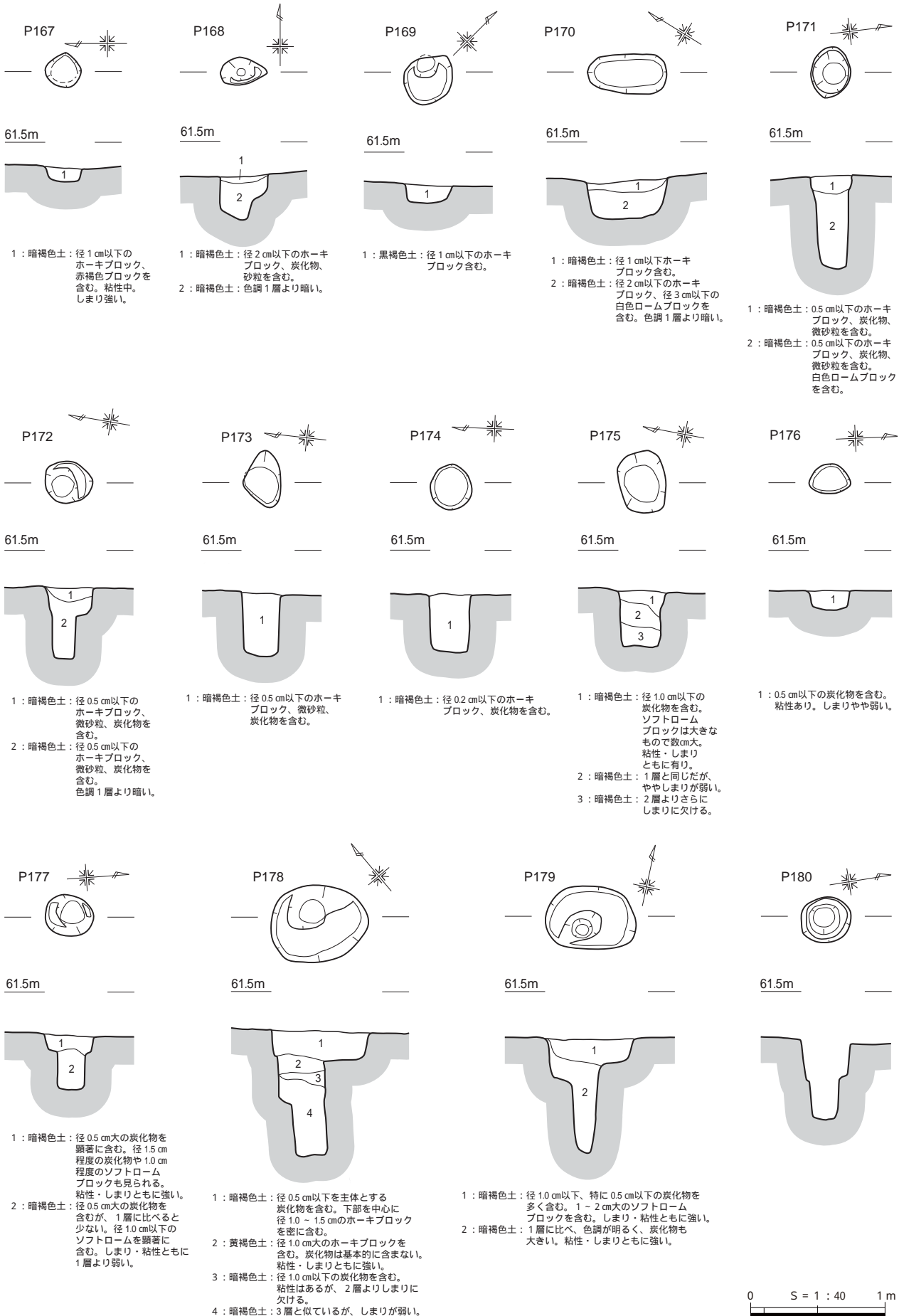
P169 (第103図、表2)

調査区中央、D5グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸34cm、短軸33cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは7cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P170 (第103図、表2)

調査区中央、D6グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸54cm、短軸24cmの不整楕円形を呈している。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは24cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第3章 調査の成果



第103図 P167 ~ 180

P171（第103図、表2）

調査区中央部、D6グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。平面形は筒型で、長軸38cm、短軸29cmの不整円形を呈している。検出面から底面までの深さは68cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明。

P172（第103図、表2）

調査区中央部、D6グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸36cm、短軸30cmの不整円形である。断面形は段状で、検出面から底面までの深さは53cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P173（第103図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸44cm、短軸28cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは46cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P174（第103図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸34cm、短軸31cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは41cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P175（第103図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸46cm、短軸34cmの不整楕円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは41cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P176（第103図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸31cm、短軸23cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは15cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

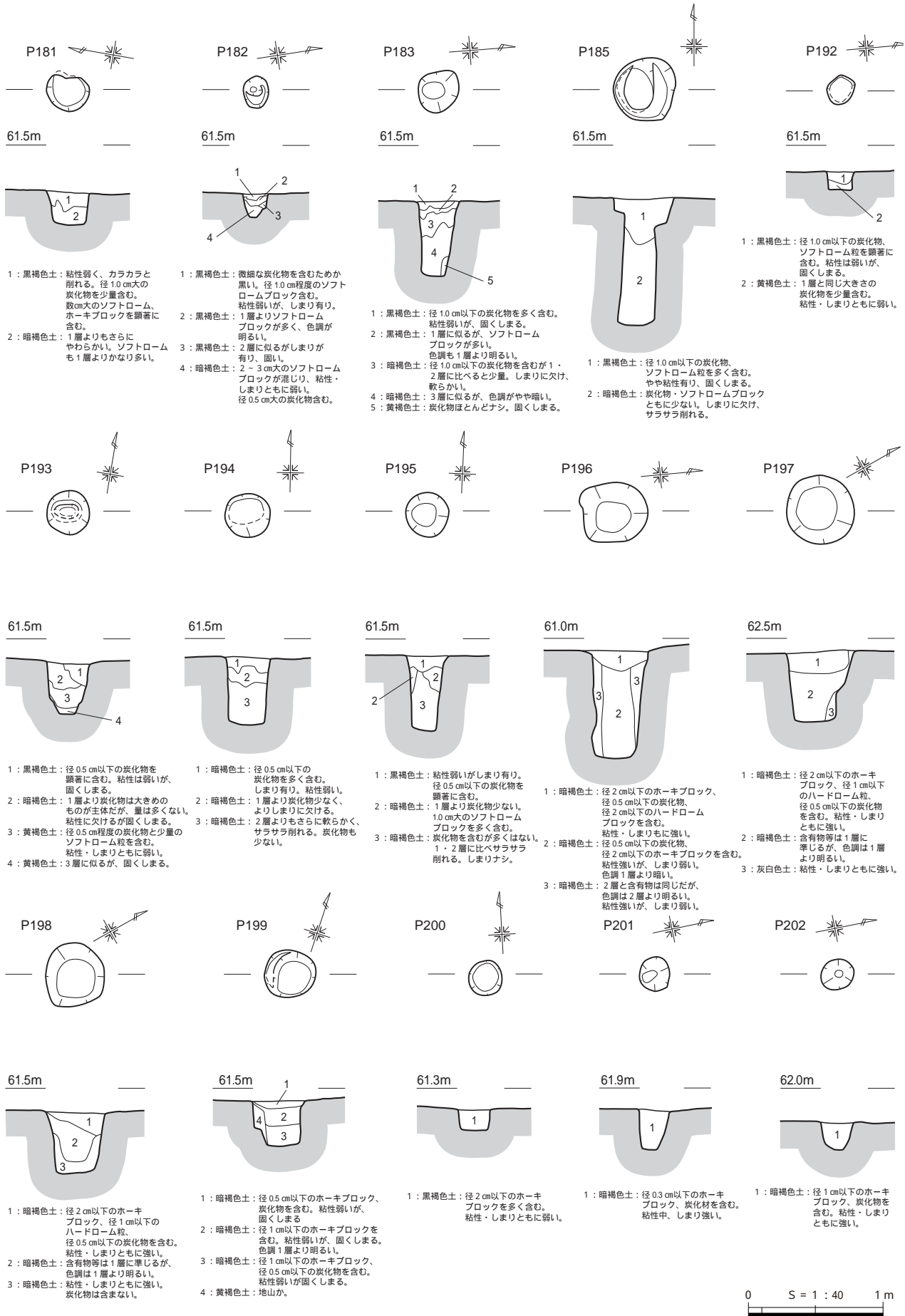
P177（第103図、表2）

調査区中央部、D6グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸34cm、短軸30cmの不整円形である。断面形は段状で、検出面から底面までの深さは40cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P178（第103図、表2）

調査区中央部、D6グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸74cm、短軸58cmの不整楕円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは92cmを測る。遺物が出土してお

第3章 調査の成果



第104図 P181 ~ 202

らず、時期は不明である。

P179（第103図、表2）

調査区中央部、D6グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸68cm、短軸45cmの不整楕円形である。断面形はテラスを持った筒状で、検出面から底面までの深さは84cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P180（第103図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸35cm、短軸28cmの不整円形である。断面形は椀状で、検出面から底面までの深さは57cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P181（第104図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸30cm、短軸28cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは22cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P182（第104図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸23cm、短軸18cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは55cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P183（第104図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸34cm、短軸30cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは22cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

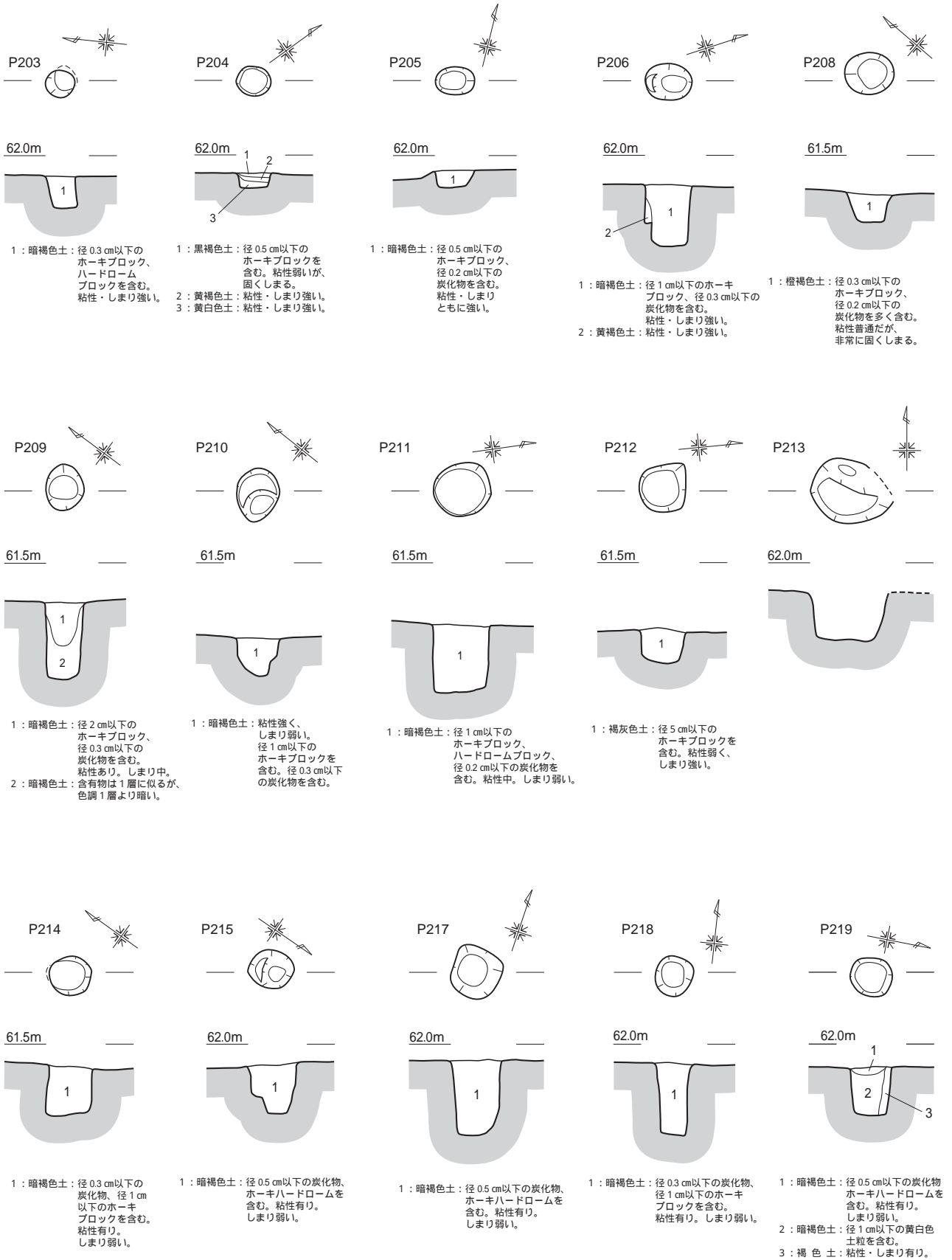
P185（第104図、表2）

調査区中央部、C6グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸46cm、短軸44cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは92cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P192（第104図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸21cm、短軸20cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは7cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第3章 調査の成果



0 S = 1 : 40 1 m

第105図 P203 ~ 219

P193 (第104図、表2)

調査区中央部、D5グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸32cm、短軸30cmの不整形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは38cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P194 (第104図、表2)

調査区中央部、D6グリッドの標高61.4mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸32cm、短軸31cmの不整形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは50cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P195 (第104図、表2)

調査区中央部、D6グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸34cm、短軸32cmの不整形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは56cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P196 (第104図、表2)

調査区中央部、D5グリッドの標高59.9mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸44cm、短軸39cmの不整形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは80cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P197 (第104図、表2)

調査区中央部、D6グリッドの標高62.4mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸51cm、短軸50cmの不整形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは52cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P198 (第104図、表2)

調査区中央部、D5グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸48cm、短軸44cmの不整形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは44cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

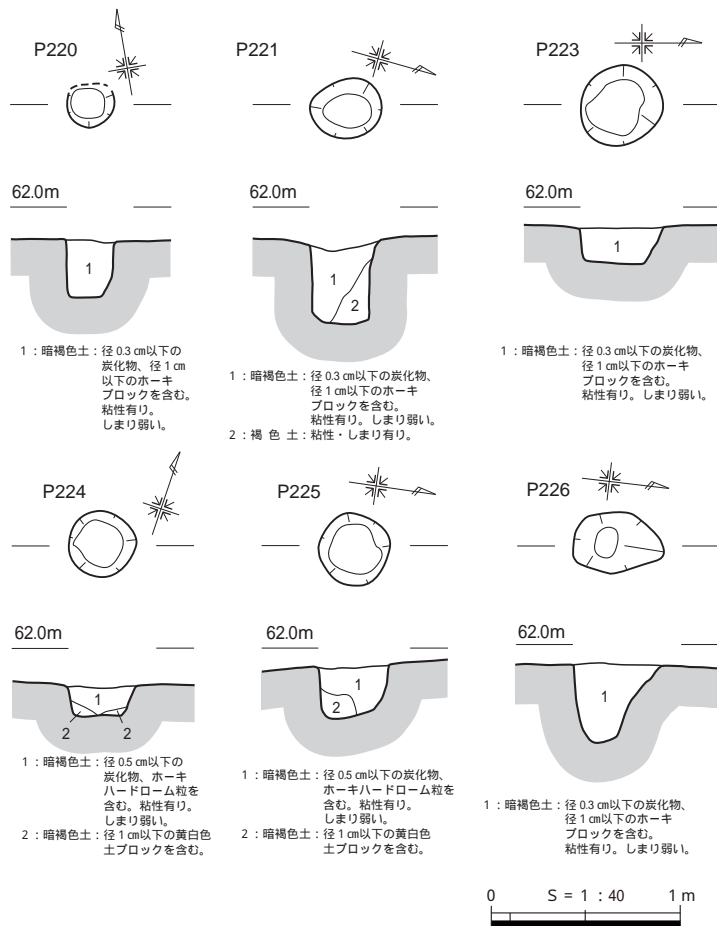
P199 (第104図、表2)

調査区中央部、E6グリッドの標高61.4mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸38cm、短軸36cmの不整形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは34cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P200 (第104図、表2)

調査区中央部、D6グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸26cm、短軸22cmの不整形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは7cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第3章 調査の成果



第106図 P220 ~ 226

P203 (第105図、表2) 調査区南寄り、F6グリッドの標高61.9mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸20cm、短軸19cmの不整形円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは21cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P204 (第105図、表2)

調査区南寄り、F6グリッドの標高61.9mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸22cm、短軸21cmの不整形円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは5cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P205 (第105図、表2)

調査区南寄り、G5グリッドの標高61.9mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸24cm、短軸20cmの不整形円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは6cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P206 (第105図、表2)

調査区南寄り、F6グリッドの標高61.8mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸32cm、短軸28cmの不整形円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは44cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

ず、時期は不明である。

P201 (第104図、表2)

調査区南寄り、F6グリッドの標高61.8mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸23cm、短軸22cmの不整形円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは30cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P202 (第104図、表2)

調査区南寄り、F5グリッドの標高61.8mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸23cm、短軸22cmの不整形円形である。断面形は椀状で、検出面から底面までの深さは19cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P203 (第105図、表2)

調査区南寄り、F6グリッドの標高

P208（第105図、表2）

調査区中央部、D6グリッドの標高61.3mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸34cm、短軸28cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは20cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P209（第105図、表2）

調査区中央部、D6グリッドの標高61.2mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸32cm、短軸28cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは45cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P210（第105図、表2）

調査区中央部、D6グリッドの標高61.0mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸38cm、短軸30cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは28cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P211（第105図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.1mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸41cm、短軸38cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは38cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P212（第105図、表2）

調査区中央部、D5グリッドの標高61.0mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸34cm、短軸31cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは24cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P213（第105図、表2）

調査区南寄り、G6グリッドの標高61.8mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸60cm、短軸46cmの不整楕円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは34cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P214（第105図、表2、PL.39）

南東拡張区、G5グリッドの標高61.4mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸30cm、短軸28cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは34cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P215（第105図、表2、PL.39）

南東拡張区、G5グリッドの標高61.8mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸34cm、短軸28cmの不整楕円形である。断面形は段状で、検出面から底面までの深さは36cmを測る。遺物が出土しておら

ず、時期は不明である。

P217 (第105図、表2、PL.39)

南東拡張区、G5グリッドの標高61.9mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸38cm、短軸40cmの不整楕円形である。断面形は段状で、検出面から底面までの深さは52cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P218 (第105図、表2、PL.40)

南東拡張区、G5グリッドの標高61.9mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸28cm、短軸26cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは51cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P219 (第105図、表2、PL.40)

南東拡張区、G5グリッドの標高61.8mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸28cm、短軸27cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは36cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P220 (第106図、表2、PL.40)

南東拡張区、G5グリッドの標高61.8mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸27cm、短軸23cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは29cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P221 (第106図、表2、PL.40)

南東拡張区、G5グリッドの標高61.8mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸38cm、短軸32cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは40cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P223 (第106図、表2、PL.40)

調査区南より、G5グリッドの標高61.9mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸44cm、短軸42cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは18cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P224 (第106図、表2、PL.40)

調査区南寄り、G5グリッドの標高61.8mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸36cm、短軸35cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは14cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P225 (第106図、表2、PL.40)

調査区南寄り、G5グリッドの標高61.9mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸38cm、短軸36cmの不整円形である。断面形は桶状で、検出面から底面までの深さは26cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P226 (第106図、表2、PL.41)

調査区南寄り、G5グリッドの標高61.9mの尾根部平坦面に立地する。平面形は長軸48cm、短軸32cmの不整楕円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは42cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

表2 ピット計測表(1)

調査区		長軸×短軸 深さ(m)	調査区		長軸×短軸 深さ(m)	調査区		長軸×短軸 深さ(m)
1区	P 142	0.30×0.24 - 0.32	3区	P 167	0.28×0.24 - 0.05	3区	P 199	0.38×0.36 - 0.34
	P 143	0.35×0.33 - 0.31		P 168	0.36×0.20 - 0.31		P 200	0.26×0.22 - 0.07
	P 144	0.38×0.36 - 0.28		P 169	0.34×0.33 - 0.07		P 201	0.23×0.22 - 0.30
	P 145	0.73×0.70 - 0.22		P 170	0.54×0.24 - 0.24		P 202	0.23×0.22 - 0.19
	P 146	0.62×0.54 - 0.29		P 171	0.38×0.29 - 0.68		P 203	0.20×0.19 - 0.21
	P 147	0.38×0.38 - 0.38		P 172	0.36×0.30 - 0.53		P 204	0.22×0.21 - 0.05
	P 148	0.22×0.20 - 0.18		P 173	0.44×0.28 - 0.46		P 205	0.24×0.20 - 0.06
	P 149	0.22×0.19 - 0.28		P 174	0.34×0.31 - 0.41		P 206	0.32×0.28 - 0.44
	P 150	0.65×0.62 - 0.34		P 175	0.46×0.34 - 0.41		P 208	0.34×0.28 - 0.20
	P 151	0.86×0.65 - 0.09		P 176	0.31×0.23 - 0.15		P 209	0.32×0.28 - 0.45
	P 152	0.85×0.82 - 0.18		P 177	0.34×0.30 - 0.40		P 210	0.38×0.30 - 0.28
	P 153	0.54×0.42 - 0.50		P 178	0.74×0.58 - 0.92		P 211	0.41×0.38 - 0.38
	P 154	0.45×0.44 - 0.24		P 179	0.68×0.45 - 0.84		P 212	0.34×0.31 - 0.24
	P 155	0.88×0.83 - 0.31		P 180	0.35×0.28 - 0.57		P 213	0.60×0.46 - 0.34
	P 156	0.78×0.64 - 0.24		P 181	0.30×0.28 - 0.22		P 214	0.30×0.28 - 0.34
	P 157	0.71×0.70 - 0.28		P 182	0.23×0.18 - 0.22		P 215	0.34×0.28 - 0.36
	P 158	0.61×0.42 - 0.55		P 183	0.34×0.30 - 0.55		P 217	0.38×0.40 - 0.52
	2区	P 159		0.65×0.63 - 0.51	P 185		0.46×0.44 - 0.92	P 218
P 160		0.57×0.50 - 0.42	P 192	0.21×0.20 - 0.07	P 219	0.28×0.27 - 0.36		
P 161		0.39×0.34 - 0.46	P 193	0.32×0.30 - 0.38	P 220	0.27×0.23 - 0.29		
P 162		0.34×0.28 - 0.29	P 194	0.32×0.31 - 0.50	P 221	0.38×0.32 - 0.40		
P 163		0.32×0.29 - 0.34	P 195	0.34×0.32 - 0.56	P 223	0.44×0.42 - 0.18		
P 164		0.38×0.37 - 0.17	P 196	0.44×0.39 - 0.80	P 224	0.36×0.35 - 0.14		
P 165		0.26×0.24 - 0.25	P 197	0.51×0.50 - 0.52	P 225	0.38×0.36 - 0.26		
P 166		0.33×0.32 - 0.22	P 198	0.48×0.44 - 0.44	P 226	0.48×0.32 - 0.42		

表3 ビット計測表(2)

調査区	遺構	ビット番号	長軸×短軸 深さ (m)	調査区	遺構	ビット番号	長軸×短軸 深さ (m)	調査区	遺構	ビット番号	長軸×短軸 深さ (m)
2区	SS1	1	0.45×0.35 - 0.30	1区	SS8	4	0.60×0.55 - 0.40	3区	SI3・4	1	0.45×0.40 - 0.28
		2	0.66×0.54 - 0.18			5	0.46×0.43 - 0.52			2	0.35×0.28 - 0.50
		3	0.30×0.25 - 0.38			6	0.60×0.36 - 0.35			3	0.40×0.27 - 0.35
	SS2	1	0.48×0.40 - 0.40			7	0.28×0.18 - 0.27			4	0.45×0.40 - 0.70
		2	0.40×0.32 - 0.30			8	0.50×0.32 - 0.10			5	1.05×0.90 - 0.40
	SS4	1	0.40×0.30 - 0.45			9	0.50×0.14 - 0.15		SI7	1	0.43×0.38 - 0.51
		2	0.85×0.75 - 0.20			10	0.30×0.28 - 0.24			2	0.40×0.38 - 0.39
	SS5	1	0.40×0.40 - 0.65			11	0.40×0.36 - 0.10			3	0.37×0.34 - 0.42
		2	0.28×0.25 - 0.13			12	0.50×0.22 - 0.20		SI9	2	0.50×0.49 - 0.53
		3	0.38×0.36 - 0.10			1	0.72×0.72 - 0.27			3	0.58×0.47 - 0.45
		4	0.60×0.53 - 0.30			2	0.66×0.57 - 0.27			5	0.72×0.58 - 0.62
	SS6	1	0.45×0.42 - 0.37	SB12	3	0.66×0.54 - 0.39	SI13	1	0.38×0.35 - 0.28		
		2	0.40×0.37 - 0.30		4	0.60×0.57 - 0.36		2	0.32×0.30 - 0.41		
		3	0.58×0.55 - 0.62		5	0.75×0.75 - 0.41		3	0.54×0.50 - 0.97		
		4	0.55×0.50 - 0.40		6	0.72×0.69 - 0.54	SI14	1	0.49×0.48 - 0.58		
		5	0.42×0.40 - 0.45		7	0.75×0.72 - 0.68	SI15 ~ 17	1	0.27×0.25 - 0.29		
		6	0.38×0.30 - 0.42		8	0.72×0.66 - 0.36		2	0.45×0.40 - 0.41		
		7	0.39×0.34 - 0.33		1	0.42×0.39 - 0.21		3	0.27×0.26 - 0.55		
		SS7	1	0.17×0.16 - 0.05	SB13	2	0.48×0.42 - 0.36	SB14	1	0.56×0.43 - 0.48	
				0.41×0.41 - 0.25		3	0.45×0.36 - 0.21		2	0.51×0.50 - 0.30	
				0.33×0.28 - 0.42		4	0.48×0.45 - 0.54		3	0.45×0.45 - 0.33	
0.38×0.35 - 0.33				5		0.33×0.30 - 0.39	SB15	1	0.38×0.25 - 0.33		
0.40×0.30 - 0.30	6	0.45×0.45 - 0.42	2	0.30×0.25 - 0.33							
SS8	1	0.40×0.34 - 0.45	3区	SI2		1	0.42×0.40 - 0.60	3	0.48×0.29 - 0.24		
		0.36×0.34 - 0.45			2	0.48×0.43 - 0.57					
		0.60×0.35 - 0.50			3	0.75×0.69 - 0.67					

第4節 鍛冶関連遺物の考古学的観察

(1) 遺物の整理方法

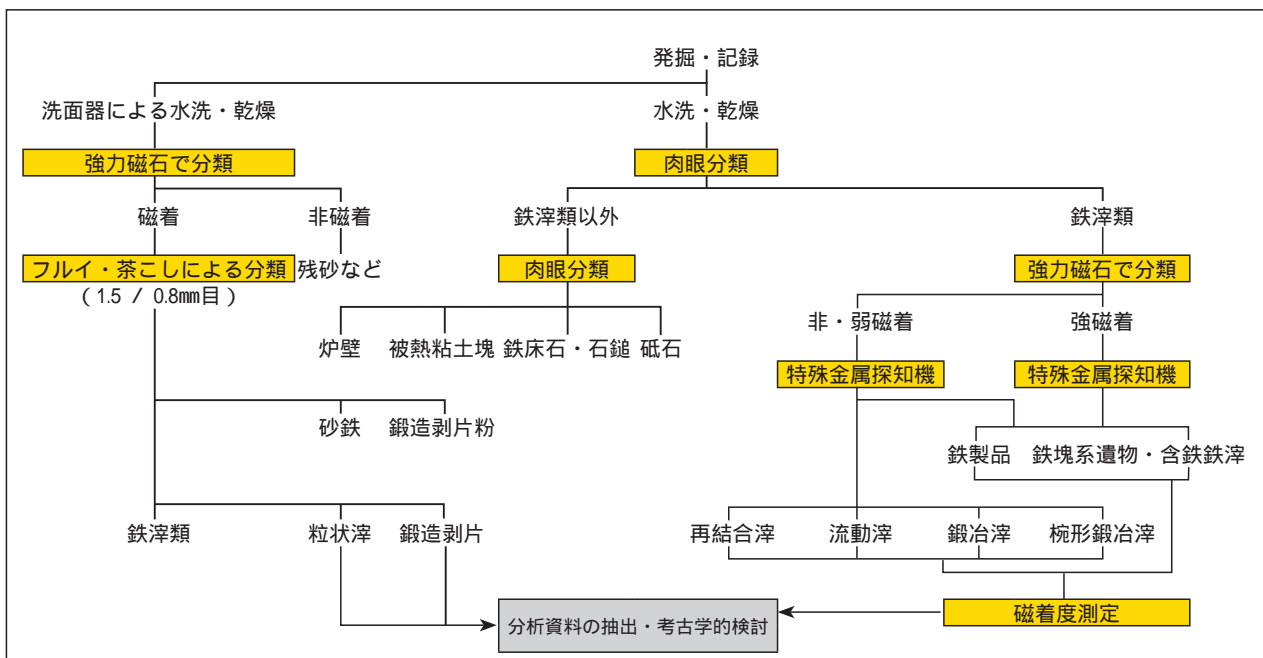
笹津乳母ヶ谷第2遺跡からは、約2.5kgの鍛冶関連遺物が出土している。その内訳は、鉄製品、鍛冶滓、粘土質溶解物、羽口、鉄床石、被熱石、砥石、そのほか粒状滓・鍛造剥片などから構成される。このなかから、情報量の多いものを報告書掲載遺物として48点抽出・構成し、同時に金属学的分析資料点を選定した。現地で鍛冶関連遺物と判断されたものについて原位置の記録に努め、取り上げを行っている。微細遺物は、鍛冶作業の規模や作業空間の復元を行うために鍛冶工房域を中心として遺構内・外の土壌サンプリングを実施し回収した。遺構の主体を占めるピットや鍛冶炉は埋土を一括回収し、鍛冶炉周辺は25cmメッシュ単位で土壌サンプリングを行った。回収した土壌は、調査事務所に持ち帰り、水洗・乾燥後、1.5mm目、0.8mm目のフルイで選別し、強力磁石と特殊金属探知機によって含鉄の遺物を抽出し、肉眼による分類作業を進めた(註1)。

(2) 調査の手順

鍛冶関連遺物については、遺構の機能や工程を的確に把握するため、強力磁石(TAJIMA PUP-M)と小型特殊金属探知機(KDS METAL CHECKER MR-50)による抽出及び肉眼観察による考古学的な分類と構成を行った。この中から、各遺構の機能や工程を代表すると思われる資料を金属学的分析が必要なものとして選定し、遺物の詳細観察表と実測図の作成、写真撮影を行った。資料の抽出、詳細観察表の作成は穴澤義功氏に依頼し、併せて分析資料の切断箇所についても指示をいただいた。

(3) 遺物観察表の見方

遺物観察表は、島根県板屋遺跡(註2)、鳥取県中道東山西山遺跡(註3)における製鉄・鍛冶関連遺物の検討で採用された様式を基本とし、分析項目などを加えた様式を用いている。主な分析項目の見方は以下のとおりである。



第107図 鍛冶関連遺物分類模式図

- 遺物種類 金属学的分析を行う前に、考古学的な観察によって判定した遺物の種類である。
- 法 量 各遺物の長さ・幅・厚さ（各単位mm）・重量（単位g）を計測したものである（註4）
- 磁 着 度 製鉄関連遺物分類用の「標準磁石」（TOKINフェライト磁石SR-3 寸法30×17×5mm）を用いて、6mmを1単位として資料の反応の程度を数字で表現したものである。
- 遺 存 度 資料が完形か破片かを記す。
- 破 面 数 資料が破片の場合、破面がいくつあるかを記す。
- メタル度 埋蔵文化財専用に整準された小型特殊金属探知機によって判定された金属鉄の残留の程度を示すもので、基準感度は次のとおりである。なお、対象物中に、かつて金属鉄が内包されていた資料で錆化してしまったものは、錆化（ ）と表示する。
- H（ ）：Hは最高感度で、ごく小さな金属鉄（1～2.5mm）が残留することを示す。
- M（ ）：Mは最高感度で、Hの倍以上の金属鉄（4～5mm）が残留することを示す。
- L（ ）：Lは低感度で、Mの倍以上の金属鉄（10～12mm）が残留することを示す。
- 特L（ ）：特Lは低感度でLの倍以上の大きな金属鉄（20mm以上）が残留することを示す。
- 分 析 どの分析をどの部分について行うかを 印で示す。
- 所 見 外形や破面・断面の状況、木炭痕や気孔の有無、および付着物やその他の状況について記す。
- 分析部位 資料のどのような部分をどのような目的で、調査・分析するか記す。なお、観察表下の実測図の網掛け部分は、分析に供した資料の採取位置を示す。
- 備 考 資料がどのような場所で、どのように生成されたと予想されるかなどについて記している。

（4）鍛冶関連遺物の概要

笹津乳母ヶ谷第2遺跡からは、約2.5kgの鍛冶関連遺物が出土している。その内訳は、鉄製品、鍛冶滓、粘土質溶解物、羽口、鉄床石、被熱石、砥石、そのほか粒状滓、鍛造剥片から構成される。この中から、情報量の多いものを報告書掲載遺物として48点抽出・構成し、同時に金属学的分析資料を9点選定した（第108図、表4～14）。以下の、構成資料について概要を記す。

・ はSS4から出土している。 は平面六角形で、断面が扁平なメタル度H（ ）の鍛冶滓である。

は幅1.2cmほどのヘラ状鉄製品で、錆化（ ）している。 ～ はSS6出土鍛冶関連遺物である。

は平面形が不定形で、左右側部に小さな破面を持つ含鉄の椀形鍛冶滓であり、メタル度はH（ ）である。 は下面に灰色の炉床土が付着した極小の椀形鍛冶滓であり、上手側部が破面となる。 は粉炭を含む酸化土砂に覆われた含鉄の椀形鍛冶滓である。表面の酸化土砂中には鍛造剥片が付着しており、錆化（ ）している。 は表面全体に木炭痕が点在した極小の鍛冶滓であり、破面は認められない。 は厚さ5.5mm不整の方形を呈した棒状鉄製品であり、器種は不明である。

～ はSS7出土鍛冶関連遺物で鉄製品、鍛冶滓や鉄床石、羽口などの鍛冶具がバランスよく出土している。 は下面に炉床土が付着した極小の椀形鍛冶滓であり、破面は3箇所確認される。分析資料1として抽出した。

・ は極小の椀形鍛冶滓であり、含鉄部は上面寄りの中核部に位置している。 は含鉄の椀形鍛冶滓であり、下面に灰色の炉床土が点々と固着している。分析資料2である。 は長さ約4cm、幅2

cmの頭部が外側に広がった小型の鑿である。メタル度はL()であり、分析資料3として抽出した。

は袋状鉄斧で、左側部は袋部の外面が平滑な弧状の面として仕上げられている。メタル度は特L()で、分析を試みている(分析資料4)。はメタル度L()で、断面が方形を呈し、足部が欠損した鋸である。は上面に通風孔部の壁面を残す鍛冶羽口の先端部小破片であり、左側部上半が滓化している。は鍛造剥片が付着した薄板状の鉄床石破片である。は砂岩製の砥石であり、砥面は1面を数える。～は鍛冶炉内から出土した資料であり、その多くが土壌の水洗によって回収されている。は上下面に木炭痕を残す、流動状の鍛冶滓で左側部が破面となっている。・は土壌から回収された粒状滓・鍛造剥片であり、前者を3点、後者を2点、それぞれ分析に供している(分析資料5・6)。は厚さ4mmほどの方形断面の棒状鉄製品であり、鋸か釘の可能性がある。・は鍛冶炉直上から出土した羽口である。通風孔部の直径は3cm、基部側はやや膨らむが直孔である。先端部から肩部にかけて滓化している。は長さ2.1cm、幅2.9cmの被熱した砂岩製の砥石であり、上面に斜め方向の砥痕が見られる。

～姪はSS8出土鍛冶関連遺物である。は羽口の顎部周辺で生成された可能性が高い粘土質溶解物である。は含鉄の椀形鍛冶滓であり、左右側部と下面中央部が破面となっている。～は被熱粘土塊であり、いずれも強い被熱部分が残し、は滓が付していることなどから炉壁の可能性を指摘できる。姪・姪は表面が被熱した薄板状の鉄床石破片であり、後者は鍛造剥片が固着する。

娼～婆は弥生時代後期後葉に位置づけられるSI2出土鉄製品である。娼は長さ2.2cm、幅0.5cmを測る棒状製品である。嬰は長さ4.4cm、厚さ1.5cmほどの板状鉄製品、嬖は左右方向に反り返ったヘラ状鉄製品である。婆は厚さ3.5mmほどで、基部側に袋部を持つ袋状鉄斧である。東伯地域で同様な形状を有する袋状鉄斧は、笠見第3遺跡D区SI2、中道東山西山遺跡SI8、蝮谷遺跡で確認できる。

姦～婁・嬖～娼は遺構外出土鍛冶関連遺物である。姦・嬖は椀形鍛冶滓であり、いずれも滓質は緻密であり、メタル度は無い。婁・嬖は粘土質溶解物である。婁は半流動状の表面であり、裏面は結晶が発達している。嬖は上半部が、さまざまな色調を持つ粘土質溶解物主体であり、下半は灰色に被熱した炉床土が残存している。娼・娼は厚さ4.7～5.2mmの方形断面を持つ釘と推定される鉄製品である。婁は薄板状鉄製品であり、弥生時代に帰属する可能性がある。娼はU字状鋤先であり、土器溜り1出土である。嬖は厚さ5mmほどの鑄造品破片である。娼は薄板状に剥離した鉄床石破片であり、鍛造剥片が付着している。

以上、遺構内・遺構外出土鍛冶関連遺物を概観した。この中で、弥生時代に帰属する鉄製品を除くと、鍛冶作業に伴う道具類は羽口3点、鉄床石破片4点、砥石2点で総重量577.4gが出土している。次に、遺物の主体を占める鉄滓類の組成であるが、個体数で見ると椀形鍛冶滓10点、鍛冶滓4点、炉壁5点、粘土質溶解物3点、粒状滓・鍛造剥片49.3gである。鉄製品の内訳は、工具の釘が3点、鑿1点、袋状鉄斧1点、鋸1点、農具のU字状鋤先1点となり工具類が主体であり、鍛冶素材の少なさから操業内容が村方鍛冶程度であったことがわかる。

註1) 穴澤 義功 2001 「製鉄遺跡発掘調査の視点と方法 - 製鉄遺跡の本質に迫るために - 」『平成12年度奈良国立文化財研究所・発掘技術者専門研修「生産遺跡調査課程」資料』奈良国立文化財研究所

註2) 角田 徳幸 1998 『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5 板屋 遺跡』島根県教育委員会

註3) 高尾 浩司・小口 英一郎 2005 『一般国道9号(東伯中山道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中道東山西山遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団

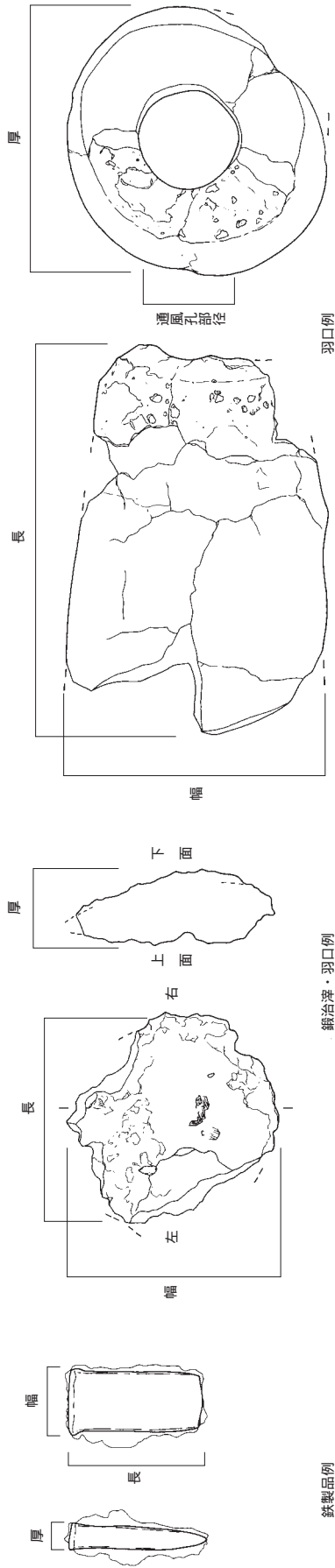
註4) 小林 信一 1991 「製鉄遺跡の発掘調査と整理について」『研究連絡誌』32 財団法人千葉県文化財センター

表4 笹津乳母ヶ谷第2遺跡 鍛冶関連遺物一覽表

構成No	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線	取上
				長さ	幅	厚さ						
	鍛冶滓(含鉄)	1区	SS4	3.2	3.1	1.7	19.8	2	H()			225
	鉄製品(鍛造品)へら状不明品	1区	SS4	2.5	1.4	0.4	3.6	3	錆化()			261
	梲形鍛冶滓(小・含鉄)	1区	SS6	6.5	8.6	2.9	156.0	3	H()			760
	梲形鍛冶滓(極小)	1区	SS6	4.4	3.9	2.3	35.2	3	なし			618
	梲形鍛冶滓(極小・含鉄)	1区	SS6	4.2	3.6	2.2	36.8	4	錆化()			760
	鍛冶滓	1区	SS6	1.6	2.1	1.0	3.7	1	なし			681
	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	1区	SS6	4.6	0.7	0.7	6.5	3	錆化()			679
	梲形鍛冶滓(極小・炉床土付き)	1区	SS7	6.4	6.4	2.3	81.5	2	錆化()	分析資料1。表6参照。		891
	梲形鍛冶滓(極小)	1区	SS7	1.8	1.9	1.1	4.7	1	なし			838
	梲形鍛冶滓(極小)	1区	SS7	2.5	2.1	1.7	12.8	2	なし			839
	梲形鍛冶滓(極小・含鉄)	1区	SS7	4.0	5.0	2.6	41.2	2	錆化()	分析資料2。表7参照。		970
	鉄製品(鍛造品)蓋	1区	SS7	4.1	2.0	0.8	21.4	4	L()	分析資料3。表8参照。		839
	鉄製品(鍛造品)袋状鉄斧	1区	SS7	7.7	4.3	2.3	160.0	4	特L()	分析資料4。表9参照。		942
	鉄製品(鍛造品)鋸状不明品	1区	SS7	9.0	4.8	1.2	82.0	3	L()			890
	羽口(鍛冶)	1区	SS7	2.3	3.3	2.0	8.3	2	なし			1002
	鉄床石(鍛冶剥片付き)	1区	SS7	3.4	2.3	0.8	7.4	1	なし			586
	砥石	1区	SS7	8.5	9.95	6.5	400.0	1	なし			839
	鍛冶滓	1区	SS7	3.2	4.1	1.3	17.6	2	なし			1175
	粒状滓(3点)	1区	SS7						なし	分析資料5。表10参照。		1115
	鍛冶剥片(2点)	1区	SS7						なし	分析資料6。表11参照。		1054
	鉄製品(鍛造品)鋸又は釘	1区	SS7	3.5	0.5	0.3	1.6	2	錆化()			1109
	羽口(鍛冶)	1区	SS7	4.3	6.8	2.3	79.0	2	なし			1110
	羽口(鍛冶)	1区	SS7	11.8	7.8	2.7	366.0	2	なし			1108
	砥石	1区	SS7	4.1	2.9	2.1	21.6	1	なし			1111
	粘土質溶解物	1区	SS8	2.1	3.4	2.1	8.7	2	なし			1031
	梲形鍛冶滓(極小・含鉄)	1区	SS8	5.5	4.0	2.7	54.0	2	錆化()			998
	被熱粘土塊(炉壁・鍛冶炉?)	1区	SS8	4.2	3.2	2.0	14.8	1	なし			1582
	被熱粘土塊(炉壁・鍛冶炉?)	1区	SS8	3.6	3.4	2.3	13.8	1	なし			1631
	被熱粘土塊(炉壁・鍛冶炉?)	1区	SS8	4.4	3.9	2.8	29.2	1	なし			1636
	被熱粘土塊(炉壁・鍛冶炉?)	1区	SS8	5.9	4.6	3.1	46.4	1	なし			1770
	被熱粘土塊(炉壁・鍛冶炉?)	1区	SS8	4.8	6.5	2.7	51.5	1	なし			290
	鉄床石(被熱)	1区	SS8	6.7	4.6	1.2	18.0	1	なし			1005
	鉄床石(鍛冶剥片付き)	1区	SS8	7.0	6.2	2.7	112.0	1	なし			1140
	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	3区	SI 2	2.2	0.5	0.3	1.5	3	錆化()			1195
	鉄製品(鍛造品)薄板状不明品	3区	SI 2	4.4	1.2	1.5	7.6	3	錆化()			587
	鉄製品(鍛造品)へら状不明品	3区	SI 2	4.5	1.2	0.2	6.8	2	錆化()			167
	鉄製品(鍛造品)袋状鉄斧	3区	SI 2	5.35	3.1	1.2	52.5	3	錆化()			287
	梲形鍛冶滓(小)	1区	C2グリッド	4.4	5.4	4.3	87.0	2	なし			293
	梲形鍛冶滓(極小)	1区	C2グリッド	3.6	2.4	1.6	13.8	1	なし			569
	鍛冶滓	1区	C3グリッド	1.3	1.9	1.2	5.0	1	なし			169
	粘土質溶解物	1区	E0グリッド	2.2	2.0	0.7	2.9	1	なし			588
	粘土質溶解物	1区	E0グリッド	3.6	4.9	4.1	40.8	1	なし			1175
	鉄製品(鍛造品)釘?	1区	C2グリッド	3.3	0.4	0.3	5.2	2	錆化()			1115
	鉄製品(鍛造品)釘?	1区	C2グリッド	2.6	0.7	0.5	4.7	2	錆化()			1110
	鉄製品(鍛造品)U字状鋸先	1区	C2グリッド	2.1	0.9	0.3	4.7	3	錆化()			1106
	鉄製品(鍛造品)袋状鉄斧?	1区	土器溜り1	11.4	4.8	0.5	140.0	3	錆化()			1111
	鉄製品(鍛造品)袋状鉄斧?	1区	D2グリッド	3.1	2.8	0.5	12.2	3	錆化()			1031
	鉄床石(鍛冶剥片付き)	1区	E1グリッド	5.3	3.3	1.1	18.4	1	なし			998

表5 笹津乳母ヶ谷第2遺跡 鍛冶関連遺物分析資料一覧表

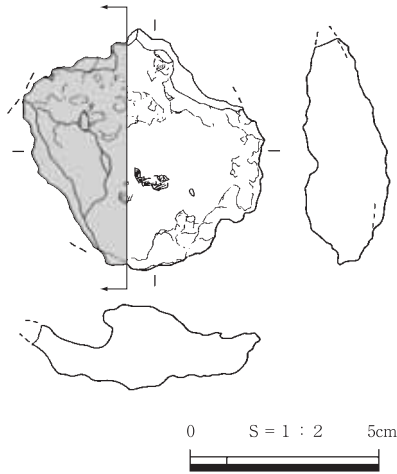
分析資料番号	地区名	遺構名	構成番号	遺物種類	重量(g)	磁着度	メタル度	分析コメント	マクロ	検鏡	硬度	EPMA	X線回折	化学分析	耐火度	カロリ	放射化分析	断面樹脂	分析位置指定	採取方法	観察	集合写真	モノクロ	カラー	実測図	前名優	X線透過	取上
1	1区	SS7埋土中		楕形鍛冶滓(極小・炉床土付)	81.5	2	なし	滓部を											長軸端部2/5	直線状の切断							891	
2	1区	SS7埋土中		楕形鍛冶滓(極小・含鉄)	41.2	2	錆化()	滓部を中心に											短軸端部3/5	直線状の切断							970	
3	1区	SS7埋土中		鉄製品(鍛造品・鑿)	21.4	4	L()	メタル部を中心に											長軸端部角1/2	L字状の切断							839	
4	1区	SS7埋土中		鉄製品(鍛造品・袋状鉄斧)	1600	4	特L()	メタル部を中心に											長軸端部角1/3	L字状の切断							942	
5-1	1区	SS7鍛冶炉		粒状滓			なし	粒状滓として											必要品	選択							土壌サ	
5-2	1区	SS7鍛冶炉		粒状滓			なし	粒状滓として											必要品	選択							土壌サ	
5-3	1区	SS7鍛冶炉		粒状滓			なし	粒状滓として											必要品	選択							土壌サ	
6-1	1区	SS7鍛冶炉		鍛造剥片			なし	鍛造剥片として											必要品	選択							土壌サ	
6-2	1区	SS7鍛冶炉		鍛造剥片			なし	鍛造剥片として											必要品	選択							土壌サ	
分析項目別点数										7	9	4	2	0	4	0	0	0	2									



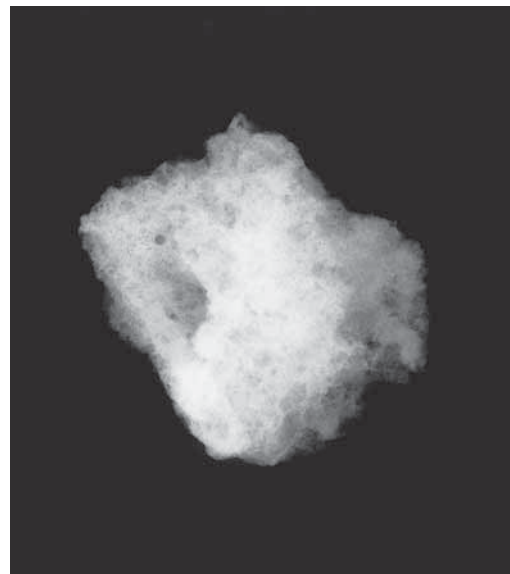
第109図 鍛冶関連遺物計測位置凡例図

製鉄・鍛冶関連遺物の計測値は、炉壁・鉄滓・粘土質溶融物の場合、正位置の図の左右を長さ、上下を幅、横方向に展開したときの左右(縦方向に展開したときの上下)を長さとし、鉄製品については鑄部分を綫いた長軸長を長さ、短軸長を幅としている。なお、本文・観察表の記述における遺物の各面の呼び名は左の凡例図のとおりである。

出土状況	遺跡名	鎗津乳母ヶ谷第2遺跡			遺物No	㊸ (取上No.891)			項目	滓	メタル		
	出土位置	SS7 埋土中			時期：根拠	7世紀後半～8世紀	:	出土土器					
試料記号	検鏡：	NOT2-1	法	長径	64.0 mm	色調	表：茶褐色～黒褐色・灰白色	遺存度	破片	分	マクロ		
	化学：	NOT2-1		短径	64.0 mm		地：黒褐色・灰白色	破面数			3	検鏡	
	放射化：	—		厚さ	23.0 mm		磁着度	2			前含浸	—	硬度
遺物種類(名称)	楕形鍛冶滓(極小) 炉床土付き			重量	81.5 g	メタル度	なし	断面樹脂	—	析	EPMA		
観察所見	<p>平面、不整五角形をした極小の楕形鍛冶滓。扁平で下面には灰白色の鍛冶炉の炉床土が面的に貼り付いている。上面は生きており、左側部と上手側肩部の二ヶ所に破面が残る。破面数は3を数える。上面は中央部が小高くなっており、側部側に向かいなだらかに傾斜する。右側部の末端部は、炉床土が上方に立ち上がるため、滓部もそれに沿っている。上面左側端部には、径1.5cmほどの窪みが残されている。表面に微細な木炭痕があることから、工具痕とは考えられない。滓質は中層の密度が高く、炉床土沿いや表皮沿いの気孔や木炭痕により密度が低目となる。上面表皮にうっすらと貼り付く酸化土砂中には、黒色や青光りする鍛造剥片が数ヶ所確認される。炉床土は粘土質で、わずかにスサの混和が認められ、練りは甘い。色調は上面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は黒褐色。炉床土は灰白色となる。地は滓部が黒褐色で、炉床土が灰白色。</p>												
分析部分	長軸端部 2 / 5 を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。下面の炉床土の混入に注意。残材返却。												
備考	鍛冶炉の炉床中央部の底面に貼り付くように形成された薄手の楕形鍛冶滓。左側部寄りの窪みは、他の木炭痕に比べて大きく、その位置や角度から見て鍛冶羽口の通風孔部を通じた工具痕の可能性を残す。												



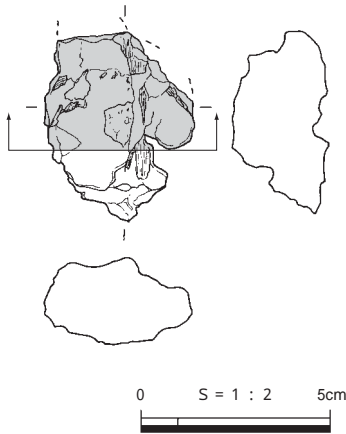
分析資料 1 分析位置図



分析資料 1 X線写真

表7 分析資料 2

出土状況	遺跡名		笹津乳母ヶ谷第2遺跡			遺物No		(取上No.970)			項目	滓	メタル		
	出土位置		SS7 埋土中			時期：根拠		7世紀後半～8世紀							
試料記号	検鏡：	NOT2-2	法 量	長径	40.0 mm	色調	表：茶褐色～黒褐色	遺存度	ほぼ完形		分 析	マクロ			
	化学：	NOT2-2		短径	50.0 mm		地：濃茶褐色～黒褐色	破面数	2			硬度			
	放射化：	—		厚さ	26.0 mm	磁着度	2		前含浸	—		EPMA			
	遺物種類(名称)	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)		重量	41.2 g	メタル度	錆化()		断面樹脂	—		X線回折			
観察所見	<p>右側部を中心に凹凸のある不規則な形状をした極小の椀形鍛冶滓。上手側の側部に二ヶ所の小破面を持つが、それ以外は不定形ながらも滓表面を残している。左側部はきれいな弧状をした滓部で、下面は緩やかな皿状となり、わずかに灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が点状に固着する。上面は木炭痕が残る平坦面で、小範囲が残っている。右側部は1.2cm大以下の木炭痕が中層部分に介在するためか、形が乱れている。滓表面は二次的な酸化色で、木炭組織に由来する酸化物にびっしりと覆われている。滓質は外周部を中心に気孔が多く、比較的密度が低い。磁着はわずかにあるものの、特に強い部分はない。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は黒褐色。地は濃茶褐色から黒褐色となる。</p>														
分析部分	<p>長軸端部3 / 5を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材返却。</p>														
備考	<p>滓量の少ない鍛錬鍛冶段階の椀形鍛冶滓と考えられる。形状的には椀形鍛冶滓の成りかかりといえるが、鍛冶炉の炉床に下面が接しており、基本的には分析資料1とほぼ同様の生成条件を示す。</p>														



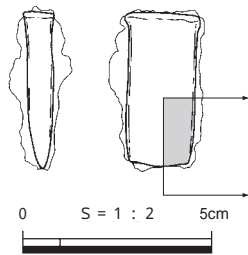
分析資料 2 分析位置図



分析資料 2 X線写真

表8 分析資料 3

出土状況	遺跡名		笹津乳母ヶ谷第2遺跡		遺物No		(取上No.839)			項目	滓	メタル
	出土位置		SS7 埋土中		時期：根拠		7世紀後半～8世紀					
試料記号	検鏡：	NOT2-3	法 量	長径	41.0 mm	色 調	表：茶褐色～濃茶褐色	遺存度	完形	分 析	マクロ	
	化学：	NOT2-3		短径	20.0 mm		裏：濃茶褐色～黒褐色	破面数	0		硬度	
	放射化：	—		厚さ	8.0 mm	磁着度	4	前含浸			EPMA	
	遺物種類(名称)	鉄製品(鍛造品・鑿)		重量	21.4 g	メタル度	L()	断面樹脂			X線回折	
観察所見	<p>頭部が1～2cmほど外側に拡がった小型の鑿。幅は約2cm、厚みは0.7cm前後を測る。長さは約4cm。下手側は片刃状で端部が薄くなっている。頭部側から見た平面形が、やや弧状になっているようにも見えるが、錆膨れと酸化土砂の影響かと推定される。一見、全体形状が楔状となる。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、表は濃茶褐色。地は濃茶褐色から黒褐色を示す。メタル度がL()で、色調が濃茶褐色から黒褐色となるのは黒錆の影響による可能性がある。</p>											
分析部分	<p>長軸端部角1/2をL字状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。</p>											
備 考	<p>頭部がわずかに拡がっており、使用痕跡と推定される。ただし、拡がりは若干で濃れてはいない。右側面の平坦面に斜め方向の放射割れが入り始めており、それに対応するかのようには頭部が斜めの錆膨れとなっている。右側部の放射割れは打撃の影響かもしれない。</p>											



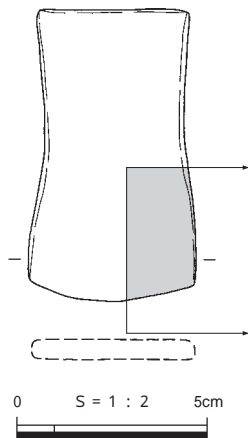
分析資料3 分析位置図



分析資料3 X線写真

表9 分析資料 4

出土状況	遺跡名	籠津乳母ヶ谷第2遺跡		遺物No	(取上No.942)			項目	滓	メタル
	出土位置	SS7 埋土中			時期：根拠	7世紀後半～8世紀 出土土器				
試料記号	検鏡： NOT2-4	法 量	長径 77.0 mm	色 調	表：褐色～茶褐色	遺存度	ほぼ完形	分 析	マクロ	
	化学： NOT2-4		短径 43.0 mm		地：濃茶褐色～茶褐色	破面数	0		検鏡	
放射化： —	厚さ 23.0 mm		磁着度	4	前含浸		硬度			
遺物種類(名称)	鉄製品 (鍛造品・袋状鉄斧)		重量 160.0 g	メタル度	特L()	断面樹脂		EPMA		
観察所見	<p>表面や袋部に酸化土砂が不規則に固着し、部分的に錆膨れの破面が確認される袋状鉄斧。左側部は袋部の外面が平滑な弧状の面として仕上げられており、刃部側が3mmほど外側に広がっている。右側部や下面は錆膨れや酸化土砂によりその形状が読み取りにくい。袋部は完全に内部が酸化物により埋められており、中空部は外観的には認められない。上面は袋部から刃部にかけてが緩やかな傾斜面で、刃部全体がわずかに下手側に向かい反っている。また、刃部が斜めに磨耗している状態で、使用痕かと推定される。色調は表面の酸化土砂が褐色から茶褐色で、地は濃茶褐色から茶褐色となる。</p>									
分析部分	<p>長軸端部角 1 / 3 を L 字状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。</p>									
備 考	<p>刃部に使用痕らしき傾きをもち、磨耗している可能性があるため、SS7鍛冶工房で製作された鉄製品かどうかははっきりしない。出土状態は埋土中。メタル部の残りは良く、7世紀後半から8世紀の鉄製品としては残りが良すぎる印象もある。</p>									



分析資料 4 分析位置図

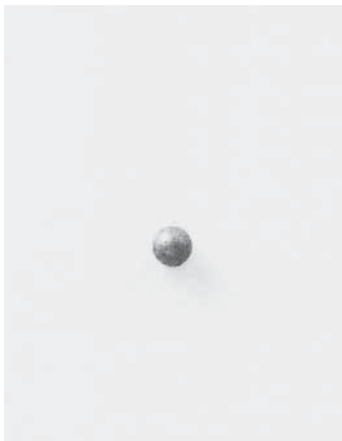


分析資料 4 X線写真

出土状況	遺跡名		笠津乳母ヶ谷第2遺跡			遺物No		⑨ (鍛冶炉1層 土壌サンプル)			項目	滓	メタル		
	出土位置		SS7 鍛冶炉			時期：根拠		7世紀後半～8世紀		:				出土土器	
試料記号	検鏡：	NOT2-5	法 量	長径	—	mm	色調	表：	遺存度		分 析	マクロ			
	化学：	—		短径	—	mm		地：	破面数			硬度			
	放射化：	—		厚さ	—	mm	磁着度	—		前含浸		—	X線回折		
	重量	—		g	メタル度	なし		断面樹脂		—		放射化			
遺物種類 (名称)	粒状滓 (3点)														
観察所見	SS7とした、鍛冶炉を持つ段状遺構の床面に設けられた、鍛冶炉1層の土砂を水洗することにより分離された粒状滓。1層は鍛冶炉の最上面に堆積し、炭化物を密に含んでいる土砂である。資料は1層の土砂を一括取り上げた上で、水洗分離の後に抽出した。道具は洗面器と1.5mm目、並びに0.8mm目のフルイを用いている。個別の資料は下表参照。														
分析部分	必要品を選択し、粒状滓として分析に用いる。残材返却。														
備考															

分析資料5 粒状滓

番号	直径 (mm)	色調	形状及び表面	磁着	気孔
5-イ	0.8	青黒色	きれいな球形で気孔を有する。光沢なし。	やや弱	僅かにあり
5-ロ	0.9	青黒色	きれいな球形で気孔を有する。小さな突起が1ヶ所認められる。光沢あり。	やや強	僅かにあり
5-ハ	1.4	青黒色	ややいびつな球形で気孔を有する。小さな突起が3ヶ所認められる。。光沢なし。	やや強	あり



5 - イ 外観写真



5 - ロ 外観写真



5 - ハ 外観写真

表11 分析資料

出土状況	遺跡名	笹津乳母ヶ谷第2遺跡		遺物No	(鍛冶炉北側1層 土壌サンプル)			項目	滓	メタル
	出土位置	SS7 鍛冶炉		時期：根拠	7世紀後半～8世紀 : 出土土器					
試料記号	検鏡： NOT2-6	法 量	長径 mm	色調	表：	遺存度	分 析	マクロ		
	化学：		短径 mm		地：	破面数		検鏡		
	放射化： —		厚さ mm		磁着度	前含浸		硬度		
遺物種類(名称)	鍛造剥片(2点)		重量 g	メタル度	なし	断面樹脂		X線回折		
観察所見	SS7とした、鍛冶炉を持つ段状遺構の床面に設けられた、鍛冶炉1層の土砂を水洗することにより分離された鍛造剥片。1層は鍛冶炉の最上面に堆積し、炭化物を密に含んでいる土砂である。資料は1層を一括に取り上げた上で、水洗分離の後に抽出した。道具は洗面器と1.5mm目、並びに0.8mm目のフルイを用いている。個別の資料は下表参照。									
分析部分	必要品を選択し、鍛造剥片として分析に用いる。残材返却。									
備考										

分析資料6 鍛造剥片

番 号	計測値(mm)			色 調	表	裏	磁 着	気 孔
	長 軸	短 軸	厚 さ					
6 - イ	2.5	2	0.2	青黒色	やや凹凸を有する。	平滑である。光沢を有する。	やや弱	なし
6 - ロ	3.0	2.1	0.2	青黒色	やや凹凸を有する。	やや凹凸を有する。	やや強	なし



6 - イ 外観写真



6 - ロ 外観写真

表12 笹津乳母ヶ谷第2遺跡鍛冶関連遺物観察表(1)

構成No	挿図PL	遺物名	地区名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考	X線	取上
					長さ	幅	厚さ						
	第16図 PL.66・67	鍛冶滓(含鉄)	1区	SS4	3.2	3.1	1.7	19.8	2	H()	薄い酸化土砂に覆われた扁平な含鉄の鍛冶滓。上面は緩やかに盛り上がり、1cm大の木炭痕をわずかに残す。下面は緩やかに窪んでおり、結果的には、上面にほぼ対応する。側部は凹凸が連続して平面形が多角形となる。含鉄部は左側部寄りの中核部。		225
	第16図 PL.66・67	鉄製品(鍛造品)へら状不明品	1区	SS4	2.5	1.4	0.4	3.6	3	錆化()	幅1.2cmほどのへら状の鉄製品破片。右側部は平面形が隅丸方形きみで、上面左側部半分から左側部が破面となる。透過X線像では、明瞭な鍛造痕が確認できない。ヤリガンナ状の鉄製品である可能性も残されている。		261
	第26図 PL.66・67	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	1区	SS6	6.5	8.6	2.9	156.0	3	H()	中央部で二片に割れている小型の椀形鍛冶滓。平面形はやや不定形で、下面下手寄りが左右方向に不規則に窪んでいる。そのため表面の一部が飛んでしまっている。その他、左右の側部が小さな破面となる。短軸側の端部は上手側が立ち上がり、下手側は垂れ下がる。含鉄部は下手側の上皮寄り。		760
	第26図 PL.66・67	椀形鍛冶滓(極小)	1区	SS6	4.4	3.9	2.3	35.2	3	なし	下面に灰色の炉床土が固着した極小の椀形鍛冶滓破片。上面と右側部が生きており、上手側が破面となる。下面は緩やかな皿状。滓質はやや密度が低い。		618
	第26図 PL.66・67	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	1区	SS6	4.2	3.6	2.2	36.8	4	錆化()	粉炭を含む酸化土砂に覆われた極小の椀形鍛冶滓。上下面と右側部が生きており、主破面は左側部となる。右側の肩部に黒錆の吹いた破面あり。表面の酸化土砂中には、薄手で青光する鍛造剥片が含まれている。含鉄部は右寄りの芯部。		760
	第26図 PL.66・67	鍛冶滓	1区	SS6	1.6	2.1	1.0	3.7	1	なし	表面全体に点々と木炭痕が残された不定形小塊状の鍛冶滓。はっきりした破面はなく、5mm大以下の木炭痕が目立つ。木炭の隙間で生成されたためか、端部がやや流動きみ。		681
	第26図 PL.66・67	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	1区	SS6	4.6	0.7	0.7	6.5	3	錆化()	上手側の端部が薄板状に成形された後に、小さく捻られている棒状不明品。両端部が破面で、下手側の端部には径3mmほどの方柱状の突出部が認められる。体部半ばでは幅8mm、厚さ5.5mmほどの不整形の断面形を持ち、不規則な鍛冶痕が確認される。何らかの未成品の可能性あり。		679
	第32図表6	椀形鍛冶滓(極小・炉床土付き)	1区	SS7	6.4	6.4	2.3	81.5	2	錆化()	分析資料1。表6参照。		891
	第32図 PL.66・67	椀形鍛冶滓(極小)	1区	SS7	1.8	1.9	1.1	4.7	1	なし	2cm大の小塊状の椀形鍛冶滓破片。厚みは1cm前後で、椀形滓とすれば、極小サイズに当たる。少なくとも側部二面が破面となる。含鉄部は上面寄りの中核部。		838
	第32図 PL.66・67	椀形鍛冶滓(極小)	1区	SS7	2.5	2.1	1.7	12.8	2	なし	極小の椀形鍛冶滓の肩部寄りの小破片。厚みは1.5cm前後で、左側部がもとの椀形鍛冶滓の肩部を示す。滓質は緻密で破面は側部に連続する。		839
	第32図表7	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	1区	SS7	4.0	5.0	2.6	41.2	2	錆化()	分析資料2。表7参照。		970
	第32図表8	鉄製品(鍛造品)鑿	1区	SS7	4.1	2.0	0.8	21.4	4	L()	分析資料3。表8参照。		839
	第32図表9	鉄製品(鍛造品)袋状鉄斧	1区	SS7	7.7	4.3	2.3	160.0	4	特L()	分析資料4。表9参照。		942
	第32図 PL.66・67	鉄製品(鍛造品)鋸状不明品	1区	SS7	9.0	4.8	1.2	82.0	3	L()	表層が厚く錆化した鋸状不明品破片。横断面形は方形きみで、足部先端は二方とも欠け落ちている。体部の平面形は緩やかな弧状で、長さ8cmほどの部分から、足部側に折れ曲がっている。外観的にも透過X線像にも、筋状のひび割れが発達しており、表層から順次細いひび割れが延びている。ひび割れや鍛造痕には、緩やかなうねりが確認され、成・整形はやや粗い。		890
	第32図 PL.68	羽口(鍛冶)	1区	SS7	2.3	3.3	2.0	8.3	2	なし	上面に通風孔部の壁面を残す鍛冶羽口の先端部小破片。右側部上半が溶化した自然面で、それ以外の側部は基本的に破面となっている。ただし、右側部下半は破面となった後にも、黒褐色の被熱痕あり。胎土はわずかにササが混じる練りの甘い粘土質。通風孔部の推定径は3cm弱となる。	-	1002
	第32図 PL.69	鉄床石(鍛造剥片付き)	1区	SS7	3.4	2.3	0.8	7.4	1	なし	薄板状に剥離した鉄床石の表面破片。側部は破面となり、上面のみ生きている。上面は薄く被熱して、下手寄りには黒褐色の鍛造剥片の固着が確認される。石材の質や被熱状態はSS8出土の構成石と似る。	-	586
	第33図 PL.69	砥石	1区	SS7	8.5	9.95	6.5	400.0	1	なし	上面に幅3.3cmほどの椀状の砥面を残す砂岩製の砥石。側面は多くの剥離痕が観察され、下面は欠損している。砥面には、斜め方向の線状痕や敲打痕が認められる。	-	946
	第33図 PL.69	鍛冶滓	1区	SS7 鍛冶炉	3.2	4.1	1.3	17.6	2	なし	上下面に1cm大前後の木炭痕を残す、やや流動状の鍛冶滓片。扁平で比重が高く、滓としては特異。極小の椀形鍛冶滓の特異に発達した肩部片の可能性あり。破面は左側部のみ。炉床の粉炭層中で生成か。	土壌サンプル	
	表10	粒状滓(3点)	1区	SS7 鍛冶炉						なし	分析資料5。表10参照。	土壌サンプル	
	表11	鍛造剥片(2点)	1区	SS7 鍛冶炉						なし	分析資料6。表11参照。	土壌サンプル	
21	第33図 PL.66・67	鉄製品(鍛造品)鎌又は釘	1区	SS7 鍛冶炉	3.5	0.5	0.3	1.6	2	錆化()	4mmほどの方形の横断面形を持つ、鎌又は釘の足部(茎部)片。上手側が破面となっており、どちらかは不明。軸方向にやや曲がりを持ち、横断面形もやや歪む。出土位置は鍛冶炉中で、鍛冶途上の未成品の可能性が高い。	土壌サンプル	

表13 笹津乳母ヶ谷第2遺跡鍛冶関連遺物観察表(2)

構成No	挿図PL	遺物名	地区名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考	X線	取上
					長さ	幅	厚さ						
22	第33図 PL.68	羽口(鍛冶)	1区	SS7鍛冶炉	4.3	6.8	2.3	79.0	2	なし	鍛冶羽口の先端部破片。三片に割れており、取り上げ番号は別ながら、接合する。通風孔部の7割方が遺存する。通風孔部の径は現状で約3cm。基部側が体部から欠落しており、身厚は現状で1.7cmを計る。先端部から肩部にかけてはきれいに溶化して、部分的に発泡する。通風孔部は縁に沿って滓が巻き込まれている。胎土は非常に細かい砂粒状で、粘質でない点は、構成とも共通する。	-	1172・1173・1174
23	第33図 PL.68	羽口(鍛冶)	1区	SS7鍛冶炉	11.8	7.8	2.7	366.0	2	なし	鍛冶羽口の体部から先端部破片。先端から斜め方向に直線状に開く形態の羽口で、基部側に向かい身厚を増す。残存部分は体部半ばから先端部右側となる。通風孔部の径は先端部で3cm、基部側でわずかに膨らむもののぼぼ直孔といえる。身厚は先端部で1cm、基部側では2.4cmと厚い。先端部から肩部にかけては溶化発泡しており、通風孔部の壁面にも一部、滓を巻き込んでいる。胎土は、ややスサを多めに交える砂粒主体のもので、粘性は低い。	-	1171
24	第33図 PL.69	砥石	1区	SS7鍛冶炉	4.1	2.9	2.1	21.6	1	なし	被熱した砥石破片。上面と右側の肩部のごく一部が生きており、残る側面から下面は破面となっている。石質は砂岩で、上面には斜め方向の砥痕が確認される。破面のうち、下手側と右側の肩部下半は破片化した後に被熱している。石質は砂岩でやや軟質。	-	1175
25	第39図 PL.66・67	粘土質溶解物	1区	SS8	2.1	3.4	2.1	8.7	2	なし	厚さ1.8cmほどの粘土質溶解物。上下面が平坦で、側面には不規則な凹凸が残る。左側部、上手側の端部には小破面を残している。鍛冶羽口の頸部周辺で、生成された可能性大。	-	1115
26	第39図 PL.66・67	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	1区	SS8	5.5	4.0	2.7	54.0	2	錆化()	左右方向に向かう不規則な椀状をした極小の椀形鍛冶滓破片。左右の側部と下面の中央部が破面となっている。全体的に椀状で、滓の質感や断面の一部がSS6出土品、構成の椀形鍛冶滓と共通点を持つ。同一の鍛冶炉(SS7鍛冶炉)が本来の生成炉である可能性を持つ。	-	1054
27	第39図 PL.68	被熱粘土塊(炉壁・鍛冶炉?)	1区	SS8	4.2	3.2	2.0	14.8	1	なし	鍛冶炉内面肩部の破片の可能性を持つ被熱粘土塊。内面は緩やかに弧状に成形されており、上手側の端部は平坦となる。側面から裏面は全面破面。胎土は初殻を混える粘土質。上面にはわずかに滓が固着する。	-	1109
28	第39図 PL.68	被熱粘土塊(炉壁・鍛冶炉?)	1区	SS8	3.6	3.4	2.3	13.8	1	なし	鍛冶炉の炉壁内面破片と推定される被熱粘土塊。内面のごく一部が生きており、側面から裏面は破面主体。下手側は水平に途切れているが、性格不明。外面側は厚さ8mmほどの範囲が吸炭している。	-	1110
29	第39図 PL.68	被熱粘土塊(炉壁・鍛冶炉?)	1区	SS8	4.4	3.9	2.8	29.2	1	なし	内外面が生きており、鍛冶炉の炉壁破片と推定される被熱粘土塊。平面形は内側の方が弧状が強い。最大厚みは3.0cmを計る。内外面が酸化色で中間層は薄く吸炭している。胎土は初殻混じりの粘土質。鍛冶炉の炉壁中段破片か。	-	1108
30	第39図 PL.68	被熱粘土塊(炉壁・鍛冶炉?)	1区	SS8	5.9	4.6	3.1	46.4	1	なし	内外面が生きており、鍛冶炉の炉壁破片と推定される被熱粘土塊。側面は全面破面となる。現状の最大厚みは約3.2cmを計る。内面は酸化色が強く、やや白っぽい赤褐色となる。外面は握り方に接しているものとみられ、赤褐色に被熱する。中間層は強く吸炭。縦断面形が外面では弧状で、鍛冶炉としては下半部の破片か。	-	1106
31	第39図 PL.68	被熱粘土塊(炉壁・鍛冶炉?)	1区	SS8	4.8	6.5	2.7	51.5	1	なし	外面の一部が生きており、鍛冶炉の炉壁片と推定される被熱粘土塊。内面は表面が剥離しており、上半部の表面に赤味の強い被熱部分が残る。右側部は主破面となる。外面は立ち上がりの急な直線状で、握り方に接した剥離面の可能性がある。平面形は緩やかな弧状。鍛冶炉の炉壁の上半部で肩部寄りの破片か。	-	1111
32	第39図 PL.69	鉄床石(被熱)	1区	SS8	6.7	4.6	1.2	18.0	1	なし	表面が薄く剥離した鉄床石の表面破片。上面から被熱しており、弱い赤化がみられる。上面の左側端部は自然面で、わずかに滓が固着する。構成 姫と石質は同一。	-	1031
33	第39図 PL.69	鉄床石(鍛造剥片付き)	1区	SS8	7.0	6.2	2.7	112.0	1	なし	上面に鍛造剥片が固着した鉄床石の表面破片。側面には破面が連続し、最大厚みは2.8cmを計る。下面は剥離面。上面は生きており、右下手側が傾斜面となり、左側は平坦面となる。平坦面の左下手側の端部が薄く赤化しており、その部分を中心に黒褐色の鍛造剥片が点々と固着する。なお、複数の刃物傷が上面にみられるが発掘時の傷跡であろう。構成 姫の鉄床石破片も同一種の石材。	-	998
34	第82図 PL.66・67	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	3区	SI2	2.2	0.5	0.3	1.5	3	錆化()	2.1cmほどの長さを持つ棒状不明品破片。上手側が錆膨れて大きく膨らんでおり、本来の径を示していない。下手側は比較的健全な釘または鎌の足部状。横断面形はやや扁平な形態を持ち、最大幅は4mm前後を計る。	-	1582
35	第82図 PL.66・67	鉄製品(鍛造品)薄板状不明品	3区	SI2	4.4	1.2	1.5	7.6	3	錆化()	酸化土砂に覆われた薄板状不明品。平面形はへら状で、右下手側の端部に厚さ1mmほどの地の部分が見えている。他は酸化土砂により表面状態がはつきりしない。形態的には刀子破片の可能性を持つ。	-	1631
36	第82図 PL.66・67	鉄製品(鍛造品)へら状不明品	3区	SI2	4.5	1.2	0.2	6.8	2	錆化()	幅1.2cm前後の、左右方向が反り返ったへら状不明品。左右の側部が不自然な途切れ方をしており、破面の可能性が高い。厚みは酸化土砂により厚くなってしまっているが、本来は1.5mm程度の可能性あり。背側は直線状で、下手側は3mmほどの高低差をもつ鋸歯状となる。性格は不明。	-	1636

表14 笹津乳母ヶ谷第2遺跡鍛冶関連遺物観察表(3)

構成No	挿図PL	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線	取上
					長さ	幅	厚さ						
37	第82図 PL.66 ・67	鉄製品(鍛造品) 袋状鉄斧	3区	SI2	5.35	3.1	1.2	52.5	3	錆化()	黄褐色の厚い酸化土砂に覆われた鉄製品破片。4mm前後の厚みをもつ板状で、下手側と右側部には破面が露出している。左側部は端部は直線状で、全体が板状の鉄製品であることがわかる。		1770
38	第63図 PL.66 ・67	椀形鍛冶滓(小)	1区	C2 グリッド	4.4	5.4	4.3	87.0	2	なし	3.5cmほどの厚みをもつ小型の椀形鍛冶滓の側部破片。上面から左側部は生きており、右側の側部3面が破面となっている。破面に露出する滓部は緻密。左側部の立ち上がりは急で、左側の肩部は突出している。		290
39	第63図 PL.66 ・67	椀形鍛冶滓(極小)	1区	C2 グリッド	3.6	2.4	1.6	13.8	1	なし	極小の椀形鍛冶滓の側部破片。上手側が主破面で、表裏面には点々と木炭痕と羽口由来の粘土塊小破片が固着している。滓質はほぼ緻密。		1005
40	第63図 PL.66 ・67	鍛冶滓	1区	C3 グリッド	1.3	1.9	1.2	5.0	1	なし	小塊状の鍛冶滓。上面は平坦で、下面は突出し、右側部には粉炭状の鍛造剥片が固着している。ほぼ完形品。		1140
41	第63図 PL.66 ・67	粘土質溶解物	1区	E0 グリッド	2.2	2.0	0.7	2.9	1	なし	7mmほどの厚みをもつ扁平な粘土質溶解物。表面は半流動状で、黒褐色のガラス質滓が主体となる。裏面は結晶が発達して部分的にキラキラと輝く。左側部には破面があり、中空部が広い。		1195
42	第63図 PL.66 ・67	粘土質溶解物	1区	E0 グリッド	3.6	4.9	4.1	40.8	1	なし	粘土質の滓が重層した粘土質溶解物。右側部は発掘時の傷で、下半部は1.7cmほどの厚みをもつ極小の椀形鍛冶滓様。上手側の側部に小破面あり。上半部は、さまざまな色調をもつ粘土質溶解物主体で、発泡した部分や小さな錆跡が混在する。下面には灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が残存する。羽口の頸部で生成か。		587
43	第63図 PL.66 ・67	鉄製品(鍛造品)釘?	1区	C2 グリッド	3.3	0.4	0.3	5.2	2	錆化()	酸化土砂に覆われた釘状の鉄製品破片。透過X線像は径4mmを計り、横断面形は方形の可能性が高い。両端部が欠落しており、太さは全体に変わらない。		167
44	第63図 PL.66 ・67	鉄製品(鍛造品)釘?	1区	C2 グリッド	2.6	0.7	0.5	4.7	2	錆化()	酸化土砂に覆われた釘状不明品。前者と似た付着物に覆われ端部には破面が露出している。同一固体の可能性もあるが、やや本資料の方が、横幅がある印象をもつ。		287
45	第63図 PL.66 ・67	鉄製品(鍛造品) 薄板状不明品	1区	C2 グリッド	2.1	0.9	0.3	4.7	3	錆化()	酸化土砂に覆われた薄板状の鉄製品破片。右側部から上手側の側部には芯部の鉄が抜けた中空の破面が露出している。本来の厚みは2~3mm程度か。性格は不明。		293
46	第56図 PL.66 ・67	鉄製品(鍛造品) U字状鋤先	1区	土器溜り1	11.4	4.8	0.5	140.0	3	錆化()	U字状鋤先の刃部側破片。基部は右側の方がやや長く遺存しており、左側は途中で欠落する。刃部の最大幅は約5cm。槽部分は欠落が進み、上面大半は本来の形を失っている。下面の方が健全で、この部分から見ると槽部分の深さは1cmほどになる。左側の刃部先端も小さく欠けている。透過X線像では、右側の基部の先端も割れているように見える。刃部の使い減りはそれほどはっきりしない。		569
47	第63図 PL.66 ・67	鉄製品(鋳造品?) 袋状鉄斧?	1区	D2 グリッド	3.1	2.8	0.5	12.2	3	錆化()	5mmほどの厚みをもつ、鋳造品破片。5mm程の板状で、表裏面には錆跡の欠けや放射割れが発達している。右側の端部がわずかに上方に立ち上がっているようにも見えるが、錆跡の可能性もある。現状で最大幅は2.8cmを計る。		169
48	第63図 PL.69	鉄床石 (鍛造剥片付き)	1区	E1 グリッド	5.3	3.3	1.1	18.4	1	なし	薄板状に剥離した鉄床石の表面破片。上面は平坦で右側は傾斜面となっている。上面の下手側にはやや光沢のある青黒い鍛造剥片が面的に固着し、浅いハネも共存する。石質は構成 姫・姫と同様とみられるが、赤化はしていない。		588

第3章 調査の成果

表15 笹津乳母ヶ谷第2遺跡1区出土土器観察表(1)

遺物	遺層	構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上
1	SS1・2	埋土	須恵器 坏蓋	11.4 3.5	口縁-体部 破片	外面：天井-口縁部回転ナデ 内面：天井-口縁部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰白色 内面：灰白色	良好		86
2	SS1	埋土	土師器 甕	16.4 4.2	口縁-体部 破片	外面：口縁-体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面：浅黄色 内面：浅黄色	良好	外面スス付着	107・133
3	SS1	埋土	土師器 壺	底径4.8 4.7	体-底部 2/3	外面：体-底部ナデ 内面：体-底部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面：淡黄色 内面：浅黄色	良好		90
6	SS2	埋土	須恵器 坏蓋	10.2 3.4	天井-口縁部 完形	外面：天井-口縁部回転ナデ 内面：天井-口縁部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰-黄灰色	良好		139・349
7	SS1・2	埋土	土師器 甕	14.4 4.2	口縁-体部 破片	外面：口縁-体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好		53
8	SS4	埋土	土師器 碗	17.4 4.1	口縁-体部 破片	外面：口縁-体部ナデ 内面：口縁-体部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：黄灰色 内面：黄灰色	良好		305
9	SS4	埋土	土師器 碗	13.8 4.1	口縁-体部 破片	外面：口縁-体部ナデ 内面：口縁-体部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面赤色顔料	249
10	SS4	埋土	土師器 高坏	- 7.8	坏部-脚部 破片	外面：風化により調整不明 内面：坏部風化により調整不明、脚部絞り目	径4mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		256
11	SS5	埋土	須恵器 坏身	13.0 3.9	天井-口縁部 完形	外面：天井部ヘラケズリ、肩-口縁部回転ナデ 内面：天井-口縁部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：オリブ灰色 内面：オリブ灰色	良好		319・321・326・1153
12	SS5	埋土	須恵器 坏身	13.7 3.2	口縁-体部 1/4	外面：口縁-体部回転ナデ 内面：口縁-体部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：オリブ灰色 内面：オリブ灰色	良好		319
13	SS5	埋土	須恵器 坏身	11.6 4.0	口縁-体部 破片	外面：口縁-体部回転ナデ 内面：口縁-体部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：青灰色 内面：灰色	良好		314
14	SS6	埋土	須恵器 坏蓋	14.9 4.0	天井-口縁部 2/3	外面：天井部回転ヘラケズリ、肩-口縁部回転ナデ 内面：天井-口縁部回転ナデ	径3mm以下の白色砂粒、黒斑状粒子	外面：灰色 内面：灰色	良好	胎土分析 2	738
15	SS6	埋土	須恵器 坏蓋	11.8 3.5	天井-口縁部 完形	外面：天井部ナデ、肩-口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰白色 内面：灰白色	良好		724
16	SS6	埋土	須恵器 坏蓋	12.8 3.6	天井-口縁部 1/3	外面：天井-口縁部回転ナデ 内面：天井-口縁部回転ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：黄灰色 内面：灰色	良好		736
17	SS6	埋土	須恵器 坏身	11.0 4.4	口縁-底部 2/3	外面：口縁-体部上半回転ナデ、体部下半-底部回転ヘラケズリ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒、黒斑状粒子	外面：灰色 内面：灰色	良好		740
18	SS6	埋土	須恵器 坏身	10.8 3.6	口縁-底部 破片	外面：口縁-底部回転ナデ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	良好		757
19	SS6	埋土	須恵器 坏身	4.5 7.6	口縁-底部 完形	外面：口縁-体部回転ナデ、底部回転系切 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄色 内面：灰黄色	良好		604・606・610
20	SS6	埋土	須恵器 坏身	14.2 4.4	口縁-底部 2/3	外面：口縁-体部回転ナデ、底部回転系切 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の黒斑状粒子	外面：オリブ灰色 内面：オリブ灰色	良好		658
21	SS6	埋土	須恵器 坏身	11.4 3.6	口縁-底部 完形	外面：口縁-体部回転ナデ、底部回転系切 内面：口縁-底部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：暗黄褐色 内面：暗黄褐色	良好		766
22	SS6	埋土	須恵器 坏身	底径9.6 2.6	体部-底部 破片	外面：体-底部回転ナデ、底部回転系切 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰-灰黄褐色 内面：灰-にぶい黄褐色	良好		581・665
23	SS6	埋土	須恵器 高台付坏	11.8 4.1	口縁-坏部 1/6	外面：口縁-底部回転ナデ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒、黒斑状粒子	外面：灰白色 内面：灰色	良好		663・664・688
24	SS6	埋土	須恵器 高台付坏	底径8.6 4.2	体-底部 1/3	外面：体-底部回転ナデ 内面：体-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	良好		574・613
25	SS6	埋土	須恵器 高台付坏	13.8 4.2	口縁-坏部 2/3	外面：口縁-底部回転ナデ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒、黒斑状粒子	外面：灰白色 内面：灰色	良好		631・644・649
26	SS6	埋土	須恵器 甕	- 10.5	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	良好		600
27	SS6	埋土	土師器 甕	24.4 5.8	口縁-体部 破片	外面：口縁部ナデ、体部調整不明 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙-灰黄褐色	良好		697
28	SS6	埋土	土師器 甕	17.6 13.9	口縁-体部 1/2	外面：口縁-体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	良好		575・733
29	SS6	埋土	土師器 甕	35.4 23.2	口縁-体部 1/2	外面：口縁-体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：黄褐色	良好		707・719・723
30	P153	埋土	土師器 瓶	14.9 6.5	口縁-体部 1/8	外面：口縁-体部ナデ 内面：口縁-体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		849
32	SS7	埋土	須恵器 坏蓋	13.6 2.4	口縁部 破片	外面：口縁部回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰白色 内面：灰白色	良好		985
33	SS7	埋土	須恵器 坏蓋	- 2.3	天井-口縁部 1/3	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井-口縁部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒、黒斑状粒子	外面：灰黄色 内面：灰黄色	良好		839
34	SS7	埋土	須恵器 坏蓋	- 2.1	天井部 破片	外面：天井部回転ナデ 内面：天井部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰オリブ色 内面：灰白色	良好		984・986
35	SS7	埋土	須恵器 坏身	10.6 3.0	口縁-底部 2/3	外面：口縁-底部回転ナデ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒、黒斑状粒子	外面：浅黄色 内面：浅黄色	良好		857
36	SS7	埋土	須恵器 坏身	12.9 3.7	口縁-底部 1/3	外面：口縁-底部回転ナデ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：青灰色 内面：青灰色	良好		922
37	SS7	埋土	須恵器 坏身	12.5 2.8	口縁-底部 2/3	外面：口縁-底部回転ナデ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄色 内面：浅黄色	良好	胎土分析 5	856
38	SS7	埋土	須恵器 坏身	12.2 2.7	口縁-底部 2/3	外面：口縁-体部上半回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰白色 内面：灰白色	良好		852
39	SS7	埋土	須恵器 甕	- 3.7	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	良好		585
40	SS7	埋土	須恵器 甕	- 7.3	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	径2mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	良好		852
41	SS7	埋土	須恵器 甕	- 5.5	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	径5mm以下の白色砂粒	外面：灰オリブ色 内面：灰色	良好		852
42	SS7	埋土	須恵器 甕	- 5.7	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	良好		951
43	SS7	埋土	須恵器 甕	- 15.2	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面：暗青灰色 内面：青灰色	良好		950・953・954
44	SS7	埋土	須恵器 甕	- 10.2	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	径5mm以下の白色砂粒	外面：黄灰色 内面：灰色	良好		956・960
45	SS7	埋土	須恵器 甕	- 6.5	肩部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面：暗青灰色 内面：青灰色	良好		947
46	SS7	埋土	土師器 甕	12.8 4.6	口縁-体部 破片	外面：口縁部ナデ、体部調整不明 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：黄褐色	良好		927
47	SS7	埋土	土師器 高坏	- 7.8	坏-脚部 1/6	外面：坏-脚部風化により調整不明、指オサ工 内面：坏-脚部風化により調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		959
48	SS8	埋土	須恵器 坏蓋	10.2 3.8	天井-口縁部 完形	外面：天井部ナデ、肩-口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、肩-口縁部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	良好		1118
49	SS8	埋土	須恵器 坏身	11.1 3.7	口縁-底部 完形	外面：口縁-底部回転ナデ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好		1080・1098
50	SS8	埋土	須恵器 坏身	10.6 3.1	口縁-底部 2/3	外面：口縁-底部回転ナデ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒、黒斑状粒子	外面：暗緑灰色 内面：オリブ灰色	良好		1028
51	SS8	埋土	須恵器 坏蓋	12.9 3.4	天井-口縁部 ほぼ完形	外面：天井-口縁部回転ナデ 内面：天井-口縁部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	良好	宝珠つまみ変容型	1070

表16 笹津乳母ヶ谷第2遺跡1区出土土器観察表(2)

遺物	遺層 構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上
52	SS8 埋土	須恵器 坏身	6.8 4.0	口縁-底部 2/3	外面:口縁-体部回転ナデ 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:オリブ黄 内面:オリブ黄	良好	胎土分析 13	1090
53	SS8 埋土	須恵器 坏身	6.8 4.0	口縁-底部 2/3	外面:口縁-体部回転ナデ、底面回転系切 内面:口縁-底部回転ナデ	径5mm以下の白色砂粒	外面:灰黄色 内面:灰黄色	良好		1047
54	SS8 埋土	須恵器 坏身	13.5 3.9	口縁-底部 2/3	外面:口縁-体部回転ナデ 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:オリブ黄色 内面:オリブ黄色	良好		989
55	SS8 埋土	須恵器 坏身	11.9 4.2	口縁-底部 ほぼ完形	外面:口縁-体部回転ナデ、底面回転系切 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰白色 内面:灰色	良好	胎土分析 11	1036・1084・ 1084・1114・1144
56	SS8 埋土	須恵器 碗	17.8 6.1	口縁-底部 2/3	外面:口縁-底部回転ナデ 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰色 内面:灰色	良好		1064・1065・1067
57	SS8 埋土	須恵器 壺	底径11.9 7.7	体-底部 1/5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰色 内面:灰色	良好	胎土分析 15	1034・1044・1081
58	SS8 埋土	須恵器 破片	- 7.5	体部 破片	外面:平行タタキ 内面:青海波文	径5mm以下の白色砂粒	外面:暗紫灰色 内面:紫灰色	良好		1116
59	SS8 埋土	須恵器 破片	- 10.0	肩-体部 破片	外面:平行タタキ 内面:青海波文	径2mm以下の白色砂粒	外面:灰色 内面:灰色	良好		1050
60	SS8 埋土	土師器 無頸壺	10.9 7.7	口縁-底部 ほぼ完形	外面:口縁部ナデ、体部ハケ ナデ 内面:口縁-体部ケズリ ナデ	径3mm以下の白色砂粒・雲 母片	外面:明褐色 内面:橙色	良好		1164
61	SS8 埋土	土師器 破片	25.6 4.6	口縁-体部 破片	外面:口縁-体部ナデ 内面:口縁部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好	表面ス入付着	1039
62	SS8 埋土	土師器 破片	28.5 4.6	口縁-体部 破片	外面:口縁-体部風化により調整不明 内面:口縁-体部風化により調整不明	径4mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好		1096
63	SS8 埋土	土師器 破片	18.4 21.8	口縁-体部 2/3	外面:口縁部ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径5mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		1143
65	SS9 埋土	須恵器 坏蓋	11.0 3.0	口縁部 破片	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	径0.5cm以下の白色砂粒・ 黒斑状粒子	外面:灰白色 内面:灰色	良好		1135
66	SS9 埋土	須恵器 高坏	13.8 3.9	口縁-体部 1/6	外面:口縁-体部回転ナデ 内面:口縁-体部回転ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面:浅黄色 内面:浅黄褐色	良好		1134
67	SS9 埋土	土師器 破片	22.6 18.6	口縁-体部 2/3	外面:口縁-体部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好		1130
68	SB12-P15 埋土	弥生土器 破片	18.2 5.0	口縁-頸部 破片	外面:口縁部8条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁部ナデ	径5mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好		422
69	SD1 埋土	弥生土器 破片	17.8 4.5	口縁-頸部 破片	外面:口縁部6条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁部ナデ	径5mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		76
70	SK17 埋土	弥生土器 破片	- 3.9	口縁-体部 破片	外面:口縁部風化により調整不明 内面:口縁-頸部ナデ、体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好		180
71	SK18 埋土	弥生土器 破片	15.8 4.2	口縁-体部 破片	外面:口縁部9条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁-体部ナデ	径3mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:明赤褐色	良好		189
72	SK18 埋土	弥生土器 破片	16.2 3.3	口縁-頸部 破片	外面:口縁部5条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁-頸部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好		203
73	土器溜り 暗褐色土	須恵器 坏蓋	12.9 4.9	天井-口縁部 2/3	外面:天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面:天井-口縁部回転ナデ	径3mm以下の白色砂粒	外面:褐色 内面:灰色	良好		348
74	土器溜り1 暗褐色土	須恵器 坏身	10.6 3.1	口縁-体部 破片	外面:口縁-体部回転ナデ 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:暗青灰色 内面:青灰色	良好		482
75	土器溜り1 暗褐色土	須恵器 坏身	12.0 2.6	口縁-底部 破片	外面:口縁-底部回転ナデ 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:暗青灰色 内面:明アリ一部灰色	良好		351
76	土器溜り1 暗褐色土	土師器 坏身	14.2 4.1	口縁-体部 破片	外面:口縁部ナデ、体部回転ヘラケズリ 内面:口縁-体部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:明黄褐色 内面:橙色	良好		352
77	土器溜り1 暗褐色土	須恵器 坏身	底径8.8 2.8	体-底部 破片	外面:体部回転ナデ、底部静止系切り 内面:口縁-体部回転ナデ	径1mm以下の白赤色砂粒	外面:灰色 内面:灰色	良好		493
78	土器溜り1 暗褐色土	須恵器 高坏	- 8.0	脚部 破片	外面:脚部回転ナデ、2段透し 内面:脚部回転ナデ	径5mm以下の白色砂粒	外面:灰色 内面:灰白色	良好		374・568
79	土器溜り1 暗褐色土	須恵器 長頸壺	8.0 5.1	口縁-頸部 1/6	外面:口縁-頸部回転ナデ 内面:口縁-頸部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:暗青灰色 内面:暗青灰色	良好		450
80	土器溜り1 暗褐色土	須恵器 破片	- 13.9	体部 破片	外面:平行タタキ 内面:青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面:青灰色 内面:青灰色	良好		307・456・457
81	土器溜り1 暗褐色土	須恵器 破片	47.5 10.3	口縁-頸部 破片	外面:口縁部肥厚、櫛描波状文 内面:ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:青灰色 内面:青灰色	良好		466
82	土器溜り1 暗褐色土	土師器 破片	16.8 8.5	口縁-体部 1/6	外面:口縁-体部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:黄褐色	良好		543・546・547・ 548・599
83	土器溜り1 暗褐色土	土師器 破片	19.7 11.2	口縁-体部 1/2	外面:口縁部ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:橙色	良好		536・537・541・546・ 567・568・599
84	土器溜り1 暗褐色土	土師器 破片	24.6 9.4	口縁-体部 1/4	外面:口縁-体部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径5mm以下の白色砂粒	外面:明赤褐色 内面:橙色	良好		364・371
85	土器溜り1 暗褐色土	土師器 破片	20.4 9.5	口縁-体部 1/6	外面:口縁-体部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径3mm以下の白色砂粒	外面:明黄褐色 内面:橙色	良好		490
86	土器溜り1 暗褐色土	土師器 破片	26.5 17.8	口縁-体部 2/3	外面:口縁-体部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径3mm大の白色砂粒・雲母 片	外面:明褐色 内面:明褐色	良好		360
87	土器溜り1 暗褐色土	土師器 破片	23.6 6.6	口縁-体部 破片	外面:口縁部ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径2.5mm以下の白色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好		470・478・481・483・ 485・489・517・522・ 527・531・538・568
88	土器溜り1 暗褐色土	土師器 破片	26.3 17.9	口縁-体部 破片	外面:口縁部ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径3mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		307・309・355・ 501・513
89	土器溜り1 暗褐色土	土師器 破片	23.0 24.4	口縁-体部 1/6	外面:口縁-体部ハケ・ナデ 内面:ヘラケズリ	径3mm以下の白色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好		307・441・443・445・462・ 495・499・502・505・ 514・516・520・566・568
96	P150 埋土	縄文土器 深鉢	- 4.8	口縁部 破片	外面:貝殻条痕 内面:ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好		833
97	P150 埋土	縄文土器 深鉢	- 4.8	体部 破片	外面:貝殻条痕 内面:ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:にぶい褐色 内面:にぶい黄褐色	良好	833と同一固体	832
98	P150 埋土	須恵器 壺	- 3.7	口縁部 破片	外面:口縁部肥厚、回転ナデ 内面:口縁部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:灰色 内面:灰色	良好		1009
99	P151 埋土	須恵器 破片	- 7.5	体部 破片	外面:平行タタキ 内面:青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰白色 内面:灰黄色	良好		794
100	P146 埋土	須恵器 坏蓋	14.0 2.8	肩-口縁部 破片	外面:肩-口縁部回転ナデ 内面:肩-口縁部回転ナデ	径1mm以下の砂粒	外面:明黄褐色 内面:青灰色	良好		313
101	E2 暗褐色土	弥生土器 破片	29.6 5.9	口縁-頸部 破片	外面:口縁部11条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁-頸部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好		81
102	D0 暗褐色土	弥生土器 破片	20.5 4.2	口縁-頸部 1/3	外面:口縁部9条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁-頸部ナデ、体部ケズリ	径3mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:黄褐色	良好		587
103	E3 暗褐色土	弥生土器 破片	13.6 3.1	口縁部 破片	外面:口縁部6条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁部-頸部ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面:明黄褐色 内面:明黄褐色	良好		78
104	D1 暗褐色土	弥生土器 器台	- 4.8	器部-脚部 破片	外面:器部4条平行沈線文、脚部ナデ 内面:器部ナデ、脚部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:赤褐色 内面:橙色	良好	外面赤色塗彩	208
105	D0 暗褐色土	弥生土器 破片	16.0 5.1	口縁-体部 破片	外面:口縁部ナデ、体部風化により調整不明 内面:口縁部ナデ、体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		587
106	C3 -	須恵器 坏蓋	13.0 3.5	天井-口縁部 破片	外面:天井-口縁部回転ナデ 内面:天井-口縁部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:オリブ灰色 内面:オリブ灰色	良好		235

第3章 調査の成果

表17 笹津乳母ヶ谷第2遺跡1区出土土器観察表(3)

遺物	遺層	構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上
107	C	D2	須恵器 甕身	9.6 2.7	口縁-底部 破片	外面:口縁-底部回転ナデ 内面:口縁-底部回転ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面:白灰色 内面:黄灰色	良好		21
108	E2	甕身	須恵器 甕身	12.7 3.1	口縁-底部 破片	外面:口縁-底部回転ナデ 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:青灰色 内面:青灰色	良好		82
109	D1	甕身	須恵器 甕身	10.3 3.0	口縁-底部 2/3	外面:口縁-底部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰黄色 内面:灰黄色	良好		594
110	D2	甕身	須恵器 甕身	10.4 4.4	口縁-底部 2/3	外面:口縁-底部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面:口縁-底部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:灰色 内面:灰色	良好		173
111	D1	甕身	須恵器 高坏	底径10.3 6.8	坏-脚部 1/3	外面:坏-脚部回転ナデ 内面:口縁-底部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:暗紫灰色 内面:暗紫灰色	良好		306
112	C3	-	須恵器 坏蓋	2.4	天井-肩部 破片	外面:天井部輪状つまみ、肩部回転ナデ 内面:天井-口縁部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰オリブ 内面:灰オリブ	良好		215
113	F1	甕身	須恵器 甕身	12.5 3.8	口縁-底部 ほぼ完形	外面:口縁-底部回転ナデ、底部回転系切 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:オリブ灰色 内面:オリブ灰色	良好		426
114	D2	甕身	須恵器 甕身	12.3 3.9	口縁-底部 ほぼ完形	外面:口縁-底部回転ナデ、底部回転系切 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰黄色 内面:橙色	良好		12
115	C3	-	須恵器 甕身	12.6 3.3	口縁-底部 破片	外面:口縁-底部回転ナデ 内面:口縁-底部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:灰色 内面:灰色	良好		439
116	C3	-	須恵器 甕	底径7.8 3.9	底部 破片	外面:底部回転ナデ、底部回転系切 内面:体-底部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒・雲母片	外面:灰色 内面:青灰色	良好		230
117	C3	-	須恵器 甕	20.0 4.1	肩部-底部 破片	外面:肩-底部回転ナデ 内面:肩-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	自然釉付着	227
118	表土	土師器 甕	28.2 5.8	口縁-底部 破片	外面:口縁-底部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好			24・146
119	D2	甕身	土師器 甕	12.0 4.5	口縁-底部 破片	外面:口縁-底部ナデ、ハケ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好		174
120	D2	甕身	土師器 甕身	10.3 2.3	口縁-底部 2/3	外面:口縁-底部回転ナデ、底部静止系切 内面:口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:赤褐色 内面:赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	469

表18 笹津乳母ヶ谷第2遺跡2区出土土器観察表

遺物	遺層	構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上
125	SK24	埋土	弥生土器 甕	18.8 8.3	口縁-頸部 1/6	外面:口縁部ナデ、頸部ハケ ナデ 内面:口縁-頸部ナデ	径3mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		1460
126	土器溜り2	黄褐色土	弥生土器 甕	16.6 5.1	口縁-頸部 破片	外面:口縁部7条平行沈線文、頸部ナデ・指オサエ 内面:口縁部ミガキ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好		1400
127	土器溜り2	黄褐色土	弥生土器 甕	14.8 4.4	口縁-頸部 破片	外面:口縁部4条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁-頸部ナデ	径5mm以下の白色砂粒・雲母片	外面:橙色 内面:橙色	良好		1358
128	土器溜り2	黄褐色土	弥生土器 甕	9.6 3.6	口縁-底部 破片	外面:口縁部11条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好	外面赤緑塗彩	1405
129	土器溜り2	黄褐色土	弥生土器 甕	13.9 4.6	口縁-頸部 破片	外面:口縁部ナデ、頸部ナデ 内面:口縁部ナデ、頸部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:浅黄色 内面:浅黄色	良好		1329・1403
130	土器溜り2	黄褐色土	弥生土器 甕	12.5 3.7	口縁部 破片	外面:口縁部ナデ 内面:口縁部ナデ	径2mm以下の白・灰色砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好		1399・1359 1435・1439
131	土器溜り2	黄褐色土	弥生土器 高坏	8.3 12.5	脚部 3/4	外面:脚部ナデ・ハケ、裾部ナデ 内面:脚部ナデ、裾部ハケ・ナデ	径3mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好		1405
132	P162	埋土	弥生土器 甕	16.4 5.0	口縁-頸部 破片	外面:口縁部3条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁-頸部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:明黄褐色 内面:明黄褐色	良好		1392
133	C12	縄文土器 深鉢	2.4	底部 破片	外面:半戦竹管による平行沈線 内面:貝殻腹縁による条痕	径2mm以下の白色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好			1366
134	C12	縄文土器 深鉢	底径8.5 4.5	底部 2/3	外面:燃系文 内面:ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好			1369
135	C12	弥生土器 甕	19.6 4.8	口縁-底部 破片	外面:口縁部6条平行沈線文、体部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:黄褐色	良好			1293
136	C11	弥生土器 甕	16.0 3.2	口縁-頸部 破片	外面:口縁部5条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:黒褐色 内面:褐色	良好			1228
137	C12	弥生土器 甕	16.8 5.0	口縁-底部 破片	外面:口縁部7条平行沈線文、頸-体部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径3mm以下の白色砂粒	外面:明赤褐色 内面:明黄褐色	良好			1273
138	C12	弥生土器 甕	19.8 4.3	口縁部 破片	外面:口縁部5条平行沈線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径3mm以下の白色砂粒	外面:にぶい橙色 内面:橙色	良好			1298
139	C12	弥生土器 甕	12.9 3.5	口縁-頸部 破片	外面:口縁部9条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好			1277
140	C12	弥生土器 甕	15.8 4.8	口縁-頸部 破片	外面:口縁部16条平行沈線文、体部ナデ 内面:口縁部ミガキ	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好			1364
141	C12	弥生土器 甕	4.4	口縁-頸部 破片	外面:口縁部9条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好			1260
142	C12	弥生土器 甕	16.4 4.5	口縁-頸部 破片	外面:口縁部6条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面:橙色 内面:褐色	良好			1289
143	C12	弥生土器 甕	18.0 4.8	口縁-頸部 破片	外面:口縁部7条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面:明黄褐色 内面:明黄褐色	良好			1278
144	D12	弥生土器 甕	16.2 5.1	口縁-頸部 破片	外面:口縁部6条平行沈線文、頸部ナデ 内面:口縁部ミガキ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:明黄褐色	良好			1282
145	C12	弥生土器 甕	16.4 4.9	口縁-頸部 破片	外面:口縁部5条平行沈線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好			1289
146	B12	須恵器 甕	6.7	底部 破片	外面:体部平行タタキ 内面:体部青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄灰色 内面:黄灰色	良好			1266
147	C12	須恵器 甕	7.6	底部 破片	外面:体部平行タタキ 内面:体部青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰色 内面:灰色	良好			1294
148	B12	須恵器 甕	9.8	底部 破片	外面:体部平行タタキ 内面:体部青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄灰色 内面:黄灰色	良好			1390
149	層	須恵器 甕	9.1	底部 破片	外面:体部平行タタキ 内面:体部青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面:黄灰色 内面:黄灰色	良好			1481
150	B12	須恵器 甕	4.3	頸部-肩部 破片	外面:回転ナデ、柳描文 内面:頸部回転ナデ、肩部青海波文	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰色 内面:灰色	良好			1385

表19 笹津乳母ヶ谷第2遺跡3区出土土器観察表(1)

遺物	遺層	構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上
151	S12	層	弥生土器 甕	口径12.5 器高16.7 底径3.7	口縁部-底部	外面:口縁部7条平行沈線文、頸部ナデ、肩部ハケ、体部5条横線文、底部-底部ミガキ 内面:口縁部ナデ、頸部ケズリ、体部ケズリ	密、径2mm以下の白色砂礫	外面:灰白色・黄灰色 内面:灰黄色	良好	口縁部-肩部オコケ付着、体部-底部保付着	1586-1591 - 93 1599-1612-1642
152	S12	層	弥生土器 甕	口径12.0 器高8.0 底径3.8	頸部-底部 破片	外面:頸部ナデ、肩部5条横線文、肩部-底部ミガキ、底部ナデ 内面:頸部ナデ、肩部-底部ケズリ、底部-底部ケズリ後ミガキ	径5mm以下の白色砂礫が	外面:黄灰色 内面:にぶい黄褐色・灰色	良好	外面赤彩有、内面一部赤彩有	1609-1610
153	S12	層	弥生土器 甕	12.6	口縁部-底部	外面:口縁部7条平行沈線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、頸部-体部ケズリ	径1mm以下の白色砂礫	外面:にぶい黄褐色 内面:淡黄色	良好		1583

表20 笹津乳母ヶ谷第2遺跡3区出土土器観察表(2)

遺物	遺層	構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上
154	S12	4層	弥生土器 甕	18.7 7.8	口縁部- 体部	外面：口縁部3条平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部-頸部ナデ、体部ケズリ	径1mm大の白・灰色砂礫	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1611
155	S12	4層	弥生土器 甕	13.9 4.1	口縁部- 頸部	外面：口縁部8条平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部-頸部ナデ、頸部ケズリ、口縁ミガキ	径1mm大の白色砂礫	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1587
156	S12	4層	弥生土器 甕	15.4 4.6	口縁部- 頸部	外面：口縁部7条平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	径1mm大の白色赤色砂礫 黒雲母含む。	外面：浅黄褐色 内面：褐灰色	良好	口縁-頸部オコゲ付着	1600
157	S12	4層	弥生土器 甕	15.4 3.8	口縁部- 頸部	外面：口縁部6条平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ナデ?	径1mm以下の白色砂礫	外面：浅黄橙・橙色 内面：浅黄橙・橙色	良好	口縁部内外面赤色塗彩	1616
158	S12	4層	弥生土器 甕	14.9 4.5	口縁部	外面：4条平行沈線文 内面：ナデ	径1mm以下の白色砂礫	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1620
159	S12	4層	弥生土器 甕	17.8 4.2	口縁部- 頸部	外面：口縁部6条平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	径1-2mm以下の白色砂礫	外面：浅黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1598
160	S12	4層	弥生土器 壺	12.3 6.2	口縁部- 頸部	外面：口縁部3条平行沈線文、口縁-頸部ナデ 内面：口縁部-頸部ヨコナデ、体部ケズリ	径0.5mm大の白色砂礫	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1585
161	S13	4層	弥生土器 甕	17.3 4.3	口縁部- 頸部	外面：口縁部3条柳描文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密、2mm以下の白色砂礫	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面煤付着	1992
162	S13	4層	手づくね 土器	口径 5.0 器高 5.1 底部径 3.0	口縁-底部	外面：口径部-底部ナデ 内面：口径部-底部ナデ	密、径1mm大の白色砂礫	外面：橙色・灰褐色 内面：灰褐色	良好	外面部分的に指オサエ	1924
167	S17	2層	弥生土器 甕	12.5 3.4	口縁部- 頸部	外面：口縁部8条平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	径1mm以下の白・灰色砂礫	外面：橙色 内面：橙色	良好		1888
168	S17	2層	弥生土器 甕	14.0 6.7	口縁部- 体部	外面：口縁部6条平行沈線文、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂礫	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	口縁部-体部オコゲ付着	1886
169	S17	床直	弥生土器 甕	16.6 6.5	口縁部- 体部	外面：口縁部8条-5条平行沈線文、頸部ナデ、体部10条波状文 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白・灰色砂礫	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1842
170	S17	2層	弥生土器 甕	16.2 5.3	口縁部- 肩部	外面：口縁部ナデ、7条平行沈線、頸部ナデ、肩部刺突文 内面：口縁部ナデ、頸部-肩部ケズリ	径2mm以下の白色砂礫	外面：橙色 内面：橙色・浅黄色	良好		1844
171	S17	2層	弥生土器 甕	16.4 2.9	口縁部	外面：1条・1条平行沈線文 内面：ナデ	径1mm以下の白色砂礫	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1845
172	S19	床直	土師器 甕	25.0 38.1	口縁部- 底部	外面：口縁部ナデ、頸部-底部ハケ 内面：口縁部-肩部ナデ、体部ハケ、底部ナデ	径5mm以下の白色砂礫	外面：橙色 内面：橙色	良好	内面底部指オサエ	1797
173	S19	3層-床直	土師器 甕	20.3 17.8	口縁部- 体部	外面：口縁部-頸部ナデ、頸部-体部ハケ 内面：口縁部-頸部ナデ、体部ヘラケズリ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：橙色 内面：橙色	良好		1805・1808・1819
174	S19	1層	土師器 甕	14.8 6.5	口縁部- 体部	外面：口縁部-体部ナデ 内面：口縁部-頸部ナデ、体部ヘラケズリ	密、径2以下の白色砂礫、 雲母片を含む。	外面：黄褐色 内面：黄褐色・にぶい黄褐色	良好		1827
175	S19	3層	土師器 甕	11.2 3.2	口縁-頸部	外面：口縁部7条平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密、径1mm以下の白・黒色 砂礫	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	口縁部内外面赤色塗彩	1736
176	S19	4層	土師器 甕	16.0 8.6	口縁部- 体部	外面：口縁部-体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面： 内面：	良好		1766
177	S19	2層	土師器 甕	12.9 4.2	口縁部- 頸部	外面：口縁部ナデ、頸部調整不明 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ?	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：黄褐色 内面：褐灰色・黄褐色	良好		1789
178	S19	床直	土師器 甕	20.0 4.9	口縁部- 頸部	外面：口縁部-頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部調整不明	密、径1mm以下の白・灰 色砂礫	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1808
179	S19	3層	土師器 甕	20.3 4.6	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密、径2mm以下の白色砂礫	外面：灰黄色 内面：黒褐色・黄褐色	良好		1733
180	S19	2層	土師器 甕	15.6 3.5	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密、径1mm以下の白・黒 色砂礫	外面：黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1793
181	S19	2層	土師器 甕	17.1 4.4	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：黄褐色 内面：黄褐色・黒褐色	良好	外面煤付着	1825
182	S19	3層	土師器 甕	14.5 4.5	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：黄褐色 内面：橙色	良好		1804
183	S19	3層	土師器 壺	27.4 5.4	口縁部- 頸部	外面：口縁部-頸部ナデ 内面：口縁部-頸部ナデ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1715-1722
184	S19	2層	土師器 壺	18.2 7.8	口縁部- 頸部	外面：口縁部ナデ、頸部稜形状刺突文 内面：口縁部-頸部ナデ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：黄褐色 内面：黄褐色・灰黄褐色	良好		1780
185	S19	3層	土師器 器台	12.6 3.6	口縁部	外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケメ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：橙色 内面：橙色	良好		1751
186	S19	2層	土師器 器台	- 3.4	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：明黄褐色・黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1777
187	S19	3層	土師器 高坏	口径 10.8 器高 9.0 底部径 11.4	口縁-脚部	外面：口縁部-脚部ナデ、脚部-底部ハケ、底部部ナデ 内面：口縁部ハケ、口縁部-頸部ナデ、体部ケズリ後ナデ、脚部-底部部ナデ	径1mm以下の白・灰色砂 礫	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1720
188	S113	3層	土師器 甕	12.8 5.1	口縁部- 体部	外面：口縁部-体部ナデ 内面：口縁部-体部ナデ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：橙色 内面：黄褐色・黒褐色	良好		1674
189	S113	3層	土師器 甕	16.0 4.2	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密、径1mm以下の白・灰 色砂礫	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1673
190	S113	3層	土師器 甕	19.2 4.0	口縁部- 頸部	外面：口縁部-頸部ナデ 内面：口縁部-頸部ナデ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：黄褐色・褐灰色 内面：にぶい黄褐色	良好		1685
191	S113	3層	土師器 壺	13.7	頸部-退部	外面：頸部ナデ、体部ハケ 内面：頸部ナデ、体部ケズリ後ナデ	密、径5mm以下の白・灰 色砂礫	外面：橙・黄褐色 内面：黄褐色	良好		1690
192	S114	2層	弥生土器 甕	17.4 5.0	口縁部- 頸部	外面：口縁部6条?柳描文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密、径2mm以下の白・灰 色砂礫	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1864
193	S114	3層	土師器 低脚坏	11.5 5.6	脚部	外面：脚部ナデ 内面：脚部ナデ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：黒褐色 内面：暗褐色	良好		1876
194	S114	1層	須恵器 坏身	2.0 11.4	底部- 底部部	外面：底部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：底部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ	密、径1mm以下の白色砂礫	外面：オリ-ブ灰色 内面：オリ-ブ灰色	良好		1858
195	S114	1層	土師器 甕	26.5 5.0	口縁部- 体部	外面：口縁部-体部ナデ 内面：口縁部-頸部ナデ、体部ケズリ	密、径1mm以下の白・灰 色砂礫	外面：赤褐色・橙色 内面：赤褐色・黄褐色	良好		1854
196	S116	1層	弥生土器 甕	14.1 4.4	口縁部- 頸部	外面：口縁部6条平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	径1mm以下の白・灰色砂 礫	外面：橙色 内面：橙色	良好		1963

表21 笹津乳母ヶ谷第2遺跡出土有孔土玉観察表(1)

遺物	遺層	層位	形態	高さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上
4	SS1	埋土中	管状	3.40	3.20	0.40	42.0	ナデ	径1mm以下の白色砂礫	灰白色	良好	片面穿孔	136
5	SS1	埋土中	管状	2.80	3.60	0.50	38.0	面取り後、ナデ	径1mm以下の白色砂礫	浅黄色	良好	片面穿孔	95
31	SS6	埋土中	管状	3.50	3.15	0.35	34.0	ナデ	径1mm以下の白色砂礫	にぶい黄橙-灰黄褐色	良好	片面穿孔	734
64	SS8	埋土中	管状	3.30	3.40	0.70	43.0	ナデ後、ハケ	径1mm以下の白色砂	にぶい黄橙	良好	片面穿孔	1030
90	土器溜り1	暗褐色土	管状	3.00	4.00	0.45	50.0	面取り後、ナデ	径2mm以下の茶色砂礫	浅黄褐色	良好	片面穿孔	460
91	土器溜り1	暗褐色土	管状	2.80	3.20	0.40	32.0	面取り後、ナデ	径1mm以下の輝石、雲母	にぶい黄橙	良好	片面穿孔	338
92	土器溜り1	暗褐色土	管状	3.55	3.30	0.70	16.0	ナデ後、ハケ	径1.5mm以下の白色砂礫	黒褐色	良好	片面穿孔	363
93	土器溜り1	暗褐色土	管状	2.80	3.30	0.80	19.5	面取り後、ナデ	径1mm以下の白色砂礫	暗灰色	良好	片面穿孔	339

第3章 調査の成果

表22 笹津乳母ヶ谷第2遺跡出土有孔土玉観察表(2)

遺物No.	遺構	層位	形態	高さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
94	土器溜り1	暗褐色土	管状	3.0	3.9	0.8	34.0	面取り後、ナデ	径2mm以下の白色砂粒	にぶい黄橙色	良好	片面穿孔	337
95	土器溜り1	暗褐色土	管状	3.1	3.0	※0.6	16.0	面取り後、ナデ	径1mm以下の白色砂粒	オリーブ黒	良好	両面穿孔	340
121	F0	暗褐色土	管状	3.2	3.3	0.7	34.0	面取り後、ナデ	径1mm以下の白色砂粒	橙色	良好	片面穿孔	299
122	E1	暗褐色土	管状	2.8	3.1	0.5	28.0	ナデ	径1mm以下の白色砂粒	褐灰~にぶい黄橙色	良好	片面穿孔	588
123	E1	暗褐色土	管状	2.6	3.0	0.4	20.0	面取り後、ナデ	径1mm以下の白色砂粒	明黄褐色	良好	片面穿孔	304
124	E0	暗褐色土	管状	3.15	3.7	0.5	48.0	面取り後、ナデ	径1mm以下の白色砂粒	明黄褐色	良好	片面穿孔	300

表23 笹津乳母ヶ谷第2遺跡出土玉類観察表

	挿図・PL	遺構・地区 層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上	備考
J 1	第24図 PL.44・45	SS6 床直	勾玉	瑪瑙	3.6	2.2	1.1	9.6	801	
J 2	第24図 PL.44・45	SS6 床直	勾玉	瑪瑙	2.0	2.0	1.05	4.3	802	一部欠損
J 3	第24図 PL.44・45	SS6 床直	勾玉	瑪瑙	3.85	2.1	1.15	9.4	813	
J 4	第24図 PL.44・45	SS6 床直	勾玉	瑪瑙	3.7	2.3	1.15	10.2	824	
J 5	第24図 PL.44・45	SS6 床直	勾玉	碧玉	3.3	1.7	1.15	6.6	822	
J 6	第24図 PL.44・45	SS6 床直	管玉	碧玉	2.95	1.15	1.15	6.8	804	
J 7	第24図 PL.44・45	SS6 床直	管玉	碧玉	3.2	1.15	1.15	6.7	817	
J 8	第24図 PL.44・45	SS6 床直	管玉	碧玉	2.7	1.1	1.1	5.6	818	
J 9	第24図 PL.44・45	SS6 床直	管玉	碧玉	3.1	1.15	1.15	8.0	820	
J 10	第24図 PL.44・45	SS6 床直	管玉	碧玉	2.45	0.8	0.8	1.7	805	
J 11	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	碧玉	1.35	1.3	1.05	2.7	803	
J 12	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	碧玉	1.2	1.2	1.1	2.1	819	
J 13	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	水晶	1.05	1.0	0.9	1.1	808	
J 14	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	水晶	1.15	1.15	0.85	1.4	815	
J 15	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	水晶	1.2	1.15	0.85	1.4	816	
J 16	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	水晶	1.25	1.2	0.95	1.7	825	
J 17	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.85	0.85	0.75	0.7	809	
J 18	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.9	0.8	0.9	0.9	811	
J 19	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.8	0.8	0.65	0.6	814	
J 20	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.8	0.7	0.65	0.5	826	
J 21	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.45	0.25	0.4	0.1以下	806	
J 22	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.4	0.2	0.35	0.1以下	807	
J 23	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.5	0.3	0.45	0.1	810	
J 24	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.4	0.25	0.35	0.1以下	812	
J 25	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.35	0.2	0.3	0.1以下	821	
J 26	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.35	0.4	0.3	0.1以下	823	
J 27	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.35	0.2	0.35	0.1以下	591	
J 28	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.4	0.35	0.3	0.1以下	591	
J 29	第25図 PL.44・45	SS6 床直	丸玉	ガラス	0.35	0.25	0.3	0.1以下	591	

表24 笹津乳母ヶ谷第2遺跡出土石器観察表

	挿図・P L	遺構・層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上	備考
S1	第16図、PL.65	SS4埋土	砥石		7.35	9.3	4.25	410.0	232	
S2	第24図、PL.63	SS6埋土	石錘	安山岩	6.5	3.3	1.6	49.8	709	
S3	第31図、PL.62	SS7埋土	石鏃	サヌカイト	1.26	1.2	0.28	0.3	583	
S4	第31図、PL.62	SS7埋土	石鏃	サヌカイト	2.2	1.3	4.0	0.8	982	
S5	第31図、PL.64	SS7埋土	敲石	安山岩	57.5	72.4	3.3	143.6	1003	
S6	第31図、PL.64	SS7埋土	敲石	安山岩	12.2	7.7	2.45	360.0	872	
S7	第31図、PL.64	SS7埋土	敲石	安山岩	9.25	7.6	4.6	390.0	873	
S8	第31図、PL.64	SS7埋土	敲石	安山岩	6.95	5.6	4.9	270.0	981	
S9	第31図、PL.64	SS7埋土	敲石	安山岩	7.55	7.7	2.9	151.4	928	
S10	第31図、PL.63	SS7埋土	石錘	安山岩	4.3	4.6	1.4	36.4	1010	
S11	第31図、PL.68	SS7埋土	被熱石		2.7	2.1	1.6	6.3	839	
S12	第38図、PL.62	SS8埋土	石鏃未製品	黒曜石	2.02	1.58	2.01	0.8	989	
S13	第52図、PL.63	SK18埋土	石錘	安山岩	70.5	64.0	3.0	160.8	187	
S14	第52図、PL.63	SK19埋土	石錘	安山岩	7.6	6.9	2.25	170.0	204	
S15	第61図、PL.62	表土	石鏃未製品	黒曜石	2.8	1.9	0.8	4.4	154	
S16	第61図、PL.62	表土	石鏃未製品	黒曜石	2.1	1.22	3.5	0.9	155	
S17	第61図、PL.62	D1、暗褐色土	石鏃	サヌカイト	1.72	1.3	0.3	0.4	512	
S18	第62図、PL.62	D1、暗褐色土	スクレイパー	黒曜石	4.5	5.62	0.9	21.8	395	
S19	第62図、PL.62	C1、暗褐色土	スクレイパー	黒曜石	3.82	4.8	1.4	25.5	792	
S20	第62図、PL.65	E1、暗褐色土	砥石		4.0	4.05	2.1	36.9	304	
S21	第62図、PL.64	E0、暗褐色土	敲石	安山岩	10.5	9.6	5.75	780.0	431	
S22	第62図、PL.64	表土	敲石	安山岩	10.1	9.5	8.4	1080.0	38	
S23	第62図、PL.64	F0、暗褐色土	敲石	安山岩	15.9	7.75	6.5	1120.0	636	
S24	第62図、PL.64	E1、暗褐色土	敲石	安山岩	14.1	8.75	5.3	880.0	358	
S25	第63図、PL.63	表土	石錘	安山岩	7.4	5.85	2.8	132.9	8	
S26	第63図、PL.63	D1、暗褐色土	石錘	安山岩	7.8	6.8	2.3	188.8	311	
S27	第71図、PL.62	SK24 埋土	石鏃	サヌカイト	5.02	3.11	0.35	7.7	1453	
S28	第71図、PL.64	SK24 埋土	敲石	安山岩	16.5	8.65	5.4	1130.0	1466	
S29	第71図、PL.64	SK24 埋土	敲石	安山岩	13.0	5.1	3.7	360.0	1451	
S30	第77図、PL.62	C11、暗褐色土	石鏃	サヌカイト	1.9	1.6	2.5	0.7	1229	
S31	第77図、PL.62	C12、暗褐色土	石鏃	サヌカイト	2.14	1.24	0.3	0.8	1245	
S32	第77図、PL.62	C12、暗褐色土	石匙	サヌカイト	3.73	7.35	0.9	21.3	1220	
S33	第77図、PL.63	D12、暗褐色土	石錘	安山岩	5.0	3.0	1.5	36.6	1376	
S34	第77図、PL.63	B12、暗褐色土	石錘	安山岩	4.55	4.4	2.0	49.6	1262	
S35	第77図、PL.63	C12、暗褐色土	石錘	安山岩	5.7	5.4	2.0	75.7	1247	
S36	第77図、PL.63	D12、黄褐色土	石錘	安山岩	5.8	5.75	1.75	81.9	1375	
S37	第77図、PL.63	E8、黄褐色土	石錘	安山岩	6.12	5.5	1.7	49.7	1208	
S38	第77図、PL.63	C12、暗褐色土	石錘	安山岩	5.9	4.9	1.35	52.9	1234	
S39	第77図、PL.63	C12、暗褐色土	石錘	安山岩	7.45	5.95	2.5	130.0	1284	
S40	第78図、PL.64	D11、黄褐色土	敲石	安山岩	11.7	6.55	4.8	500.0	1419	
S41	第78図、PL.64	C12、黄褐色土	敲石	安山岩	11.4	10.7	6.5	970.0	1249	
S42	第86図、PL.64	SI3 埋土	敲石	安山岩	9.7	9.3	3.95	470.0	1910	
S43	第86図、PL.63	SI4 7層	石錘	安山岩	3.85	1.7	1.7	12.2	2053	
S44	第92図、PL.64	SI9 床直	敲石	安山岩	16.55	6.1	6.3	980.0	1769	
S45	第94図、PL.65	SI13 床直	台石	安山岩	23.65	15.75	10.3	6400.0	1702	
S46	第94図、PL.65	SI13 床直	台石	安山岩	27.2	17.3	6.4	4730.0	1707	
S47	第98図、PL.63	SI16 床直	石錘	安山岩	8.15	6.7	2.3	190.0	2071	

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 15

一般国道 9 号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡琴浦町

笹津乳母ヶ谷第 2 遺跡

発 行 2007 年 3 月 30 日

編 集 鳥取県埋蔵文化財センター

〒 680-0151 鳥取市国府町宮下 1260 番地

電 話 (0857) 27 - 6711

発行者 鳥取県埋蔵文化財センター

印 刷 株式会社 矢谷印刷所